



# 尾道短期大学50年史

# 尾道短期大学50年史

50-year History  
of ONOMICHI JUNIOR COLLEGE

Very faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

題字 藤原勝子氏 (書道家)



## 『尾道短期大学50年史』の 刊行にあたって

尾道短期大学学長

森山 茂

1946（昭和21）年7月1日に、本学の前身である尾道市立女子専門学校が誕生してから、今年で50年になります。この間、高等教育機関としての本学の性格も、規模も、役割も、意義も、大きく変化しました。そしてまた、今後も、時代の推移に伴う社会の要請に対応して変貌していくことでしょう。

そこで、50年という節目に際して、創立以来の本学の歩みを振り返り、記録に纏めることにいたしました。それは、単に過去を回想して懐かしむためのものではありません。これまでの本学の教育のありかたを総括して、それをきっちりと確認したうえで、本学がこれから進んでいく道を見定める基礎にしようとするものであります。

この記念誌には、これまで本学が実施してきた教育の実態が、具体的に明らかにされています。本学の発展を語る史的事実とともに、向学心に燃えて勉学に励んだ人、クラブ活動や寮生活によって学園生活を楽しんだ人、親友や教師との語らいに人生の喜びを見つけた人、そして、教育研究に情熱を傾けた教職員など、本学に寄せる人々の心がいきいきと語られています。私が特に嬉しく思うのは、数多くの人々の心の中に、本学における生活が青春の記念碑として生きているということです。本学に対する人々の熱い思いが、私の胸に沁みます。そして、母校として、その期待に応えていかなければならない責任を痛感します。皆様におかれましても、この冊子によって本学の教育のありかたについてご理解いただき、今後ともに、本学の発展のために、ご協力、ご支援くださいますようお願い申し上げます。

なお、この記念誌の刊行は、同窓会のご尽力によって実現したものであります。執筆や編集の面でご協力いただいたばかりでなく、経済的な面でも全面的にご支援をいただきました。

また、学内的には、この記念誌の資料的な価値を高めるために、散逸している資料を捜し求め、関係者を尋ねて証言を得るなど、地道な活動を続けた編集担当者の苦労も並大抵なものではありませんでした。

そのほか、数多くの方々のご協力、ご支援によって、この記念誌は完成いたしました。ここに、『尾道短期大学50年史』に関与されたすべての方々に対して、心からお礼を申し上げます。



## 開学50周年に想う

尾道市長

亀田 良一

尾道は、古くから文人墨客の来遊が多かったことから、市民の間には高い文化性が根付いています。そのことから、戦後の混乱期にあっても教育への関心は高く、地元で女子の教育機関として女子専門学校の創設が広く要望として現れていました。その機運を醸成した人が国会図書館副館長となられた中井正一氏であります。当時、尾道において中井正一氏を中心とした文化活動が盛んであり、文化活動と市民要望があいまって当時の石原市長により尾道市立女子専門学校が設立されたのであります。

奈良で行われた正倉院展は混乱した時代背景にもかかわらず大成功に終わっており、当時の日本が空腹を癒すように文化を渴望していたことが窺い知れ、これを原動力として新生日本が誕生したと思っております。

爾来、社会情勢はいろいろ変化しましたが、人の文化に対する関心は常に高いものがありました。

その後、学制改革によって短大に昇格され、時代の要請にしたがって経済科・経営情報学科を増設し50年の歴史を刻んで参りました。この間、優れた教授陣によって多くの人材を育成し、世に送り出してきたのであります。

短期大学の歴史の中にあつて歴代の学長・教職員のご苦勞は、筆舌に尽くし難いものがあつたらうと推察しております。あらためて関係各位に敬意と謝意を表します。

今、尾道市は国際芸術文化都市として21世紀に向け大きく羽ばたこうとしております。それには尾道が誇る尾道短期大学に芸術学科を増設し一翼を担っていただくと思っております。

今後、歩んできた歴史の重さを大切に、これからの未来を見据えて国際的にも貢献できる尾道短期大学に発展させることが、私たちに与えられた使命であると思っておりますので、教職員をはじめ市民の皆様のご協力をお願いするものであります。



## 祝 辞

全国公立短期大学協会会長

佐々木徹郎

全国公立短期大学協会を代表しまして、尾道短期大学の50周年を心からお祝い申し上げます。

尾道市は、昭和21年7月に国語科・生活科をおく尾道市立女子専門学校を設置されました。当時、戦後間もない時代で、日本は精神的にも経済的にも敗戦の傷跡から脱却できない状態で、また、女性には学問はいらぬという考え方が残っていたと思います。このようななかで、女子の高等教育機関を新設されたことは刮目すべきことではないかと考えられます。

昭和25年、女子専門学校は新制度の下で尾道短期大学に昇格しました。この際も、生活科と別科を廃止し、国文科、さらに経済科を設置するという思い切った処置をされました。また、昭和63年には経営情報学科を設置され、教育にコンピュータを取り入れられました。経営情報学科は公立短期大学の学科としては最初のものであり、カリキュラムや設備について多くの大学からの見学や問い合わせがあったと聞いております。

従来、女性の短期大学高等教育といえば、国文、英文などの人文関係学科と家政学科があげられました。経済、経営、情報関係の学科はどちらかといえば男性向きのものと考えられていました。貴大学では発足以来このような固定観念にとらわれず、コンピュータの意義を認識され、経済や経営情報の学科を設置されました。現在、多くの公立短期大学では学科の改組転換を検討中であり、貴大学の半世紀の歩みは、貴重な経験として、他の公立短期大学にとってよいモデルとなると思います。

貴学が50周年を機に、さらに大きく発展することを信じまして、お祝いの言葉といたします。



## 創立50周年記念によせて

尾道短期大学同窓会会長

小島 雅由

昭和21年7月1日、尾道市立女子専門学校として開校し、間もなく画期的な学制改革により現在の尾道短期大学となり満50周年を迎えることが出来、誠にめでたい限りであります。

昭和21年といえは敗戦後の混乱期で、食料をはじめ諸物資の欠乏により勉学どころではない時代に本学を開校に導いて下さいました、設置者である尾道市及び諸先輩方の先見の明とご苦勞に対し、只々感謝の念で一杯です。

尾道短期大学創生期は国文科だけの規模から翌年には商都尾道を標榜して経済科の増設があり、又昭和37年長江の学舎から久山田の地に独立学舎が出来ました。設備の充実と共に昭和63年経営情報学科の増設により学生数も1000名を擁する規模となりました。

私たち同窓生も今日約1万6700余名となり各方面で活躍して居られます。同窓会活動について注目すべきものを特記しますと、

一、昭和36年学生ホール建設募金をはじめた処、同窓生から金167万円余の募金を受けた。これは昭和38年総工費金450万円の学生ホール建設費の一部として母校へ寄付。

一、創立20周年の記念事業として同窓会報第20号（昭和41.7.1発行）が竹内幹夫、三上勝康両氏のご努力で70頁の小冊子として発行され好評を得た。

一、福山大学開校以前に県東部地区への県立大学設置の情報を得て、大学と連携をとりつつ時の設置者と懇談会を持ち、お願いすると同時に活動を盛り上げた。

一、昭和61年体育館落成記念に緞帳、演壇等備品を寄付。

一、昭和61年度卒業生から毎年、卒業式後卒業祝賀会を教職員を混え行っている。

一、同窓生の会員名簿を5年目毎に発行し希望者に配布している。

創立50周年を契機に大学当局とより一層連携を深め、大学がより充実し発展することを願うと共に、地域社会に貢献され大学の存在意義を昂揚されんことを願って止みません。



## 賀 標

尾道短期大学後援会会長

藤井 榮眞

尾道短期大学の創立50周年を迎えるに当たり衷心より御慶び申し上げます。思い起こしますに、50周年といえは大学創立の年に生まれた者が早50歳に相成り、世の中核として今の時代を動かしつつあります。

しかし、その当時は敗戦の混乱期にあって、食糧難に就職難、更にインフレと、日々の生活に追い回されており、若者は何の希望も目標も無くし、所謂アブレとか戦後派とか言われた時代でした。

その様な時に、この若者達に尾道の将来を託そうと大学創立を図られた方々には、確かに先見の明が在り、入学出来た者達も幸せであったことでしょう。但し、敗戦の痛手から立ち上がろうとする経済状況において、学校の創立と維持には、関係者各位の一方ならぬ御苦勞があったと伝え聞いております。

また、その発展の軌跡を辿りますと、混乱期にもかかわらず、立派な教授陣を揃えることが出来ました。その為、地方大学には珍しく、西日本を中心に各地域の教育・文化・産業・行政等各界の重鎮を担う方々を育てることが出来たのも、宜べなるかなと感じる次第です。それと同時に大学の実績も出来、短大としての確固たる地位を築いて参りましたことも、偏に創立以来の精神及び関係者各位の御努力の賜物と考えられます。

昨今のキャンパスの様子を見ますに、多くの御協力を得られましたこともあり、次第に大学としての施設も充実しつつあり、昔日の感、一入の思いが致します。

創立から半世紀。よくぞ此処まで来たものと、先人の精神に思いを致し感謝すると共に、益々研鑽し次の半世紀、大学創立100周年の賀節に向かって、更なる飛躍と発展を期待したいものと存じます。



# 目次

『尾道短期大学50年史』の刊行にあたって  
開学50周年に想う  
祝辞  
創立50周年記念によせて  
賀標

尾道短期大学学長 森山 茂  
尾道市長 亀田 良一  
全国公立短期大学協会会長 佐々木徹郎  
尾道短期大学同窓会会長 小島 雅由  
尾道短期大学後援会会長 藤井 榮真

## 第1部 沿革編

第1章 前史 久保時代 (1946年～1949年).....	18
1 女専創設.....	18
2 教育制度の改革と女専.....	22
(1) 体制の整備	
(2) 中等学校教員無試験検定の認可	
(3) 別科の新設と学則の変更	
3 南高等学校へ校舎移転.....	29
座談会 戦後の混乱の中で生まれた女性教育—1946(昭和21)年女専開学—.....	32
第2章 尾道短期大学の発足 (1950年～1965年).....	40
1 短期大学へ昇格(国文科設置).....	40
2 経済科の増設.....	42
3 施設の拡充.....	43
4 頼学長の逝去と田中学長の就任.....	45
5 10周年記念事業.....	46
6 久山田へ移転、新学舎完成.....	47
7 怪火事件とバス転落事故.....	49
座談会 滞標—尾道に集う青春群像—.....	53
第3章 着実な成長 (1966年～1985年).....	62
1 国庫補助普通交付税交付金の交付の実現.....	63
2 『尾道短期大学二十年史』の刊行.....	64
3 市民の子弟の優先入学問題.....	64
4 課外教室の建設.....	65
5 短期大学としての体制の整備.....	66
(1) 尾道短期大学教員定年規程の制定	
(2) 尾道短期大学学長選考規程の制定	
6 県立移管運動.....	67
7 研究棟の建設.....	70
8 図書館の建設.....	71
9 久山田小学校の跡地の取得.....	73
10 教育研究面での改革.....	73
11 四年制大学昇格への動き.....	76
第4章 新たな飛躍 (1986年～1996年).....	78
1 経営情報学科の増設.....	78
2 体育館竣工.....	85
3 教育委員会から市長部局への所管の移管.....	85

4 短期大学の新たなる展開	89
(1) ランド・スケープ計画 (キャンパス整備計画)	
(2) 学生会館の建設	
(3) 総合調査報告書制度の導入	
(4) カリキュラムの改善等	

## 寄稿

尾道女専と私	第4代学長 吉田 真三	94
尾道短期大学創立50周年を賀す	第5代学長 福田襄之介	95
開学50周年に寄せて	名誉教授 野上 久人	96
思い出	名誉教授 築山 福文	97
創設時代の功労者	名誉教授 帯賀 一男	98
憂しと見し世ぞ今は恋しき	名誉教授 富田 忠雄	99
我が青春の長江時代	名誉教授 森 清	100
あの頃のこと	作家・短期大学国文科第1回卒業 (1952年) 高橋 玄洋	101
母校を想うところ	尾道市助役・経済科第8回卒業 (1960年) 若住 久吾	102

## 第2部 変遷と現況編

第1章 学章と学生歌	104
1 学章	104
2 学生歌	105
第2章 学内機構	107
第3章 学内諸施設	109
1 図書館	110
(1) 短大図書館の歩み	
(2) 図書館の歩みを支えた人々	
(3) 未来への飛翔	
2 体育館及びグラウンド	114
(1) 体育館	
(2) グラウンド	
3 課外教室・学生食堂から学生会館へ	114
(1) 課外教室・学生食堂の日々	
(2) 学生会館の時代へ	
4 情報処理実習室	116
第4章 入試制度	118
1 一般入試・推薦入試	118
2 外国人入試	119
第5章 教育・研究	121
1 一般教育・教職課程	121
一般教育	
(1) 科目の変遷	
(2) 教員の変遷	
(3) 課題	
教職課程	
(1) 経過	
(2) 教員の変遷	
(3) 現況と課題	

2	国文科	127
	(1) 学科の教育内容	
	(2) 教員の変遷	
3	経済科	129
	(1) 学科の教育内容	
	(2) 教員の変遷	
4	経営情報学科	133
	(1) 設置の趣旨	
	(2) 設置に至る経緯	
	(3) 学科の教育内容	
	(4) 教員の変遷	
<b>第6章 研究活動</b>		137
1	研究紀要	137
2	文部省科学研究費補助金による研究	151
3	博士号取得	152
4	長期研修制度	152
5	表彰	153
<b>第7章 社会活動（地域との連携を目指して）</b>		154
1	公開講座	154
2	市民大学	160
3	専修科の設置	162
4	コンピュータ公開講座	162
5	表彰	163
<b>第8章 学生生活</b>		164
1	学友会	164
2	サークル活動	164
3	学園祭	165
4	寮	166
5	チューター制度	166
6	学生相談室、保健相談室	166
<b>第9章 就職状況</b>		168
<b>第10章 後援会・同窓会</b>		170
1	後援会の活動	170
2	同窓会の活動	170
<b>第3部 資料編</b>		
1	尾道市歴代市長	174
2	歴代学長	175
3	叙勲者	176
4	名誉教授	176
5	歴代管理職	177
6	専任教員	179
7	歴代後援会役員	183
8	卒業生数の推移	184
<b>年表</b>		186
<b>校地・施設配置図</b>		188
編集後記		189



正門

久山田の地で



学会 (C棟)



中心広場



中心広場



中心広場



学舎 (B棟)



湖畔広場



湖畔広場



湖畔広場



学生会館外観



学生食堂



学生会館外観



1階ロビー (C棟)



1階ロビー (C棟)



図書館外観



図書館



図書館



体育館



コンピューター実習室 (C3教室)



テニスコート



# 《講義風景》



国文科



経済科



経営情報学科



2階ロビー (C棟)



登学風景



クラブ風景



図書閲覧室



就職資料室



縁湖祭

# 尾道小景



御袖天満宮



尾道水道



「暗夜行路」の坂道



古寺巡りの石畳



尾道中央棧橋

# 歴代学長



初代

賴成一



第2代

田中 稻穂



第3代

八木 寛



第4代

吉田 眞三



第5代

福田 襄之介



第6代

信岡 巽



第7代

白神 良昭

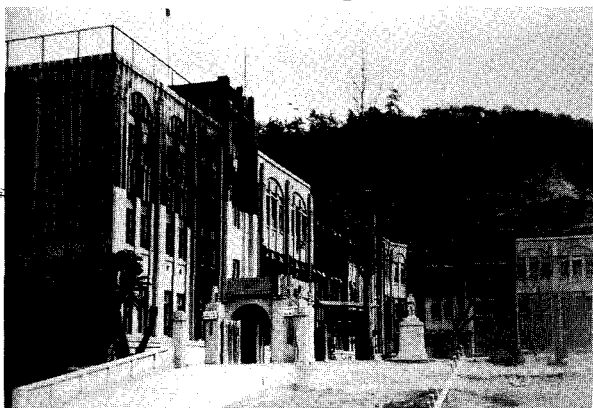


第8代

森山 茂

# 第1部 沿革編

# 第1章 前史 久保時代 (1946年～1949年)



●終戦直後の混乱の中で尾道市では、向学心あふれる女学生のための学府をつくろうという気運が高まり、市民の熱意が行政当局を動かすまでとなった。いまだ国情不安定な時代にもかかわらず、強い熱意と粘り強い設立運動が実を結び、1946（昭和21）年7月1日、尾道短期大学の前身である尾道市立女子専門学校が開校した。  
(写真：久保時代の仮校舎（久保小学校）)

## 1 女専創設

尾道短期大学の歴史は尾道市立女子専門学校の創設をもって始まる。戦後の学制改革に伴って、女専が短大に昇格したのである。

女子専門学校の設立の気運が芽生えたのは、戦後まもなくのことであった。そこにはいくつかの理由があった。第一は、進学の問題である。当時は言うまでもなく、日本国中がインフレ、食糧難、住宅難と、敗戦直後の大混乱の真中にあった。高等教育機関はほとんどが大都市にあり、就学のために他出することは考え及ばぬことで、いわんや若い女性が荒廃した都会へ遊学することには大きな不安と困難があった。第二に、尾道市の文化的レベルの高さを挙げることができよう。当市は言うまでもなく、内海交通の要衝として、長い歴史をもつ商都として栄え、古くから文人墨客の遊来も多く、市民の文化的成熟度には高いものがあった。女子の強い向学心もそのような背景の中から醸成されてきたものであり、それが第一の理由と重なって女専創設への強い要望となり市民の間に現れてきたのである。

設立運動に熱心な多くの市民の中でも、特に中核的存在であったのが、中井正一氏である。中井氏は戦前から進歩的な思想の持ち主として知られていたが、戦後まもなく、市立尾道図書館長となり、尾道を中心に文化活動を活発に開始していた。そこで、戦後の新しい思想の知識人や活動

### 石原善三郎 (1888-1989)

早稲田大学法科卒業。大阪市会議員、府会議員、衆議院議員、奈良市長を歴任。終戦後の混乱期に尾道市議会から迎えられて尾道市長に就任（戦後公選初代市長）。1946（昭和21）年12月24日～1951年4月5日まで在職。このとき、抱負として二大目標を掲げた。一つは新国道（現在の国道2号線）の整備で、これは当時この地域が戦中の建物疎開で家屋が倒されたままで混乱の状態にあったのを、今日の自動車道路網の発達を予測して国道に整備したことを意味する。他の一つが女子専門学校の創設で、これは終戦間際のきわめて困難な財政事情を克服して、尾道の文化の中核的存在としてよくそれを実現させ、さらにこれを短期大学に昇格させ今日の基礎を確立したもので、小都市の公立短期大学としては先駆的な役目を果たし、モデルケースとして注目を引いたものである。氏はその後さらに1971年4月30日～1975年3月29日の間、再度市長に当選就任し、市の発展と短期大学のさらなる発展のために雄大な理想をもって取り組んだ。氏の短期大学への熱い思いは生涯変わることはなかった。

家たちが中井氏のもとに出入りするようになってきた。後の短大教授青木茂氏もその中の一人で、初めは読書や時世の論談などの集まりだったのが、そのうちに新しい時代を担う女性の高等教育機関の必要性が論議されるようになり、ついに、市当局を動かすまでになったのである。

たまたま当時、青木氏と同郷で縁戚関係にあたる麓保孝氏が文部省の督学官を務めており、任務も中国・四国地区の専門学校担当であったため、尾道に立ち寄る機会が多かった。そこで、麓氏の助言を受け、設立準備委員会（後に設立委員会と改称）が設けられた。準備委員会は、時の市議会議長島居哲氏と中井正一・青木茂・富永貫一などの諸氏が主なメンバーで、富永氏がその委員長であった。富永氏は1946（昭和21）年3月から1949年10月まで商工会会頭を務めた人物である。こうして1946年2月中旬に、一部有志（準備委員をも含む）と市当局とによる下相談が行われ、続いて2月27日には正式の相談会が市役所で持たれるまでになった。その後も準備は着々と進み、3月8日付けをもって申請書を文部省に提出した。申請書は、県の副申を加えて、

- 1 尾道市が中国地方の交通の要衝に位置しており、しかも唯一の非戦災地であること
- 2 女性教育は平和文化国家建設の急務であること
- 3 尾道には専門学校がないこと
- 4 現在尾道に最も近い女子専門学校は広島市にあり、交通、食糧、住宅難などの不安から、遠方での勉学は断念せざるをえないこと
- 5 非戦災地なので尾道には学校とするにふさわしい校舎も、蔵書を多数持つ図書館も残っている。また、立派な病院もあるので保健科の勉学に役立つであろうこと
- 6 市民の設立への熱意が多大であること

などが述べられていた。

また、同時に添付された設置要項は、次のとおりである。

- 一 目的 本校ハ専門学校令ニヨリ女子ニ高等ノ学術理論オヨビ応用ヲ教授シ婦徳ヲ滋養セシムルヲ以テ目的トス
- 二 名称 尾道市立女子専門学校

### 中井正一<sup>まさかず</sup>（1900-1952）

京都大学哲学科卒。同大学美学科講師。1937（昭和12）年反ファッショ活動で治安維持法に触れて検挙され、懲役2年執行猶予2年の判決を受ける。戦争末期郷里尾道に疎開。戦後1945（昭和20）年11月1日、尾道市立図書館長に就任、地方文化の興隆のために精力的に活動。女専設立の熱心な提言者であったが、その理由の一つに女性問題についての氏の進歩的考え方もあったと言われる。女専創設後、自らも非常勤講師として教壇に立った。その後国会図書館の副館長に就任し、尾道を離れた。

### 青木茂（1898-1984）

山陽新報記者の傍ら郷土史の研究に専念。1946（昭和21）年より女専講師、引き続き1972年まで短大で教授として勤める。1963年「近世わが国における富籤の社会経済史的研究」で中国文化賞を受賞。短大誕生の陰の功労者と言われているが、氏自身は次のように語っている。「女専の開設が認可されたのが、昭和21年というのであるから、まさに古今未曾有なことであつたらう。年ごろの娘をもっているものにとっては必至の運動であつた。民衆が一政治に参加しての、挙市的な運動として画期的な実績をあげたのは、尾道最初にして最後の請願行動といわねばなるまい。」

〈「或るふうてん日記」山陽日日新聞 1977（昭和52）年2月26日〉

- 三 位置 尾道市久保町124-2
- 四 学則 別紙ノ通り
- 五 学科 修業年限 国語科 3年  
保健科 3年
- 六 生徒定員 国語科 150人 (各学年50人)  
保健科 150人 (各学年50人)
- 七 敷地建物ノ図面及其ノ所有區別  
敷地建物ノ図面別紙ノ通り  
所有區別全部市所有
- 八 開校年月 昭和21年6月
- 九 経費及維持ノ方法 尾道市費及授業料、寄附金其他ノ収入ヲ以テ支弁ス

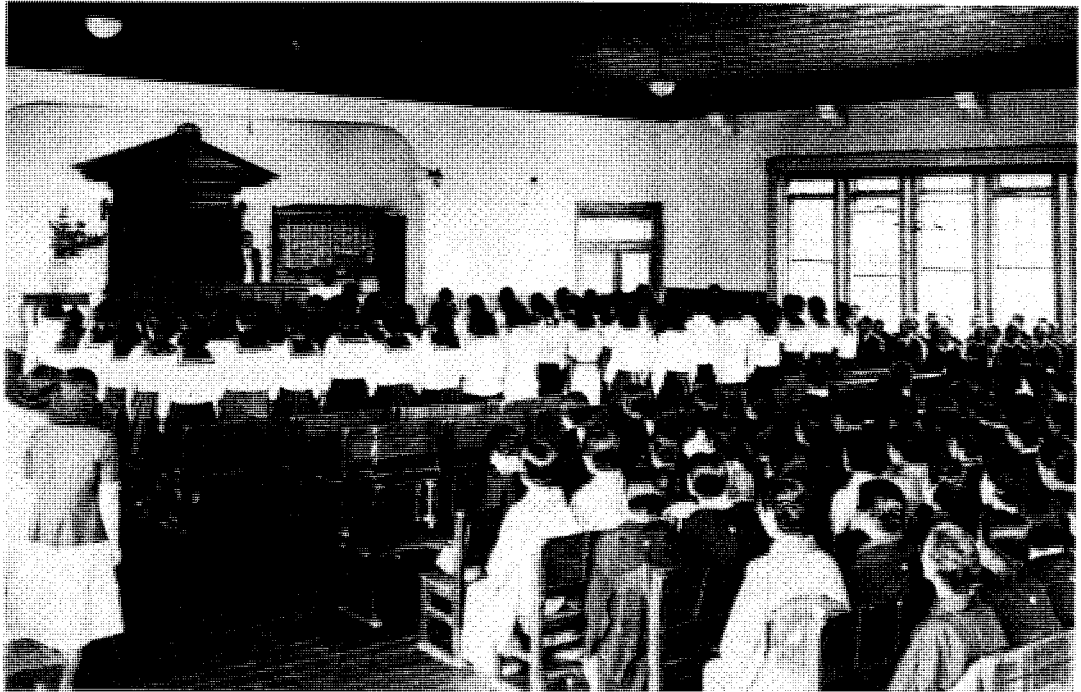
設置要項にもあるように、順調にいけば6月には開校できたはずであるが、実際にはそれほど簡単にはいかなかった。諸種の事情から、5月に入ってもまだ実現の見通しはつかなかった。たまたま来尾した麓氏がこのままでは立ち消えになりかねないとの懸念を表明したので、青木氏は麓氏を伴い、島居哲氏を訪れて事の次第を述べた。島居氏は諸種の事情を勘案の上、自ら責任をもって努力する旨を誓い、ようやく明るい見通しを得ることができた。それが5月15日のことである。

当時の尾道市長は石原善三郎氏であったが、戦後の市の発展に遠大な理想を掲げ果敢に取り組んでいた氏は、周囲の条件が整うとこれを了承し、開校が急速に進行をみるようになり、先に提出の申請書に基づいて、5月22日に文部省から認可(3月30日付)が下りた。校長には広島高等師範学校の教授、頼成一氏を迎えることになった。氏は尾道とゆかりの深い頼山陽の末孫で、漢学者として著名であった。教授陣としては、林猪太郎・江藤保定の両氏がまず専任として決定(当時は戦勝国の管理下にあつて教員の資格審査を必要としたので、正式な職名はすぐには決まらなかった)し、その他は順次整えられた。校舎は申請書に示す地点(地番は現在は東久保町13-19)の久保小学校の一部を借りることとなり、募集事務にさっそく取りかかった。久保小学校の一部を借用することになったのは、終戦間もなくの混沌期で、戦災を免れていたとはいえ、独立の校舎を持つ

## ■尾道市立女専 生徒募集に着手 入試要領決る、筆記試験なし

尾道市立女専の正式認可によって尾道市では30日市役所で設立準備委員会を開き開校準備を打ち合わせ、とくに左のとおり入試要綱を決定しただちに生徒募集に着手した。出願期日6月5日~15日△銓衡方法、筆記試験を行わず内申書で銓衡、18日午前9時第1次合格者発表、ついで口頭試問、身体検査を19日(国語科)20日(保健科)いずれも午前8時から行う、21日には内申書の不備な者に対して試問を行う△合格者発表22日正午△定員は50名ずつ△開校予定25日△授業料年額300円△志願申し込みは市役所内女専事務所宛

〈山陽新聞 1946(昭和21)年6月1日 要約〉



女専第1回生入学式（壇上は頼校長）

ことなど望むべくもなかったからである。

入学願書の受付は6月5日から15日まで、11日間行われた。出願者は、国語科61名、保健科148名、計209名であった。出身校別で言えば、広島県立高等女学校が17校、他県の県立高等女学校が4校、実業学校が7校、その他の公私立21校、計49校の多数に上った。この中から第一次の選考を行い、国語科60名、保健科105名を合格させ、さらに第二次の選考（戦災者・引揚者の特別選考を含む）を経て、国語科50名、保健科50名、計100名の入学を許可した。

入学式は7月1日、久保小学校の講堂で行われた。そのときの式次第は次のとおりである。

#### 入学式次第

- 一、新入生入場
- 一、保護者入場
- 一、来賓入場
- 一、学校長入場

（進駐軍将校2名と市長を伴う、一同起立）

- 一、学校長誨告
- 一、新入生総代宣誓

## ■女専意義深く開校

待望の尾道市立女子専門学校入学式は1日午前10時から仮校舎久保国民学校講堂で意義深く挙行した。この日希望に胸ふくらませた新入学生100名が嬉々として会場に参集、頼校長事務取扱、石原市長、島居市議会議長、三澤県視察官はじめ設立準備委員、市内有力者、父兄など約150名の他進駐軍キング大尉も特に列席、まず頼校長事務取扱から「地方の子女高等教育機関として生まれた本校は家庭と表裏一体の教育を理想とし“誠”をモットーとして指導する」旨告示があり、キング大尉、石原市長、島居議長から祝辞をうけて感銘裡に閉会、開校第一歩を踏み出した。

〈山陽新聞 1946年(昭和21年)7月2日 要約〉



一、学事報告

(主として生徒募集状況)

一、閉式の辞

一、学校長、来賓、新入生退場

[注] 保護者は居残って後援会設立の協議を行った。(女専設立委員会はこの時に解消して、その性格の一部は後援会に引き継がれた)。

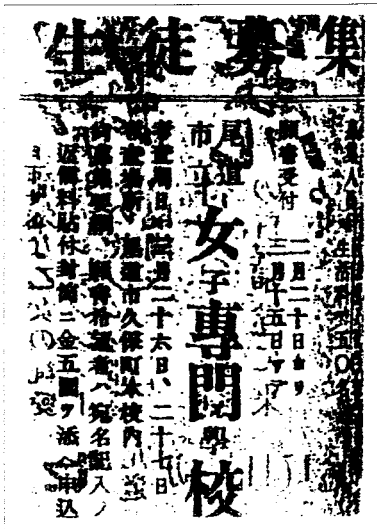
こうして尾道市立女子専門学校は発足した。このときの7月1日がその後今日まで創立記念日と定められ、1996年同月同日をもって50周年となるのである。

## 2 教育制度の改革と女専

1947(昭和22)年4月、戦後の教育面での民主的改革としていわゆる六三制が実施された。これは周知のとおり、戦前の義務教育年限を6年から9年に延長し、複雑に分岐していた小学校卒業後の学校体系を単一化して、3年生の中学校制度を創出し、さらにその上に高等学校3年(1948年から発足)、高等教育機関として大学4年(同1949年)の制度を設けたものである。敗戦後の極度に窮乏した中で導入されたこの制度は、教育現場に多くの混乱と難儀をもたらしたのであったが、当校もその例外ではなかった。なによりの大問題は、専門学校が制度上廃止されたため、新制度の大学へ移行しないかぎり、廃校せざるを得ない状況に追い詰められたことであるが、この問題については短大昇格の問題と絡めて後に述べるとして、とりあえず、この新制度導入に伴って発生したいくつかの事情や学内の対応等について記しておきたい。

### (1) 体制の整備

女専は、前掲申請書の設置要項に示されているように、修業年限3年で国語科と保健科が置かれ、1学年の入学定員は各50名であった。保健科は後に生活科と改められた。生徒は、初年度は国語科50名、生活科57名(初めは50名であったが、入学取消や補欠入学などで変動があった)の入学、2年度は国語科35名、生活科49名の入学であった。



生徒募集の広告〈山陽日日新聞 1948(昭和23)年2月19日〉

ところが、3年度、1948年には、同年から導入された六三制の新制高校が発足し、女專入学の資格となる旧制高女卒業相当の多数がこの新制高校に進学したために、入学者が激減してしまった。すなわち国語科5名、生活科11名となった。

しかし入学者は少なくとも3年生まで揃えば、学校としては一応の体制が出来上がり、教員組織もここでほぼ完成することになった。以下、当時ならびにその後の専任教員を一括して挙げておく。(表1)

### 《寄稿》

#### 女專時代のことなど

女專国語科第1回卒業（1949年）

平田 文子

昭和19年（1944年）春、太平洋戦争が激しくなり敗戦のさざしがみえだした頃、私達は高等女学校3年生（今の中学3年生と同じ年令）でした。勉強ばかりでなく、農家の麦刈りや田植えの手伝いもしました。10月には学徒動員で日立造船向島工場と東洋繊維尾道工場に行き、朝7時から夕方5時まで働きました。先生方も大変だったと思います。食料品もだんだん少なくなって栄養失調になりそうな状態でした。

昭和20年8月、広島、長崎の原爆で終戦となり、工場からやっと高等女学校へ戻ることができました。8月末には学校から広島の小屋浦収容所へ行き、掃除や食事の手伝い、死亡者の寝具の後始末等を数日やりました。みんな黙々として働きました。

その翌年の7月1日が尾道市立女子専門学校の開校の日です。時代の流れとはいえ、勉強したくてもできない時期を過ごして来た私達は、朝から先生方の講義を聞くことができるのが夢のようでした。しかし英語は敵国語として習うことができなかつたのでほとんど忘れてしまい、ずいぶんしんどい思いをしました。英語のテキストには、オキュパイドジャパンと書かれてありました。

歴史（日本史）の講義は特に有意義なものでした。今までのゆがめられたものでなく、

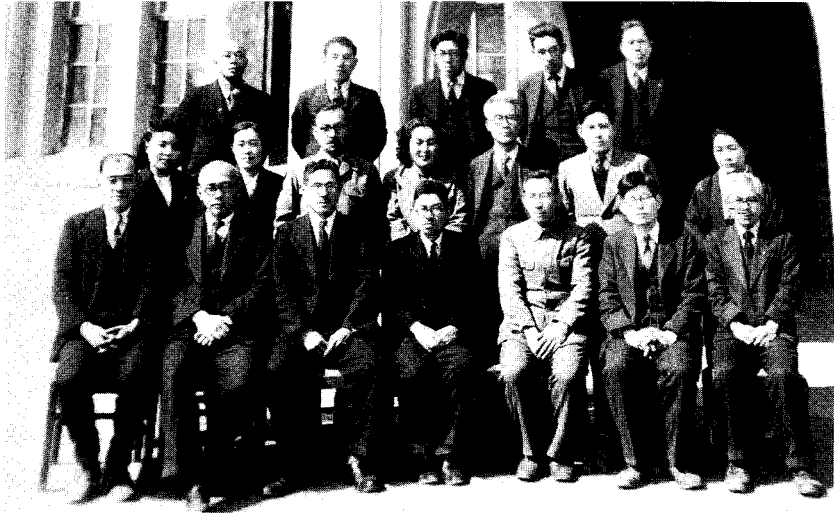
本物の歴史を教えていただきました。

お金もなく、またあっても買う本が少なく、買えばザラ紙に印刷してあるような本でした。尾道図書館が学校の近くにあったので帰りには寄ってよく本を読みました。隣に映画館があり、本を読んでいると音楽など聞こえてきました。外国の名画など、よく観に行きました。私達で演劇をする時は、一般のお客様が沢山観に来ました。でも、その科白はアメリカ進駐軍の検閲を受けてパスしなければできないようでした。

女專3年生の夏休み前に、文部省の検定試験を受けるかという話があり、国語科の私達はみんな力を合わせて猛勉強？をしようと思決めました。夏休み返上で先生方も指導して下さい、冬に文部省の試験官監督の下に3日間試験を受けました。中等学校の国語の2級免許状をもらいました。後輩の皆さま方に、すこしは役にたったかと思ひます。

昭和24年（1949年）3月、私達は第1回の卒業生となりました。広島で被爆して体にガラスの破片を残している友もありましたし、被爆した人と結婚し、遂に主人は原爆症で亡くなり、子供を育て、数年の後亡くなった友。原爆手帳を持ち、ガンでは死なぬよと云いながらガンで亡くなった友。

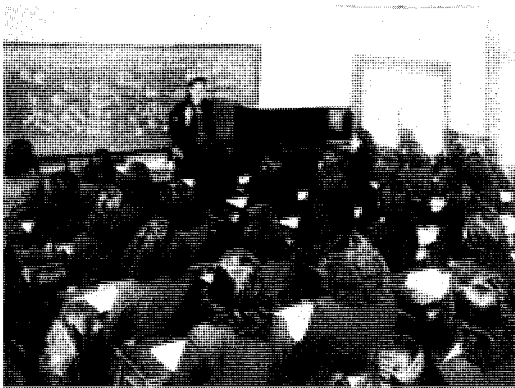
春には、千光寺の桜は今を盛りと美しく咲き、秋になると菊の香が高く薫っています。力一ぱい生きて、散った友達の冥福を祈りつつ、なお前へ進んで行きたいと思っております。



女専 教師一同



女専 学生と教師



女専時代の授業風景

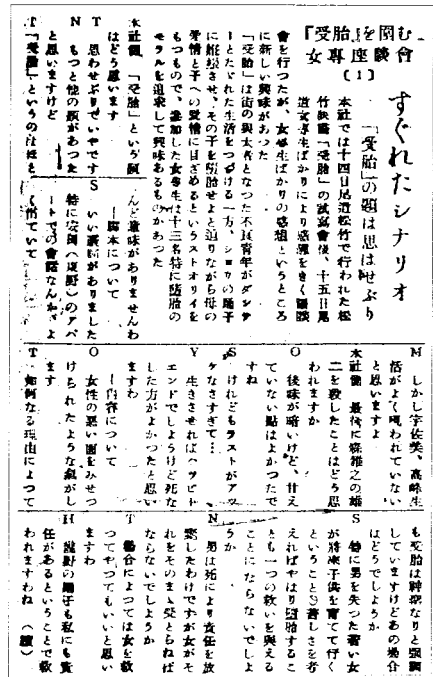


表1 専任教員一覧

氏名	職名	担当学科目	在職期間	備考
頼 成一	校長		1946. 7. 1-短大へ続く	学校長事務取扱としては4月1日付け発令
林 猪太郎	教授	社会・英語	1946. 7. 1-1949. 5.16	市嘱託として6月1日より設立事務に当たる
江藤 保定	〃	国語	1946. 7. 1-短大へ続く	
柿村 峻	〃	漢文	1946.10.25-1949. 4.15	
三吉 トモ	〃	家政	1947. 3.31-短大へ続く	
小河 義夫	〃	化学・物理	1948. 3.31-短大へ続く	
八木 寛	〃	教育・英語	1948. 7.31-短大へ続く	
三ヶ尻 浩	〃	国語	1949. 3.31-短大へ続く	
大上 一男	〃	心理学	1950. 3.31-短大へ続く	1953.2.2に帯賀に改姓
青木 茂	助教授	歴史	1947. 3.31-短大へ続く	非常勤講師として開校当時より勤務
吉田 眞三	〃	国語	1947. 3.31-短大へ続く	
高橋 賢陳	〃	哲学・倫理	1948. 3.31-短大へ続く	
小川 裕	講師	家事	1948. 2. 5-1949. 3.31	
鳥居フミエ	〃	家政	1949. 5.31-短大へ続く	1959.4.1に山口に改姓
増田 茅子	〃	被服	1950. 5.15-1952. 3.31	

【付記】非常勤講師としては、尾道市立尾道図書館長中井正一氏（哲学、1946.7.1-1948.4.25）、尾道市立厚生病院長井上賢氏（病理、昭和1946.7.1-1947.5.7）他多数あるが省略する。

一方、学生も新しい学校の創造に情熱をもった優れた教官の指導のもと、人数こそ少ないが、戦時中の空白を埋めようと実に意欲的・積極的に勉学に取り組んだ。こうした優秀な教師と意欲的な学生の集う女専は、学問の方でも部活動の方でも活気がみなぎり、単に教育機関というだけでなく、尾道の文化の一翼を担う文化施設でもあり、その発信地でもあった。演劇や映画の批評の座談会の中心メンバーはいつも女専の学生であった。1948年5月には、女専が中心となり、芸術院賞を受けた藤原義江の独唱会を開いている。学生たちの自主的な部活動を校友会と呼んでいたが、女専開校当初より、音楽、体育、茶道、華道、演劇などの諸部がつくられて活動していた。音楽部では尾道の放送局でラジオ放送に出た部員がいたり、体育部では国民体育大会に出場した部員がいた。また、演劇部の活躍は特にめざましく、チェーホフなど外国の翻訳ものを意欲的に手がけ、戦後の尾道の文化の先導的役割を果たした。1949年度には会則の成文化や部の増設が行われて、いっそう活発



女専学生による演劇批評の座談会〈山陽日新新聞 1948(昭和23)年4月17日〉

## ■市立女専岐路に立つ

片や大学昇格運動

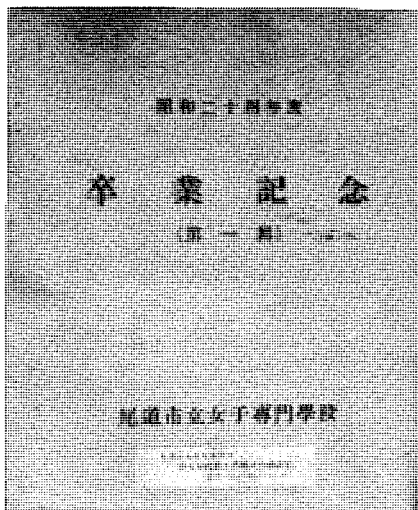
片や志願者二十名

尾道市立女専の経費は本年度は二四万円、明年度は一躍増額されて七十九万を計上されているが、二十五日の予算委員会でこれが問題になり明年度は入学志願者も少いのにいまのまゝでいけばその経営難は市の財政面に相当響いてくるから独立採算制をとらせ折角の地元唯一の専門学校なので廃校は惜しいから五月にきまる新制大学設置基準案に間に合うように単科大学昇格の運動を起してはとの意見もでて、この意見に大半が賛成を示すに至つたので、市当局では早速大学設置の具体案を練るとともに昇格運動を起すことになった、いま、石原市長の手許で考えられているプランは、

男女共学とし、いままでの生活科、国語科のほかには法科、文科、経済科を新設、校舎は現在の久保校を充当しようというものである

この計画をよそに女専側では明年度も生活科五十名、国語科五十名計百名の生徒を募集しているが、女専が大学に昇格するか、新制高等学校になるかが不明であること、本年から五年卒業生でなければ入学資格がないため願書の提出は少く締切日を延期した二十五日で志願者がいまだ二十名にも達しない状態である、志願者はほとんどが生活科で国語科志望は少い、女専では二十六七両日試験を行うが、さらに二次募集を行うが入学者がたとえ五名でも授業をつづけて行こうと学校では悲壮な決意をかためてをり、女専側ではたとえ何があろうと今年度の入学は最後の女専卒業生となるわけで、何とかして入学してもらいたいと希望している。

〈山陽日日新聞 1948(昭和23)年3月27日〉



女専 第1回卒業記念文集(1949(昭和24)年度)

になった。文芸部や新聞部ができたのもこの頃である。

このように、仮校舎とはいえ、内容も充実に向かい、組織体制も次第に整ううちに、1949年3月12日、第一回の卒業生を送ることになった。卒業式は、東高等学校の講堂を借りて行った。久保小学校の講堂は当時すでに新制中学の教室として使われていたからである。卒業生の数は、国語科・生活科とも44名であった。

なお、ここで当時の学則のうち、学校生活にかかわる部分をいくつかあげてみる。今日の学則と大きく異なり、大変興味深い。

第7条 学年ヲ分チテ2学期トス

第1期ハ4月1日~9月30日

第2期ハ10月1日~翌年3月31日

第8条 本校ノ休業日

夏期休業 8月1日~8月31日

冬期休業 12月15日~翌年1月7日

春期休業 3月25日~4月7日

第9条 生徒入学ノ時期ハ每学期ノ始トス

第25条 本校生徒ノ学費

授業料 1200円

入学検定料 50円

入学金 50円

## (2) 中等学校教員無試験検定の認可

戦前の教員検定制度は学校に対する資格審査の試験があり、それに合格すると、その学校の卒業生は無試験で中等学校教員の資格が与えられるというものであった。この無試験検定制度は1900（明治33）年以来実施されてきたもので、戦後1949年教育免許法の制定により廃止されることになった。本学としてはこの特権を得る最後の機会で1948年出願した。出願したのは国語科だけで、試験はその年の12月12日に行われた。成績審査の結果合格になり、以後、国語科の卒業生は無試験で中等学校の免許が得られることになったのである。

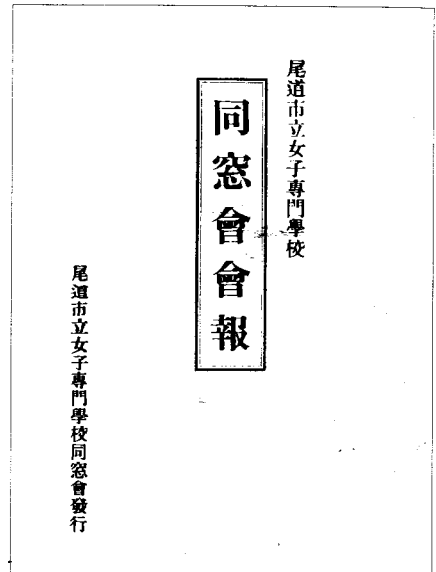
## (3) 別科の新設と学則の変更

これも、学制改革に対応して急遽作られたものであった。1948年よりそれまで4年制であった旧制女学校は一律5年制となったので、旧制高等女学校の卒業生またはそれに準じる者が、新制高等学校卒業相当の修業年数に達することができるように修業年限1年を補って、高い教養を身につけさせようというのが目的であった。それにはまた、次に準備中の短大への入学資格を配慮する意味も加味されていた。1949年3月、大急ぎで文部省へ申請し、3月27日に内諾を得て直ちに募集に取りかかった。幸いに応募者も相当数あり、4月13日に入学試験を行って、23名を合格させ、15日に入学式を挙行了した。その後、遅れて入学を許可した者をも加えて総数32名になった。

ところで実は、それに伴って女専の学則に改正を要すべきことが起こっている。それは女専入学の基礎資格が旧制高等女学校卒業であったものが、六三制の改革によって旧制高等女学校が廃止され、1949年からは新制高等学校として卒業する者が本筋となったからである。したがって、入学資格を新制高等学校に切り換える必要がおり、同時に修業年限は2年に短縮することが適切となった。それによって、前掲の学則が一部改正されたので、その主な部分を次に挙げておこう。

(イ) 第3条の、修業年限「3年」を「2年」に改める。

(ロ) 第5条の「学科課程云々」による表も、それに



女専 同窓会会報

つれて改正（記載省略）

(ハ) 「第8章 別科」を追加して次の条文を置く

第29条 別科は短期間に女子に須要な学術技能を教授し婦徳を涵養するを目的とす

第30条 別科の修業年限は1年とする

第31条 別科の定員を50名とする

第32条 別科に入学し得るものは左の各号の1に該当するものである

### 《寄稿》

## 開学50周年にあたって

女専生活科第1回卒業（1949年）

今井 鈴子（旧姓大塚）

創立50周年おめでとうございます。第1回入学式に緊張と感激で「宣誓」を読んだ私も、シルバーカードを頂く年齢となりました。子供達は40歳前後、社会の中堅として活躍し、孫は今年、丁度私が女専に入学した時と同じ年齢となりました。50年の歳月とはこういうものかと感無量です。あらためて50年前の資料を探し出してみました。セピア色の入学式の写真、書き込みのある本とザラ紙のノート。日記。これらを読みなおして懐旧の情と共に、改めて私にとってこの女専の3年間がいかに貴重な日々であったかと感慨にひたりました。

思えば戦時中、勤労奉仕、学徒動員、警報発令ごとの救護出動、そして戦後の広島原爆の救護と、少女ながらも懸命の日々でした。そしていざ平和が訪れてみると、都会は焦土と化し、生活環境も悪く、子女を都会に遊学させることの困難な時代でした。あたかもその時期に女専が尾道に創立されたのです。

校舎は仮住まいの久保小学校。2階東南隅の2教室で国文と生活の2学科のみでした。暖房は黒板脇の1米四方の木と土で作られた四角い火鉢が一つ。しかし教授陣は実に素晴らしい陣容でした。頼成一校長、林猪太郎先生、柿村峻先生、吉田眞三先生、三吉トモ先生……と私達には勿体ない立派な先生方が、住

宅事情の悪い中で健闘しておられました。林先生の法律と人権、柿村先生の論語、吉田先生の近代文学、高橋先生の哲学。又、生活科は厚生病院（現在の市民病院）の先生方の授業も多く、栄養学、疾病予防、人体生理学など受講しました。また実際に厚生病院で腎臓摘出の手術を見学させて頂き、緊張して青ざめながらも生命の厳粛さに心打たれたことを思い出します。中井正一先生の論文提出に苦勞しながらも人生の深みに思いを至すようになりました。お偉い先生方ですのに優しく相談にのって頂いたり、テニスの相手などして下さいました。青空に両手をひろげて平和を感謝したい日々でした。

その頃は演劇ブームで、1回生もチェーホフの「桜の園」を角田寛英さん（尾道在住の詩人）の演出で公演し、その大熱演は今も脳裡に残っています。千光寺山頂の尾道放送局で高山教子先生の指揮で「流浪の民」を合唱したり、デコボコの校庭でテニスをやり始め、県女や企業の借りコートで練習を重ね、第3回福岡国体へも出場しました。

終戦で虚無状態の私達は、女専で学ぶことにより、自分自身で物を見、聞き、考えることを教わりました。遂に自分達の校舎を持たぬまま卒業しましたが、あの時育てられた文化の芽は、家庭に入り、子育てをし、50年経た今も心の支えとなっております。恩師の温存を偲び、感謝しますと共に、母校の今後の一層の発展を念じて筆を擱きます。

- 1 高等女学校を卒業した者
- 2 文部大臣に於いて一般の専門学校入学に  
関し高等女学校卒業と同等以上の学力あり  
と認めるもの

第33条 別科の教科課程を左の通り定める（記  
載省略）

第34条 授業料は年額2,520円とす

第35条 別科に関しては別に定めるものの外は  
本科の学則を準用する

(ニ) 第25条の「学費」もこの際次のように改正

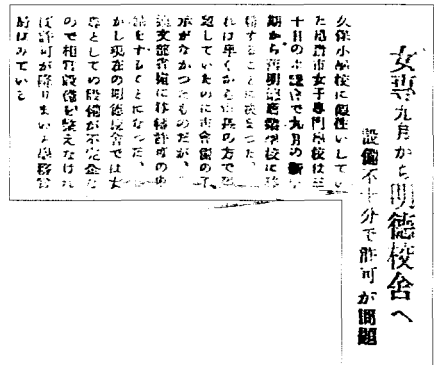
- 一 授業料 2,520円
- 一 入学検定料 200円
- 一 入学金 200円

(ホ) 「補則」に「この変更学則は昭和24年4月1日よ  
り施行する」の一項を加える。なお補則の条数は  
変わる。

この新学則によって、1949年4月に最初の新制高等学校  
卒業（あるいは相当）で入学した新入生は、前年入学の組、  
すなわちそのときの2年生へ編入されたのである。入学者  
は、国語科1名、生活科7名であった。

### 3 南高等学校へ校舎移転

女専発足時、戦後の物資困窮の大混乱の中で、とにかく  
窮余の策として久保小学校を借用することができたのは、  
当時、久保小学校には児童数が少なく、教室にかなりの余  
裕があったからである。しかし戦後、社会情勢が安定する  
につれて疎開者の復帰などで次第に児童数が増え、また、  
六三制の導入でにわかに新制中学のための校舎が要請され  
新制の久保中学校が一部を借用することになったので、教  
室の不足はますます深刻なものになってきた。女専が初め  
に借りていた教室は、普通教室が本校舎（鉄筋コンクリ  
ート造3階建）東側2階、裁縫教室がその3階、音楽室がその  
階下、食物実習室が講堂の階下、そして職員室が本校舎北  
側2階の1室、校長室はその一部、事務室は1階で2度移転  
した。それが3年目には、国語科1年が講堂の控室に、生活



南高等学校への校舎移転決定の記事（山陽日日新聞1949(昭和24)年8月2日）



## ■大学昇格 尾道女専不合格 二年制の望み捨てず

大学設置委員会では14日から3日間、第8回総会を開き、第1次審査に残された国立、公立、私立校について審査を行い、合格94校、不合格5校、保留2校、部分的保留2校を決定したので、18日文部大臣に答申した。これで第1回とあわせて新制大学のうち開校を認められないもの173校、不合格39校、保留2校で、昨年発足とあわせると新制大学数は185校となった。

ところで、問題の尾道女専の昇格は前回保留となっていたが、今後の審査の結果、下関水産、清泉女子、京浜女子、戸板女子の4校とともに不合格に決定、ついに四年制大学へ昇格の望みは水泡と帰した。

しかし、四年制大学の希望はすておらず尾道市ではこの運動をつづけるとともに女専として存続することになる。

〈山陽日日新聞 1949(昭和24)年3月20日〉

科1年は事務室を仕切って使うといった状況であった。4年目(1949年7月11日)にはさらに講堂の階下に一部移転して、その西北隅の狭い物置きを校長室に、隣の部室を職員室に、玄関口の通路を隔てて東北隅を事務室にした。窮屈さもさることながら、まことに惨めな状態であった。このような状態ですらでも続けられるものではないので、新たに施設上の対策が立てられなければならない段階にきていたわけである。それに拍車を加えたのが大学設置の問題であった。

すでに述べたように、学制改革により、女専は新制大学に切り換えなくては、廃校の運命に陥る以外にない状況となった。そこで、急遽教授陣を方々に求め1948(昭和23)年度には国文科(入学定員40名)の新制大学を設置すべく文部省に申請した。同年12月21日、大学設置委員会から文部省の係官とともに現地視察員の派遣があったが、不備な点が多く、このままの仮校舎では認可の見込みがないことが明らかとなった。そこで申請の件も1949年度には改めて練り直さなくてはならなくなり、施設の面では尾道市立南高等学校を借用することになった。南高等学校はこれまで明德商業と称していたが、新制度に伴い廃校とし、夜

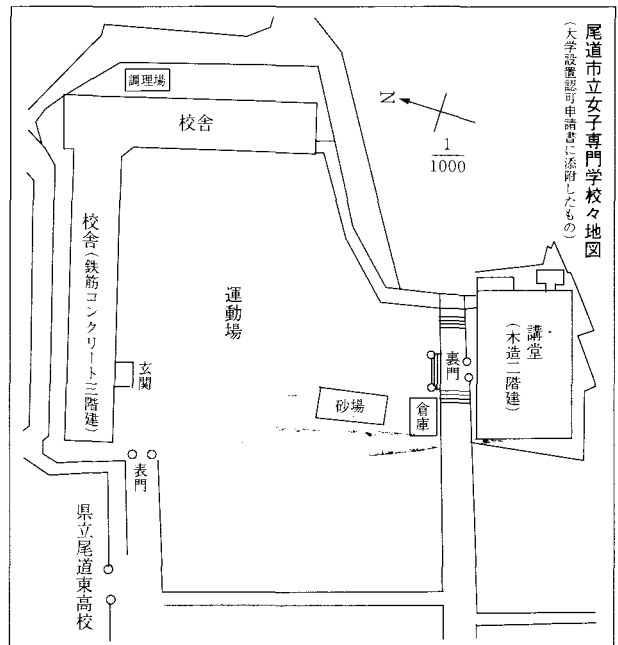


図1 久保時代の仮校舎(久保小学校)配置図

間の南校として出発していたので、昼間はその施設を完全に借用できたからである。しかし、旧明德商業の側では尾道の恩人山口玄洞氏の創立になるこの学校の存続運動があり、女専の借用についても反対があった。しかし、最終的に市の説得に応じ、かくて1949年9月7日に移転が行われ、それまで3年2カ月にわたりお世話になった久保小学校にようやく別れを告げたのである。

# 座談会 戦後の混乱の中で生まれた女性教育 —1946(昭和21)年女専開学—

日 時：平成7年8月7日・午後1時30分～  
午後4時

場 所：喫茶店「茶屋」（尾道市土堂町）

出席者：吉田 眞三（元尾道短期大学学長、  
元女子専門学校教授）

小島 雅由（尾道短期大学同窓会会長）

小川 和恵（国語科1期生）

近藤 信恵（国語科1期生）

原 雅楽子（国語科1期生）

平田 文子（国語科1期生）

秋永 良子（生活科1期生）

国広 妙子（生活科1期生）

筒井 和子（生活科1期生）

長井 保子（生活科1期生）

織田 正子（生活科2期生）

豊松 道枝（生活科3期生）

司 会：信岡 巽（創立記念事業準備委員会  
委員長、元学長）

司会 女専が創立された1946(昭和21)年といえますと、戦後の未曾有の大混乱の時期だったと思います。尾道は幸い戦災を受けなかったのですが、それにしましても、食べるものもろくにない戦後すぐに女専をつくろうという、当時の人たちの意気込み、教育に対する情熱、あるいは将来の歴史を見据えた先見の明といえますか、今、顧みましても実に驚嘆すべきことです。当時の尾道の状況というのはどうだったのでしょうか。

近藤 私たちもまだ若かった頃ですからよく分りませんが、当時の石原善三郎市長という方は、戦後のインフレや食糧難など大変な中で「夢を語る市長」とかいわれて、なかなかのアイデアマンだったようです。女専というのもその一つで、この人ならではの先見的な発想だったのかもしれない。

司会 当時尾道に疎開しておられた中井正一先生の思想的影響も大きかったのではないのでしょうか。戦前から進歩的な思想の持ち主で、これから

の新しい時代の日本を担うのは女性であり、女性の権利や自由、解放が大きな課題で、そのための教育機関として女専の設立を強く訴えられたと聞いております。

小島 青木茂先生のお力も大きかったと伺っております。

司会 石原市長の先見的な進取の精神、中井先生の進歩的思想、それに青木茂先生の優れた歴史的洞察、それらが一つになって女専の精神的な中核を形成したのでしょうか。

筒井 創立当時のことといえば、科名については、私たちが入ったときは、たしか家政科と書いていたと思います。その家政科がいつの間にか保健科になって、そして卒業のときには生活科に変わりました。ですから、私たちの在学中に2回名前が変わったように記憶しております。つまり私たちの学科は、その時その時の要求に対して変容していったんだなと思います。

司会 ところで、当時の新聞をいくら調べても最

初の女専の学生募集の広告がどこにも出ていません。2回目は「山陽日日新聞」に出ているのですが、皆さんは女専開校の情報をどのようにしてお知りになったのですか。

近藤 女学校へ案内がきたのです。一般のニュースとしては新聞に載ったのですが、募集については女学校に案内がきたのでしょうか。

原 私は先生から聞きました。女学校の4年生の8月15日に終戦になりまして、防空壕を埋めたりいろいろな作業をしながら、その間に少しずつ勉強していました。今度、尾道に女専ができるということで、急遽補習の時間を取ってくださったように記憶しています。だから、学校から聞いたと思うのです。

試験は「徒然草」から出たのです。どうして覚えているかという、補習してくださった先生が山をかけてくださり、それが当たったからです。

司会 皆さんの女学校時代は戦争のさなかで勤労働員などで大変でしたでしょうか、戦後この尾道女専ができてそこで学びたいと考えられたのは、どういう動機からでしたか。

筒井 私の場合は、日本の国が言ってきたこと、私たちが教わってきたことと、戦争に負けたという現実のギャップやショックの中で、じっとして

いられないというような感じがあったのです。最近テレビなどを見ている、戦後50年たって、私と同じようなことを言っている人が多いですね。私だけじゃなかったのだと思いました。

近藤 終戦の年、女学校の5年生だったとき、尾道の話が出たのです。どこか別の学校へ行こうかなと思っていたのですが、父親が「いい学校は受かるか受からないか分からない。そんなところへ行くよりも、入れてもらえそうな尾道女専の方がいい」と言うわけです。それに私は理科系の勉強をしていたのに、女らしくないということで国文へ行けと言われ、無理やり国文に変わらされて、尾道女専に行きました。父親にねじ曲げられた格好で急遽変更したのです。ですから、しぶしぶ来たのですが、良い友達が大量にできましたし、素晴らしい先生方に恵まれて、ほんとうに充実した青春の3年間を過ごしました。今でも、本当によかったと思っています。入学式のときに校長、市長のご挨拶の後に、進駐軍の将校の方が通訳を連れてスピーチをしたのが印象に残っています。

国広 当時は戦争が終わった後で、食糧難が大きなネックになって、都会へ出ようにも出られなかったのです。出るどころか、みんなUターンしていました。でも、どうしても上の学校へ行きたい



女専 座談会出席のみなさん

と思っていたところへ女専ができたものですから、ラッキーでした。

私は国文科に行きたかったのですが、家には祖父母がいて、女の子に学問は無駄だということで、国文科には行かせない、家政科ならいいということになり行かせてもらったのです。

平田 女学校時代は戦争の真っ只中で十分に勉強できず、この空白をなんとか埋めたいという気持ちがあって、余計に行きたかったのです。

長井 私は「お嫁入り道具はいらないから女専へ行きたい」と言いました。親は落ちればいいと思っていたかもしれませんが……。知識の点でも精神の面でも、もっと充実したいと思ったのです。私も同じように、戦争による空白が耐えられなかったのでしょうか。

原 私は因島の出身です。因島には日立の造船所がありまして、女学校の2年生の終わりから動員され行っておりました。4年生の夏までずっと働きづめで、勉強はほとんどできませんでした。小さい頃から東京の学校へ行くつもりでいたのに、当時は空襲でみんな焼けて混乱し大変でした。どこへも行けないと悲しんでいたら女専ができましたので、やっと入らせてもらい嬉しく思いました。

女専にいた2年7カ月は、羽がはえたみたいに、それ以前の不自由な状況から解放された気分でした。先生は素晴らしいし、若い旺盛な知識欲を満足させてくれる友達もたくさんいました。都会から帰ってきた方も多くて、新しい時代の文化を友達からいっぱい吸収させていただきました。「あの時期がなかったら今の自分はない。青春は女専のときだ」と明言できます。

近藤 柿村先生(柿村峻:熊本女子大学に転任、後同大学学長)もいつもおっしゃいます。女専にいた尾道の3年間はまたとない3年間だったと。去年の10月に奥様が亡くなられて、ちょっとお参りかたが熊本へ行ってお会いしましたら、お嬢さん方も「父がいつも言いますから、一度尾道へ行

ってみたいものです」とおっしゃっていましたね。私たちにとっても何とも言えない3年間でしたし、先生方もそう思ってくださっているんだなと思いき感激しました。

平田 青木先生も「校舎はボロ、設備もボロで日本一オンボロ女専だけれども、日本一いい女専だから、誇りをもって勉強しましょう」と言ってくださいました。

司会 当時の先生方の中では吉田先生が一番およかったということですが、先生はどういういきさつで女専へいらっしゃることになったのでしょうか。

吉田 私が戦地から帰ってきたのは昭和21年6月の終わりでした。6月の月末に佐世保に上陸しているのです。しばらくは内地の情報も全く分からない有様でした。

たしか9月に東京へ行って、久松先生(久松潜一:東京大学教授)にお会いして今後の身の振り方について相談にのっていただき、郷里の上下が近かったということもあり、尾道へ来ました。

戦地から帰って間もなくのことで、来てみれば女性ばかり。正直言って、生徒たちみんながまぶしくて……(笑)。しかし、他の先生方から「尾道に来てあまりいいことはないよ」と言われて、とんだところへ来たなと思いました。そのときは2、3年いて、あとはどこかへ行こうぐらいに気軽に考えていたのです。

そのようなとき、市議会で一部の議員さんから、「女専が金をくって困るのでつぶせ」という声が上がったのです。ある先生は、「吉田君、君は若いだから早くよそへ行った方がいいぞ。ここにいたらつぶれるぞ」とおっしゃいました。この先生は親切で私にそうおっしゃったのですが、そのときは私はもう女専が好きになっていたのですね。「もしこの学校が将来性ある学校なら、後から来る先生はいくらでもいるだろう。しかし、つぶれかけた学校へ赴任してくる先生はいない。私は若く

てまだ先があるのだから、とにかく現在の学生が卒業するまではここにいて、見送ってやろう。学校がつぶれるのなら、どうせ全部卒業生を出してからだろうから、それを見送ってやらないとかわいそうだ」というような気持ちになりました。どうせ私がいくところ、日本帝国は戦争で破れ、尾道女専は沈没（笑）。これも一つの運命だという気持ちでいたところ、短期大学に変わったわけです。

それにしましても、頼校長先生には敬服していました。私たちは「孔子様」と呼んでいましたが、学者肌の、本当に子供のような純粋な心を持った仏様みたいな方でした。その人格に心酔し、どこまでもついて行こうという気持ちになりました。

司会 吉田先生は、われわれを見捨てず女専、短大と今日までずっと面倒を見てくださっているわけですが、何か先生にまつわる思い出はございますか。

長井 吉田先生が学校へ来られたのは30歳ぐらいのときでしたでしょうか。ずっとテニスを教えてもらって、国体にも出場できました。よく遊ばせていただいたことも楽しい思い出で、道後山や大山などへも連れて行っていただきました。今日は当時に返ったような気持ちで、懐かしいかぎりです。

豊松 実は、私は3年の途中までは2回生で入りまして、3年の途中で病気をして休学いたしました。1年たって、1学年遅れて行こうかどうしようかと迷っていましたが、吉田先生がわざわざ自宅に来てくださりまして、「あしたからでいいから出てきなさいよ」と言ってくださったのです。それがきっかけで「それじゃ、行こうかしら」という気になりました。次の3回生で勉強させてもらいまして、なんとか卒業生の名簿の端に入れていただきました。もし、先生があのおとき来てくださっていなかったら、私はそのままあきらめていたかもしれません。

筒井 吉田先生は国文の先生で、私たち生活科の

者は授業は受けなかったのですが、余暇の方で随分お世話になりました。演劇とかソフトボール、テニスなどで本当に鍛えられましたし、楽しく遊んでいただきました。何を隠そう、ソフトボールを最初に尾道へ持ち込んだのは女専なんです。山へ登ったときのこともよく覚えてみます。

豊松 他の先生では、やはり中井先生のことをよく覚えています。先生の美学は素晴らしい授業でした。「日に新たに、日に日にまた新たに」というような言葉を授業の中でおっしゃっておられまして、いまだに忘れられません。

原 先生の授業のとき、机の上にバラが1本いけてあったのですが、2、3日してそのバラを枯れたまま机の上に置いていましたら、中井先生が、「君たち、バラの美しいときを本当に愛するか、それともこうなっても愛するか」とおっしゃったので、みんなしーんとなってしまいました。あれから、花がしおれたのを見るたびに、いつも中井先生のことを思い出します。

信岡 市の図書館に当期中井先生が女専で講義されたノートが残っていますが……。

国広 あれは私が筆記していたノートなのですが、図書館の方で探していらっしゃるということで、私の汚いノートでもお役に立てればと思ってお目かけました。

小島 先生は京都大学の助教授をなさっていたのですが、戦争中に先生の学説が警察に狙われ、京都大学をお辞めになってこちらにお帰りになったということです。中井先生を尾道へ迎えられたのは第15代市長の田坂寧邦氏です。先生のお父様が戦前に尾道にいらっじゃったのが縁だということですが、田坂市長は中井先生の素晴らしさをよくご存じだったのですね。だからこそ、官憲の監視下にあった中井先生をあえて温かく尾道へ迎えられたと聞いております。

原 中井先生の講義の中で、学生時代に登山された経験を話され、今もときどき山に登られるとい

うことで、「高い山の上で見ると、星はまたたかないんだよ。ぽかっと大きな目玉でのぞかれていますみたいだ」とおっしゃっていたのが印象的です。

**豊松** 私は中井先生のお嬢さんと同級でしたから、夜によく先生のお宅へ遊びに行っていました。1階では尾道の若い男の人たち、いわゆる文化人みたいな方たちが先生といろいろ議論をしていらっっしゃって、私たちは2階でコーラスをしたり、英語の勉強をしたりしていました。下に集まっておられる人たちがコーラスに聴きほれていると、先生が「戦争中のことを思うと、これが平和なんだ」と、感激したようにみなさんにおっしゃったということでした。ときには、私たちも下りて行って皆さんの話の中に入れてもらったりしていましたが、私たちはもっぱら聞いているばかりでした。

私たちが2年のとき広島県知事選に立候補されて、そのときの選挙資金に当てるために出版された『近代美の研究』を私たちは買わせていただきましたが、今でも大切に持っています。

**司会** 素晴らしい優れた先生方の指導の下、当時の学生もみんな意欲的に学問に取り組んでいたように思います。皆さんは、勉強についてどんな思い出をお持ちでしょうか。

**近藤** 国文や漢文はそうでもなかったのですが、歴史については、せっかくの青木先生の講義が十分消化しきれなかったように思います。国文や漢文は難しくても、考え方そのものに変化はなかったわけですが、歴史はその点非常に難しかったですね。戦争によって、それ以前と以降では価値観がガラリと変わってしまいましたから。

**小川** 林先生は憲法の授業をしてくださいました。ここでも戦前の考え方とはガラリと変わった内容で、それをわかりやすく説明して下さったと思います。でも、その講義を基準にして社会を見たら、かなりのギャップがあったのです。そのことを誰にも言えないでいましたが、あるとき原さんに聞いてみましたら、同感だと言われて、や

っぱり同じ思いの人はいたのだと思いました。

当時の女専の学生たちは、やはり時代に目覚めていて知的にも文化的にもレベルの高かった人が多くて、私も知らないうちに影響を受け、とてもいい勉強になりました。

**織田** あの頃、市の厚生病院からも何人も先生方が教えに来られていましたが、本当に先生ばかりで、温かい家庭的な雰囲気をつくっていただいたように思います。野北通夫先生も長崎医科大学の医学部長や長崎労災病院長になっておられましたが、お会いしたら昔の尾道時代や女専で教えたことなどを懐しんでおられました。

**原** だいたいはのんびりと勉強していたと思いますが、中学校教員無試験検定認可のための国家試験というものがありませんでした。それに合格すると、以後の国語科の卒業生は無試験で中学校教員の免許が得られるという制度で、学校に対する資格審査のための試験であったのです。吉田先生、江藤先生など国文や漢文の専門の先生方が叱咤激励してくださったことを覚えています。そのときは、さすがに勉強しましたね。

**吉田** あのとき、生活科の人たちは「自分たちの勉強は試験のための勉強じゃないんだ。本格的な勉強をする」というようなへ理屈を言うわけです。「試験のための勉強と本格的な勉強の区別はない。国語科の者は全員受けろ」と気合いを入れました。

あの頃は今と違って、女の人はあまり就職はしませんでした。ですから、それほど資格の必要性を感じなかったのです。ただ、私は国語科の人たちには就職云々よりも、挑戦させてみたかったです。合格して自信をつけ、誇りを持ってもらいたかったし、学校の格式もそれによって高まるわけなんですから……。気合いを入れたことをよく覚えていますよ（笑）。

**原** 吉田先生は「君たちだけのためじゃないんだ。後輩のことも考えてみい」と言われたんですよ。あれでみんな発奮して、私も家政科の何人かを説



女専 茶道部

得した覚えがあります。「学校の先生をする人はいないし……」という声も返ってきましたが、私は挑戦することにしました。私も実際は先生になるつもりはなかったのですが、おかげでずっと40年も学校の先生をさせてもらい、恩恵を受けた一人です。

司会 勉強以外の活動に話題を移らせていただきたいと思います。その当時どんなクラブがあったのですか。

平田 テニス部でしょう。卓球もありました。学生交流では短歌会、コーラス部、速水流のお茶と池坊もありました。私たちは西国寺の下の山神先生（クラブの講師）のお宅へ帰りに寄って、生花を習っていました。

豊松 あの当時は今ほど東京との文化交流がない時代ですから、女専が文化的な活動ではリーダー的な役割を果たしていたところがあります。演劇活動がなかなか盛んでした。学生演劇連盟があって、前進座を呼んだこともあります。自分たちで自主的にやっていました。みんなが演出者というか……。

前代未聞のものすごいお芝居があったのですよ。出演者は吉田先生、青木先生、柿村先生、衣装はすべて新聞という……（笑）。

司会 個性豊かな方々がたくさんいらっしまったようですが、女専にはどちらの方面の学生さんが多かったのでしょうか。やはり地元出身の方が大部分でしたか。

近藤 いいえ、そんなことはありませんでした。汽車通学でしたし、下宿の人もいました。戦後ですから、疎開してきていた東京、大阪の女学校卒業の人もたくさんいました。地元の県女の人たちよりも、都会などよそからの人たちの方が多かったのじゃないでしょうか。

まだ国道なんてできてなくて、駅まで行くのに強制疎開の跡のところを歩いていましたね。土がボロボロの状態のところを毎日必死で歩いていましたが、ちょっと時間に余裕があると本通りを歩いて行きました。

小川 東京からこちらへ帰られた方、大阪から帰られた方などは、本当にレベルが高かったような気がします。

ときには、授業をエスケープして映画を見に行ったりしました。気に入れば同じ映画を3回も4回も見まして、青春を謳歌した思い出があります。

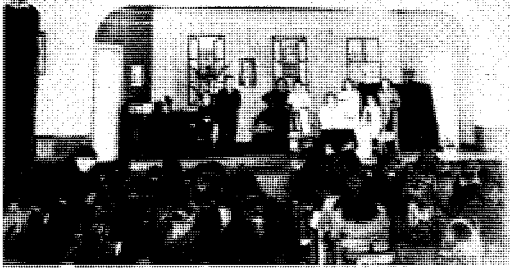
女専の友達は何かなり多く、今でも論理的なことも気兼ねなく話せるような気がして感謝しております。

秋永 私の場合は、少し回り道をして女専に入りました。女学校を卒業するとき、代用教員になるんだったら卒業させてやるということで職に就きました。と言っても、17歳ですから、生徒といくらも変わらないのです。今思い出しても冷汗が出るような毎日でした。そして、女専か代用教員かどちらを選ぶかという岐路に立たされたわけです。



女専 テニス部





女専 演劇大会

が、申し訳なかったのですが、女専へ行くからということで急に辞めさせていただきます。

司会 その当時は、よその大学との交流で男女の交際などというのはどうでしたか。

原 個人的にはおありだったと思いますが、そんな時代ではありませんでしたね。なにしろ、あの頃は男性は戦争で亡くなられた方が多く、女性がたくさんいて男性が少なかった時代です。

原 六高（旧制第六高等学校）あたりの学生さんがレコードコンサートをしていました。また、広島文理大学へ短歌会でこちらからまいりしたり、コーラスで広島まで行ったりというくらいではないでしょうか。

司会 それにしましても、当時の通念から言えば、女の子なら女学校に4年か5年行けばそれでもう十分だという感じでした。それ以上、上級の学校に行くといったら、やっぱりエリートだと思うのですね。私も、知り合いの家の方が女専へ行っているというのを、その当時私は中学生でしたが、親が話していたのを耳にして、たいそう高級な学校へ行っているようなイメージがありましたね。その頃、尾道の方は、女専へ行っている学生には一目置いていたのではないのでしょうか。

小島 女専の人たちは非常に目立ったと思います。それで、女専は特権階級の子女の学校なんだという見方をされて、一部の市議員から「女専は金をくう」と攻撃もされたということを聞いております。

豊松 映画の批評会なども、新聞社が女専の学生

を集めてやっていたようですね。女専というのは、尾道の文化運動をリードしていたというか、いわば先端を走っていたのです。確かに当時、女専の連中は市民から一目置かれていたのです。

豊松 女専というのは、卒業してからも私たちに大きな影響を与え続けて来ています。高橋先生（高橋賢陳：女専・短大教授、道元の研究家で文学博士）が公開講座で講義してくださっていましたので、それを聞きに行かせてもらったりしていました。それで、先生の道元の研究に共鳴しまして、本をいくつか書いていらっしゃるのを手伝わせていただきました。結局、ものの考え方というものを、卒業してからもいろいろ指導していただきました。先生は、亡くなられるまで弟子として導いてくださったと思います。

女専へ行ったからこそ、いい先生方にめぐり会えたのです。戦争中とは全然違う教養的でアカデミックな雰囲気の中で明るく楽しい生活を送らせてもらって、勉強だけではなく、とてもいいものを生涯にわたっていただけたと思っています。

筒井 女専は、今まで皆さんがおっしゃったように、本当に荒廃した時代にぼつと一つの花が咲いたようなところでした。戦時中は学徒動員で、私たちの学んだ女学校の学舎は晩部隊に占領され暗い時期でした。それだけに女専の3年間は実に楽しくおおらかで、学びながら演劇やスポーツで遊ばせていただき、その中で青春の炎を燃やし続けたのです。

あの頃、林先生が、「無用の用」ということを言っておられました。「学生生活は無用の用なのだ。学校で学んだことがすべてではない。しかし、必ずどこかで役立つときがある」というようなお話をされていたと思います。私も今考えてみますと、ものの見方というものに対して、女学校だけの生活で終わっていたら現在の私はなく、もっと違った人間になっていただろうと思うのです。つくづく女専の3年間の生活は開放的で素晴らしく

ったと回顧しております。

織田 女専時代に家族的なむつまじさがあったというのも、先生方御自身のお子さんがたくさん女専へ入っていらっしゃっているんです。それで余計、そういうところもあったんじゃないかなと思ったりします。

皆さんがおっしゃっているように、私にとって女専時代というのは、女専へ行ったということが人生の大きなプラスになっていると思います。1年上の方が集まられるときにも、学年を超えて出ておいでと言われるといそいそと仲間に入れていただいたりするのですけれども、やっぱり50年たってみるとそういうことも許されるようになって

て、楽しい時間を持てるようになり幸せだと思っております。

司会 本日はお忙しい中、お集まりいただき、本当に素晴らしい貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます。

確かに、女専は短大となり今や全国的にも有名校となりましたが、昔の教師と学生との温かい人格的交流、手作りの教育が現在もあるのかどうかというと、ちょっと自信がないのです。ただ、世の中も変わってきていますし、大学だけの責任ではないと思いますが、われわれとしましても、この長い歴史と伝統あるよき校風を継承していくよう最善の努力をしていきたいと思っております。

## 第2章 尾道短期大学の発足 (1950年～1965年)



●学制改革により存亡の岐路に立たされる中、男女共学の大学への昇格運動が展開された。2年間におよぶ運動が実を結び、短期大学への昇格が1950(昭和25)年3月10日付けをもって文部省によって認可され、女専は尾道短期大学へと生まれ変わることで新しい歴史を歩み始めた。  
(写真：長江時代の仮学舎(南高等学校))



長江時代仮学舎の正門

### 1 短期大学へ昇格 (国文科設置)

四年制か廃校かという二者択一を迫られていたのは、ひとり尾道女子専門学校のみではなかった。既設の大学は別として全国の旧制高等学校、専門学校、教員養成学校に共通する問題であった。戦後の物資不足の中で設備等が十分に整わず大学への転換が認可されない事例が数多く発生した。文部省でもその不備を考慮し、アメリカのジュニア・カレッジの制度をモデルに暫定措置(後に恒久制度となる)として、1949(昭和24)年新たに短期大学の制度を設けてこれに対応した。四年制大学への昇格の望みを絶たれていた女専にとっては、それはまさに絶好の機会であった。直ちに尾道女子専門学校も短大への昇格手続きを取ることにした。今度は、学舎は借り物とはいえ昼間は全部使えるので、また国文科と家政科とを申請することになった。書類ができて、いよいよ提出したのが10月中旬であった。設置要項は次のとおりである。

名称	尾道短期大学
位置	尾道市十四日町1079-1 (長江6丁目)
校地総坪数	1234坪
学舎など建物	402坪

しかし、設置の基準が相当に厳しく家政科は却下され、国文科だけがどうにか通過して、1950年3月10日付けをも

### 尾道市立女子専門学校 短期大学昇格決定

内容は全国第一と自負

久しく待望していた尾道市立短期大学はいよいよ十四日付認可され、これで四年制大学をねらって充実したもので新学年入学生をけに短大として、全国募集する。修業年限二年、第一だと市当局は自負、一年八十名(国)している。文科)を募集する、同女専は生活科と別大学の特徴は教授陣が科を各若干名ずつ募集

短期大学昇格決定の記事〈山陽日日新聞 1950(昭和25)年3月16日〉

って認可された。これに先立ち、同年2月1日、学生募集要綱が発表された。国文科1学年80名の募集で、修業年限は2年間、卒業後は中学校教員2級免許の資格をとることができた。入学試験は同年3月27日に国語・社会・理科・数学・英語の筆記試験が、28日には面接および身体検査を行うこととした。短大の記念すべき第1回入学式は5月1日に行われた。

### 《寄稿》

## 出会い、二人の師と

国文科第1回卒業（1952年）

小西 眸（旧姓宇安）

いま、私は、目を閉じて往時に還ろうとする。あまりにも歳月が経ち過ぎた為なかなかにもどれそうにない。学舎は長江に在り入学式当日、校門の脇の泰山木は、みずみずと若葉を5月の空に揚げていた。国文1期の学生の年齢差実に10歳余、経歴も学問に対する姿勢も千差万別であった。しかし新しく動き出した日本の中で自分の方向をなんとかしなければ、なんとかしようとの思いが渦巻き、その手始めに、戦時下歪められてきた「知」への正しい欲求が強くあった事は間違いない。

静かにふり返ってみると、この2年間に、私の人生の指標となるべき二人の師に巡り合うことが出来た。そのお一人は、吉田眞三先生である。先生は、いまでも町でお会いすると、当時の様に若々しいお声で「やあ！」とおっしゃる。まるで、さようならをした昨日の続きのように。最近はずも、師の人生への姿勢と持論をお伺いすることが出来た。師は旧約聖書のヨブ記を引用されその一端を披瀝された。「わたしは裸で母の胎から出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。……私も裸で帰りたい」と。さらにこう加えられた。「世の中には、陽の当たらないところで地道に孜々として世のため人のため尽くしている人がいらっしゃる。そうした人にこそ光を与えられるべきなのだ」と。人は一定の時間を生きるしかない。天空のながれからみれば

まことに短い。どんな生き方がよいかということは何にも決めることは出来ない。しかし省みて裸で帰れば十分だと言えるだけ懸命に生きているか。また1994年3月、老人大学20年を祝す記念誌紙上に、祝う言葉を書いているらっしゃる。大要は、次の様なものである。「軟弱とは、質を異にする『優しさ』を育てるゆとり、暇、時間がなくなっている。お金にならない時間を使おうとしないところに優しさが育つはずはない。人間しか与えることのできない優しさを育てることを願う」と。老いを迎える私の目指すべき課題のひとつを示されたように思う。

いまお一人は、野上久人先生である。現在の私が、短歌を書くことによって、思いもかけない遠方の人達といい関係を持ち、鳥語がましくも人様の前で短歌の話などしてられるのは、在学中、文芸部を創りそれに短歌を発表したことに端を発し、野上先生と言葉を交わすようになったことに起因する。やがて、1961（昭和36）年4月、歌誌「世紀」を先生と共に発刊。爾来34年、歌誌と共に歩むことが出来たよろこびを持つ。作歌の出発から50年近くを、それは或いは狭量で独善的な生き方であったかも知れないが、歌によって私の心はときに慰められ、ときに励まされて来た。これからは、自在な境地に遊びつつ、楽しみつつ作歌することが出来ればと願う。

あっと言う間の2年間ではあったが、それは、私の裡に、いままたしかな手触りとなって輝いている。



短大国文科第1回生入学式（壇上は頼校長）

### 高垣寅次郎（1890～1985）

高垣寅次郎といえば日本で屈指の経済学者で、尾道短大のため陰に陽に援助された恩人の一人であった。短大に経済学科増設をお願いに行った際も高垣は快く引き受けている。金融論の非常勤講師として他の専任教員と共に申請すると文部省が「高垣先生！ 先生がそんな田舎の短大の講師をされるわけがない」と笑ったというエピソードがある。

これに対し、八木はほくそえんだ。就任承諾の印鑑ももらっていたからである。

文部省もカブトをぬいだその高垣寅次郎は何かと短大のため助言した。自らが来られないようになってからは代わりに長男の堀家文吉郎（早大教授）を寄こされ、最後まで約束を果たされた。

〈山陽日日新聞 1988(昭和63)年7月2日、1985(昭和60)年8月28日 要約〉

一方、女専は1953年まで併設することになっていたが、募集はこの1950年度が最後となった。女専の国語科は短大の発足により募集を打ち切ったが、生活科と別科は若干名ずつ募集した。入学者は生活科が10名、別科が15名であった。卒業生については、女専の本科はこの年が第2回で、国語科は30名、生活科は27名であった。別科の第1回生は、生活科へ進んだ者が8名、短大へ進んだ者が11名あって、別科修了で終わった者は9名であった。

## 2 経済科の増設

1950(昭和25)年に尾道短期大学が誕生すると、経済科を新設しようという動きがでてきた。尾道は古来より商業都市であり、経済科は必要不可欠だというのが市民の声であった。そこで同年9月30日、申請書を文部省に提出した。国文科のときと同様、審査は難航した。それは主に施設の不備であった。大学設置委員会のメンバーが同年11月9日来尾し学舎などを調査したが、あまりの貧弱さに驚き、経済科の新設どころか、大学それ自体の存続すら危いとの判断を下したため、市は同月20日、急遽臨時議会を招集し、100万円の追加予算を可決し研究室、図書室、実験室等の充実を急ぐことにした。しかし、ここで大きな力とな

**募集人員**  
 國文科 (男女) 四〇名  
 経済科 (共學) 八〇名  
 聯修受付 二月十一日より三月十一日まで  
 学力検査期日 三月十九日・二十日  
 (募集) **尾道短期大学**  
 入学資格認定を要する者は十七日実施  
 入学適性検査を要する者は十八日実施  
 要項は東費二十円に宛名記入の返信封  
 筒(八円切手つき)を添え申込まれた  
 所 在 尾道市十四日町一〇七九番地

短大、生徒募集の広告〈山陽日日新聞 1952(昭和27)年2月1日〉



当時の演習(ゼミ)

# 取り合えず百万円計上

## 警告に市當局の緊急處置

本市では、かねて海陸交通の要衝として発展した。このため、本市は、かねてから、交通の便、特に、海陸交通の便が、本市の発展に、重要な役割を果たしている。このため、本市は、かねてから、交通の便、特に、海陸交通の便が、本市の発展に、重要な役割を果たしている。

本市では、かねて海陸交通の要衝として発展した。このため、本市は、かねてから、交通の便、特に、海陸交通の便が、本市の発展に、重要な役割を果たしている。このため、本市は、かねてから、交通の便、特に、海陸交通の便が、本市の発展に、重要な役割を果たしている。

100万円の追加予算可決の記事〈尾道大学女専学生新聞 1950(昭和25)年12月20日〉

ったのが、高垣寅次郎博士であった。氏は尾道市の出身で東京高等商業学校(現一橋大学)を卒業、欧米に留学の後、同大学の教授となり、戦後拓殖大学の学長(1946~1952)、学術会議会員(1949~1966)、また、日本金融学会会長(1949~1982)、大学設置審議会専門委員(1963~1970)等の要職に就いた経済学界の重鎮であった。尾道市から経済科増設の協力を求められた氏は、非常勤講師として自らスタッフの一員に加わることを申し出た。同氏の他にさらに、尾道出身の坂本弥三郎(神戸大学教授・経済原論)、花戸竜蔵(神戸大学教授・財政学)、片山金章(中央大学教授・商法)の諸氏が同様に非常勤講師として来校を約束し、設備の不十分を補って余りある豪華な教授陣が揃い、ついに1951年1月31日付けをもって認可された。入学定員1学年80名でスタートした。

大学側の体制が整ったため、この年、多数の願書が寄せられ、1951年3月14日付けの山陽日日新聞に「尾道短大に志願者が殺到す 2.5人に1人の割」の見出しで記事が掲載されるほどであった。

### 3 施設の拡充

最初、国文科の短大が認可になったのには付帯条件があった。その主なものは、「2年以内に必要な整備拡充を行っ



入学時オリエンテーション旅行

4163

### 明春三月迄には完成か 図書館建設試案成る

#### 資金募集は順調

尾道短期大学建設委員会が、尾道市に建設する尾道短期大学図書館の試案設計が、ほぼ完成した。この試案設計は、尾道市立図書館の館舎を改築するのではなく、尾道市立図書館の敷地内に、尾道短期大学の敷地と一体的に建設するものである。この試案設計は、尾道市立図書館の館舎を改築するのではなく、尾道市立図書館の敷地内に、尾道短期大学の敷地と一体的に建設するものである。この試案設計は、尾道市立図書館の館舎を改築するのではなく、尾道市立図書館の敷地内に、尾道短期大学の敷地と一体的に建設するものである。

図書館建設計画の記事〈尾道大学新聞 1953 (昭和28)年6月20日〉

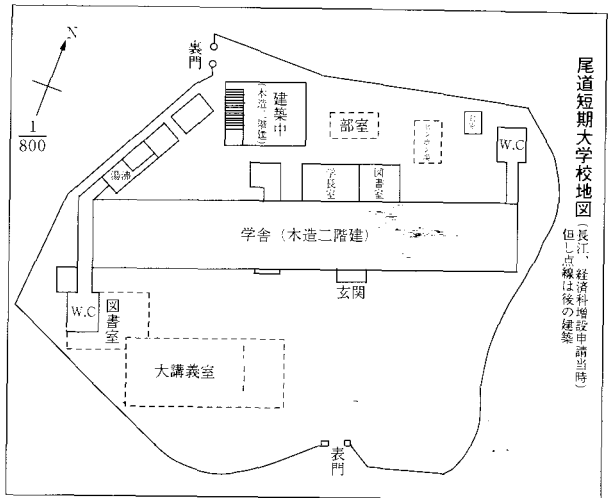
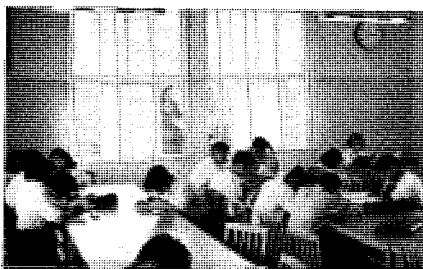


図2 長江時代仮学舎(南高等学校)配置図

### 図書館建設の 棚上げを憂う

尾道短期大学建設委員会が、尾道市に建設する尾道短期大学図書館の試案設計が、ほぼ完成した。この試案設計は、尾道市立図書館の館舎を改築するのではなく、尾道市立図書館の敷地内に、尾道短期大学の敷地と一体的に建設するものである。この試案設計は、尾道市立図書館の館舎を改築するのではなく、尾道市立図書館の敷地内に、尾道短期大学の敷地と一体的に建設するものである。

図書館建設に関する記事〈尾道大学新聞 1954(昭和29)年7月1日〉



図書館

て大学としての完備を期すること」というもので、そのための教室増加が急務であった。なお、施設上の付帯条件としては「自然科学に関する施設設備を整備すること」および「研究施設を整備すること」という2項目があった。実験用の器具・薬品や図書類も整えねばならず、特に1950(昭和25)年には前述のとおり経済科の増設を計画していたので、そのための経費を市の予算に計上して少しずつ整備に取りかかった。

敷地の北側に約198㎡(60坪)の2階建1棟をつくり、1階を化学実験室、2階を教員の研究室にあてることにして、経済科増設の申請図面には、それを建築中の形で提出した。しかし、当時は朝鮮戦争の影響で国内に木材が不足し、建築は容易に進まず、前述の設置委員会来尾の際には基礎工事の溝を掘ったばかりのところ、メンバー一行を驚かせたわけである。明けて1951年2月、文部省の係官が立ち寄った時にやっと屋根をふいた程度で、実験用具も係官来尾の内報によって大至急入荷させ、その場をしのいだような状態であった。幸い認可されたが、1951年4月にやっと完成にこぎつけた。

しかし、1951年4月より経済科が増設されたため、教室増加を考えないといけない状況となってきた。経済科の認可の際にも、国文科のときと同様に、付帯条件として施設の整備拡充が要求されていた。そこで、今度は敷地の西南



長江時代の学舎

に約165㎡（50坪）の平屋の大講義室を建てることになり、1952年4月に完成した。しかし、学生数が増加するにしたがい手狭となり、1954年には増築せざるを得なくなった。夏休みを利用して建築に取りかかり、10月に落成し、後期に間に合わせた。

一方、図書館は、大講義室の増築を終えた10月から直ちに取りかかり、1955年4月下旬に完成した。モルタル造2階建で、近隣の市町村からの寄付を仰いだ。



左：図書館、右：大講義室（2階：12号教室、1階：11号教室）

#### 4 頼学長の逝去と田中学長の就任

このようななか、1951（昭和26）年7月21日、初代学長（校長）頼成一が草創の尽瘁と苦勞のため病に倒れ不帰の客となった。頼学長は女専を創設し、次いで短大昇格を果たし、さらに経済科の増設を行い、尾道短期大学を文化の香り高い商都尾道にふさわしい大学へと導くため、力の限りを尽くした。葬儀は、大学葬として八木寛教授が葬儀委員長となり、7月28日、市内久保町の西国寺で厳かに執り行われた。人格と学識の故に「尾道の文化の師」と讃えられ、多くの市民からその死は悼まれた。

学長亡き後は、教授会の議を経て八木教授が学長事務取

**頼成一校長死去す**

惜しまれる生前の名講義

尾道短期大学頼成一町に生れ、號之館生學氏は五月下旬より高血圧大高、東大文科史學科と心臓内閉症で療を卒業後、東京高校、獨中であつたが、二十一年東京女子大、広島文藝一日午後十時二分、大の各教授を兼任し、尾道市吉和町の寓居で和二十一年來尾、頼成一氏、女専の校長を経て初代、二十八年八月二十一日、昭和十四年一月二十一日、尾道市の正五位勲六等、瑞雲章、承五代として広島市袋を授與されている。聞

氏は女専學の泰斗で、數の講義は断界第一のもので、今でも評判が高い。遺族には母屋ステイ刀夫人、結さん、長男惟嗣氏、長女彌子さんがいる。頼成一氏は二十三日午後二時五十分、密葬のち、二十八日午後二時から西國寺で短期大学と頼成一との合同葬が営まれる。

頼学長の逝去に関する記事（山陽日日新聞 1951（昭和26）年7月24日）





学長田中氏に決定の記事〈尾道大学新聞 1953(昭和28)年2月20日〉



学長を囲む懇談会に関する記事〈尾道大学新聞 1954(昭和29)年7月1日〉



創立10周年に関する記事〈尾道同窓会報第2号 1956(昭和31)年10月20日〉

扱に任せられた。次期学長の選考は意外に手間取り、その後、教授による学長選考委員会が設置され、委員会は学外からの招聘を決めた。

ようやく候補が決まったのは、1952年も終わりに近い頃である。その候補は、田中稲穂氏である。田中氏は戦前、山口高等商業学校（現・山口大学経済学部）で長年商品学を担任され、経済科をもつ当校の経営には適任であるとの見解が委員会で決定し、教授会も通過した。八木学長事務取扱より交渉があり、田中氏は要望を受諾され、1953年1月15日付けで2代学長に就任した。

## 5 10周年記念事業

1956（昭和31）年度は女専が創設されて満10年を迎えるので、短大もそれにさかのぼり、10周年記念事業を行うことになった。創立記念日が、すでに先年教授会の議を経て7月1日に定められているので、まずその日に記念式典を行い、祝賀行事は11月初旬に行うことにした。

1956年7月1日の記念式典は、長江小学校の講堂を借りて午前9時から行われ、田中稲穂学長の式辞と青木茂助教授の講演（学校創立の懐古）があった。式典は、学内行事の範囲でとどめられた。

祝賀行事は「文化の日」を中心に、4日間にわたり執り行われた。11月2日には、長江小学校の講堂を借りて記念祝



創立10周年に関する記事〈尾道大学新聞 1956(昭和31)年7月1日〉



滝川幸辰京都大学総長の講演会（創立10周年記念事業）

賀式が行われ、午後には滝川幸辰京都大学総長の「日本の大学」と題する講演会が開催された。11月3日には、学内物故者の慰霊祭が行われ、午後からは同窓会が開催、在学生代表参加の下に「尾道短期大学学生歌」の贈呈式が行われた。また、音楽部員による発表会、演劇部員による演劇公演会も催された。11月4日には、芸能会、園遊会が催され、また、初日からこの日まで学生の作品展示会が開かれた。11月5日には、運動会が開催された。

## 6 久山田へ移転、新学舎完成

女専時代より当校の悲願は、独自の学舎をもつことであった。短大に昇格した後も女専で使用していた長江の仮学舎をそのまま使用していたため、学生の増加とともに教室不足は年々深刻になってきた。応急措置として学舎の増改築を繰り返す一方で、いくつかの移転計画が立てられたものの、小都市の予算では容易に実現の見通しが立たないままであった。

そうこうするうち、市有地の利用のことが考えられるようになり、やや奥地ではあるが、久山田の水源池わきの空き地（約9564㎡）を利用することになり、1960（昭和35）年10月から整地工事にかかった。思ったより土質が弱かったために、2月完成の予定が5月初旬に完了。続いて1961年7月から学舎の建築に取りかかった。敷地は学舎が



田中学長（創立10周年記念事業）

**創立十周年記念**

**祝賀祭盛大に催さる**

本学は創立十周年を記念して、十一月三日から五日まで、祝賀祭を盛大に開催した。祝賀祭は、祝賀式、講演会、慰霊祭、同窓会、学生代表参加による「尾道短期大学学生歌」の贈呈式、音楽部員による発表会、演劇部員による演劇公演会、芸能会、園遊会、学生作品展示会、運動会など、多岐にわたる行事が行われ、大いに盛り上がった。祝賀式は、十一月三日午後二時から、本学講堂で行われ、田中校長の祝辞、滝川京都大学総長の講演、学生代表による「尾道短期大学学生歌」の贈呈、田中校長の答辞、祝賀会歌の斉唱、祝賀式は、大いに盛り上がった。祝賀式は、十一月三日午後二時から、本学講堂で行われ、田中校長の祝辞、滝川京都大学総長の講演、学生代表による「尾道短期大学学生歌」の贈呈、田中校長の答辞、祝賀会歌の斉唱、祝賀式は、大いに盛り上がった。

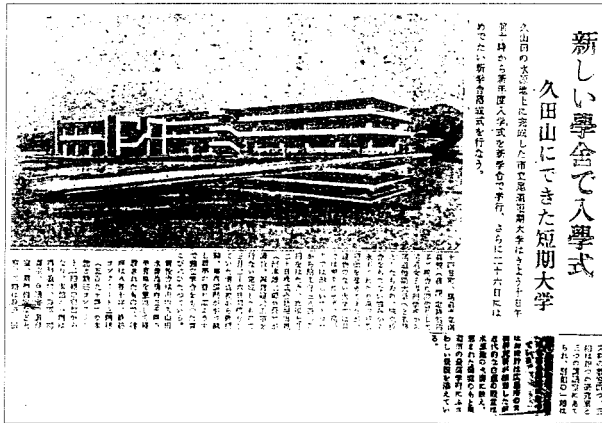
**好評だった園遊会**

十一月二日から四日間

（以下、新聞記事の本文が縦書きで続きます）

創立10周年に関する記事（尾道大学新聞 1956（昭和31）年11月26日）





新学舎での入学式の記事〈山陽日日新聞 1962(昭和37)年4月10日〉

2970㎡（900坪）、運動場6600㎡（2000坪）の計9570㎡（2900坪）で、教室を主とした3階建のA棟と、2階建のB棟西の2棟が完成したのは1962年3月のことであった。B棟には1階に学長室、応接室、事務室など、2階に大講義室がつけられた。完成後直ちに移転作業を行い、新年度から完全に新学舎での授業がスタートした。

十分な広さの敷地の久田山に移転すると、入学希望者の増加に対応するべく、学生の定員を増やすことにした。入学者の定員を、国文科40名を100名に、経済科80名を200名にし、文部省の許可を得て1963年度から実施することとなった。それと並行して第2期工事を行うことになり、大講義室をもつB棟東学舎と、食堂を含む学生ホールが建築された。1963年5月に第2期工事が終了すると、続いて第3期工事に取りかかり、1965年3月に図書館と学生集会所が完成した。グラウンドの整備拡張も行い、1965年1月には約9900㎡（3000坪）の広さとなった。

## 7 怪火事件とバス転落事故

時代は少しさかのぼるが、忘れられない事件として、怪火事件とバス転落事故が起きている。

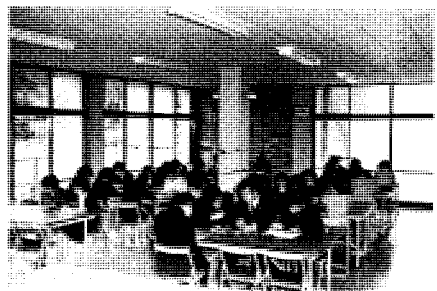
怪火事件というのは、1953（昭和28）年5月28日午後11時45分頃、長江校舎2階の左隅にある第3教室の入口付近から怪火が出た事件である。たまたま、その時帰宅途中の尾道市教育長高橋武氏が、学舎のすぐ上の道から異常な明



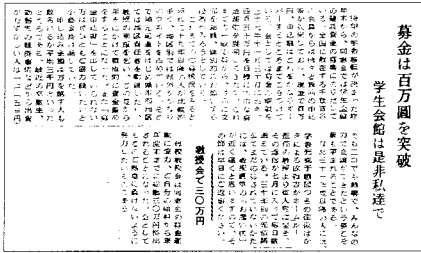
学舎移築本格化の記事〈尾道大学新聞 1960(昭和35)年12月20日〉



新学舎完成間近の記事〈尾道大学新聞 1961(昭和36)年12月11日〉



B棟東学舎の旧図書館



学生会館建設資金の募金に関する記事〈同窓会報第13号 1961(昭和36)年8月1日〉

## ■創立15周年の贈り物 尾道短期大学新学舎落成 200人が出席式典

尾道市立短期大学の新学舎落成式典は、からりと晴れあがった4月26日午前11時から久山田の新学舎講堂で盛大に開催され、約200人が出席した。

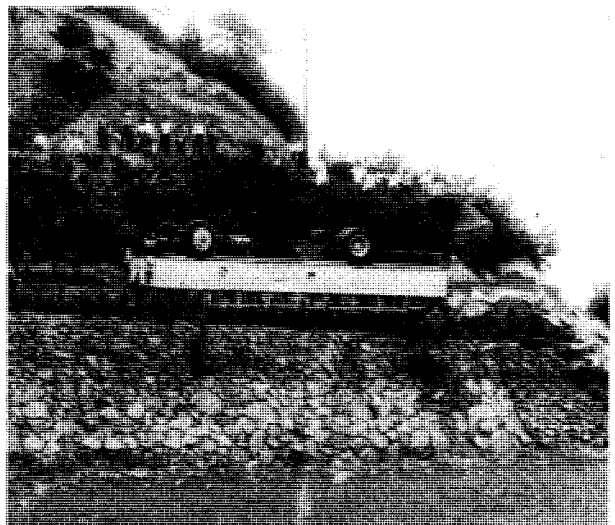
井上短大助教授の司会で、まず青山尾道市長が式辞を述べ、「新築移転が強く要望されていたもので、市も苦しい財政から予算を割いたが、後援会の寄付金も大きい財源となった」と説明、ついで田中短期大学長が「3月末に新学舎の引き渡しを受けたが、学年末と入学試験に身体を奪われ、3月25日の日曜を利用して移転した。新しい環境の下での新学舎の実現にはいい知れぬ温かい援助があった。12年間南高校の校舎を借りて相手の学校にご迷惑をかけた。36年度は短大の前身、尾道女専の創立15周年にあたり、ひそかな願いを胸に抱いていたが、ついに新学舎が実現した。学問の場として、修練の道場としてここは理想に近いものである。心にゆるみのできぬよう常に反省しながら進みたい」と挨拶を述べた。

〈山陽日日新聞 1962(昭和37)年4月27日  
要約〉

かりに気付いた。直ちに校内に入って宿直員を呼び起こし、すばやく消火器で消し止めたので、壁の腰板を少し焦がした程度で済んだ。夜間のことなので、元来問題は南高等学校に関わることであるが、いずれにしても、まことに天佑の感なきを得ないものがあった。出火現場の様子からして放火の疑いが強く、警察も捜査にあたったが、犯人はついにあがらなかった。

また、1961(昭和36)年7月1日、久山田新学舎建築の起工式に出席するため当校の職員や学生の乗車したバスが転落するという事故が起こった。この日は創立記念日で休日となっており、起工式には職員の大部分と学生の代表者とが参列することになっていた。問題の市バスには職員16名、学生の代表者が22名、一般乗客数人が乗っていた。バスが久山田水源池門田貯水場脇のカーブにさしかかったとき、前方から来たオートバイを避けようとして約5メートル下の池底中段に転落したのである。幸い貯水量が少なかったため水による被害はなかったものの、バスは仰向けになり、多くの負傷者を出した。学長をはじめとする重傷者も数名あったが、死者がなかったことが不幸中の幸いであった。

このような大事故にもかかわらず、最悪の事態を回避できた理由のひとつには、当時の市長だった青山俊三氏の活躍があげられる。青山氏も同じ式典に出席するため、転落



転落事故現場

したバスの数百メートル後ろに続いてしたが、まもなく事故現場にさしかかると救助作業の先頭になって指揮にあたったのである。医師でもある青山氏の迅速適切な措置は、後日の語り種となった。



バス転落事故の記事〈山陽日日新聞 1961 (昭和36)年7月2日〉

《寄稿》

私のなかに生きるY教授

国文科第3回卒業（1954年）

藤井 壮次

「藤井君、何も言わず向島町教委へすぐ行くこと」。実に簡潔な文面のはがき1枚が、私の人生の前半を見事に決していました。四十数年前の恩師Y教授からのご連絡でした。

当時、私は戦後の混沌とした社会動態と自身の体験を重ね合わせ、仕事が直接社会のひずみを正していく実践人を志し、N市に新設されたA社会事業大学への編入学の準備に熱中しながら、この1枚のはがきと対面し熟考しました。

その間、Y教授の講義中の独白を思い起こしては判断に戸惑っていました。それは「一生の仕事は選ぶものではない。今自分にできる身近なことの中にすべての可能性は秘められている」というお言葉です。

あの〇駅構内に佇む被災児や薬害に苦しむ青少年の自立に身を投じるのも、島の小学校教師として教育をつくるのも、広い社会基盤の中では共通項にあると思いついたのです。町教委で辞令を手を、油の切れた自転車で、砂埃の県道を私は夢中で小学校めざして走りました。初任給1カ月分に相当する紺の背広は汗と埃で汚れていました。

学校は新教育の渦中で、仕事は実に多彩で

した。手がけたのは27名の児童への徹底した漢字指導と、「読む図書館」から問題解決のための「調べる図書館」への質的転換でした。深夜作業の傍らではTVが騒然たる社会の揺れを伝えていました。「自分は今、確かに現代に生きて子どもを創っている」という熱い思いがこぼれました。そこには、青年団員や若い母親との討論など、「地域社会学校」としての教育が息づいていました。

Y教授からは幾度となくご指導の機会を得ましたが、師の一言ひと言は胸を刺すものばかりでした。

「子どもは君、教室の審判官だよ。教師のことばが子どもを生かしたり失望させたりする」「コップに水を注ぐのではなく、底から水を湧き出させるのではなくは——」「君の今やる仕事は教育福祉の創造だ。それは社会福祉の基本のあり方にかかっている」などです。

それらがどれだけ私の気力を支えたことでしょう。しかし、Y教授と語ることはできなくなりました。そのことが、あるいは私に無言の自立を宣告されたのかも知れません。

そして、私のすべては、尾道南高校から短期大学へと“尾道”に育まれたことに自信と誇りを持っています。

(文中のY教授は、元尾道短期大学学長故八木寛先生です。)

《寄稿》

## わが青春はいつまでも 色彩やかでありたい

国文科第10回卒業（1961年）

谷 温子（旧姓国政）

突然の原稿依頼にとまどいつつ36年前にタイムスリップさせてみた。

尾道短期大学第10回国文科の学生として新しい黒のスーツに身をつつんで、生口島から巡航船に乗っての門出であった（現在は尾道大橋、因島大橋、生口橋と陸続きになっている）。

連華坂を歩いて長江の学舎へ。床にはブリキで修理した跡のあった木造2階建の学舎。体育の時間は、山道を登って千光寺のグラウンドへ。自立するために教職の道を選んだ。

玉川大学通信教育部聴講生として、故八木寛先生にはずいぶんとお世話になった。

背伸びをして作歌、短歌誌“世紀”でご指導を頂いた野上久人先生。

大塚光信先生の鴨長明の方丈記の講義。

美術大学に編入したいと相談にいったクラス担当の故青木茂先生等々。

講堂のピアノで楽しんだ友、乗兼（亀宝）さん。喫茶店“琥珀”で名曲はそっちのけでおしゃべりに花を咲かせた唐島（玉田）さん、高橋（佐野）さん。各々歩む道は違っても友情は現在進行形で、相変わらずのおしゃべりに人生相談に、旅行に、コンサートに、美術館めぐり等にと、気のおけない一生の友達と

して、わたしのそばにいてくれる。

尾道は、お寺の街、絵の街。絵が描きたかったわたしは、短大時代を合わせて7年間尾道絵画研究所で絵を学び、県美展、日本水彩展へと青春のエネルギーを燃焼させた。

中学校の国語と美術（武蔵野美大の通信教育で夏休みを利用して2年間実技講習に行く）の教師として未熟ながら5年間教師生活をす。後ろ髪を引かれつつ“人生の最大の芸術作品はわが子である”と言われた中学時代の恩師のことばを肝に銘じて、結婚を機に退職をする。広島、東京、広島、西宮、広島と転勤した。それぞれの土地で2人の娘の育て、人との出会いと別れ。

自立した個性ある一個人として育ててくれることを願い全力投球の日々…。2人の娘は自分で進路を決めた。長女は15年間続けたピアノを捨てて広大医学部へ、現在は形成外科医として東京で研修中、次女は広大教育学部心理学科を卒業して18年間続けたバレエの道で自立しつつ…。

わたしは25年間の空白をのり越え??小学校の臨採、中学校の時間講師を経て、いま障害児教育相談員（教育委員会指導課嘱託）として新しい自己発見に充塞した日々を過ごしている。家族に愛され、友に恵まれ、仕事有り、絵を描き、謡を楽しみ。

わが青春は、いつまでも色彩やかでありたい。

# 座談会 <sup>みおつくし</sup> 澤標 —尾道に集うた青春群像—

日 時：平成7年8月20日・午前12時～午後3時

場 所：尾道短期大学・会議室

出席者：信岡 巽（創立記念事業準備委員会・委員長、教授・元学長）

森山 茂（尾道短期大学学長）

井上 強（旧教員 昭和25年～52年）

帯賀 一男（旧教員 昭和25年～52年）

竹内 幹夫（国文科1回卒）

広瀬文三郎（国文科1回卒）

広角 隆子（国文科1回卒）

土屋 安正（経済科1回卒）

小島 雅由（経済科2回卒）

杉山 文男（経済科3回卒）

藤原 茂（経済科4回卒）

藤野 徹（経済科5回卒）

佐藤 伊助（経済科11回卒）

長尾 功機（経済科11回卒）

大下 至子（経済科16回卒）

正田 敏子（経済科16回卒）

司 会：西原 通夫（経済科3回卒）

司会 ただ今より座談会を始めたいと存じます。来年が母校創立50周年にあたるので、その記念誌掲載のために青春時代を短期大学で過ごした思い出を語っていただくことを中心にして座談会を開かせていただきました。

最初に創立50周年記念誌編集委員長の元学長、信岡先生よりご挨拶と趣旨説明をお願いしたいと存じます。

信岡 本日はお忙しいなかをお集まりいただきありがとうございます。50年と申しますと、例えば生まれたばかりの子が50歳になるという長い年月であります。その間いろいろな変遷を経て今日のような発展を遂げたわけであります。

とりわけ、本学でのご苦労や思い出を、座談会の形で記録にとどめることは意義深いものと存じます。どうぞ、ご自由にざっくばらんに自分の思いを語っていただければありがたいと思っております。

司会 続きまして、長年同窓会長をしていただいております小島会長よりお言葉をいただきます。

小島 私自身が年をとって入学したこともありまして、いろいろな役をやらされてきました。そういうこともあって、会長の役も回ってきたものと思っています。

皆さんのお役に立つことも十分でなく、心苦しく思っておりますが、尾道に住んでいることから申しまして、できることはやらなくてはと思っております。

短大にもいろいろな変遷があり、皆さんにもいろいろな思い出があると存じます。今日は、いい思い出、悪い思い出、苦しい思い出、いろいろと語っていただき記念誌の一ページに花をそえていただければと思っております。

2年間がいかにな有意義であったかということは、それぞれの立場で違うと思いますが、まぎれもなくそれは現在に生きていると思っております。ご自由なご歓談をお願いいたします。

司会 今日には森山学長をはじめ、創立期から本校で教鞭をおとりになった帯賀先生、井上先生にもおいでいただきました。両先生から当時の思い出



を語っていただければと存じます。

帯賀 私は昭和25年(1950年)から52年(1977年)まで27年間、短大に勤めさせていただきました。今81歳になります。昨年は大病をしました。現在はこのように元気であります。

私が赴任したときは、学長は頼成一先生でした。広島高等師範学校の2年先輩の八木寛先生から「来ないか」と声をかけられたのです。3、4年後に築山福文さんが呼ばれました。

少々手前味噌になりますが、この三人が結束しまして、肩をたたき合いながら研鑽に励んだわけです。その時代の先生方というのは、全国的なレベルからみても立派な先生だったと思います。特に田中稲穂先生は、教えること、身をもって示すことにおいては、現代でもまれにみる先生ではなかったかと思えます。

井上 私も昭和25年から52年まで勤めましたが、そのうち7年間保健体育の担当をしました。そういうこともあって、自分自身も健康には人一倍注意を払ってきたつもりです。おかげさまで現在医者にもかからず、81歳になった現在も元気ががんばっています。

思い出すのは長江学舎のとき、あの狭い運動場

で体育をしていたことです。もちろん、基本動作が主体で競技などはむずかしいことでした。そのうちに千光寺グラウンドを使用するようになりました。

教育の面で申しますと、尾道は昔から商業都市であって教育都市ではありません。福山や広島に比べてやはり教育行政では、どちらかというと後塵を拝していたという状態で、よその発展をみて真似をしてきたようなところがあります。しかし、我々は真似をしながらも工夫を重ねて「どこにも負けてはおらんぞ」という気持ちでやってきたと自負しています。

司会 お話をうかがっていますと、当時の先生方の熱意を思い出します。創立期に学生であった方、その実態はいかがでしたでしょうか。

小島 私の場合、18歳のとき終戦を迎え、広島ですでに就職しておりました。前々から大学へ行きたいと思っていましたが、原爆の直撃を受けていることや、家庭の都合でそうもいきませんでした。そんなとき、故郷尾道に短大ができたということを知り、昭和26年(1951年)に尾道へ帰り学ばせていただきました。言ってみれば変則的な入学です。



クラスメイトで一番年をとっていたのが私です。私以外にも経済科2回生には、代用教員から来られた方あり、国鉄へ勤めながら通学されていた方あり、役所へ勤めながら通学されていた方ありで、それぞれ苦勞しておられました。

最も苦手だったのが語学です。それまで英語も習ったことがないんですから、これに一番苦勞しました。森（清）先生にはみんな鍛えられました。先生は、有志を集めてドイツ語も教えたりしておられました。

竹内 その頃、小学校の先生というのは、半分以上が旧制中学出の代用教員でした。私も広大三原分校の代用教員をしておりましたが、先輩の先生から大学進学を勧められて願書を持って行きました。ところが締め切った後でして、来年受けてくださいと言われました。たまたまその事務員の方が、尾道の女専が短大をつくるという話を教えてくださったんです。それで尾道短大に入学したというわけです。7月1日が入学日でした。

ところが、入ってみるといわゆる高等学校を卒業した人は、ほんとうにわずかだったと思います。高橋玄洋（劇作家）君は海軍兵学校の途中から来ていましたし、藁田（現 日本経済新聞社 副社長）君というのは、終戦になって陸軍士官学校から短大に来ていました。彼は国鉄に勤めながらその合間をみて短大へ通っていました。

当時は仕様ぐらいに思っていた海軍兵学校とか陸軍士官学校で学んだ人と一緒に勉強するんですからね。最初はびっくりしました。

勉強に関して言えば、我々が一番困ったのはやはり英語でした。英語というのは敵国の言葉だということで、入学以前には習ったことがありません。私はいつも怒られながら勉強しました。AクラスとBクラスに分かれていました。

後に尾道市内の学校に60歳の定年まで勤めましたが、それも当時の勉強のお陰だと、先生方には心から感謝しております。

広角 先ほど英語のお話が出ましたが、私の場合は、旧制高等女学校で大変に良い英語の先生に恵まれて英語が好きになりました。終戦の年は女学校の4年生で、福山も空襲を受け、家も焼けました。

とても進学などできない状態で、仕方なく洋裁の学校へ行きましたが、どうしても英語がやりたいと思ったのです。けれども英語の学校はありませんでした。そこで学校の近くだったこともあり、国文科ができるという話を聞き、少し年をとっていましたが入れていただきました。

とても立派な先生方で、いろいろ楽しい思い出があります。

広瀬 私たちは1回生ということで、「手塩にかける」という言葉がありますけれども、そういうふうに一人ずつを大事に扱ってくださったと思います。

先ほどからお話にていますように、経歴が雑多な人たちが集まって、年齢にも幅がありました。非常に優秀な人もいるし、落ちる人もいるという具合で、学力に差があるし、個性もあるしで、先生方には大変ご迷惑をかけたと思います。先生方は非常に立派で、授業を聞いていても感動するようなことがよくありました。

藤原 井上先生は私の短大時代の担任で、随分鍛えられました。私は昭和10年（1935年）生まれで今年で満60歳になりますが、81歳の元気な先生のご様子を拝見して、私も健康には十分留意してがんばっていきたく感じました。

また、帯賀先生には心理学を教えていただきました。そのなかで、いまだに記憶に残っているのは、「犬とか猿は、美しい花を目の前に持っても決して美しいとは思わない。それを美しいと思うのは人間だけである。感性の高い人間になりたいものだ」というお言葉です。今でもはっきりと覚えています。

小島 私は経済2回生ですが、夏休みに集中講義

がありましたね。経済科が創設されて間もない頃で、他大学の経済関係の先生方の応援を得たんだと思うのですが、扇風機も冷房もない大講義室に受講生がぎっしりといっぱいでした。短大の先生方も熱心に講義を受けておられたことをよく覚えています。後から知って驚いたのですが、学会でも実力者ぞろいの先生方だったんですね。

**西原** 私は経済3回生ですが、集中講義の先生方をよく覚えています。金融論は高垣寅次郎先生（当時金融学会会長・一橋大学名誉教授、後に拓殖大学学長、成城大学学長）、商法は片山金章先生（当時中央大学教授、後に同大学学長）、理論経済学は坂本弥三郎先生（当時神戸大学教授、後に同大学経済学部長）、財政学は花戸龍蔵先生（当時神戸大学教授、後に神戸経済大学学長）、貿易論は入江猪太郎先生（当時神戸大学教授）といった錚々たるメンバーでした。

励みになったのは、坂本教授の「尾道短大の学生は本気で勉強する。レポートやテストの成績が神戸大学の学生に負けておらん」というお言葉でした。

**正田** 経済科16回生の正田と申します。私が学んだ時期は、久山田へ移転してしばらく後で、みんな誇りをもち前途洋々とした明るさが学園全体に漲っていたように感じます。男子がクラスに3、4人ぐらいずついました。経済の富田、梅田、吉原先生や法学の高野先生などの講義に新鮮な刺激を受けました。坂本先生の講義は私たちも受けましたし、堀家文吉郎先生（高垣寅次郎先生の御子息で早大教授）など都会の大学の先生の集中講義もあり、充実していました。私は信岡先生が担任で英語を教わりましたが、まだお若くて張り切っておられました。

**長尾** 私は長江学舎のときは、家が近くでもあったので、前の方の席をとりに行っていました。いい席をとっていい席で聞こうという積極的な気風も当時はありました。

それから人数的には男女半々ぐらいで、体育祭の時には楽しい思い出がたくさんできたように思います。長江学舎のときは千光寺グラウンドで、久山田に移ってからは、こちらのグラウンドでした。

長江学舎から久山田学舎に移った時には、自分の学舎ということで、広々とした感じになったことを覚えています。

我々の時代は部員でなくても備われて出場することもありました。私は備われて卓球の中国大会に出た覚えがあります。ちょうど2年にまたがって節目の経験をさせていただきました。

**藤野** 我々の頃は、体育は千光寺のグラウンドを教場にしておりました。そのため、登り下り30分以上をかけて長江の学舎から移動したので、十二分にウォーミングアップ、クールダウンができました。

我々の母校である学舎は、夜は南高等学校（夜間高校）として使われ、昼は尾道短期大学の国文科、経済科として使われておりました、木造の戦前の建物でした。古い建物でありながら教育内容は充実しておりました。

我々の年度の卒業生は、経済科で100人足らず、国文科で50人足らずだったと記憶しております。こじんまりした学舎の中で、ゼミの先生も27、8人に1人の先生がついて、一人ひとりの顔、性格、学業成績、その他をしっかり把握されておられ、よいアドバイスをいただきました。

「卒業のときには、一人ひとり一つの作品に名を刻んで、世の中に送り出したような気がする」という恩師の言葉が今も頭に残っています。

**司会** 当時の学生と教師は、~~一~~学問を超えて強く結ばれていたように思いますが、この点についてもう少しお話いただけませんか。

**広瀬** こんなこともありました。午後の授業になって眠たくなってくると、廊下の向こうからピアノの曲が聞こえてくるんです。それは江藤保定先



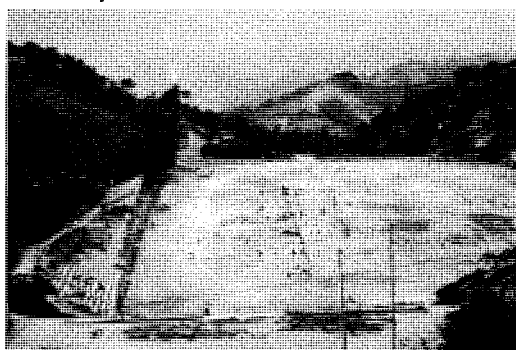
生なんですけれども、毎日ショパンのいろいろな曲を弾いて自分で楽しんでおられて、それがずっと聞こえてくるんです。毎日聞いているうちにショパンのファンになりまして、非常に楽しかったことを覚えております。

また、私は卓球が好きだったので、休み時間になるとたった一つの卓球台へ集まっていました。三ヶ尻浩先生も卓球がお好きで、一生懸命お相手をしたことを覚えています。

吉田眞三先生はテニスがお上手で、校庭で学生を相手に走り回っておられました。若くて知識欲が旺盛だったので、ロシア語ができる学生がいると、ロシア語の講座を開こうとか、レコードコンサートをしようとか、本当に行動的な働きかけをなさっておられました。

佐藤 私は旧学舎で1年、新学舎で1年過ごし、ちょうどいい時期を過ごさせていただいたという感じがしております。

井上先生の思い出ですが、体育の時間、「千光寺のグラウンドを30分以内で回ってきたら単位をやる」と言われて、みんなで一生懸命に走ったことが思い出されます。単位のことは半信半疑でしたが、一方ではひどいことを言う先生だとも思いました。私はすぐ倒れてしまったんです。その時、



千光寺のグラウンド

先生は「大丈夫か」と声をかけながら近寄られ、本気で心配してくださる先生だと思ったんです。

長尾 ごく個人的な話をさせていただければ、10月でしたか、交通事故にあいまして長期欠席をしました。出席日数が足りないと単位がとれなくなりますね。「教務課長の先生が黙認するので、各先生の了解があれば進級させよう」ということでした。そこで、各先生方に直談判をしました。森清先生が卒業の日に単位をくれまして、それで卒業できたという思い出があります。

藤野 私のゼミの先生というのが中峯照悦先生で、京都大学法学部を卒業して1、2年たって本学に赴任されたように聞いておりました。ですから、25、6歳だったと思います。我々から見ると貫

禄のある兄貴というイメージでした。

良<sup>うしろ</sup> 神社の近くに下宿しておられて、そこへ何人かの男子学生を呼んで、授業以外の話をしてくださいました。食料難の時代でしたが、夜になると路地のラーメン屋に連れて行ってもらいました。あの当時1杯30円でしたか、「週刊朝日」がそれと同額でした。少ない給料だったと思うんですけれども、割に豪快によばれていました。今にして思えば、先生の家へ遊びに行くということの積み重ね、このようなことによって、先生と学生とのつながりが培われたのではないかと考えております。

杉山 学生時代はお金も十分にないし、食事面も今ほど豊かではありませんでした。勉強のことより、大学祭が終わった後、先生のお宅に押し掛けて行って、酒を飲んで騒いだことを楽しく思い出しております。先生のお宅に大変ご迷惑をおかけしたなど、今頃になって気づいたのでは遅いのですが……。

先生はまだ30歳代で、少ない給料で私たちによく手料理をご馳走してくださったと、今になってつくづく感謝している次第です。

帯賀 昭和29年(1954年)というと戦後の食料難をひきずっていた時期ですね。昭和30年ぐらまでは食べる物に非常に不自由していたのではないですか。米を運んできて、それを尾道市内で売って学費の足しにしていたという学生もいましたね。よく学校へ通ってきてくれたものだと思います。

新制大学ができた頃は、お国全体が四苦八苦しており、勉強は二の次だったのですが、しかし、学生は向学心に燃えていて今さらながら感心してしまいます。その点、今の学生は違いますよ。その頃の学生には頭の下がる思いがします。

森山 私がこの学校に着任したのは、昭和48年(1973年)4月で、その頃の国文科教員の研究室はA棟3階の左端の31号室で、国文科の先生方

が全員同室という形でした。その頃からみますと、随分学校の設備もよくなってきているわけです。

けれども、教育というのは設備云々ではない、教師と学生とが非常に近い距離で心を通わすことができる人間関係が大切だと思うのです。先ほどからお話を聞きながら、まさに、それが教育の原点だということを改めて痛感しています。

心と心の通う教育という点で、この短大が創立期から昭和50年代に果たした役割というのは、かなり大きかったのではないかと、それが現在社会的に活躍されている卒業生の方々の原動力になったのではないかと思います。私どももこれから教師と学生の心が通い合う、そしてまた学生同士の心が通い合う教育をめざして一層の努力をしなければならぬと考えながら、非常に興味深くお話を聞かせていただいています。

司会 学校を卒業してからも、学校や学友との絆は強いと思いますが。

杉山 私も卒業しても縁の切れないことを感じております。短大の地鎮祭の日にバスが転落した事故の時です。

私は福山でNHKの記者をしておりまして、尾道支局のニュースデスクに呼び出しを受けて厚生病院に行きましたら、山本(実)先生が大怪我をされていました。「先生、大丈夫ですか」と、取材を忘れてOBとして心配したことを覚えています。

その後、ある教授が「たくさん卒業生に見舞いに来てもらってありがたかった。これが教師冥利につきるということか」と言っておられたことを思い出します。事故のあった狭い道路は舗装されていますが、いまだに拡幅工事が終わっていないことに一抹の不安がありますね。

土屋 経済1回の土屋です。クラスの半数以上が私より年上でした。私のグループは16人ほどおりましたが、その中で12人が学校の先生になり校長や教頭で定年になりました。今も電話をかけてき

てくれて一緒に飲んだりしますが、進んだ道が違い会えないこともしばしばです。しかし、連帯意識は少しも薄れていません。

佐藤 僕達の頃、経済科は女子と男子がちょうど半々ぐらいで、国文科もそうだったのではないかと思います。あるとき僕は、八木先生と田中学長を本気で怒らせたことがあるのです。就職の件です。

就職試験を福山で受けたのですが、何人かが受けて僕だけ採っていただきました。そこへ就職したのですが、自分の上司が気に入らないという理由で、1週間ぐらいで辞めてしまったのです。

そうしたら、「ちょっと来い」ということで、卒業していたにもかかわらず学長に呼び出され、「来年から採ってもらえないじゃないか」と言って怒られました。それは叱るというよりも教えるというような感じで、後になって身にしみました。

今だったら分かるのですが、やっぱり若かったのですね。先生のご苦労がそのときは全然分からなかったのが今でも残念です。

帯賀 西原さんや藤原さんの時代も非常に不況の

時代でしたね。現在、就職氷河期といわれていますが、当時就職指導の仕事を担当していた私にとっては、今よりもっと厳しかったのではないかと感じています。

その後、女子学生が増えてきて、これがまたきつい状況でした。銀行へ頭を下げて頼んで回りましたが、短大まで行った人は年がいつているからというようなことで断られました。女性採用は高校卒の方が長く勤めてもらえるというのです。

司会 次にクラブ活動や課外活動についての話題に入りましょう。

藤原 私は卓球をしていたのですが、中国5県のスポーツ大会で優勝したことが一番の思い出です。裏の仮設卓球場は下が土間で、あの狭いところに卓球台が1台か2台置いてありました。卓球の優勝杯を持って学長室に入り、田中学長に喜んでもらったことが、在学中では一番印象に残っております。

土屋 私たちは演劇をしました。沖縄の話で、国文科の女子学生にも手伝ってもらってやりました。あの頃はみんな張りがありました。一生懸命という気持ちがね。最近はなんだかガリ勉のような気がしてならないのですが、これも年寄りの愚痴でしょうか。

杉山 今、土屋さんが話された演劇についてですが、我々の時も発表をしていました。私が大学新聞に論説を書いた中の一部を見てみますと、「演劇発表をやって市民に感謝の意を表したことが、市民に非常に好感を持たれた。あんなボロ校舎におりながら感謝してくれるのなら、なんとかしてあげなくてはならないという声があった。このような所からも、学園を充実していく端緒があることを忘れてはならない」というようなことを書いています。

竹内 演劇活動は、高橋玄洋さんが始めました。学生時代から脚本家としての素地があったんです



短大の就職難に関する記事〈尾道大学新聞 1953(昭和28)年12月10日〉

ね。彼が我々に呼びかけて、女性にも中にはいつてもらいまして、第1回目を長江小学校の体育館でやりました。彼の力は甚大であったわけです。

彼は全然勉強しなくても勉強ができるわけですから、演劇のことばかりやっていたんですね。授業中でも、一生懸命脚本を書いていたことを覚えています。我々は先生の話をよく聞いていてもよく分からないというのに、彼は聞きながら脚本も書いてしまうのです。彼の頭の中では、小道具もなにかも出来上がっているのです。我々はそれを手伝ったというところだったと思います。

小島 私の時代はまだ社会状態も不安定なときで、学生運動もありましたが、これもいい勉強になったと思っています。それから、尾道短大のPRも兼ねて本校主催の「近県高等学校弁論大会」も開きました。

杉山 私は新聞部に属していました。同窓会新聞を長年編集された三上（勝康）さんは1年先輩でした。ここに昭和29年（1954年）7月発行の新聞を持って来たのですが、当時の学生が一番の関心事は学舎の新築計画はないのかということでした。なにしろ大正時代に建てられた古い学舎は、夜間の南高校と併用でした。私たち新聞部はなんとか移転を計画してほしい気持ちから、市の部長に教育懇談会を申し入れております。市としては大学を育成していく意思はあるけれども、なにしろ予算がなく具体的な計画がないということでした。

そのころ学舎東側教室ではや騒ぎがありました。「とにかく煙草だけは吸うな」と口ずっばく言われていたのを覚えています。火事でも起きたら短大そのものが廃校になるというような危機感を持っていました。

大下 私は正田さんと同期で、卒業後も短大の教務部などに勤め大学と関係が深かったのですが、少したってから園田、小倉、亀山、和佐谷先生など若い先生がどんどん入って来られ、一段と活気が出てきた感じでした。時代の一つの変わり目だ



座談会「よりよき学園にするために」〈尾道大学新聞 1954(昭和29)年7月1日〉

ったように思います。

それにしましても、創立当初から尾道短期大学の先生方は公開講座をしておられますね。一般の人に混じって学生もたくさん聴講していたと聞いています。特別な意図があったのでしょうか。大学を市民に開放するという、現在の趣旨と同じようなことだったのででしょうか。

信岡 尾道短大の場合、非常に早い時期に先駆的なことをやっていたものだと思います。地方に大学がなかった時代、短大が大学講座を開くということで、大学開放という非常にオープンな役割を当時からすでに果たしておられたと感心しております。これは一時中断していましたが、吉田学長時代に復活し、現在まで続いて市民から好評をいただいております。

司会 学校の将来像として、県立移管とか、尾道短大に芸術科を設置とか、四年制大学に昇格とか、いろいろ取り沙汰されていますが、このことについてのご意見をお願いします。

小島 同窓会としましては、過去に県立移管をしきりに進言し動いた経緯があります。これは四年制大学をめざしてのこととして、市立では財政的に無理だと考えたからであります。まず県立に、そして県の財政で四年制というように考えたのですが、うまくいかなかったいきさつがあります。

信岡 私が学長のとき、経営情報学科をつくりま

したが、それも施設を充実させ、スタッフを揃えていって、将来は四年制へのステップにしたいとの構想からでした。

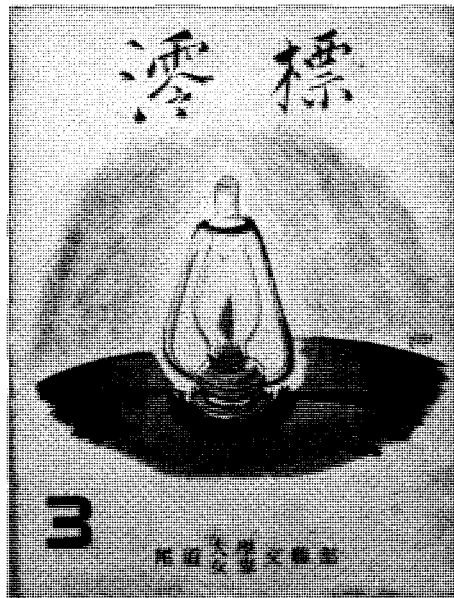
杉山 私も四年制大学昇格は大賛成です。18歳人口がどんどん減少し短大離れが進むなかで、学生の奪い合いが始まっています。やるなら早くやらないと取り残されてしまうということは以前からいわれてきたことです。取り返しのつかないことが予想されます。何とかその辺のところを創立50周年を期に、大きくアドバルーンを上げたいものです。同窓会の皆さんにも計り側面的にバックアップして、実現をめざして頑張りたいと思います。

藤原 杉山先輩の意見に賛成です。やるんだから早くやりたい。我々に出来ることと出来ないこと、学校として出来ることと出来ないこと、その辺を洗い出してみ、当たるべきところに当たることを考えてはいかがですか。具体的な方策があれば、我々にできることは大いに協力していきたいと考えています。

森山 学内的には、市立のまま、現在の国文・経済・経営情報の3学科を四年制大学に改組すること

を第一目標とした将来構想について合意を得ているところであります。これとは別に、新市長の公約でもあった「短大に芸術科の増設を」という構想があります。それとの絡みで、近々短大の将来的な展開をどうするかという問題も少し動いていくのではないかと考えておりました。それなりの決意をしなければならぬ時期だと思っております。

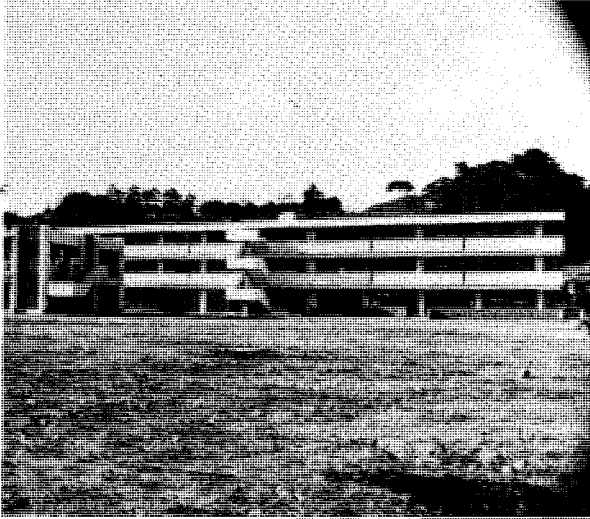
司会 今日はいろいろ思い出を語っていただきましたが、ここにいらっしゃる多くの方は、私も含めて、戦前の天皇中心の教育を受け、戦後、物心両面でがらりと変って荒海に投げ出されたように思います。そして皆んながその混乱の中で何か精神的な指標、いうならば「湊標」を求めてこの短大に集ってきたように思います。これは本学の文芸部の雑誌のタイトルともなっていますが、当時のわれわれの精神的状況をもっとも象徴的に表していたように思います。しかし、本日は思い出を語るだけでなく将来像も含めて内容のある話をたくさん語っていただき、すばらしい座談会となりました。母校のますますの発展を祈りながら終わりとさせていただきます。



みおつくし  
湊標 (文芸部雑誌)



## 第3章 着実な成長 (1966年～1985年)



●久山田に新学舎をもつことによって、本短大は力強い新たな歴史を刻み始めた。この頃には卒業生が本学で培った知見によって社会の各方面において頭角を露し始め、尾道短期大学の名声は次第に高まってきた。また公立の短期大学は全国的に数が少なく、大学への進学率の上昇も追い風となって志願者は増加の一途を辿り、またその地域も全国的な裾がりを覚せ始めた。しかし、こうした隆盛は、また一方で、それに見合う教育・研究のための設備の充実に要求し、課題は増大する一方であった。

(写真：久山田の新学舎)



当時の尾道短期大学周辺 (右手の木造校舎は旧久山田小学校)

久山田の新学舎への移転がようやく終わり、さらに第2期・第3期工事により施設が充実していくなか、1965(昭和40)年1月、田中稲穂学長が辞意を表明した。田中学長

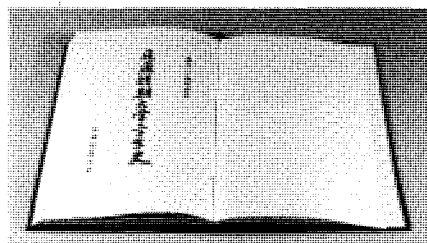
は、1953（昭和28）年1月の就任以来12年間、長江時代から久山田移転までのもっとも多難な時代にその職にあつて大学の発展に尽瘁され、実に多大な業績を残した。特に、山口高商での在職期間が長く、その教え子が多く実業界で活躍していた関係上、経済科卒業生の就職開拓に大きく寄与した。

市はその年の3月末日をもって辞職を承認し、次の学長については、人事委員会が事実上の学長選考委員会を形成して協議した。その結果、八木寛教授が学長候補として推薦され、教授会は投票によりこれを議決した。続いて尾道市長の発令により、1965年4月1日付けをもって八木寛教授が第3代学長として就任した。

（付記）学長の任期についてはそれまで規程はなかったが、1966年3月11日に諮問委員会の議を経て、任期を4年（ただし重任を妨げない）に決定した。

## 1 国庫補助普通交付税交付金の交付の実現

八木学長は女専、短大の創立当初より大学の発展と増大する市の財政負担の狭間で、常に学長の補佐役として道を切り開いてきた。八木は小規模の都市が大学を経営していくことの難しさを熟知していた。それだけに本学の次なる発展を考えた時、財政的基盤を確立することが最も重要で急務の課題であるとの認識を強く抱いていた。八木は国庫補助への道を懸命に探索した。全国公立短期大学協会でも、早くから同様の運動を進めていたが、八木が学長となり同協会のメンバーとなるや、八木はかつての台北師範学校時代の教え子であった山中貞則衆議院議員（当時大蔵政務次官）に事情を訴えた。山中議員は学生時代のクラス担任であった八木の教育者としての人格に心酔し、卒業後も思慕と尊敬の念を忘れることがなかったので、恩師の苦勞を見ごしにはできないと大蔵省や関係官庁を動かし、全国の公立短期大学に対し、1973（昭和48）年度より普通交付税交付金の形で国庫補助金の給付を実現させたのである。これによって、本学の財政基盤は大いに改善され、その後の本学の発展の原動力の一つとなった。これは八木の



『尾道短期大学二十年史』



創立20周年に関する記事〈尾道大学新聞  
1966(昭和41)年6月30日〉



マスプロ化（大量入学）に関する記事〈尾道大学新聞 1968(昭和43)年5月27日〉

大きな功績の一つとして特筆しておかなければならない。

## 2 『尾道短期大学二十年史』の刊行

1966（昭和41）年は女専から数えて創立20周年に当たった。これを記念して『尾道短期大学二十年史』を刊行した。編集担当責任者として高橋賢陳教授がこれに当たった。八木はその「序」の冒頭で次のように述べている。

「わが学園も満二十歳に達した。

思えば、二十年前、国民が敗戦の虚脱状態に陥り、国情また混乱の極にあったとき、女子専門学校の設立を執行した、当時の尾道市当局並びに指導的市民の達識と勇断には、ただただ敬服のほかない。しかし、設立後の育成は、戦後の窮乏の中なので、遅々として進まず、かてて加えて、学制改革による大学としての整備が要請されたのであるから、その経営は困難を極めたのである。（中略）

いわば、肥立ちのはなはだ悪かった幼児が、周囲の人々が驚くほどの成長をとげて、成人式を迎えるに至ったのである。本学は、尾道市という一地方自治体の設置した大学であるが、いまでは、遠く北は北海道、南は沖縄から、非常に広い地域から、多くの学生が笈を負うて集まってくるようになった。卒業生も広く各方面で活躍して声価を高めている。いまや、名実ともに、本学は成人としての活躍期に入った観を呈している。」

敗戦直後の極度の虚脱と混迷の中で呱呱の声をあげて以来20年、苦難の道を振り返る八木の胸中には、慈しみ育てたわが子を成人式に送り出す親の心情にも似た深い感慨があったであろう。草創期の詳細な経緯など当事者ならではの知り得ない生の資料に基づいた真実の記録は、まさに貴重な短大史である。本『50年史』が多くをそれに負っていることは言うまでもない。

## 3 市民の子弟の優先入学問題

この時代に記録にとどめておきたい一つの出来事があった。1971（昭和46）年市長に就任した石原善三郎氏が、同年8月13日島田教育長を通し、本学に対し市民の子弟を優



市民の子弟の優先入学問題に関する新聞記事〈山陽日日新聞 1971(昭和46)年8月20日〉

先入学させるよう要請してきたことである。市内の子弟に高等教育を受けさせるのが短大創設の主旨であったというのが理由である。これに対し、八木は教育の機会均等という理念から、市内の受験者を優先する差別的措置はとれないこと、それを容認すれば今日まで公正な入学試験の審査で入学を決定してきた本学の権威と自治が揺らぐとして断固拒否したのである。この事件は、本学の評価が全国的に高まって志願者が急増し、推薦入試制度も廃止したため、市内の子弟の入学が困難となり、全学生数の中で市内出身者の占める比率が極めて低くなっていた時代を象徴的に示す事件でもあった。因みに1971年度で見ると入学者数436名中市内在住者の子弟は僅か28名である。いずれにせよ、このときの八木の毅然たる態度は、本学の権威と自治を世間に明示し、本学の声価をいっそう高揚せしめたものである。なお、教授会もまた8月20日学長を支持し、市長の要請を拒否する決議を行った。

#### 4 課外教室の建設

1969（昭和44）年4月学生ホール（学生食堂）の西側の空き地に後援会の助力によって課外教室が建築された。木造厚型スレート瓦葺2階建てで、1階133.57㎡（和室8畳3室、4畳3室、茶室4.5畳1室）2階128.15㎡（21畳1室、20畳1室、6畳1室その他ピアノ練習場）、合計261.72㎡、建築費は約630万円であった。

全体が清楚な和室で構成されて温かい家庭的な雰囲気を持ち、茶道、書道など日本的なクラブ活動の中心となったばかりではなく、クラスやゼミの会合、教師と学生の語りや交流、親睦の場としても大いに利用され親しまれた。課外教室と名付けたのは、課外活動も教育の一環として捉えた八木の発案によるものであった。1995（平成7）年、学生会館の建築によって取り壊されたが、課外教室の名称は学生会館の2階の3室に引き継がれ残されている。

また学生談話室が1969年9月、学生ホール（学生食堂）西側に87.047㎡増築してつくられた。洋風の広間でステレオやソファを備え学生の団欒の場として活用されてきたが、これも学生会館建築に伴って取り壊された。



完成した課外教室全景



課外教室



学生談話室

## 5 短期大学としての体制の整備

八木はまた、本格的な大学としての骨格を整えるべく、懸案となっていた諸問題の解決に尽力した。そのうち主なもの二つを取り上げておきたい。

### (1) 尾道短期大学教員定年規程の制定

大学教員の定年については教育公務員特例法第8条第2項によって、大学管理機関が定めることになっている。しかし、本学には創立以来明確な定年規程がなかった。八木は、1968年10月、学内に定年問題を考えるための特別委員会を設置し協議を始めた。そして1971年3月10日の教授会において、同委員会の結論による「尾道短期大学教員定年規程」を承認、同年4月1日からこれを施行することを決定し、教員の定年を63歳と定めた（ただし、学長で教授を兼ねる者が満63歳を超えた場合にあっては、学長の退職の時を定年退職とする）。なお、この時点では定年に達した教員退職の時期は毎年4月1日と決められたが、1976年より3月31日に改正された。

### (2) 尾道短期大学学長選考規程の制定

学長の任期は、1966年4月21日の教授会において、4年とし、ただし重任を妨げない、と決定した。しかし、その選考方法については明確にされていなかった。上記任期4年の決定によって1968年、八木は任期満了となり、次期学長の選考を教授会に委ねた。このとき、人事委員会（教授全員で構成）がその任に当たり、原案を作成、八木を次期学長候補として教授会の信任を求め、同年12月12日、過半数の評決によって再任を決定した。しかし、八木は大学発展のためにはより民主的な選考が不可欠であり、その方法を明文化しておくことが望ましいと考えた。そこで「規程委員会」にその原案の作成を求めた。1972年1月27日の教授会で「尾道短期大学学長選考規程」および「同細則」案が提示され、承認可決された。これによって学長は「学長候補者推薦委員会」（教授会の互選による5名）の推薦を受けた2名以上の候補者の中から選挙して行うことが明文化

された。

八木は、その他従来慣習的に処理されてきた多くの問題についてそれぞれ規程を定め、時代に即応した民主的な大学運営への道を開いた。

八木は広島文理科大学で教育学を修めた教育学者であり、また台北師範学校教授兼附属小学校主事、戦後は鹿児島師範附属小学校主事を閲歴した教育実践者としても名高かった。本学においても教職課程の教授として教員養成に情熱を注ぎ、また独自の教育理念と工夫によって小学校教員免許状取得への道を開き、多数の教員志望の学生たちの夢を実現させた。この業績もまた大きく忘れ難いものである（第2部第5章1 教職課程の項を参照）。1970年代後半は全国の大学を席卷した大学紛争がそのピークに達し、大学教育がまさに危機にさらされた時代であった。本学もまた、まったくその嵐の圏外に置かれていたわけではなかった。しかし、教師と学生との交流を基本とする建学以来の、心の通った手作り教育がしっかりと根を下ろしていたので、動揺はなかった。こうした教育の伝統の中心に教育者八木学長の存在があったことは言うまでもない。

八木は2期目の任期満了（1973年3月末）を機に辞任し定年退職する意思を表明した。そこで「学長選考規程」初の適用によって、「学長候補者推薦委員会」委員5名（八木、吉田、富田、信岡、小倉）が教授会によって互選された。学内ではなお八木の再々任を切望する声が強かったが、辞任の意が固く、委員会では次期学長候補者として吉田眞三教授を推薦した。1972年10月19日の教授会で当選が確定し、1973年4月1日付けをもって、同教授が第4代学長として就任した。

こうして八木学長は、女専以来本学の主軸として実に偉大な多くの功績を残し、学内外から惜しまれつつ学園を去ることになった。

## 6 県立移管運動

吉田学長はかねてより、本学を市から県の運営へ移管すべきであるとの意見をもっていた。前学長と同様、市の財政基盤では、大学としての発展におのずから限界があるこ



当時の大学紛争に関する記事〈尾道短期大学新聞 1970(昭和45)年7月5日〉



学生と歓談する吉田学長

とを、それまでの厳しい体験の中から学びとっていたのである。苦難を克服し、ようやく成人の段階に達した本学がさらなる飛躍を目指すには、それが最良の選択であるとの認識に至っていた。その頃、若い教員を中心に、すでに四年制大学への昇格を待望する声が出始め、そうした目標を達成するためにも、まず県に移管し、より大きな財政基盤の下でその理想へ向けた発展を図るのが、最も合理的で妥当な道であると考えた。吉田は学長に就任すると、直ちにこ

### 《寄稿》

#### 恩師の思い出

国文科第25回卒業（1976年）

国家公務員 依藤 妙子

先生方には大変お世話になりました。学長の吉田先生、ゼミの森山先生、チューターの和佐谷先生、いっしょにソフトボールをして下さった亀山先生、これらの先生方にはお礼の言いようもない程お世話になりました。

まず、吉田先生の授業で印象に残っていることは、先生は戦争で多くの部下を運命的な失くし方をされ、クリスチャンになられたことと、「人間はひとりのときに成長する」とおっしゃったことです。卒業後の私は、何度もこのことばの重みを痛感しました。できるのなら尾短にもう1年通って、その後の人生のための精神力と知識をもっと蓄えればよかったと後悔したものです。

ゼミの森山先生には、学問の厳しさを教えられました。『源氏物語』のレポートのご指導は、編入してからの研究に大変役に立ちました。在学中からちょうど20年の月日がたちますのに、私はまだ森山先生に甘えてご助言を頂いております。人情厚いお心は、尾道短大の先生方の素晴らしさだと感謝しております。

それと、森山先生は、国文科のお別れ会で海援隊の歌を独唱されました。卒業後、テレビで武田鉄矢を見ると森山先生を思い出し、武田鉄矢と森山先生が一致するのです。

和佐谷先生は、意外とマイペースで頑固な

先生でした。1年の体育祭の仮装行列で女子高生の役をされたのですが、あ那时的ドギつい化粧をされたお顔は、今でも忘れられません。哲学の先生なので考え深い方なのですが、国文科のお別れ会では、幼稚園児の歌を独唱されました。あれは、世の中に対する批判の表れだったのでしょうか。

亀山先生は、よくいっしょにソフトボールをしたよしみで顔馴染みになったのですが、卒業前にソフトをしているときに、

「依藤さん、編入試験を受けるのにソフトばかりしていいの」

と、問われました。そのとき私は、「(勉強を)するだけのことはしています」とえらそうなことを言って、あとになって、「なまいきなことを言ってすみません」

と、あやまりに行きました。私も相当な自信家だったようですが、これでよく編入試験に落ちなかったのだと恥入っています。で、亀山先生の授業中のおことばで、「本当に絶望した人間は底ぬけに明るい」という忘れられないことばがあります。私は、卒業後、何度かそういう試練にあい、真に人の気持ちが変わるようになりました。でも今は、本当の絶望というのは究極のもの、つまり死ぬときであり、いつも生きるための何らかの希望の光が見えているのだと信じています。

先生方の思い出は書き尽くせません。多くの生きる指針を与えて下さいまして有難うございました。

の目標に向かって精力的に運動を開始した。市長（当時は佐藤勲氏）もこれを了承し、また市議会、同窓会、後援会も賛同し協力を約束した。しかし、県の側では、施設の整備が不十分で、現状では低成長期に入り、悪化している県の財政負担をさらに圧迫する恐れがあること、また県内の子弟の在籍率が低く、県民への貢献度の点で難点があることなどを理由に、最終的には受け入れを拒否し、残念ながら運動は成果を得るに至らなかった。しかし、この県立移管運動は、大学が地元にあることの価値や重要性を改めて市当局や市民に認識させる大きな契機となった。わが郷土

### 《寄稿》

#### この世でいちばんなつかしい町 ——

国文科第28回卒業（1979年）

九州大学勤務 上田 はるみ

いちめんの桜並木。

それは、まだ、風の冷たい春4月。

海の見える尾道駅（当時は新幹線の新尾道駅は未着工）からバスに乗り、曲がりくねった古い町並をかすめ、山へわけ入り、水源池をぐるりと回って、終点の久山田下車。

やわらかく降りそそぐ桜の花の向こうに、今はもう思い出の中の尾道短大はあったのでした。

卒業して数年後、乗り合わせた列車の中で「私の知人も卒業生だけど、どうして、みんな、そんなに尾道をなつかしがるのかなあ」

そう問われ、答えようとして、答えにつまってしまいました。

自然は豊かでしたが、建物は古めかしく、ひそかに「釣殿」と呼んでいました今の図書館は建築中（当時は古い閉架式図書館）でしたし、講義の時間はしっかり長かったし。

夏は暑くて、冬は風が冷たくて。水源池からはカエルの合唱。

山の中の仙人（仙女か）のような暮らしも悪くはありませんでしたが、「下界」もやっぱり恋しかったし。

尾道という地がなつかしいのでしょうか。

思い出すのは、桜の頃にはついに行けず、はらはらと枯れ葉舞う（時に松ぼっくりも落ちて来ました）晩秋に歩いた、文学の小道。

今はどうなっているでしょうか。途中で、がくと登る（あるいは下る）角度が変わった、ユニークな千光寺のロープウェー。

観光案内の地図を手に、ひたすら歩いた坂道。たくさんのお寺。尾道駅前の商店街。

すぐそこは海。古い歴史の港町。

卒業後、各地で再会した悪友たち。年賀状と暑中お見舞い少々で、あとは、ごぶさたします恩師の先生方。すみません。

結局。

人も町も学校も、海も坂道も、すべてを含んだ「尾道」そのものが、なつかしいのかもしれません。

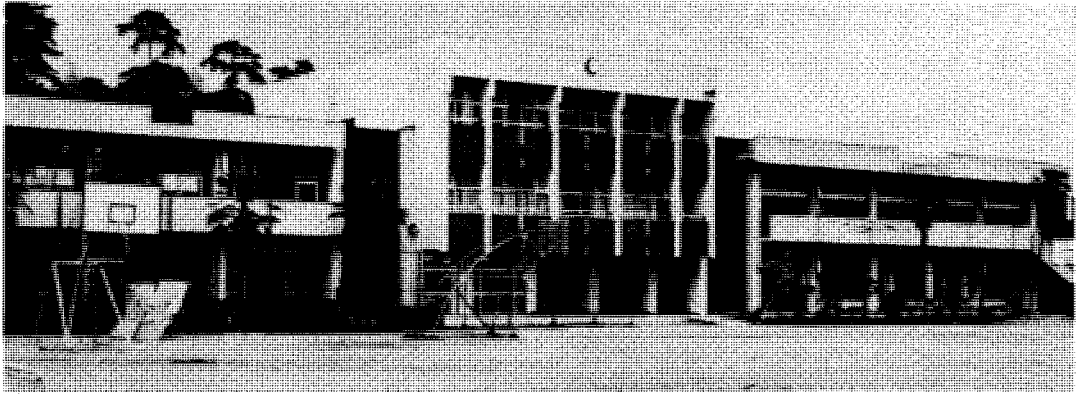
時の流れとともに、尾道も、尾道短大もまた、変わっていくことでしょう。たぶん、きっと、いつそう、すてきに。

尾道を離れ、地味な事務の仕事について、日々は過ぎ、時は流れて。

思い出すのは、尾道での2年間。良くも悪くも、あの2年間がなければ、今の私はないでしょう。

年ふるごとに、尾道での日々のなつかしさは、あの春の4月の桜のように、やさしく心の中に降り積もっていくようです。





研究棟完成

の大学として発展を見守っていかうとする空気は従来になく高まりを見せ始めた。さらに、こうした学長のエネルギーでひたむきな姿勢は学内にもよき刺激をもたらし、大学のあり方をめぐって論議は活発となり、充実と改革へ向けたさまざまな取り組みが積極的に試みられ始めた。それらの具体的成果を次に挙げてみる。

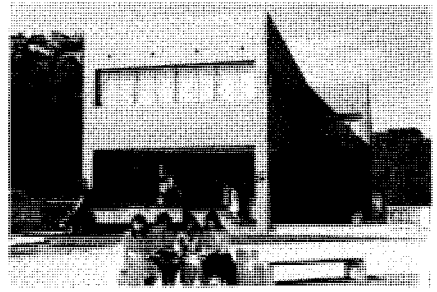
## 7 研究棟の建設

かねてより研究室の整備が要望されていたが、なかなか実現しなかった。A棟3階の西側の31号教室を薄い壁板で仕切った3室が研究室として使われ、1室に3、4名が同居し、研究や学生指導の面で甚だしく障害があった。これを改善するため研究棟の建設が計画された。当時B棟は左右がB、C棟の名称でそれぞれ分離独立し、中間を渡り廊下で結んだ構造となっていた。その渡り廊下を撤去して、その空間にRC造573.6㎡、3階建の研究棟が1973（昭和48）年4月着工、翌年1月に完成した。総工費は約5000万円の後援会の援助によった。これによって1階1室、2階5室、3階5室、合計11室の研究室が準備され、研究室の問題はなお不十分ながらも大幅な改善を見た。

なお、これまで研究室として使用されていた部屋は仕切りを取り払い改造し、本来の教室として使用されることになった。

## 8 図書館の建設

図書館については、その歴史的経過や現状など、第2部第3章 学内諸施設の項で述べるので、ここでは吉田学長時代の設備充実に関連した事項としてのみ簡単に触れておく。図書館としてはそれまでB棟東側の1階が当てられ、その他書庫としてその地下も使用されていた。しかし年々蔵書は増え続け、また、時代の変化とともに図書館にも新しい



開館当時の図書館

《寄稿》

### 図書館その他の思い出

国文科第29回卒業（1980年）  
 学習院大学法経図書センター勤務  
 東史（旧姓荒瀬）

私の手元には、未だに尾道短大時代の図書館利用カードがあります。眺めると、現代詩の授業で扱った宮沢賢治、萩原朔太郎、また演習リポートの泉鏡花など、三日にあけず借り出して、我ながらよく勉強していたものだなあと、感慨深いものがあります。

在学中に新築に成った図書館は、大きなガラス張りの窓から水を湛えた貯水池が眺められ、余所目には湖の城のようにも見えました。短大の図書館としては、所蔵量も内容も充実したものだと聞かされて、我がことのように嬉しかったのを覚えています。自分で手にとることの出来る開架図書はまだあまりなく、殆どは係の方が書庫から取ってきて下さる閉架図書でしたが、どういふものかその当時の係の女性は、いつもムツとしたような顔で立ちふるまっていて、申し込むのに気おくれたものでした。それにもめげず通いつめたわけです。

何しろ辺りに本屋さんとなかったのですから、学生として必然だと言えました。当時短大の周りは田畑と下宿屋と農協と簡易郵便局位しかなく、本屋へ行くには1時間に1本程度のバスで、30分かけて麓の町中まで行くしかありません。のどかと言えばのどかです

が、文化から隔離されているようで、久山田という地名には妙な実感がありました。山の上で、私はひたすら本を読んでいたのです。卒業後は神田の書店に勤め、出産退職後、玉川大学の通信教育で司書資格をとり、今は大学の図書館員として働いているのですから、本当に本と共に歩んできた気がします。

今振り返ると、久山田での学校生活には、素朴で気取りのない良さがありました。小さい学校ならではの気安さで、私は当時の学長吉田眞三先生のお部屋にも、幾度となくお邪魔しました。夢中になっていた歌舞伎のことだの、鏡花のことだの、時のたつのも忘れて語らったものです。学長室には、すぐ近くのテニスコートのなごやかな声も聞こえてきました。一部の先生方は暇さえあれば、テニスをなさっていたようです。

授業とは別に、坂根先生・和佐谷先生・私と友人との4人で、読書会をしていたこともあります。そうしたお付き合いのせいか、今でも先生方と手紙のやり取りがあるのは幸せなことです。つい先頃も坂根先生が送ってきて下さった国文学報の久山田便りを拝見していると、先生方もあの頃と少しも変わらない気がして、しみじみ懐かしく思いました。これからも、アットホームなあたたかさを失わない学校であって欲しいと、陰ながら祈っています。

システムや機能が要求され、これに対応できる独立した新図書館の建設が望まれるようになった。幸い後援会の方から資金提供の申し出があり、着手することになった。建設場所の問題があったが、市水道部との話し合いで、大学に隣接した水源池の一角約900㎡を埋め立てることで了解が得られた。敷地造成工事は1977(昭和52)年5月に始まり9月末に完了、建物の方の工事は1978年4月に始まり、同

《寄稿》

## 尾道短期大学とわたし

国文科第31回卒業(1982年)

小学校教諭 小林 真理子(旧姓宮地)

早いもので尾道短期大学を卒業して、13年の月日が流れようとしている。私は、現在、倉敷市内の小学校で教諭として忙しい毎日を送っている。思えば、教諭という立場になるまでには随分長い年月を要したものである。

尾道短期大学を卒業後、私は佛敎大学の課程本科の1年コースに入学して、まずは小学校の2種免許を取得した。取得後は、教員採用試験に挑戦しながら、市内の小学校で講師として5年余り勤めた。そして、晴れて試験にも合格し、念願の教諭として採用されることになったのは、尾道短期大学を卒業して6年後のことであった。長い道のりであった。と同時に、もうすでに次の目標を持っている自分に気付いたのである。「次は一種免許を取得しよう。」その目標を持った時には、家庭があり、乳児を抱えていただけに想像以上に大変で、主人や親たちの協力を得ながらの学習となった。そして、今年3月、念願の1種免許を取得することができたのである。

某大学を卒業後、すぐに教諭として採用されてきた同僚たちに比べ、私は数倍もの努力を強いられてきたことになる。しかし、毎年のように受験してきた採用試験に疲れることはあっても、一度として自分が志してきた「教師になる」という夢を断念したことはなく、むしろ「ストレートに人生を歩んでいる人に負けてたまるか」という強気でこれまで

生きてきたし、きっとこれからも生きていくことになると思う。

このようにまで私を強くしてくれたものがある。その一つは、閑寂な久山田で生活した2年間にしっかりと自分を見つめ、自分の人生の目的をはっきりと持って毎日を過ごすことができたということであろうか。そして、決して忘れてはならない二つ目が、そういう私の前向きさを在学中も卒業後も常に気にかけて下さり、どんな障害に出会った時でも温かい目で見守り応援し続けて下さった森山茂先生のおかげだと心から感謝申し上げている。

つまり、今の自分の原点は、尾道短期大学であり、そこで出会った恩師にあると言っても決して過言ではあるまい。

念願の第一希望の某国立大学に合格し、教師の道を歩んでいたとしても、決して今の自分はなかったであろうと思う。また、学ぶ喜びは体得できなかったらうとも思う。気が付くと教師になっていたというのではなく、教師になるべく道を自分で切り拓いてきたのだと自信を持って言える。初めは必要性に迫られて学習していた自分が、いつのまにか気が付くと自分自身の人生を切り拓いていくために、それも学ぶ喜びを**もって**学習していたのである。これからの人生も、常に目的を持ち、より高い自己実現を目指して精進していきたいと気持ちを新たにしている。

年12月に竣工、翌年3月1日開館した。1階478㎡、2階509㎡、計987㎡の鉄筋コンクリート造で、総工費は約1億2700万円であった。閲覧室はもとより、視聴覚室、参考図書室、ブラウジングコーナーなどを完備した薄茶のタイル張り瀟洒な建物で、湖水にその美しい姿を映し、キャンパスに新たな美しい情景を添えた。旧読書室は学生自習室として使用され、その後さらに13号室としてワープロやコンピュータ機器実習室に改造された。また、広い入口通路は学生ラウンジ、貸借カウンターは購買部、書庫はマイコン室として使用され、事務室、館長室は研究室に改造されて現在に至っている（第2部第3章4 情報処理実習室の項参照）。

## 9 久山田小学校の跡地の取得

1980（昭和55）年久山田小学校が水源池東側の三行と呼ばれる小高い丘の上に新校舎を建設し移転した。その跡地の利用について市当局にさまざまな意見や、また各方面からの利用申し込みが寄せられたが、学長の市長への熱意ある陳情によって、本学の将来の体育館建設用地として確保することで了解が取り付けられた。

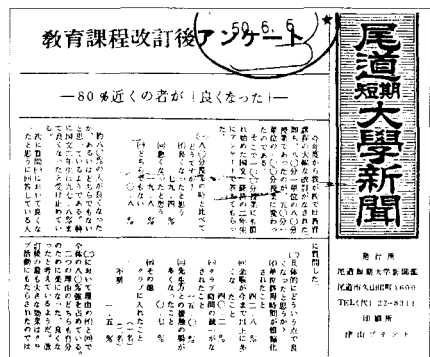
## 10 教育研究面での改革

この時期、全国の大学に燃え広がった学園紛争はようやく下火となった。しかし、これを契機に大学そのもののあり方、教育や研究の内実が学内、学外の両方から真剣に問われ論議され始めた。社会は急速に変化し、価値観が多様化していくなかで大学も大きな転換を迫られていたのである。吉田はこのような時代を視野に、就任後いち早く「将来計画委員会」を発足させ、上述のような施設の充実を図る一方で、そこでの論議を踏まえて、いわゆるソフト面での改革にも積極果敢に取り組んだ。

人事や教授会のみより民主的な運営を目指した種々の改革を実行する一方、教育研究面でも大胆な改革が試みられた。その中で特に大きなものは1975年度の単位履修時間の改訂があげられる。これは短大創設以来、80分授業15



教育課程一部改訂の記事〈尾道短期大学新聞 1974(昭和49)年12月18日〉



教育課程改訂後アンケート〈尾道短期大学新聞 1975(昭和50)年6月5日〉



宿泊セミナー

回で一単位としていたものを、他大学並みに50分15回で一単位に改めたものである。これによってゆとりの時間が多くなり部活動への積極的な参加や自主的な勉学、教師との対話の促進が期待された。

学生とのより親密な交流や対話を重視し「宿泊セミナー」(1976～1980年)を行い、「寮アドバイザー制度」(1976～1980年)も導入した。また、カリキュラムの面では一つのテーマを複数の教員がそれぞれの専門分野からアプローチする総合講座が開設された(1975年)。第二外国語(ドイツ・フランス語)も開設された(1977年)。教員の研究活動を活性化するために「研究紀要」も1981年度より年2回発行し、内地留学研修員制度も整備した(1980年)。対外的には地域と大学との交流を目指し、開かれた大学として、久山田に移転して以来途絶えていた「公開講座」を1976年に復活した。

「将来計画委員会」は1980年5月15日の教授会で「将来計画策定委員会」と名称を変更し、本学の抱える課題を洗い出した上で、改革と発展の具体的なプログラムを策定する作業に入り、真剣な議論を経て1981年2月26日、「尾道短期大学将来計画策定報告書—現況と課題、整備の方向」をまとめ、教授会に報告した。それは問題点(現況と課題)を総括し、その整備の方向を具体的に記したものであったが、特にその中で、四年制大学への改組ないし新学科増設の問題を検討するための組織の設置と、その実現に必要な諸条件の具体的な研究が提言されたことの意味は大きく、その後の本学の発展の重要な指針となった。なお、この提言は、1980年4月7日の教授会で四年制大学への昇格をめざす決議を受けたものであった。

1977年3月末をもって吉田学長は第一期の任期が満了となり、規程に従って選挙が行われたが、圧倒的多数をもって再任された。しかし、1980年度に入るとまもなく第二期満了をもって引退する旨をいち早く表明し、次期学長の選任作業を急ぐよう教授会に要請した。本学の将来を委ねる最もふさわしい後継者を、時間をかけて熟慮の上決定して欲しいとの願いからであった。そこで早速「学長候補者推薦委員会」が互選の上組織された。吉田学長のほかに富田、梅田、小倉、森山の各教授5名であった。推薦委員会で

## 《寄稿》

## 新聞記事と一枚の写真

国文科第32回卒業（1983年）

近畿大学・大谷女子短期大学非常勤講師

富澤 成實

かつて2年間の学生生活をそこで送った私にとって、尾道短期大学はある種の懐かしさとともに振り返らずにはいられない場である。その尾道短大が創立五十周年を迎えるという。そこで、この短大と関わってこられた多くの方々と一緒にお祝いしたいという思いから、尾道短大の長い歴史のなかの、私に関係したほんの些細なひとこまについてこれから贅言を弄することになるのだが、その前にぜひとも記しておきたいのは、お世話になった先生方への感謝の念である。在学中から現在にいたるまで、進歩の跡のみえない私におも辛抱強く叱咤激励の言葉をかけて戴いていること、このことに対する感謝の気持ちこそ、お伝えしなければならぬ最も肝要なことである。

私の短大時代の出発を告げる入学式の終了直後に、ある新聞社の記者から取材を受けたことがあった。いくつかの質問を受けたが、そのなかにつきのような別個の問いがあったのを記憶している。ひとつは、なぜこの学校に入学したのかという動機に関する問いであり、もうひとつは、この学校で何を勉強するつもりなのかという課題に関する問いであったように思われる。あまりに突然の出来事だったこともあって、そのときの私は彼に明瞭な返答をすることができなかった。すなわち、はじめの質問に対しては単に「出身地を離れ一人で生活をしてみたいから」と答えるほかはなく、つぎの問いには「懸命に勉強する」とだけ言ったように思われる。そのような応答のなかで、日本の文学者のなかではだれが好きかという問いに対しては、志賀直哉だと即答した。翌日の新聞をみると、そこに掲載された文章は、埼玉県出身の青年が志賀直哉を研究するために尾道短大の国文学科に

意気揚々と入学してきた、という内容を明らかに意味していた。なるほど、新聞記者という者は、本来相互に無関係な個々の断片を見事に接合して、さもありそうな美談を作り上げるものだと、多少の気恥ずかしさを感じながらも感心した覚えがある。

のちに、尾道短大を選んだ理由について人に説明する必要から、便宜上3点にまとめた。紙幅の関係から3点の内容については触れることができないが、「要領よく」整理されたその内容に満足してもいたし、自分自身への返答としてある程度納得してもいた。しかし、この文章を書くにあたって当時のことを回想するなかで、つぎのことも実は案外大きな要因だったのではないかと考えるにいたった。それは、取り寄せた入試要項に添付された学校案内のなかにあった1枚の写真に関係している。実物を持ち合わせていないので定かではないが、林芙美子の文学碑の上に腰掛けた教師らしき人物が、ゼミの数人の学生を前に尾道水道の方向を指差して何やら説明を施しているというものであった（と解釈した）。

この写真は、東京近郊で育った私には頗る魅力的だった。尾道という文学的な土地の、そこにある大学の国文科で全身どっぷりと文学に浸りたいと強く思った。むしろその実現への要請は強迫的でさえあった。いいかえると、私の内部からではなく、私のあずかりしらぬ外部から、それはやって来たのだった。受験勉強をしながら、この写真を繰り返し眺め、また尾道を舞台にした『暗夜行路』や『児を盗む話』を読み返すなか、このような思いはいっそう強められた。このことに、坂根ゼミの卒業レポート執筆時から現在にいたるまで、志賀直哉を研究対象の中心に据え続けてきたことを考え合わせてみると、新聞記事が伝えたあの内容も、あながち記者による荒唐無稽な捏造話とばかりはいえないことになる。

尾道短期大学名誉教授称号授与に関する新聞記事（山陽日日新聞 1982(昭和57)年6月23日）

尾道短期大学名誉教授称号授与に関する新聞記事（山陽日日新聞 1982(昭和57)年6月23日）

尾道短期大学名誉教授称号授与に関する新聞記事（山陽日日新聞 1982(昭和57)年6月23日）

は、大学を取り巻く諸条件の厳しいなかで発展を図るには、学内のみならず学外にも広く有能な人材を求めてはどうかとの意見が強まり、最終的に岡山大教授福田襄之介氏を候補者として推薦、1980年9月25日の教授会で同氏が当選、1981年4月1日付けをもって第5代学長に就任した。

吉田学長は一途な青年のごとき情熱の持ち主であった。学生や教師の輪の中に自ら飛び込み、酒を酌み交わし、人生や学問や大学の問題を議論して尽きるところがなかった。女専以来、どれだけ多くの卒業生が、その青春時代の追憶の中に、吉田学長との出会いを大切に秘めていることであろうか。社会も学生の意識も変貌し、大学もまた大きな転期の苦しみを味わっていた。その最も困難な節目のときに、吉田学長の卓越した指導力によって、大学は古い体質からの脱皮を果たし、なお生き生きと発展の道を歩み続けることができたのである。女専以来、八木学長と並んで文字通り本学の柱石であった吉田学長の退任は学内外の各方面から惜しまれた。

## 11 四年制大学昇格への動き

福田襄之介学長は漢文学が専攻の文学博士、岡山大学法文学部長を4期、その他評議員、学生部長などを歴任、大学における教育、研究、運営等の諸問題については優れた能力と見識の持ち主であった。氏は本学に赴任すると、吉田学長時代の教授会決議および「将来計画策定報告書」に沿って、四年制大学への昇格を第一目標に掲げ、その実現に努力した。1981年10月、学内に「改組委員会」を設置し、短期大学併置、四年制経済学部増設（定員100名）の具体案を作成、市総合計画審議会、市議会、市当局等を実現方を請願した。しかし、ここでも設置者側の財政難が大きな障害となり、計画は思うように進展しなかった。

この時期特筆すべきこととしては、1982年3月4日に「尾道短期大学名誉教授称号授与規程」が制定されたことが挙げられる。多年、教授あるいは学長として本学の教育、研究上功績のあった者に「名誉教授」の称号を授与しようとするもので、もちろん教授会も異論はなかった。これによって次の6名の元教授に1982年5月20日付けで名誉

教授の称号を授与することが、教授会で承認された。

高橋賢陳、八木寛、野上久人、築山福文、帯賀一男、吉田眞三

福田学長は四年制大学昇格の運動に専心する一方、人事の公正を図るために教員採用の公募制度や教授会の運営方法改善など、学内のいっそうの民主化に努めた。また、久山田跡地にテニスコートの造成、久山田幼稚園舎の改造による研究室（2室、現在1室は心理学研究実験室）の増設、また1981年5月「体育館建設推進委員会」を設置し、体育館の建設推進など施設の充実に尽力した。1983年、本学において初めて情報処理教育の講座を開設した（1983年度講義のみ、1984年度より機器を設置し実習を行う）。悠揚せまらざる風格ながら気さくに市民の中に溶け込み、漢詩の指導添削などを行い、尾道市の文化向上にも貢献するところ大であった。

福田学長の任期満了を控え、1985年11月、規定に従って「学長候補者推薦委員会」（富田、信岡、吉原、森山、亀山）が組織された。しかし、四年制大学昇格をはじめ本学を取り巻く状況がきわめて不透明ななか、教授会の意見も容易に一致せず、候補者の推薦は予想外に難航した。改めて推薦委員会（富田、吉原、森山、亀山、和佐谷）を選出し直し、ようやく信岡巽教授を推薦し、新学期も迫った3月14日の教授会で当選が決定、直ちに同年4月1日付けで第6代学長に就任した。



## 第4章 新たな飛躍 (1986年～1996年)



●1992年をピークとする大学入学適齢者人口の急減期、いわゆる「大学の冬の時代」を視野に入れ、経営情報学科増設の構想が打ち出された。情報化社会に即応できる人材育成のみならず、地域の情報化の促進、共同研究体制、コンサルティング機能など、市民や地元産業界からの期待も高まった。市の全面的なバックアップのもと、計画からわずか2年の1988年文部省の認可にこぎつけ、本学の歴史に新たな扉を開くことになった。

(写真：増築されたC棟学舎)

### 1 経営情報学科の増設

信岡学長は福田学長の意志を継承し四年制大学を目標とした。その道程が容易でないことは、これまでの経過で実証されているところである。しかし、第二次ベビーブームの大学入学適齢者人口のピーク時(1992《平成4年》)を迎え、全国の大学がこの時の到来を大学整備の最大のチャンスとして捉え、施設の充実、時代に即応した大学の魅力増進に次々と着手しているとき、本学だけが手をこまねいて流れにとり残されてしまうわけにはいかなかった。信岡はまず第一段階として、しかるべき学科増設を行って施設やスタッフの充実を図り、それをステップに四年制大学へ向かう二段階方式が、最も妥当で実現の可能性がある方法ではないかと考えた。信岡は就任するとまもなく吉原龍介学長と協議し、学科増設について情報の収集や他大学視察などを行い構想を練った。その結果、急速に進展してきた情報化社会に即応できる人材養成を目指した新学科が将来的に最も有望で、かつ本学全体の発展にとっても不可欠ではないかとの結論に達した。こうした学科の増設によって期待される地域の情報化の促進、共同研究体制、コンサルティング機能などは、コミュニティとの交流という公立短大の果たすべき役割の観点からもきわめて意義あるもの



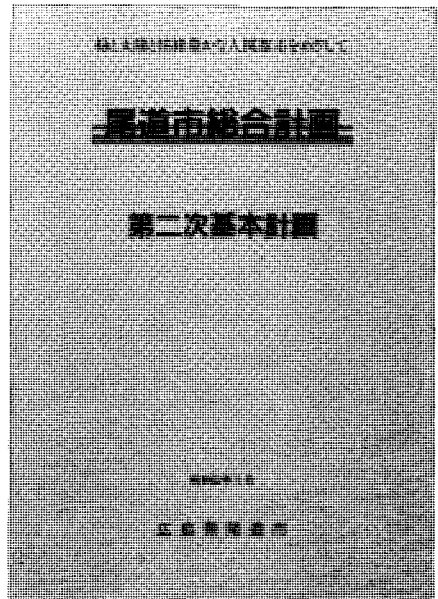
経営情報学科増設当時の尾道短期大学周辺

と考えたのである。

1986年5月1日、従来の「改組委員会」を整備拡充し、学長の下に企画部門（部長・吉原龍介）と施設部門（同・小倉正恒）および事務局（室長・光谷岩美）の三部門を置き、学科増設の具体案の作成に着手した。そして同年7月23日、同委員会において「産業情報学科」の増設構想が打ち出された。博田東平市長もこうした大学側の構想に賛同し、学長に対し前向きに検討することを表明した。1986年8月、市は通産省のニューメディア・コミュニティ構想に基づく応用発展地域の指定を受け、「尾道市総合計画第2次基本計画の審議策定委員会」（会長・信岡巽）は同年10月31日、その答申の中でインテリジェント・シティ構想としてそれを位置づけた。そのサポート機能として「産業情報学科」増設への期待感は、行政、経済界、市民の間でも高まりを見せてきた。

1986年12月4日、「産業情報学科」（入学定員1学年100名、1987年4月発足）の増設が教授会で承認され、同時にそれに必要な校地として隣接する水源池を南北に幅30m、面積6000㎡を埋め立てること、および新学舎建設（建設面積1600㎡）の具体的検討に着手することが決議された。また、それらに要する費用総額5億円を1987年度予算として設置者に要求することも承認された。これを受けて12月8日、尾道市議会は「産業情報学科」増設に伴う調査費（地質調査、環境調査、基本設計）として1400万円を補正予算で計上し、同月末可決した。これと平行して、大学側では12月12日、「改組委員会」を「学科増設委員会」と改称し、その中に「カリキュラム検討委員会」（委員長・刈山和俊）を設置し、学科の骨格と内容について本格的な検討に入った。

しかし、学科増設といえどもそれほど容易ではなかった。自治省は小規模の自治体が大学を増設することには基本的に消極的であった。また、学舎建設等のために大蔵省に起債を仰がねばならなかったが、ここも同様の姿勢であった。文部省もまた、自治省と歩調を合わせ小都市の大学の新設は、たとえ学科増設といえども抑制の方向であった。幸い市の教育行政の推進に常に重要な役目を果たしてこられた高橋最宜市会議員（議長3期を歴任）が、これらの



「尾道市総合計画第2次基本計画」

問題の解決に積極的に当たられ、ようやく道が開かれることになった。そこで市と大学が一体となって、1987年6月末締切りの申請書類提出に取り組むために、1987年1月16日、「尾道短期大学学科増設推進本部」を設置し、本部長に濱中国秋助役、副本部長に吉原暁教育長、さらに本部員に財務・総務の各部長、教育次長をそれぞれ当てる。短期大学内には「推進本部事務局」（学科推進室）を設け、光谷岩美事務長を推進室長に任じて万全の体制で臨んだ。これによって、ようやく文部省の高等教育局企画課の窓が正式に開き、そこで指導と助言を受けながら、認可に必要な諸々

《寄稿》

## 尾道短期大学での出会い

経営情報学科第1回卒業（1990年）

小川 雅子

1988年の春、経営情報学科の第1期生として、私は尾道短期大学に入学しました。月日の経つのは早いもので、あれからもう、7度目の春を迎えようとしています。新しい学生生活への期待と不安で一杯だった入学式等、懐かしく思い出されます。今、そんな短大時代を振り返ってみたいと思います。

私には、短大時代に出会った二つのものがあります。一つは、パソコンです。そもそも私が経営情報学科を専攻したのも、このパソコンへの興味からでした。パソコンが未経験だったこともあり、早く実習の講義を受けたいと、楽しみにしていました。最初の講義の時には、新設された実習室で、ズラリと並んだ新品のパソコンの前に座って、先生の言われる通り、間違えないようにと、ゆっくりとキーボードを叩いていたことを覚えています。又、この実習室は、友人達との出会いの場でもありました。毎週出題されるプログラムの課題を完成させる為に、他の講義終了後、毎日の様に皆がこの実習室に集まり、教え合って遅くまでプログラムを作成したものです。寮生活でなく地元の私にとっては、特に友人達との交流が深まる場所だったと思いま

す。プログラム作成は、難しく非常に苦労しましたが、エラーが全部なくなって完成した時の喜びはひとしおで、私の一番好きな学科でもありました。

もう一つの出会いは硬式テニスです。軟式テニスの経験はあったのですが、短大では硬式に挑戦しようとサークルに入りました。最初思うようにいかず大変でしたが、やればやる程おもしろくなっていきました。残念ながら短大時代には1年間しか活動できませんでしたが、卒業して現在に至るまでずっと続けています。今勤務している会社は、入社した時にはテニス部はなかったのですが、自ら部長となって発足し、現在活動して4年になります。又、仕事では、職種は事務なのですがパソコンを使う事が比較的多く、短大時代に学んだプログラミングなどを活用する事も稀にあり、役立っています。

このように、短大時代に出会った二つのものは、今では私の生活の一部となっています。考えてみると何も分からずに選んだ経営情報学科でしたが、丁度私の年に増設されたことを幸運に思います。この尾道短期大学、そして経営情報学科に出会えてよかったと改めて感じています。これからも、出会いを大切に頑張っていきたいと思っています。

の具体的作業が開始されたのである。それらの中で主なるものを挙げてみる。

(1) 学舎増築

新設学科講義棟兼一部管理棟、鉄筋コンクリート造り3階建総面積1709㎡、1階学長室、応接室、会議室、事務室(1階計616㎡)、2階研究室4、教室2(2階計514㎡)、3階コンピュータ実習室(コンピュータ室1、オペレーション室1、大講義室1)、研究室4(3階計579㎡)、着工1987年7月、完成1988年3月(総工費3億2500万円)

(2) 運動場敷地

隣接する水源池の埋立てによって6500㎡拡張。着工11月、完成3月(工費6億7741万円)

(3) 図書整備

新設学科の専門教育関係図書、3230冊、同学術雑誌26種類(全額1350万円)

(4) 教員

新設学科専門教育：教授5名、助教授2名、専任講師1名、他に助手1名

一般教育：教授4名、助教授3名

(5) 機械、器具

大型(ホスト)コンピュータ1台、(日本IBM汎用コンピュータ)、端末機69台

リース料1億2000万円

(6) 組織変更

大学管理運営組織の整備。従来の教務・学生・厚生各部を学生部に一本化。また、69年度以降廃止されていた学科長制を復活。

以上であるが、その中で(4)の教員の確保が最も苦心したところであった。この時期、方々で経営や情報関係の学科が続々と新設され、この分野の専門家は不足気味で、いろいろの伝手を求めて締切りぎりぎりに至ってようやく全員を揃えたリストを提出することができたのである。学科長に福井大学工学部の教授であった白神良昭氏を据え、また民間企業から2名を教授として登用した。本学としては先例を破った新しい試みとしてマスコミでも注目され話題となった。また、学内の経済科から2名が移籍した。一般

## 教授に民間人登用

**尾道短期大の「三菱」と「日立」から2人**  
経営情報学科

尾道市久山町、尾道市立短大一人きりのほど決めた。四月一日付で発布する。教授陣には、期大(信岡英典、國文、経)は、今年四月から増設する。尾道短大としては初めて民間企業からの登用もあり、成果が注目される。教務スタッフは次

▽教授白神良昭(福井大学工学部) 教授白神良昭(福井大学工学部) 教授小泉伸(京都市)

▽教授中安(三菱電機) 教授中安(三菱電機) 教授中安(三菱電機)

のみなさん。

経営情報学科に、教授白神良昭(福井大学工学部) 教授小泉伸(京都市)

▽教授中安(三菱電機) 教授中安(三菱電機) 教授中安(三菱電機)

〈朝日新聞備後版 1988(昭和63)年1月10日付〉



尾道短期大学学科増設推進室  
光谷室長

教育は従来のメンバーに1名を入れ替え申請した。なお、文部省との折衝の中で、「産業情報学科」は公立短大ではこれまで先例がなく、カリキュラムの編成に難しい問題が残るので、「経営情報学科」に名称変更するよう指導があった。短大側もそれを受け入れ、6月18日の教授会でも了解を得て、以後「経営情報学科」と呼ぶことにした。

吉原企画部長、光谷室長は文部省との折衝のため上京を繰り返し、施設建設の業務や認可書類の作成に追われ、締切り近くにはほとんど徹夜作業の連続であった。ようやく書類が完成し文部省へ持参し受理されたのは、締切りぎりぎりの6月30日であった。

提出した申請書類は(1)設置する大学等の概要、(2)設置の主旨及び特に設置を必要とする理由、(3)学則、(4)学長及び教員の氏名・経歴、(5)学科長その他教員の履歴書、教育研究業績書、職務調書及び就任承諾書等、13項目にわたる内容を記載した大部なものであるが、設置の主旨とその必要性を記載した項目において概ね次のように述べている。

- 1 尾道市は1987年策定した「尾道市総合計画」において備後地域の文化的中心圏を目指した文化都市の形成を進めており、そのためには若者を定着させ、教育、文化機能をよりいっそう充実させていかなければならない。しかし、現状では、広島県においては約4割が県外の短期大学に流出しており、また短期大学の立地状況は9割が広島市等の県西部に集中し、東部には本学を含め2校しかない。今後、尾道市が豊かな自然や歴史、文化を生かした都市として発展していくためには、教育、文化、産業振興の核となる本短期大学の整備拡充が必須の要件である。
- 2 経営情報学科は、経営等の場に情報システムを設計し、その運用を担う技術者を養成する学科としてこれからますます社会で要望される状況にあるにもかかわらず、広島県内の設置状況をみると、県西部に1校あるのみで短期大学では県東部に皆無である。
- 3 尾道市は、1986年、通産省のニューメディア・コ

コミュニティ構想に基づく応用発展地域としての指定を受け、情報ネットワーク・システムの構築と運用を図っているが、これには地元産業界、行政に加えて短期大学との三位一体で臨むことがその実効ある実現と運営に不可欠であり、本短期大学の役割に対する地元の期待が大きい。

以上の3点であるが、さらに本学科の教育の特色として、幅広い教養と専門的視野をもって現実の問題に対処できる能力の養成を挙げている。そして情報教育の中心にコンピュータの取り扱いの高度な能力の修得を据えている。定員はすでに決定したとおり1学年100名である。なお、申請書には、尾道商工会議所会頭他常議員62名、近隣31高等学校長の設置趣意賛同署名簿も添付された。

申請書類を受理された後も、4月開設に向けた学舎の増築やグラウンドの造成は工事続行中であり、また実習室へのコンピュータ導入など、計画通りに進めなくてはならず、業務は多忙を極めた。

10月15日、大学設置審議会専門委員会において、申請学科のカリキュラムおよび教員組織についての審査が終了し、すべて合格したことが文部省より伝えられ第一関門は通過した。

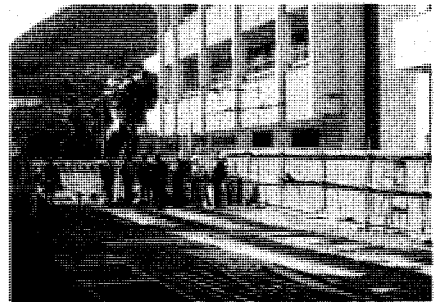
続いて10月12日、大学設置審議会の委員による現地視察が行われた。同委員の高橋良平（九州大学長）と添田喬（徳島大学長）の両人が文部省の係官1名を伴って本学を訪れ、本学が提出した認可申請書に基づき、学舎増築、キャンパス拡張工事の進捗状況などをつぶさに視察した。また、図書の整備やコンピュータの設置の状況などを調査した。信岡学長、吉原部長、光谷室長がこれに応接したが、市長、教育長、それに学科長に予定されていた白神教授も同席した。増築工事も拡張工事もいまだ進行半ばであったが、計画通り順調に進んでいたのも、特に指摘されるような大きな問題もなく無事視察を通過し、12月23日、大学設置審議会の答申に基づき、中島源太郎文部大臣より博田市長に対し正式に認可が下りた。同日、博田市長と学長が文部省の一室において直接認可証を受領した。労苦が報われたことに関係者一同喜び合った。西日本における公立短大

## 委員の九大学長ら視察

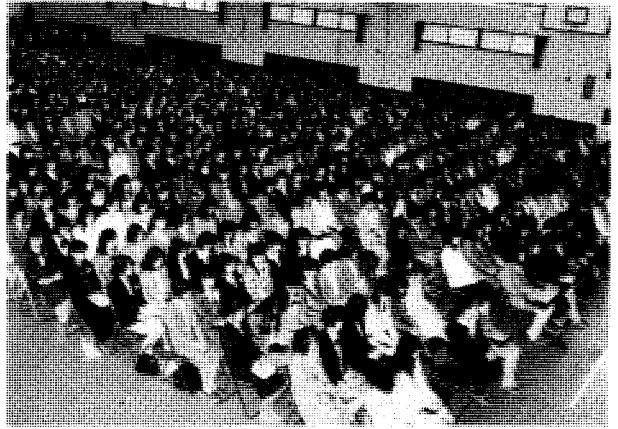
### 尾道短大 経営情報科 12月の大学審議会で認可

通産省ニューメディアコミュニティ構想応用発展地域の指定を受けた尾道市。高専情報化社会に対応する技術者を育成するため来年四月をメドに尾道短大（信岡賢学長）に経営情報科を新設するに伴い、六月三十日、文部省に認可申請した。十二日、文部省大学設置審議会委員の高橋良平・九大学長、添田喬・徳島大学長が山浦登志夫・文部省事務官を伴って尾道短大を視察。認可申請書に基づき教務、施設の進捗状況、コンピュータ導入など聞き取り調査した。委員二人が視察に訪れたことで認可の見通しが強くなり、正式には十二月に開かれる同審議会で正式決定する運びとなった。経営情報科は八人の教授、助教から八人のスタッフ。

文部省大学設置審議会委員による視察に関する記事〈大朝日日新聞 1987(昭和62)年10月17日〉



視察の様子



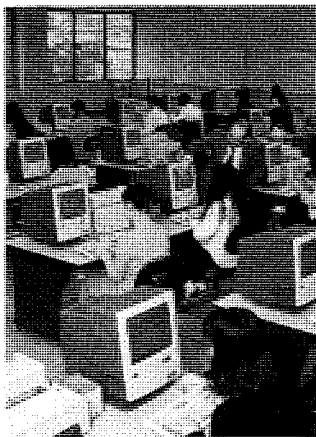
経営情報学科第1回生入学式

としては、姫路県立短期大学に次いで2番目の経営情報学科設置であった。この認可に基づき市議会は12月24日、国文科、経済科に新たに経営情報学科を加えた「尾道短期大学設置及び管理条例の一部を改正する条例案」を可決した。

直ちに新学科の入学試験の準備に取りかかり、推薦入試は翌年他の2科と同時に1月17日に行い、一般入試のみ20日間遅らせ2月27日に行うことにした。広報期間が短かったにもかかわらず、542名（推薦を含む）の応募者があり、滑り出しは順調であった。

1988年3月29日、新学舎の落成式が挙行された。新学舎はコンピュータ実習室をはじめハイテク技術を随所に配し、21世紀をにらんだ近代的設計のスマートなレンガ風の外観で、「経営情報学科」にふさわしい姿であった。また、この学科新設を記念し、汎用コンピュータの披露も兼ねて「コンピュータ市民公開講座」を5講座開設し、地域に開かれた大学として市民にも好評をもって迎えられた。

4月11日、経営情報学科第1回生の入学式が国文、経済の両科と同時に体育館で行われた。入学者は男子1名を含め154名であった。信岡学長は「新たなこの学科が他の2科と同様の高い実績と評価を獲得し、本学の歴史をさらに輝かしいものにできるかどうかは、諸君の努力次第である。1回生としての誇りと自覚をもって励んで欲しい」旨の式辞を述べた。こうして「経営情報学科」はスタートし、短大の歴史に新しい扉を開いたのである。「学科増設委員



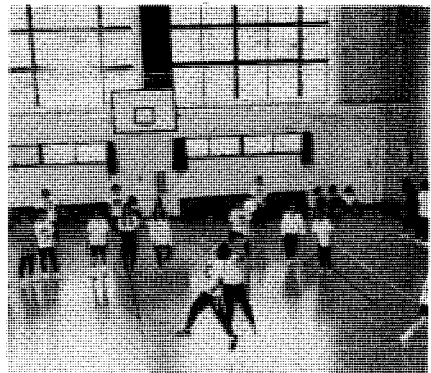
コンピュータ実習室

会」は、その任務を終了したため4月9日解散し、今後は四年制問題を考える「改組委員会」として存続していくこととなった。

信岡学長は経営情報学科の増設を行うとともに、福田学長がやり残した体育館の建設を完成し、また従来からの懸案となっていた短大の所管の移管の問題にも取り組んだ。

## 2 体育館竣工

久山田移転当初より、体育館の建設を要望する声は上がっていた。体育館がないために、体育の授業はもちろん、入学式、卒業式、学園祭等、第2号教室を使用せざるを得ず不便をかかってきたが、財政的にゆとりがなくこれまでは見送られてきた。しかし、学生からの要望は年を追うごとに切実となってきた。福田学長はこの現状を改善しようと体育館の建設を目指し、1981（昭和56）年学内に「体育館建設推進委員会」を設置し計画を進めた。幸い後援会（会長・浜本清氏）より資金協力の申し出があり、実現の見通しは明るくなっていたが、建設場所や大学全体の発展計画との絡み等の問題から思うように進展せず、1984年、上記「推進委員会」の委員を学長の任命によって改めて選出し直し協議を続行することにした。信岡はこの「体育館推進委員会」（委員長・小倉正恒）をそのまま受け継ぎ実現に向けて努力した。そして、ようやくテニスコートとして使用していた久山田小学校跡地に1985年11月着工、翌年5月、鉄筋コンクリート造平家建（延床面積1100.5㎡）が完成し、5月19日、落成式が挙行された。総工費1億7500万円で後援会が7000万円を負担し、後は借入金で賄った。同窓会も緞帳と花壇等（計500万円）を寄贈し、設備の充実に貢献した。



体育館

## 3 教育委員会から市長部局への所管の移管

本学の所管は当初、市長部局へ置かれていたが、1961（昭和36）年以降、教育委員会に移された。大学は法制度上は地方公共団体の長の管轄下にあるべきものである。本学



が義務教育の所管を本務とする教育委員会に、市長の事務の委任、補助執行の形で属することになった理由についてはつまびらかではないが、当市のような小都市では本学の運営が義務教育機関と必然的にさまざまな面で関わりをもたざるを得ない事情があったものと思われる。それはそれなりに市の教育行政全般から見て良い点もあり、本学の発展に益するところも少なくなかったことであろう。しかし、他の公立短大に例がなく、法的にも変則的であったことは、これまで学内でもしばしば問題とされてきた。経営情報学科の増設に伴う組織の整備・変更を機会に、この懸

### 《寄稿》

#### 私が尾道短期大学から学んだこと —

国文科第40回卒業（1991年）

山県郡加計町立加計中学校教諭 芦原 千恵  
尾道短期大学を卒業して早5年。今こうして長年の夢だった“教師”という職業に就いているなんて、5年前の私がどうして想像出来たのでしょうか。もともと“学ぶこと”が好きだった私にとっては、国文科の専門科目はもとよりどの授業も大変魅力的で、一時間一時間の授業は心ワクワクするととても楽しいものでした。高校までとは違い、学問とは自らが学ぶものだということ、又、学問の楽しさを教えてもらった気がします。その上、窓から入ってくる心地良い爽やかな風、水の匂いを含んだしっとりとした空気、広がる山・緑・空などの抜群の環境がより一層私の向学心を助長させたのでしょうか。精神的にゆったりとした気分で学生生活を送ることが出来ました。家から短大までの原付バイクで通ったあの道のり。暑い時も寒い時も毎日通ったあの道。目で耳で肌で季節を感じながら通ったあの道。今思い出しても妙に心が和み、しみじみとした気持ちになります。あの15分の道のりで時には大声で歌ったり、愚痴を言ったり、又これからの人生について考えてみたりと、その頃の私にとっては大変貴重な瞬間でした。

さて、いざ「就職」という段になって“私は

一体何をやりたいのか”とつき詰めて考えてみても何の答えも出ません。何年も思い続けてきた“教師”への夢が心のどこかにあり、決して消えることがなかったのでしょうか。チューターの先生やその他の先生の親身な御指導により、四年制大学への編入を自分で決めました。決めてからは夢に向かって一直線でした。自分で掲げた目標に向かって、ひたむきに一生懸命頑張れたのは、今考えてもただこの時だけです。自分の人生、生き方について真剣に考え、真剣に悩みました。このことが今の私に人間としての深みを与えていることは確かでしょう。

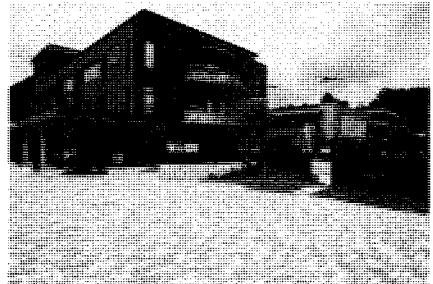
私の短大時代はまさに「自分の生き方を確立する」時期だったと言えると思います。自分の人生とは自分の手で切りひらいていくものだということを経験した中で学びました。尾道短期大学と出会ったことにより「今の私」があるのです。尾道短期大学は、ただ目の前の“就職”や“進学”といった「進路」という狭い枠にとどまらず、その先、その人の「人生」を見越した「生き方」を教えてくださいました。私たちが生きていく上で指針となるものです。目に見えないものですが、決して奪われることのない、ゆるぎないものです。2年の学生生活で、人間としてとても大切な勉強をさせて頂いた気がします。そういう意味でも、尾道短期大学は私の原点です。

案事項について学長と設置者側との折衝がもたれ、本来の正常な形である市長部局（総務部）に所管を戻すことで結論が得られ、1989（平成元）年3月、議会で条例改正が審議可決され、同年4月1日より施行された。

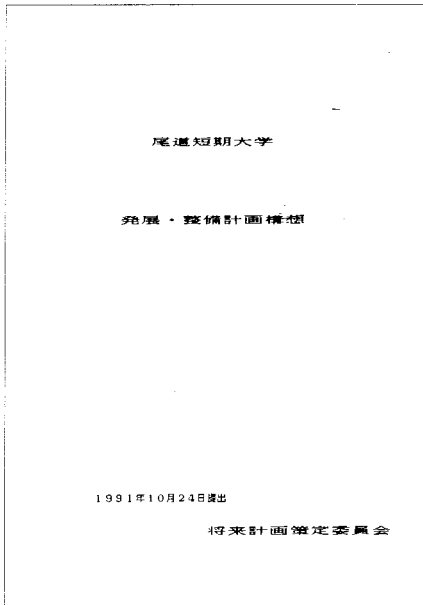
信岡学長は温厚円満な人柄であったが、使命感に燃えた信念の人でもあった。設置者を動かし文部省をはじめ関係諸官庁と粘り強い折衝を繰り返し、厳しい諸々の障害を乗り越えて学科増設を成し遂げ、短大の歴史に新しい扉を開いた功績は高く評価されよう。さらに、企画から施設の完工まで実務面で文字通り献身的な努力を傾注し、この学科増設を成功に導いた吉原学生部長と光谷室長の功劳も、ここに明記しておかなければならない。特に光谷室長は宿病をかかえながらも奮励し、功成った直後ついに力尽き、病の床に臥して間もなく不帰の客となった。まことに痛恨のきわみであった。短大発展のために尽瘁したその功績は永く記憶にとどめられるべきである。

信岡学長の任期満了を控え規程に従って前年の1988年7月に「学長候補者推薦委員会」（白神、吉原、森山、亀山、住田）が選出された。同推薦委員会は信岡学長に候補推薦を申し入れたが、学科増設という一つの目標が達せられたこと、年齢も若くもう一度研究生活に戻りたいことなどの理由から推薦辞退を表明したため、心情を推察し白神良昭教授を推薦し、同年12月15日の教授会で当選、1989年4月1日付けで第7代学長に就任した。

白神良昭学長は福井大学工学部の名誉教授、電気工学が専攻の工学博士で、すでに述べたように経営情報学科初代学科長として1988年4月より本学に赴任した。発足まもない同学科を他の既設二科と調和を図りながら軌道に乗せ育成発展させていったその統率力は、鷹揚な人柄と相まって学長としてふさわしい人であった。大学入学適齢者の受験者人口は1992年をピークとしてその後は一転減少に転ずるまさに試練の時期を迎えようとしていた。氏は、そうした状況を視野に入れながら、ハード・ソフト両面における質的整備充実に意を用い、より魅力的な大学づくりに専念した。前学長時代に設置された「情報処理センター運営委



新しくなったキャンパス



尾道短期大学「発展・整備計画構想」(1991年10月24日)

員会」(1988年4月設置)や「造成地等土地利用計画委員会」(同上)の議論を踏まえながら、全学的な情報処理教育の効果的な実用化を図る一方、キャンパスのアメニティ化に積極的に取り組んだ。

現在、本学のシンボルの一つとなっているネオ・バロック風デザインの優雅な正門と、そこから図書館正面入口までの直線コースのインターロッキング舗装のプロムナードが1990年2月にできあがり、キャンパスの風景は様相を一新した。また、拡張されたグラウンド内に本格的な美しいテニスコート4面が完成した(1992年)。いわゆる「大学の冬の時代」の到来に備え、1989年「広報委員会」を設置して本学の広報活動を活発化するとともに、入試制度の改革にも取り組み、1993年度より市内に限定していた推薦制度を全国に拡大し、人数枠も大幅に引き上げた(第2部第4章入試制度の項参照)。

1990年5月17日、「将来計画策定委員会」(委員長・森山茂)が発足し、新たな将来構想の議論を経て1991年10月24日、教授会でその構想「尾道短期大学発展・整備計画構想」を発表し承認された。その内容は「将来的発展のための構想」と「将来的発展のための基盤整備として必要な現在の施設・組織の改善」の二本柱から成り、2001年度を目途に四年制大学への改組を目指して組織的な行動を展開しつつ、それに並行する形で、その目標達成のための基盤整備として、現在の短期大学の施設・組織の改善に努力することを謳っている。そして後者の施設・組織の改善計画については、施設・整備委員会に委ねるとしている。また本構想推進の過程において、1996年度末に中間的に計画の見直しを行う旨も明記している。この「構想」は同年12月、設置者側にも呈示され、その実現に対する理解と行動を求めた。設置者側も「四年制大学設置研究会」を組織研究し設置要項の検討に入ったが、立ちふさがる壁はやはり財源であった。しかし、これによって21世紀を睨んだ本学の進むべき方向とその道筋は明確化された。

1992年の白神学長の任期満了に際し、前年の6月18日に選出された「学長候補者推薦委員会」(信岡・森山・亀山・前原・稲福)は、白神を再び学長候補者として推薦したい旨を申し出たが辞退されたので、森山茂教授を推薦した。

1992年12月17日の教授会で同教授が当選、1993年4月1日付けをもって第8代学長に就任した。

## 4 短期大学の新たなる展開

森山は、白神学長の任期中、学生部長を務め、近い将来に到来すると予測された、いわゆる「大学の冬の時代」に

《寄稿》

### 私の短大生活

経営情報学科第6回卒業（1995年）

板井 恵

私は尾道短期大学に入学し、尾道に住むようになってからもう2年が過ぎました。この2年間で、私は学業もそうですが、人間的にも成長したと自分では実感しています。

私は短大生活での生きがい求めて、学友会執行部に入りました。これが今までの自分から脱皮したかった私の第一歩でした。

私は少し時期はずれの7月に入りました。その頃はちょうど「緑湖祭」の準備が始まったぐらいで、何もわからない私は先輩に言われた事だけを忠実に実行していました。でも、それではいけないと思い、自分で考え、行動するようになりました。これがきっかけで私は自分で自分に自信が持てるようになり、他人に対して自分の意見を主張できるようになりました。

2年になり、私は会計に就任しました。

本当に突然のことだったので、最初はとても戸惑いました。でも、やりがいのある仕事だったので、すぐに気もちなおしがばろうと思いました。実際に1年間会計をしてきて思うことは、至らない点は多かったけれども、とても満足していることです。

満足感と言えば、やはり2年の時の「第49回緑湖祭」です。例年とは違った活気のあるものにしようと、各学科の生徒にも協力を求め、早くから準備を開始しました。また、過去に例のなかった尾道市内での街頭PR活動

やTV出演、新聞の取材などの広報活動を中心に活動しました。イベントも企画の段階から綿密に話し合いをし、時には本気で言い合いをするほどでした。そのおかげで大成功でした。当日は多くの人に来てくれて、とてもうれしかったです。私は裏方に専念していましたが、当日、突然カラオケ大会第三部の司会をすることになりました。とても緊張したけれど、司会者が突然歌ってしまうという前代未聞のことをしたら、とてもリラックスして司会を楽しむことができました。最後のファイヤーストームでは、感激のあまり泣いてしまいました。

このように私の短大生活は執行部の活動が中心でしたが、執行部に所属していたおかげで学生の時にしかできないことを数多く経験することができました。

短大生活は、人によって違いはあると思います。私のようにサークル活動にがんばる人、アルバイトにがんばる人など。でも、たった2年しかない短大生活を有意義に楽しく、後悔することのないように過ごすのが大切だと思います。

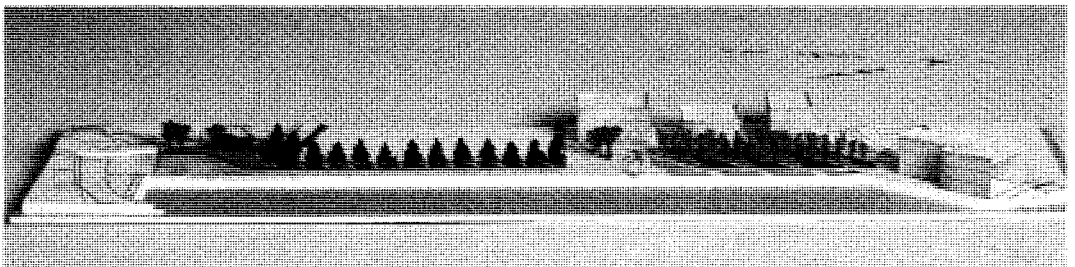
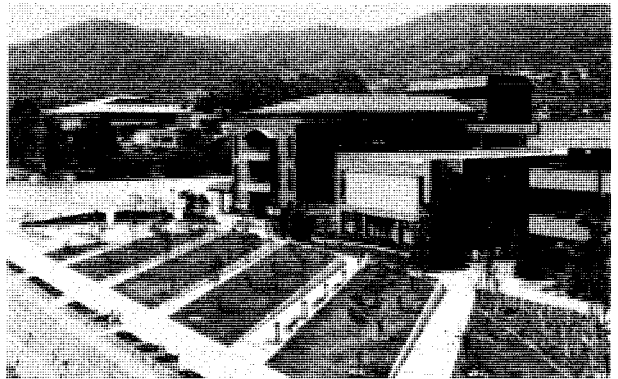
私はこの2年間は一生の宝物だと思います。

また、経営情報学科では、コンピュータ言語を学び、プログラムを組むという専門的な勉強や経営社会学という企業の経営に密接した勉強をすることができました。このように、今まで経験したことのない貴重な体験をこの経営情報学科ですることができました。

対処するために、さまざまな施策を立案し、その実現に向けて裏方としての努力を続けていたが、学長に就任すると、自らが中心となってまとめ上げた「尾道短期大学発展・整備計画構想」の実現と、1991年に公布された短期大学新設置基準に対応する大学づくりに、精力的な活動を開始した。それについて、現在までの成果を挙げておく。

### (1) ランド・スケープ計画(キャンパス整備計画)

経営情報学科増設の際に埋め立てられた造成地の整備計画が、施設・備品委員会によって「レイクサイド緑の丘キャンパス」として纏められ、正門入口から水源池に沿って図書館までの1万3200㎡を、「入口広場ゾーン」「湖畔プロムナードゾーン」「中心広場ゾーン」「湖畔広場ゾーン」に区分し整備することが、1993年12月16日の教授会において承認された。その第一期工事として、「中心広場ゾーン」と「湖畔広場ゾーン」が、尾道出身の著名な造園家である戸田芳樹氏の設計・管理によって1993年1月に着工され、1994年6月末に完成した。その事業費の3500万円は、後援会が負担した。尾道らしさをイメージしたヨットの帆やミカンの木、波形の鉄板などが水源池の水面に映える美しい



「レイクサイド緑の丘キャンパス」全体予想図

景観を描き出し、学生や教職員の憩いの場として親しまれている。

なお、他のゾーンについては、同じ戸田氏の設計・管理によって、1996年5月には完成の予定である。

## (2) 学生会館の建設

学生の福利厚生施設の一つとして、学生会館は大学生活になくてはならないものである。本学には、その施設に相当するものとしては、学生ホール（学生食堂）・談話室と課外教室の二つがあったが、次第に老朽化したため、新世代の若い感性にふさわしい総合的な機能を有する施設の要望が急激に強まり、学生会館建設の機運が生じた。前述の「発展・整備計画構想」の中においても、C棟学舎の延長増築とともに、学生会館の早期実現が重要な施策として挙げられていた。こうした趨勢から、後援会の一部費用負担の申し出もあり、学生会館の建設が実現することになった。1994年6月に着工、既設の学生食堂・談話室と課外教室を撤去し、その跡地に斬新なデザインによる鉄筋コンクリート造2階建、1階617.29㎡、2階593.46㎡、延床面積1210.75㎡の学生会館が建設された。1995年秋に完成し、9月19日に市長、公立短期大学協会副会長をはじめ200名にのぼる来賓の列席を得て、盛大な開館式と祝賀会が、体育館と学生会館において挙行された。工事費は4億2922万7000円であった。

## (3) 総合調査報告書制度の導入

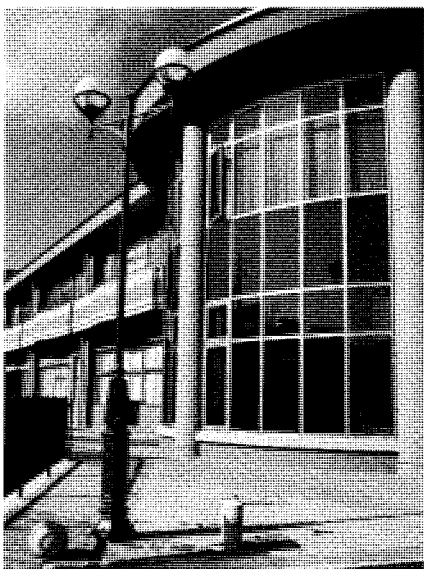
1991年5月、大学審議会は、文部大臣の諮問に対して、大学教育の高度化・個性化・活性化等のための具体案を「大学設置基準要綱」として答申した（第2部第5章1 一般教育・教職課程の項参照）。それは、近年ますます高度化・多様化している社会に即応して、大学が独自の個性を発揮できるように、カリキュラムの編成に関して大学に大幅な自由を認めようとするものであったが、同時にその結果については、大学自身が責任を負うべきものとして、教育研究活動の状況について、大学自らが点検し評価を行うよう求めたものであった。短期大学についても、同年2月の同審議会答申「短期大学の改善について」の中で、自己点検・自



中心広場ゾーン



湖畔広場ゾーン



学生会館

己評価の必要性、実施方法、評価項目、点検・評価結果の活用等について提言し、各大学がそれぞれの実情に応じて自己点検・評価の体制を整え、それを実施するように要求している。その答申を受けて1991年7月1日、「短期大学設置基準の一部改正省令」が公布された。

こうした文部省の省令改正に応じて、本学でも白神学長時代から検討を始めていたが、本学においては将来の発展充実を図るための資料を整えるという観点から、「総合調査」という形に対応することとし、1993年3月1日、「総合調査委員会」が設置され、同年6月3日に同委員会のまとめた規程案が教授会において承認され、1994年度から「総合調査報告書」として実施されることとなった。内容的には、前年度の各部局・各委員会・各学科の活動状況、課題、次年度への改善の方向、および教員各自の教育研究の実績・社会活動の状況などを総合調査委員会に報告し、委員会は、それをまとめて学長に提出するとともに、教授会においてその概要を報告し説明することになっている。「自己点検・自己評価」の導入は、日本の大学全体の趨勢となりつつあるが、「総合調査報告書」は、この流れに本学独自の形に対応しようとするものである。今後、それを基盤とする「自己点検・自己評価」へのより効果的な取り組みとその活用の方策が課題として残されている。

#### (4) カリキュラムの改善等

就任以来、森山が積極的に取り組もうとしたことに、カリキュラムの改善がある。個性的で魅力的な本学の教育を実現するために、本学の教育内容を見直し、一般教育科目と専門教育科目のあり方について検討し、その改善を目指そうとするものである。

大学は、いま、きわめて厳しい時代に入りつつある。大学入学適齢者人口の急激な減少、バブル経済の崩壊後の景気低迷による財政的な窮迫、社会のニーズに対応した相次ぐ大学の新設・増設に伴う大学間の競争の激化、女子の四年制大学志向の増加等の状況に対処して、本学の存在価値を高めるために、魅力的なキャンパスの整備とともに情報化・国際化など、社会・文化の急速で多様な進歩に即応する個性的なカリキュラムの採用がきわめて重要な課題とし



オープンキャンパス実施の様子

て早急な改善が求められている。現在のところ、まだ部分的な改善にとどまっているが、全面的なカリキュラムの改革に向けて検討作業が継続中である。

また、その他、1995年にはオープンキャンパスが実施されるなど、積極的な広報活動や入試制度の改善等の「大学の冬の時代」に対処する諸施策が学内で真剣に論議され、実行に移されつつある。

こうした動向のなかで、1993年6月3日「創立記念事業準備委員会」が発足し、1996年7月1日の創立50周年に向けて、記念事業の計画とその準備を開始した。本『50年史』も、その記念事業の一つとして企画されたものである。敗戦直後の廃墟と混迷の時代に誕生し、多くの先達が茨の道を拓き築いてきた、誇りに満ちた半世紀の歴史を振り返り辿ることによって、現在の試練を克服し、さらなる前進発展を続けるための大きな力とすることを期するものである。



**Open Campus**

Onomichi Junior College

**大学見学会**

9月10日(日) 3回受付  
10:00/13:00/15:00

キャンパスツアー キャンパスをご案内します。  
授業科目の内容をおたずねください。

入試相談 入試の状況をお知らせします。

学生生活相談 アパートや下宿、生活費など、なんでも。

申込みは不要です  
当日、受付係様に  
専任スタッフにお集まりください

**尾道短期大学**

〒742  
尾道市尾道1-1-1 1400  
TEL: 0834-22-3111  
FAX: 0834-22-2460



尾道短期大学の名称  
使用許諾を認めています  
尾道短期大学は、尾道市尾道1-1-1にあり、尾道市立尾道高等学校の敷地内にあります。  
尾道市立尾道高等学校の名称は、尾道市立尾道高等学校の名称として使用されています。

プログラム



## 尾道女専と私

第4代学長

吉田 眞三

尾道短期大学の前身である尾道市立女子専門学校に私が赴任したのは、昭和22年（1947）の春である。あしかけ5年にわたる中国大陸の戦野から帰還して1年も経っていなかった。大学を卒業するやいなや軍隊に徴集されたので、尾道女専は私の人生の最初の就職の場である。施設は惨めなほど貧弱であったが、校内には草創の明るい自由な空気がすべてを包んでいた。生きて今ふりかえるとき、女専はやはり貴くなつかしい。

追憶は美化される、といわれる。しかし、そうした属性を除いても、戦後の飢餓と激動の時代にもかかわらず、女専には生徒と教師の人格との直接の触れ合いがあった。あたたかい信頼感が通っていた。おおらかなのどかさがあった。

校長の頼成一先生は頼山陽の直系の後裔で、一種の品格を備えた温雅なりベラリストであった。三軒家の高台に住む青木茂先生・柿村峻先生と私との3人の間では、ひそかに「うちの孔子さま」と呼んだ。綽名ではなく、ほんとうにそう思い、誇りと尊敬の念をもってそう呼ばせていただいたのである。

いつのことだったか、「最も人間的なこととは、一言でいうとどういうことですか」とお尋ねしたことがあった。「それは『恕』ということです。『恕』とは、自分のことと同じように相手のことを思いやること。あなたが、人にしてほしいことを他人にもしてあげることです。論語にこうあります」といって、論語の原文をその場で紙に書いてくださった。達筆だった。

子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。

子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。

諄々と説明してくださる先生の声はやさしかった。私を慈しんでくださる先生の真情に触れたような気がした。

先輩の先生方にも、みんななんともいえない風格があった。「ほんとうには何も知らない、ということだけは知っている」弱輩者の私に対して、先生方は、完成した権威ある人間としてよりも、永遠に学び続ける者として真摯な態度で接してくださった。回想するとき、熱い感謝と慕わしさでくるめくような思いを禁じえない。

尾道女専はなくなったが、私のなかにいまも若々しく息づいている。

## 尾道短期大学創立50周年を賀す

第5代学長

福田襄之介

此の度尾道短期大学におかれては創立50周年を迎えられるということを伺い、ますますご発展をされていることをまずお祝い申し上げます。

私が迎えられて学長に就任したのは、昭和56年4月からで、1期4カ年、昭和60年3月までだった。烏兔忽忽と言うか4カ年では何する暇もなく、やっと大学の実情が解るか解らないかでもう辞めるのであるから、何も出来ず申し訳なかったと思っている。私が就任する時、吉田学長から、尾短を四年制にするのが教授会の希望だからよろしく願いするというのであった。私はこの短大を四年制にするにはどうしたらよいかと、まずこの課題を熱心に検討してみることにした。

最初に、経済的な問題であるが、尾短は尾道市立であるから経済的なことは市に仰げばよいと思った。ところがどっこい、市には大学を援助するお金は全くないのである。国からいただく交付税も、大学の出費がかさむからというので下さる交付税であるにもかかわらず、大学用には一切使わないのである。交付税法というのを調べてみると、他に流用してもよいことになっているのには驚いた。子供の奨学金を親が使っているみたいになっている。学校の施設を建てるのもいちいち学生から集めてやるようになっていくことを知った。私が就任した時にはまだ図書館の支払が残っていた。だから何もできない。体育館を建てることにしたが、これも私が辞める頃にやっとお金ができたと思う。こういうわけで四年制にするには土地が規定の面積よりも狭い。建物を建てる経費はない。教員の方々は全員審査を受け直さなければならない。それを嫌がる教師も居る。四年制昇格は必ずしも全教員の総意でないこともわかってきた。いまだにもって四年制になっていないところを見ると、これには難問題を沢山かかえている。しかし私は今でも思っている。四年制にするのは今がチャンスだと。世の情勢は四年制志向が洋溢している。大学の発展は市の発展をもたらす。どんどん四年制の大学ができつつある。市がかんでいる大学は割合スムーズに昇格させてくれる。尾道市は万難を排して今、四年制にすべきであることを改めて提言して、祝辞としたい。

## 開学50周年に寄せて

名誉教授

野上 久人

尾道短期大学が開学50周年を迎える。誠にお目出度い限りである。

私が尾道短期大学に来たのは、昭和27年11月である。そして昭和48年に定年退職するまで足掛け21年である。この間私は病気のため1年間休んで療養したりした。秋の一日、ホームルームで好きな処を訪ねて遊んだりして楽しむ事も出来た。

昭和37年、大学が長江町の仮学舎から久山田（今の学舎）へ移る地鎮祭の日、バスが久山田の水源池に落ちて多くの人が怪我をした。この時、田中学長（後に病で死亡）、吉田眞三先生、井上強先生、櫛本功先生は特にひどく、学生のひどかった数名の者と市民病院に入られた。私も左脚にひびが入ったので、ギブスをしてもらって家で休んだ。少し夏休みを早くしてもらったので諸先生と療養にはげむ事ができた。この事故で多くの人が怪我に苦しんだが、このために死んだ人は一人もなく不幸中の幸いであった。

久山田に移ってからは環境もよく、勉学に運動に存分に活躍できた。学生も大部分、久山田に下宿していたようである。この間、就職は国文科は多く小学校に、経済科は一般に公務員その他の職についた。国文科を出て校長や教頭になって活躍している者も多いと聞く。これは経済科も同じである。淳朴で真面目な学風が好まれたのであろう。そして経済科は特に立命館大学に進む者が多く、国文科は都留文科大学へ進んだ。私の受けもった国文科でも、一人の男性は都留文科大学を出て山梨の或る高校に勤めているし、女性の一人は同大学を出て広島に帰って中学校に勤めている。

図書も大分多くなった事だし、二年を四年にして尾道大学としてはどうであろうか。増員して人件費がかさむということでもあろうが、四年にすれば、やはりそれだけのことは十分あると思うのである。

## 思い出

名誉教授

築山 福文

『尾道短期大学50年史』に何か寄稿するようにとの御依頼を頂きましたのですが、私は昭和26年4月から勤めさせて頂き、52年3月に退職いたしました、もう20年近くにもなろうとしており、当時の事は殆ど忘却の彼方に押し流されてしまいました。不確かな記憶を何とか呼び起こしまして、思い出を綴ってみました。

私が参りましたのは、前年に開学していた尾道短大に経済科が増設され、職員の増員があった時でした。学校は長江小学校の少し北を東に折れて、路地を50m程上った所にありました。尾道南高等学校と共同生活（昼は大学、夜は高校）でした。古い木造2階建学舎1棟に、国文科1年、2年、経済科1年の3学級が学ぶ総員200名余りの学校でした。

私は在任中、教務課に関係する事が多かったのですが、その為入学試験や卒業関係の仕事で忙しく動きまわった事がよく思い出されます。試験問題を作成委員の先生方から頂き、謄写版印刷して何枚かずつ綴り合わせ問題を作っていました。原紙を書くことは大変熟練のいる事ですが、非常にうまい先生が2人居られまして、誠にすばらしい出来映えでした。当時尾道には謄写版印刷の業者で非常にうまい業者が1人居りましたが、その人に較べても少しも遜色がありませんでした。そして又、それらを印刷する事務員の方でうまい人が2人居られまして、我々でしたら沢山刷っていますと原紙がたるんだり破れたりするのですが、1枚の原紙で300枚も400枚も、しかも1人で手際よく刷っておられまして全く感心の至りでした。久山田に移ってからは学生定員が増大し受験生も激増して、学内で印刷することは無理となり、試験場も学内だけでは足りなくなるなど、入学試験は学内総動員の大変な行事でした。試験問題を学外で印刷することは色々と不都合な事が起こりやすく、苦勞することも多くありまして、結局また学内で印刷することになりましたが、関係される先生方は大変な御苦勞だったと思います。又新入生を過不及なく入学させるという事もなかなか気苦勞の多い事でした。合格通知を出しましても相等数の入学辞退がありますから、辞退者の様子を見ながら追加入学を通知し、入学式の日迄に丁度よい数にするわけですが、過不及なくという事はなかなか気苦勞の多い事でした。予定の字数を少し超過しそうですから擱筆する事にしまして、尾道短期大学の益々の御発展をお祈り申し上げます。

## 創設時代の功労者

名誉教授

帯賀 一男

尾道短大が創立50周年を迎えることをおよろこびします。私にとっては、職業的に故郷の感があるので、ここから永遠の発展を祈りたい。尾道南高の借家で仕事を始めた頃は何もないままの開学だった。10余年後の久山田移転時でさえ、学校の求めた施設水準は「不可欠最低限」であった。それを回顧すると、現在の姿を見て無量の感がある。

いま、創設当初の貧弱な財政事情のもと、市の僅かな支出を受けて、献身的な努力で学校の礎を築きあげた功労者として、八木寛及び田中稲穂両氏の姿が浮かぶ。

八木先生は、私の大学時代の1年先輩で、同じ草野球のチームメイトではあったが、私にとっては頭の上がない大きな存在であった。先生は、誕生時の2代の学長の下で、20年の長きにわたり、陰になっての事実上の頭脳であり、心臓であった。創設時特有の大きな苦難を越えて、卓抜な洞察力・実行力で、いわば月足らずで生まれた嬰兒をよく育ててこられた。教員給料を国家公務員並みにという、今日からすると当然であっても当時としては難しい約束を市からとりつけるなど、本学運営の基礎を次々と短期間に固められた。

田中先生は、第2代学長として長期にわたりよくこの虚弱児を成長させられた。温厚篤実な性格とそれまでに培った見識によって、何度となく襲来した内外からの危機を切り抜け、円滑に本学を運営してくださった。それを知るわれわれは、よく庇護し激励してくださるという感謝の念を抱きながら楽しく働くことができた。

50周年を迎えるとき、私には両氏の像が大きくクローズアップされる。

## 憂しと見し世ぞ今は恋しき

名誉教授

富田 忠雄

昭和32年、私は前職を辞して郷里尾道に帰り、地元の短大の職に就いた。当時の日本は、戦後の混乱・貧困からしだいに抜け出していたが、わが短大は、前身の女専創立以来すでに10年余を経ているのに、いまだにみずからの学舎が無く、夜間定時制高校の昼間の教室を借りて授業を行うという耐乏生活を、なお続けていたのである。

昭和36年、ようやく久山田の現在地に自前の学舎を建設する計画が具体化して、創立記念日である7月1日を選んで起工式が行われる運びとなった。当日朝、学長以下職員の大半と学生代表者たちで満員のバスは、一路久山田に向け門田貯水池畔の屈折路にさしかかった。その時、突然前方から疾走して来るオートバイを左に避けようとして運転を誤り、アッという間もなく車体を回転させながら転落、池底の土砂の上に仰向けの状態となってやっと停止した。たまたまこの年の梅雨期は異常な日照り続きで、池は完全に干上がっていたため、水没による惨禍だけは免れた。多数の重軽傷者が病院に運び込まれたが、死者が一人も出なかったのは、せめてもの幸運というべきであろうか。

このアクシデントを乗り越えて建設工事は進められ、翌年春に、長年の悲願であった新学舎落成の日を迎えることができた。ここに尾道短大は、未来への期待を込めた新しい第一歩を踏み出したのである。あたかもタイミングよく、日本経済はやがて高度成長の波に乗り、さらに女子進学率が全国的に逐年急上昇するといった追い風にも恵まれて、その後の短大は確実に発展の軌道を進み、評価を高めていくことになる。

ところで今年は、私にとって定年退職後ちょうど10年目になる。赴任後数年間に経験した思い出は、はるか遠くに過ぎ去った自分史の一コマにすぎない。それにもかかわらず、あの貧しく不便であった「憂しと見」えるはずの一時期のあれこれが、以後の長い歳月にわたる短大生活でのさまざまな出来事以上に、意外なほど鮮やかに、そのうえあたかも懐かしまれる記憶であるかのように見えてくるのはどうしたことであろうか。

## 我が青春の長江時代

名誉教授

森 清

学制改革で昭和25年に女専が短大となり、国文科が第1回の卒業生を送った直後の27年4月に本学に赴任した。赴任して印象深く感じたことの一つは、学内の雰囲気やケに明るく、開学期特有の活気と熱気が充満していたことであつた。敗戦後の日本の経済に明るさが兆しつつあつた勢もあろう。が、それだけではあるまい。やむなく進学を逸していた、向学心に燃えた有望な青年が数多く入学していたことにある。(それが証拠に50年経つた今、当時の卒業生が各地の官界や教育界などで重要な地位を占め、活躍している。)それに、青二才の私を除けば40歳前後の、人格、学識に優れた経験豊かな先生が揃つていて、全学一丸となつて新しい学園の創造に燃えていたのである。

当時は学生数も1学年定員120名で、文字どおりに「手作りの教育」が行われた。学生との接触を重んずる「ホームルーム制」や「個人指導」もその一端で、とりわけ「個人指導」では、夜遅くまで居残つて熱心に指導されていた先生のお姿が今も目に焼きついている。私も諸先生につられて、若き日の情熱を英語の授業に捧げたつもりである。本意でないが、大学の方針で組分けし、座席指定して、毎週単語の試験を課し、スパルタ式に鍛えたことを今懐かしく回想する。

当時は、又、就職難で学生の就職斡旋には苦勞した。経済科学生の売り込みには、田中学長自らが旧制山口高商時代のツテを頼つて東奔西走し、教職志望者には八木教授(当時)が高師、文理大の人脈を頼つて、売り込みに腐心されたことは特筆に値する事である。勿論、直接指導に当たつた教務・学生課の諸先生のお骨折りは想像に絶するものがあつた。先生達も夏休みに手分けして就職開拓に出向いたものだ。私も故郷の愛媛に出掛けたり、近い所では、福山市や府中市周辺の企業を自転車やバイクで駆け巡つたりした。或る夏、芦品郡の或る会社で社長に居留守を使われたことには閉口した。

戦中派でフォークダンスすらできない私はダンスに誘われ困つたり、酒を飲んだり、夜どおし語りあかしたこともあつた。全てが懐かしく思い出される。確かに、長江時代に私の青春はあつた。私はそれを誇りにする。青春を共にした卒業生の皆さんも、あの良き時代を私同様に誇りをもって想起して貰いたいと思う次第である。

## あの頃のこと

劇作家・短期大学国文科第1回卒業（1952年）

高橋 玄洋

短大に浪人して入った者はそうたくさんはいないだろう。私は忠海高校を卒業し、1年ぶらぶらと遊んでから、このまま遊び癖がついてしまったら大変だという親の心配から短大国文科に入った。押し込められたという方が当たっているだろう。

しかし、入ってみるとなかなか楽しい2年間だった気がする。

学舎はまだ長江の古い木造の時代で、わが家は学校のすぐ上にあり、鐘が鳴ってから駆け出しても間にあう距離である。その代わり、ずる休みをしても学舎の窓から見えてしまうのだから、休むに休めなくて困った。

授業の方は国文1クラスだけだったし、生徒の数に比べて教授陣はベテランの先生方が大ぜい揃っていたから、その内容はかなりのものだったのではなからうか。その後進んだ早大の日本文学科よりは間違いなく充実していたと思う。学生が少ない分、先生方との交流も濃密で、振り返ってみて、日本でも珍しい寺子屋式教育の最後の場ではなかったかと思う。ただ、私たち学生はおよそほんくらで、勉強などには縁の薄い連中ばかりだったから、先生方はさぞ苦勞なされたことだろう。

もう45年も前のことで、記憶も定かでない部分が多いのだが、強く印象に残っていることが二つある。

その一つは、頼成一学長が亡くなられた日のことだ。夏休みに入るか入らないかという頃で、全校あげて比婆の道後山へ登り一泊する予定の日だった。やっとの思いで頂上へたどりつき山小屋へ倒れ込むように入ると、学長の訃報が先回りして待っていた。当時、私は学生会（といってもクラス会だが）の会長をしていたので、相談の結果、代表として吉田先生とともにすぐに下山することになった。今考えても若かったものだと思う。早朝尾道を出て夜遅くには尾道へ帰っていたのだ。そんなわけで、私の道後山は郭公をひと声聞くために登ったようなものだった。

もう一つは、演劇部をつくって、長江の小学校を借りて三島由紀夫の「火宅」を公演したことだ。怖さを知らぬから出来たことだが、それが起縁で一生の仕事になってしまったのだから、世の中わからぬものである。

先年、紫綬褒章を受けた時、日経新聞の副社長から祝電をもらった。先に社長から受け取っていたので、おかしいなと思い、よく読んでみると、1年の時に机を並べていた梶田君だとわかった。あの頃の学生もそうほんくらばかりでもなかったのかも知れない。



## 母校を想うところ

尾道市助役・経済科第8回卒業（1960年）

若住 久吾

今年4月桜の咲く頃、久山田に赴く機会がありました。長い坂道を登りきったら湖畔の桜は満開で、その間から見える向こうには、赤レンガ造りの建物群が目に入りました。それが我が母校尾道短期大学のキャンパスでした。

これまで市行政に係わる者として折々のことに関心を抱いていたところではありますが、かくも立派になっていようとはの感がしました。少し車を進めて正門にさしかかりましたが、そこには、かねて学長はじめ関係者で協議をしたことのある立派な門扉が立ってしまして、なんだか心強い気分になりました。

かく申す小生たちは昭和33年入学で、長江2丁目に学舎がありました。木造2階建、旧明德商業学校が使用されていたものであり、既に相当古びたものでした。

入学式に当時の学長、田中稲穂先生が「本学で真理の探究を」と話されたことを今でも記憶しております。2年後の卒業のとき、その田中学長から、市内の優秀な会社に就職を勧められました。その会社は販売部門を分離して商事会社を発足されたばかりで、勤務地も大阪市と聞かされ、はたと困惑しました。何故なら、年老いた父母を残して営業担当として自由に頑張れる自信がなかったからであります。と同時に、現在の市役所を勧めてくれる人もあったからです。かくして、この時をもって自分の職業選択は「公務労働者」として決まったわけであります。

母校は間もなく新キャンパスが久山田町へ移転することとなり、協賛預金や簡易保険加入などの支援依頼などがあり、母校のことは知る機会がありました。経営情報学科の増設が進みますます嬉しく思っております。また、当市役所にも卒業生が数多く入所しており、平素より心強く思っております。今般、亀田良一市長が国際芸術学科の増設を指示なさり、小生も補佐する者の一人として既に準備に係わっております。

ともあれ、就学年齢人口の減少傾向のさなかに、大いなる独自性を発揮して公立大学の優等性を今後も守り続けてほしいと期待しております。関係者の発奮を期待するとともに同窓生の一人として、これまで述べたとおりいつも念頭にあるわけでありまして引き続き努力したいと存じております。そのことが母校の限りない発展に結びつくことと確信しております。終わりに各位の努力に感謝し、高等教育界に於ける限りない貢献を祈念しております。

---

## 第2部 変遷と現況編

---

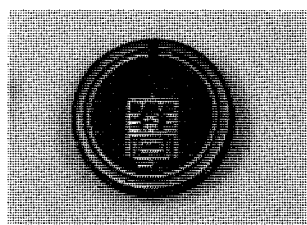
# 第1章 学章と学生歌

## 1 学章

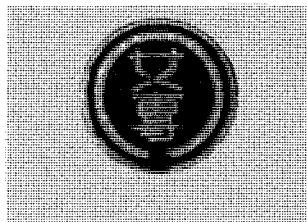
本学の優雅で古典的なデザインの正門前に立つとすぐ目につくのは、頭上の横書き「尾道短期大学」の白金浮き彫りの筆文字と、その中央高く飾られている学章である。それは円形で周囲に尾道市を象徴する2本線をあしらい、中に大学の2文字を浮かせたものである。この学章はC棟正面玄関の最上部東寄りのタイル壁画にも飾られ、正門から登校する学生はプロムナードを歩きながら、ほぼ正面やや左位置に仰ぎ見ることができる。長年親しまれてきた本学のシンボルである。

この学章はもともとバッジ用としてデザインされたもので、1960（昭和35）年、それまで不統一に用いられていたものを学校側で統一制定したものである（写真①）。このデザインそのものの起源は女専のバッジに遡る。まったく同一のデザインで、中の文字が女専に入れ代わっているだけである（写真②）。女専発足と同時にバッジは作られたが、一番最初のもは横4.5cm、縦1cmの細長い形のもので、青銅地に濃淡色のホウロウ引きで、中に尾道女専の頭文字「OGC」を入れたものであった（写真③）。その後、この円形のデザインのもものが作られ、二つが併用されていた。

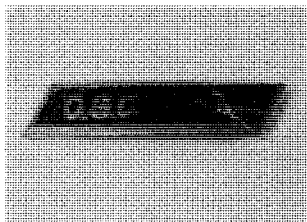
短大時代、男子学生は当時の他の大学生と同様に、黒の詰襟の学生服に角帽を被るのがファッションであった。当時の角帽に用いられた徽章は、尾道の東部海の入口、通称鶴湾の鶴を象ったデザインの上に、大学の文字を入れたものであった（写真④）。しかし、今日大学生の数が全国的に飛躍的に増大し、もはや大学生たることの自負も、母校への帰属意識も次第に薄れていく中で、本学においてもバッジや徽章の使用は、今日ではまず見ることはなくなっている。



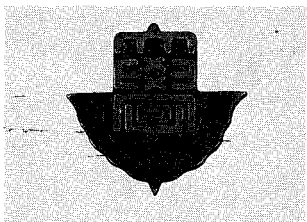
①



②



③



④

## 2 学生歌

本学では校歌にあたるものを学生歌と呼んでいる。校歌の要望は学生の間で早くからあった。歌詞を学生から公募する試みも行われた。学生歌という名称はこうした経過に由来したものであろう。しかし、適切なものがなかったために、1956（昭和31）年11月の女専短大創立10周年記念事業の一つとして、同窓会（当時約800名）が作って学校に寄贈することとなった。美しい母校愛の表れである。作詞はその年の7月の初旬、当時国文科の助教授で歌人としても名高い野上久人氏に委嘱し、作曲は9月に入って広大の高田信一教授に委嘱した。贈呈式は10周年記念行事の第2日、11月3日に同窓会総会の席で在对学生に対し行われた。歌詞と曲譜は次のおりであるが、それ以後今日まで入学式、卒業式はもとより、学生の間でもコーラス部などで愛唱され歌い継がれている。



学生歌贈呈式（創立10周年記念事業）

**お願い**  
九月の幹事会で大学 四万円どうしても諸兄弟のお力を同窓会で捻出してもらいたいので「寄附」という形をとらせのだがという語が出、慎重に審てもらいました。あのことしか議した結果、できるだけ期待に添うよう努力すると決まりました。記念祭の経費が老大な額になるのので同窓会として 母校によい学生歌を 寄附に協力下さい。抱き、若も何等か 喪き、若さ、失いすべきだというのが大方の意見がちな後壁に、心の糧を送るうでした。 明らかな青春と意義ある学生生活をすごさるため、口唇に歌歌低級。同窓会の手持金から今年支出予定の名簿代、会報、通いましょう。そして私たちも信費、総会費を差引くと残高は結構です。宛先は大学内、同窓二万余円。一万円を現金に取る。会事務局。普通郵便使用可。と出資可能額は一万円。あとの

学生歌作成費寄付お願いの記事〈同窓会報第2号 1956(昭和31)年10月20日〉

### 尾道短期大学学生歌

野上久人 作詞

そそりたつ 大宝の嶺に  
暁の 雲かがやくを  
仰ぎ見る われらが集い  
聖き希望は 胸にあふれて

玉の浦 潮騒遠く  
島山を めぐる蒼浪  
見はるかす 若き生命に  
久遠の力 みなぎりわたる

自治の啓示 心にしめて  
学びゆく 道はるかなり  
意気ゆるす 誇りの団樂  
光と愛の 恩寵栄えん

# 尾道短期大学学生歌

創立十周年記念  
尾道短期大学 校

野上久人 作詞  
黒田勝一 作曲

行進曲風に、レレレ(定音記号)→2拍

The first system of the score consists of a vocal line on a single staff and a piano accompaniment on two staves. The vocal line begins with a treble clef and a key signature of one flat. The piano accompaniment starts with a grand staff (treble and bass clefs) and a 2/4 time signature. The music is in a march-like style, as indicated by the tempo marking.

The second system continues the piece. The vocal line includes the following lyrics:   
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら

The third system continues the piece. The vocal line includes the following lyrics:   
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら

The fourth system continues the piece. The vocal line includes the following lyrics:   
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら

The fifth system concludes the piece. The vocal line includes the following lyrics:   
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら  
さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら さくら

## 第2章 学内機構

本学の発足当時（1951年）の事務組織は、尾道短期大学組織図（1）（図4）のとおりであるが、これは、当時の事務分掌規程第1条の「本学に事務部・教務部を置き、事務部に庶務課、会計課、教務部に教務課、補導課、図書課をおく」に基づいている。教務部長の下に教務課長と補導課長と図書課長とが置かれた。教務部長は3課長を統轄し、重ねて事務職員の出納事務をも監督した。それは、当時市から事務長の派遣がなかったため、事務部長を置いて教務部長がこれを兼ねる必要があったからである。教務部長は正式な役名としては1951（昭和26）年4月1日に設定し、1953年4月1日よりこれを補導部長と改称した。その後、事務の簡素化を図ることとなり、同年9月15日をもってこれを廃止した。

以上のほかに、1964年度から厚生課が新たに設けられた。これは、それまで補導課に属していた厚生と奨学の事務とを分立させたもので、学生数の増加による事務量の負担を軽減するためである。その後、1966年4月1日より尾道短期大学組織図（2）（図5）のように整備された。1970年4月1日より機構改革が実施され、課を部に改め、教務課は教務部に、学生課は学生部に、厚生課は厚生部にそれぞれ改められ、図書課長は図書館長に改められた。また、1983年度から事務長は事務局長となった。

1988年4月1日より経営情報学科が増設され、それにもなつて事務組織も尾道短期大学組織図（3）（図6）のように整備された。そして大学運営を円滑に行い、教育・研究活動の成果を上げるために、現在以下に示すような各種の委員会が設置されている。

教務委員会	学生委員会
厚生委員会	図書委員会
規程委員会	広報委員会
施設備品委員会	予算委員会
学生相談委員会	教育実習委員会
人事委員会	情報処理教育運営委員会
将来整備委員会	入試委員会
総合調査委員会	創立記念事業委員会

図4 尾道短期大学組織図 (1)

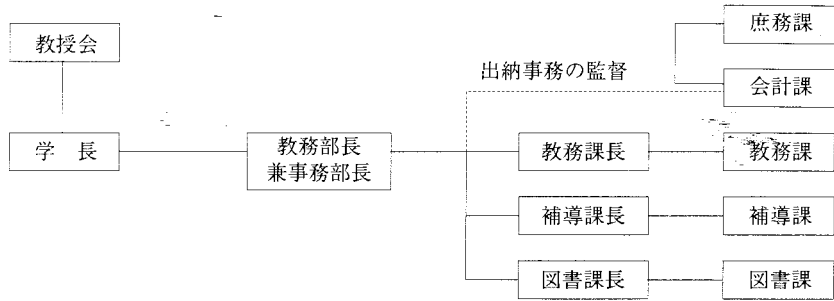


図5 尾道短期大学組織図 (2)

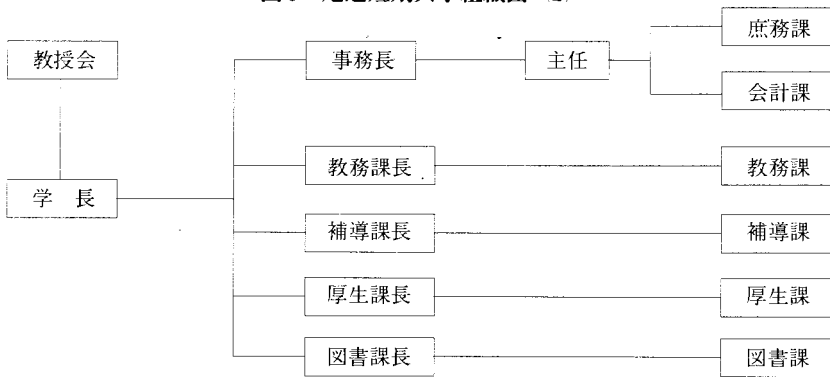
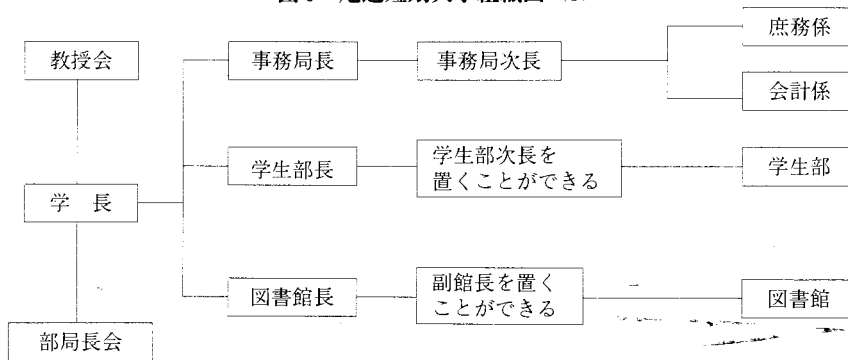


図6 尾道短期大学組織図 (3)



## 第3章 学内諸施設

大学の所在地尾道市久山田町は、市の北西部にあつて、当市の市民生活の源である上下水道の水源池を真中に、四周緑の山に囲まれた静かで美しい文字どおり山紫水明の地である。その四季折々の風景に惹かれ、ハイキング、オリエンテーリング、写生にと、この地を訪れる人は後を絶たない。

当時の関係者たちが、長江町の南校校舎から新天地を求めていくつかの候補の中から特にこの地を選んだ理由の一つに、勉学と思索に最適のこの素晴らしい環境があつたであろうと推測される。

水源池の湖辺は檜やつつじの生えた砂地の空地であつた。この空地を整備し、1961(昭和36)年3月新たな設計になる白亜の学舎が姿を現し、その優美な影を湖面に映し出した。

町民は自宅の植木を更地のキャンパスのあちこちに持ち寄り大学の移転を温かく迎えた。以来35年、施設の整備と拡張は、そのテンポはゆるやかながら着実な前進を遂げてきた。現在の校地総面積は27,868㎡、そこに点在する学舎やその他の主な建物の延床面積は10,470㎡である。その推移は沿革の中でその都度触れてきたとおりであるが、ここで主な学内施設について現況を含めて内容面から捉え直して記しておく。

表2 主な学内施設

棟別	構造	延べ面積 (㎡)	建築年
A棟	R・C造	1954.5	1962年 3月
B棟	R・C造	1758.2	1962年11月
C棟	R・C造	1709.4	1988年 2月21日
図書館	R・C造	987.5	1978年12月21日
クラブ棟	S造	110.2	1962年
体育館	R・C造	1100.5	1986年5月
学生会館	R・C造	1210.7	1995年9月 1日



# 1 図書館

## (1) 短大図書館の歩み

### 〈揺籃期〉

尾道短期大学附属図書館の歴史は、1950（昭和25）年、市立南高校の施設の借用によってようやく開学をみた短期大学国文学舎の一隅を占めるささやかな図書室に始まる。申請中であった経済科増設の認可要件を満たす必要もあり、いっそうの図書の充実が望まれ、同年、研究室・科学実験室充実費を含め合計170万円に及ぶ市費からの補填が行われている。

しかし、当時の図書室はまことに粗末なものであった。そのことは、1951年、経済科第1回入学生を迎えた段階で、収蔵図書数はわずか5000冊程度にすぎなかったことに窺える。これは当時の短大設置基準をкаろうじて満たす冊数であった。

はじめて学舎の別館として正式に図書館が付設されたのは1955年4月下旬のことである。附属図書館の建設計画はすでに1953年1月に立案をみていた。図書購入費を含め総額526万円の経費をもって木造モルタル2階建、延べ54坪（約178.2㎡）の図書館建設が計画され、同1953年から3年計画で資金調達が行われた。具体的には、総額で県費補助200万円、市費186万円を得、不足分140万円は通学区町村および保護者に寄付を求めることとなった。県費・市費・寄付金を含め資金獲得の目標額を初年度・次年度173万円、最終年度180万円とし、年々その達成を目指す方法がとられた。天野彦三郎尾道市長・高橋武教育長（当時）の熱心な懇請によって近隣市町村から支援を仰ぎ、また、保護者からの多額の寄付を得て、ようやく1954年10月に至って図書館建設が開始され、翌年4月に完成をみたのである。

新図書館の収蔵図書数は、1956年の時点で1万冊を超えていたとみられる。同年4月からは一般市民に利用を開放する措置もとられた。

### 〈飛躍期〉

だが、短大図書館の幼年時代は容易に終わらなかった。短期大学が久山田に移転し、はじめて独立の学舎を得たのは1962年のことである。しかし、最初の入学生を迎えた同年4月の時点では、まだA棟・B棟事務室しか完成をみておらず、図書館の設置が予定されていたB棟東学舎は予算の関係で建設が見送られていた。そのため、同年ようやく1万5000冊弱にまで達していた蔵書は閲覧室とともにA棟1階のわずか2室に仮住まいを余儀なくされたのである。

B棟東学舎は総工費1707万円をかけ、翌1963年5月末にようやく落成をみた。鉄筋コンクリート2階建、延べ228坪で、階上は大講義室とし、図書館は階下に当てることになっていた。水源池を臨む閲覧室と1階・地階の2層からなる書庫が完成したのは1965年3月のことであった。

このB棟東側学舎に設置された図書館に限界があることは開設当時から明らかなことであった。書庫の図書収容能力は公称では4万5000冊であったが、現実にはスペースにゆとりがなく、

施設も倉庫の域を出ないものであった。閲覧室も階上に大講義室があるため静寂を確保することは望めなかった。このB棟の図書館時代、蔵書数は年々1000冊を超えるペースで増え続け、1967年の2万冊余から、1976年には3万2000冊弱に達していた。かくして、将来を見通した十分な収蔵能力をもつ書庫を備え、静かでゆとりのある閲覧室を付設し、しかも図書館職員が機能的に図書館業務に当たれる事務スペースが確保された図書館、学舎から独立した附属図書館の一刻も早い建設が切望されることとなった。

新図書館（現附属図書館）の建設計画が具体化したのは、1976年11月のことである。敷地の確保が課題であったが、予定の敷地約900㎡のうち市水道部用地624㎡を年間1㎡当たり40円の使用料をもって借り受けることが市当局から認可された。これを受けて学内では建設計画の検討を開始し、森山茂図書館長（当時）が広島女子大学など5大学の附属図書館を視察した。図書委員会・教授会の論議を経て、正式に設計図の確定をみたのは1977年12月のことであった。

附属図書館は、1978年4月に着工、同年12月に完成をみた。鉄筋コンクリート2階建（1階478㎡、2階509㎡）、総工費は1億2700万円（うち内装・電気関係1700万円）であった。建設資金は後援会積立金と4年3カ月の借入金で賄い、金利を市が負担する方法がとられた。学生入学時に3万円の施設充実費を徴収し、これを返済金の財源に当てた。市費の負担を利子補給のみにとどめ、後援会が借入金で施設を建設し、完成後、市に寄付するという市立短大としてはいささか変則的なこの施設建設法は、この後、体育館の建設時にも踏襲されることとなった。

### 〈成熟期〉

完成をみた附属図書館は、おそらく今もなお、短期大学附属図書館として全国でも有数の施設を誇るものである。1階に新聞雑誌閲覧室・書籍閲覧室・事務室、2階に会議室・図書館長室・教官閲覧室・参考図書室などを備え、4層からなる書庫を付設したその施設は現在もなお十分に機能している。

新図書館の開館は1979年3月のことであった。一応満足の得られる施設を得た短大附属図書館のこの後の歩みは、もっぱら収蔵図書を充実し、図書館運営機構の整備を目指す方向で展開された。

蔵書数の増加には目覚ましいものがあった。すなわち、開館当時の蔵書数は3万6100余冊であったが、1984年には5万冊、1988年には6万冊、1991年には7万冊、そして1995年には遂に8万冊を超えたのである。このような蔵書数の急速な増加は1988年の経営情報学科の新設に負うところ大なるものがあった。前年、新学科新設を申請したのにもなって、1500冊余の必要図書が一挙に購入されたのをはじめ、学科新設による教員数、学生数の増加は年々の図書購入数に著しい増加をもたらした。経営情報学科の新設によって、これまで手薄であったコンピュータ・情報科学、経営学関連の図書が充実したことは、たえず時代の知的要求に応じていくことが求められる短大図書館にとって実に望ましいことであった。

一方、収蔵図書の充実とは別の方向でも図られた。すでにB棟旧図書館時代から実施されていた学生図書制度が定着した。学生の希望、教員の推薦によって教養図書を充実させ、学生に親しみやすい図書館を目指そうとしたこの試みは、今、見直しの時を迎えているが、収蔵図書に

表3 図書館統計

年度	図 書 (冊)			貸出冊数 (館外)	資 料 費 予 算 (千円)		
	和 書	洋 書	計		市 費	後 援 会 費	学 生 図 書 費
1974	27,500	2,991	30,491	20,807	1,600	1,480	
1979	34,258	3,354	37,612	11,350	2,566	3,500	1,864
1984	48,929	4,080	53,009	15,703	3,000	5,000	1,117
1989	62,615	5,334	67,949	9,890	4,000	6,120	1,707
1994	76,660	5,561	82,414	13,136	8,000	8,500	1,856

広がりと余裕を加える上で間違いなく一定の役割を果たした。

図書館運営のあり方にも変化があった。1989年、図書の閲覧方式が閉架式から開架式に変更された。短大図書館では、1954年にはじめて閉架式を採用して以来、参考図書、学生図書など一部開架式を採り入れながらも、基本的には閉架による閲覧方式を維持してきた。これは蔵書の整序と保全を優先したためであった。だが、閉架式の閲覧には、最大の図書館利用者である学生が図書との自由な出会いを得にくいという難点があった。そして何よりも、図書館職員に激務を要求した。年々増加する図書の整理事務に追われ、しかも、経営情報学科増設にともなって学生数が増加した状況の下で、限られた職員数でなお閉架式の閲覧方式を維持することは不可能なことであった。今後も図書管理・検索システムの進歩を見据えた有効な閲覧方式を模索し続ける姿勢が求められることになるであろう。

さて、近年における急速なコンピュータ化の波は、わが短大の図書館業務にも及ぶこととなった。まず、図書館のOA化の第一歩は、1990年のパソコン図書管理システム(リブロス)の導入によって行われた。このシステムの蔵書適及能力は低く、当初よりあくまでも試験的導入の意味をもつものであった。試験期間を経て、本格的なオフィスコンピュータLICSUが導入されたのは、3年後の1993(平成5)年のことであった。同年、市立図書館とのオンライン化が実施され、翌1994年には、念願であった学術情報センターとの接続が実現した。これによって、分類登録業務の迅速化が図られたのはもとより、全国的な領域で図書検索を行うことが可能になったのである。

## (2) 図書館の歩みを支えた人々

短大附属図書館の現在は過去の幾多の人々の努力によって築き上げられたものである。歴代学長の尽力はもとより、過去21代にわたる図書館長の貢献があった。在任期間など詳細は本書巻末所収の役職一覧に委ねることとして、ここではその氏名を列記するにとどめよう。現在まで図書館長を務めた教員は、高橋賢陳・青木茂・野上久人・速水敏・大塚光信・森清・梅田恵三・園田猛二郎・築山福文・亀山泰紀・森山茂・前原雅文・小倉正恒・勝矢倫生・和佐谷維昭・信岡巽・平松携の17氏に上るが、このうち、森清・園田猛二郎・森山茂・和佐谷維昭の4氏は

それぞれ2代にわたって重責を全うした。歴代図書館長の見識と図書委員教員の時宜にかなった判断の積み重ねが今日の図書館の方向を決定づけたのである。

だが、短大附属図書館の歴史の最も重要な部分を支えたのは図書館職員の書物への尽きることのない愛着と職務への献身であった。1950年、短大図書館が南高校のささやかな図書室で産声を上げてから現在まで、短大図書業務に携わった職員は実に19名を数える。そのうち特に美原素子は21年、福田芳江は17年、また、郷坪美恵子は11年の長きにわたって短大図書館職員として職務に献身した。

また、学生および保護者の短大図書館への多大な支援も看過すべきではない。短大がまだ独立した図書館をもたなかった1954年7月、当時、経済科に在籍していた一学生は学生新聞に図書館建設を希望する熱い思いを綴っている（P45掲載の尾道大学新聞 1954（昭和29）年7月1日を参照）。知的環境の充実を求めるその真摯な叫びは、時を超えて今もなお胸を打つものがある。また、現図書館建設以後においても、学生図書の閲覧業務は、相当期間、学生図書委員の無償の奉仕に支えられていた。図書館の現在は、このような学生たちの熱意と誠意に導かれ築き上げられたものであった。歴代後援会役員をはじめ、保護者の物心両面にわたる図書館への支援の意義の大きさは申し述べるまでもないことである。

### (3) 未来への飛翔

おそらく今後、短大図書館はいつそうOA化を追求する方向に進んでいくであろう。この側面における当面の課題は、貸出業務のOA化と学内LANの構築である。図書貸出の簡便化は図書館利用を促進し、学内LANの実現は、居ながらにして瞬時に文献検索を行うことを可能にして、教員の研究環境の向上に直結する。現代テクノロジーの進歩は短大図書館の未来を彩るものである。

だが、OA化・ネットワーク化だけが短大図書館の未来を開く鍵ではあるまい。今後、いかにすれば特色ある大学図書館として成長し得るか、まず、この点が問われねばならない。年々わが国で刊行される図書は近年5万冊を超えと言われ、これにビデオ・CD・LDなどのAVメディア、さらにCD-ROM・電子ブックなどの電子メディアを加えれば、おそらくそれに倍する数の情報メディアが毎年世に送り出されている。諸外国の書籍等を含めれば、その数は無数としか表現し得ない。これらからどのような方向性をもって何を選択していくか、短大図書館の未来は、その選択眼にかかっているとすべきである。むろん、本学が国文・経済・経営情報学の3科をもつ以上、関連専門書の継続的充実がまず図られねばならない。しかし、それと同時に、独自性のある図書あるいはメディアの収集を行い、一短大附属図書館の域を超えて広く学外からも利用を求められ得る図書館へ進化を遂げる努力もまた必要であろう。

知の変貌が語られて久しい。古い知の枠組みが壊れ去り、これに代わる新たな体系を模索する時代が続いているのだという。あるいは、個の認識を縛る一切の枷かぎが外された無限の可能性を許す時代を迎えたのだとも言われる。附属図書館の未来は、幾多の人々の努力によって集積された過去の遺産を守り伝えるとともに、そこに新たな知の所産を付加していく営みなくしてあり得ないものである。短大図書館の可能性は教員・職員・学生の今後における不断の知的研鑽と熱意に委ねられていると言えよう。

## 2 体育館及びグラウンド

### (1) 体育館

開学以来長年にわたって体育館建設が望まれていた。その待望の体育館が1986(昭和61)年5月、久山田小学校の跡地のテニスコートを撤去した土地に建設された。それまで体育館がないため体育実技及び保健体育講義の授業では、晴天時は体育実技、雨天時は保健体育講義をしていた。いわゆる雨降り講義であった。体育館建設により体育実技と保健体育講義は区別され、雨降り保健体育講義は解消された。

体育館は鉄骨造り、面積は1100.5㎡である。内部を見ると競技場(800㎡)、ステージ、玄関ホール、管理室、器具室、更衣室、シャワー室、部室等を備えている。

入学式及び卒業式等の大学行事は、B棟の大講義室(2号教室)において執り行っていたが、教室からモダンな体育館に移り行われるようになった。学生の自治的活動、とりわけスポーツ系の活動の拠点ともなっている。

### (2) グラウンド

長江学舎時代にはグラウンドはなく不便であった。体育実技の授業は、千光寺グラウンドまでバレーボール等の用具を抱えながら徒歩で行っていた。学舎から離れているため、体育実技の授業は時間割の4限目に組まれていた。1962年7月の久山田移転時にグラウンドが使用できるようになった。しかし狭く、秋の運動会はこれまで使用していた千光寺グラウンドで開催した。グラウンド面積は約6500㎡で十分な広さとはいえず、1963年の秋に南側に拡張してはじめて運動会を学内で開催した。1965年1月、さらにグラウンド南側の小川にヒューム管を埋め道路ぎわまで拡張した。グラウンド面積はおよそ1万㎡となった。

1984年、久山田小学校跡地にテニスコートを4面整備した。1986年には久山田小学校跡地のテニスコートを撤去して、そこに体育館を建設した。

1988年の経営情報学科増設のための敷地拡張にともない、キャンパス整備の関係でグラウンド面積は約1万㎡から約9000㎡と縮小になり、現在に至っている。また1992年、グラウンド内に約3000㎡のテニスコート4面(人工芝コート2面、クレーコート2面)を整備して今日に及んでいる。

## 3 課外教室・学生食堂から学生会館へ

1995(平成7)年9月19日、尾道短期大学学生会館の開館式・祝賀会が挙行された。横尾壮英公短協副会長・木曾勇尾道市議会議長をはじめ数多くの来賓の出席を得、亀田良一尾道市長・短大教職員一同が参加して厳粛なうちにも華やかな開館式が執り行われ、その後、完成した学生会館内の食堂でなごやかな祝宴の時がもたれた。祝宴のテーブルには、新たな学内施設の完

成を喜ぶ教職員とそれを心から祝う来賓諸氏の顔々があった。

そして、なによりも学生会館の完成・開館は本学学生が心待ちにしていたものであった。食堂・ラウンジなど、これまで必ずしも十全とはいえない施設の下でキャンパスライフを送らざるを得なかった学生たちの永年の念願は、ここによく実現をみたのである。同1995年10月2日、新たな業者を得てオープンした学生食堂は、学生食堂では全国でも珍しいバイキングコースの昼食を楽しむ学生たちで満ち溢れ、笑顔と喜びで沸き返った。

## （1）課外教室・学生食堂の日々

学生会館の前身、学生ホールが建設されたのは1963年のことであった。前年における短大の久山田への移転後、同窓会の援助によって建設が進められ、翌64年2月に完成した。鉄骨造り平屋建て、述べ面積86坪（約283.8㎡）のまことに粗末な建物であった。建設当初から学生食堂に利用することが予定されていたが、同時に着工されるはずであったB棟東学舎の建設が遅れたため、その完成をみる



旧学生食堂

同64年5月末まで大講義室に転用され、実際に食堂が開かれたのは9月であった。それ以後、1995年に学生会館内に食堂が開設されるまで、実に足掛け22年間にわたってこの場に短大学生食堂の歴史が刻み続けられた。建設当初、この食堂施設は学生ホールの名称で出発したが、必ずしもその名称は定着せず、一般には学生食堂の名で通用した。

一方、課外教室は1969年4月に完成をみた。木造瓦葺き和風2階建、21畳・20畳・6畳の和室を備えたこの施設は、茶道部・箏曲部などのクラブ活動、また、チューター・ゼミの会合・茶話会などに利用された。小規模ながら玄関先に和風庭園・飛び石を配置したこの施設には、独特の柔らかな雰囲気と落ち着いた趣があり、教員と学生、また学生同士が心を開いて語り合える場を提供した。

また、同じく1969年9月には、学生ホールの増築も行われた。わずか87㎡の小部屋であったが、食堂に隣接するこの部屋にはステレオとソファが設置され、学生の会合やレコードコンサートの場として「談話室」と呼ばれ親しまれた。

建設当時においても、学生食堂・課外教室・談話室はいずれも決して豪華とはいえない施設であった。しかし、そこには当時の短大学生たちのまぎれもない青春の一コマがあった。現在ほど多彩な食材が食卓を賑わすことがなかった時代、学生食堂は学生・教職員に相応の昼食の楽しさを提供した。また、今ほど豊富なレジャーに恵まれていなかった当時、課外教室・談話室は放課後の学生たちの活発な部活動・サークル活動の場となり、教員と学生、学生間の尽きることのない語らいの場となった。

## (2) 学生会館の時代へ

学生食堂・課外教室・談話室の老朽化が目立ち、それらの諸施設が時代遅れのものとなったことが誰の目にも明らかなものとなり、新たな施設を建設する必要性が叫ばれるようになったのは、おそらく1990年代を迎えた頃からであったろう。特に学生食堂に対する学生の不満は強く、施設の刷新、メニューの改善を望む声が年を追うごとに高まった。

学生会館建設のことがはじめて教授会の組上に載せられたのは、1993年5月のことである。本来、本学の諸施設建設計画については、学生会館建設よりもC棟の延長を優先する方向で学内の意見の一致をみていた。しかし、学生会館建設に際して4億円以上の市費の援助が得られること、学生が直接利用する施設であるため後援会の支援が得られやすいことなど諸々の条件が考慮され、C棟延長によって学内の教育・研究施設の充実を図る方向はひとまず先送りにし、まず学生の福利厚生施設の改善を急ぐこととなった。こうして業者に学生会館の設計を委託し、示された会館内・外観設計プランに教授会における活発な議論を踏まえた修正を加えた上で正式に設計図が確定したのは、1993年10月28日のことであった。

学生会館の建設は1994年8月に開始され、1年間の工事期間を経て翌年8月末に完成をみた。鉄筋コンクリート2階建、1階617.29㎡、2階593.46㎡、延べ床面積1210.75㎡で、工事費に4億2922万円余りを要した。時計塔をもち、1・2階前面円形部分総ガラス張りの斬新な外観は学舎諸施設のなかでもひととき目を引くものである。室内施設としては、1階に学生食堂（厨房を付設）・ミーティングルーム、2階に学生ラウンジ・多目的教室（AV教室）・課外教室4室（和室2室）などを備え、室内装飾・照明・調度にも明るさと清新さを重視した十分な配慮が加えられた。

学生会館の完成・開館は短大キャンパスの歴史に新しい一ページを付け加えるものである。学生会館は、今後とも学生のキャンパスライフの拠点として広く親しまれ、利用されていくであろう。クラブ・サークルの活動の場として、音楽・映像から感動を得る場として、学友の輪を広げ、しかも他者を知る交流の場として、学生会館のもつ可能性は無限に開かれている。もちろん、学生会館は学習の場であり、教職員と学生間の人格のふれあいの場でもある。この新しい諸施設から得られるやすらぎとふれあいを活力源として、本学における教育・研究・学習・職務にいつそうの充実がもたらされることが期待される。

## 4 情報処理実習室

本学における機器を用いた情報処理の実習は、1984（昭和59）年、33・34号室においてNECのポケットコンピュータPC8201を用いたBASICプログラミングの講座を経済科に開設したのが最初である。1987年からは13号教室にNECのパソコンPC9801VM21を50台設置し、PCゼミというCAIシステムのもとで経済科においてBASIC、FORTRANおよびCOBOLのプログラミングを行うとともに、ワープロソフト「一太郎」を用いた全学におけるワープロ実習に利用するようになった。1988年に経営情報学科が開設された際に、C3教室にIBMの汎用機

9370と端末用にパソコン67台を設置し、MUSICというCAIシステムのもとで経営情報学科および経済科においてCOBOLおよびFORTRANプログラミング実習に利用するようになった。これにもない、13号教室のパソコンは全科対象のワープロ実習専用利用されることとなった。1990年には13号教室のパソコンを新機種PC9801EX4へと入れ替えた。1993年にはC3教室の汎用機を9221へ、端末用パソコンも新機種へと入れ替えるとともに、これらをトークンリングによるLANで接続した。同時に13号教室のパソコンを新機種PC9801BA/U2へと入れ替え現在に至っている。



# 第4章 入試制度

## 1 一般入試・推薦入試

本学の歴史は1962（昭和37）年、久山田移転を境に大きく変貌したと考えられるが、このことは入試をめぐる状況についても同様である。移転前においては、志願者の大部分が近隣の出身者であって、人数も少なく、本学が望む学生数を確保することすら容易ではない年が続いた。このことは、例えば1957年度入試において受験者167名全員を合格させたことに端的に表れている。この難局に対処する入試制度として、一方ではできるだけ多くの選択科目を設けて受験生の便宜を図り、他方では無限定の推薦入学制度を併用したが、人数の上では、後者の方がはるかに大きな比重を占めていた。ちなみに、久山田移転の前年である1961年度入試でこれを見ると、試験科目は、国語（甲）、社会（社会・日本史・世界史・人文地理）、数学（数学Ⅰ・簿記）、理科（物理・化学・生物）、外国語（英語）の5教科11科目から3教科3科目選択であり、他方、推薦試験による入学者の全入学者に占める割合は73%であった。

久山田移転後、次第に本学に対する評価が高まったことに加えて、全国的な進学者増という客観情勢の変化が相まって、志願者の地域及び人数が共に急激に拡大した。この変化に対応して、1966年度から推薦入試を廃止するとともに、選択科目を順次縮小し、1970年度以降は国語（現代国語及び古典Ⅰ乙）を必須とし、社会（日本史）、数学（数学Ⅰ）、外国語（英語）から2教科2科目を選択することとなった。その後10年余り、志願状況はほぼ安定的傾向を示し、入試制度もほとんど変更をみなかった。

ところで、当時の志願者増は、主として県外からの志願者増によるものであって、それ自体はより広範な社会からの評価を反映したものであった。他面、地域住民の志願者数はほぼ横ばいで推移し（70年度以降の10年間についてみると、志願者総数のうち県内校・市内校の占める割合は、それぞれ20数%・3%である）、その構成比率の低下と地域住民の入学難ないし入学実数減という結果をもたらした。こうした状況と、市が本学を設置した趣旨等にかんがみ、1982年度から、入学定員の約5%につき尾道市内居住者を対象とした推薦入試制度を設けた。また同時に、入試科目については、従前の国語に加えて外国語を必須とし、数学・社会のいずれかを選択することとした。

1979年度のいわゆる共通一次試験の実施以降、本学の志願者数は減少の一途をたどるが、18歳人口の増加とともに漸増し、1988年度の経営情報学科増設を経て1991年度までは増加したが、その後は再度減少傾向にある。こうした状況の中で、1993年以降の18歳人口の激減期、いわゆる「大学の冬の時代」への対応を迫られているが、その一環として、従来の推薦入試制度を拡大し、全国を対象に、定員の約30%（うち市内対象約10%）を公募する新たな推薦入試を1993年度から実施した。これは、従前の狭い枠にとらわれず視野を広げることによって多くの

地域から優れた学生を確保すると同時に、熱意ある学生が数多く入学することによる大学の活性化へつながるものであり、その点で積極的に評価することができるであろう。

推薦入試の拡大にもかかわらず、一般入試志願者の減少によって、志願者数は全体として激減した。この現実を前に検討がなされ、1996年度から国文科において国語を必須とし、他の3科目から1科目を選択するといういわゆる2科目入試を実施することとした。これによって受験者数の増加が期待されるが、同時にこのことは従来の全学科同一科目による入試という方式に代わり、個々の学科ごとにその教育内容に応じた入試科目を設定するという、学科の特性を尊重する考え方の具体化でもあり、その意味でも注目されるところである。

なお、これまでの志願者等の状況について、正確な数字が確認できる1960年度以降について表4にまとめた。参照していただければ幸いである。

## 2 外国人入試

外国人学生については、1988（昭和63）年度から、外国人学生規定によって、聴講生を主として学生を受け入れてきたが（これまでの聴講生数5名）、国際交流の活発化にともない、本科生としての受け入れを希望する外国人が増えてきた。選考方法は各科で異なるが、書類診査・面接と小論文ないし学力テストによって行われている。なお、1992年度からこれまでに6名の外国人が本科生として入学している（ちなみに志願者数は18名）。

表4 入試データ (カッコ内は推薦入試の内訳)

年度	出願者数	受験者数	合格者数	入学者数	備 考
1960	305 (204)	287 (201)	280 (196)		61.2.2在籍 (L60 + E175)
1961	358 (236)	342 (230)	339 (228)	288 (211)	
1962	499 (314)	475 (310)	462 (302)	379 (274)	久山田に移転
1963	751 (435)	669 (430)	512 (327)	434 (280)	入学定員120→300(L40→100・E80→200)
1964	823 (455)	750 (439)	552 (331)	426 (278)	
1965	1974 (975)	1579 (884)	556 (341)	451 (295)	
1966	1445	1317	560	428	推薦入試廃止
1967	1630	1490	739	504	
1968	1724	1569	794	486	
1969	1931	1775	681	411	
1970	1763	1532	766	432	
1971	2086	1840	861	436	
1972	2326	2022	847	439	
1973	2297	2035	893	502	
1974	2496	2231	972	487	
1975	2561	1961	889	425	
1976	2224	1936	827	442	
1977	2551	2217	845	414	
1978	2546	2070	810	417	
1979	2024	1547	761	429	共通一次発足
1980	1892	1467	767	470	
1981	1788	1402	613	420	
1982	1598 (18)	1255 (18)	612 (18)	376 (18)	推薦入試復活 (市内対象・5%)
1983	1515 (20)	1102 (20)	605 (13)	399 (13)	
1984	1539 (21)	1126 (21)	651 (20)	405 (20)	
1985	1349 (30)	1014 (30)	617 (21)	394 (21)	
1986	1758 (23)	1363 (23)	734 (23)	411 (23)	
1987	1609 (35)	1496 (35)	860 (35)	415 (35)	
1988	2136 (41)	1942 (41)	965 (41)	517 (41)	経営情報学科増設(100)・入学定員300→400
1989	2541 (29)	2234 (24)	1047 (21)	526 (21)	
1990	2551 (41)	2276 (41)	1108 (25)	522 (25)	
1991	2574 (23)	2242 (23)	1227 (23)	525 (23)	
1992	2296 (25)	2000 (25)	1239 (25)	495 (25)	
1993	1840 (290)	1656 (284)	1037 (146)	514 (146)	推薦入試拡大(30% →うち市内10%)
1994	1860 (377)	1643 (303)	1041 (181)	586 (180)	
1995	1554 (264)	1406 (262)	870 (180)	431 (179)	
1996	1401 (224)	1191 (222)	845 (172)	504 (171)	国文科2科目入試実施

# 第5章 教育・研究

## 1 一般教育・教職課程

### 一般教育

戦後の高等教育を特徴づけたものの一つは、大学の教育課程への一般教育の導入である。これは戦前の高等教育があまりに専門的、職業的色彩が強く、ヒューマニズムと自由探求の精神的基調に欠け、偏狭な専門化に陥ったことに対する反省から生まれたものである。したがって一般教育が目指すところは、幅広く豊かな教養を与えることによって、専門化し、細分化した知識の統合調和を図り、高い視野に立って総合的、自主的な価値判断のできる心身共に健全な全人的な人間を育成することであるということができよう。

本学もまた、開学当初からこうした一般教育の理念に基づき、専門分野との関連において基礎学力の涵養に努めると共に、時代の進展につれてますます複雑化、多様化する社会に柔軟に対応できる思考力、判断力を有する真に人間性豊かな人材育成のために、様々な工夫と努力を重ねて今日に至っている。

1949（昭和24）年大学設置審議会決定の短大設置基準において、一般教育は人文（外国語を含む）・社会・自然の3系列からそれぞれ4単位以上、合計20単位以上の取得が卒業要件と定められた。本学も発足当初、この基準に基づいて教育と科目の配当の両面から充実が図られたことはいうまでもない。しかし1953年には設置基準が改正され、外国語が一般教育課程から分離され、3系列からそれぞれ4単位以上、合計12単位以上と定められた。

これに伴い本学でも同様の措置をとり、同年より外国語を一般教育から外し、外国語については別に4単位以上の取得を要件とした。1975年には上記基準が再度改正され、卒業要件としての一般教育科目の最低単位数はさらに減少して、人文・社会・自然の3系列にこだわることなく全体で8単位にまで引き下げられた。このような度重なる基準の改正によって、短大における一般教育の理念、目標、意義などに関し、その都度問題が提起され検討を迫られてきた。しかし、急速に発展してきた今日の高度な技術と情報化の時代においてこそ、人文・社会・自然とバランスよく学び、人間の普遍的なあり方を深く問い思考していく一般教育の意義はますます重要性を増しているとの全学共通の認識の下、本学においては、3系列からそれぞれ4単位以上という卒業要件は基準改正後もそのまま変更することなく現在にまで至っている。

### (1) 科目の変遷

開設初年度の国文科（1950）、経済科（1951）のそれぞれの一般教育の3系列の科目配当は下記のとおりであった。

#### ● 国文科

人文科学：哲学、倫理学、外国語

社会科学：歴史、法学、経済学、家政学

自然科学：数学、物理学、化学

● 経済科

人文科学：哲学、倫理学、文学、外国語

社会科学：歴史、法学、経済学

自然科学：数学、物理学、化学

その後の3系列の科目の変遷は下記のとおりである。(括弧内の数字は開設年度期間)

● 国文科

家政学(社会・1950-1980)、音楽(人文・1952-1983)、情報処理(自然・1995-1996)、日本国憲法(社会・1990-現在)

● 経済科

書道(人文・1982-1991)

● 国文科・経済科共通

心理学(人文・1954-現在)、家庭科学(自然・1954-1964)、社会学(社会・1973-現在)、生活化学(自然・1973-1987)、総合講座(社会・人文・1975-1986)、自然科学史(自然・1977のみ)、生物学(自然・1981-現在)、科学史(自然・1991-現在)、情報科学(自然・1988-1990)

注1)「外国語」(経・国)は1953年より一般教育科目から独立。

2)「法学」(経・国)が1976年より「法学(日本国憲法)」と名称変更。

3)「総合講座」(経・国)は一つのテーマに対し、学問の異なる分野の教員3、4名がそれぞれ専門の立場から論ずるというユニークな試みとして始められた。中断しながらも1986年まで続いた。取り上げられたテーマは次のようなものであった。

1975・1976年度	「ヒューマニズム」(人文)
1977年度	「自然と人間」(人文)
1979年度	「愛の表現」(人文)
1980年度	「社会と人間」(社会)
1981年度	「われわれと宗教」(人文)
1986年度	「豊かな生活」(社会)

経営情報学科新設時(1988年)における同学科の一般教育科目の3系列の各科目構成は、人文と社会の2系列はその年度の既設2科(国文・経済)のそれと同じで、自然系列についてのみ異なり、数学、物理学、化学、工学となっている。

## (2) 教員の変遷

幸い本学には前身の女専があり、短大昇格後の一般教育に相応する教員は比較的揃っていたといえよう。

女専の専任教員であった三吉トモ（就任年度1947・家政学）、青木茂（同1947・歴史）、高橋賢陳（同1948・哲学・倫理学）、鳥居フミエ（同1949・家政学）、大上一男（1950・心理学）が短大昇格と共に1950年4月より一般教育科目の専任教員として継続就任した。

その後'50年4月、山本実（物理学）、'51年4月、築山福文（数学・統計学）が就任。同年8月、三吉トモが退職。'62年8月、山本が死亡退職。'63年10月、青木が退職。'67年4月、永金知也（化学）が就任。'68年4月、頼祺一（日本歴史）が就任するが翌年の3月転出。後任として同年4月、黒川正宏（日本史）が就任。'72年4月、高橋が退職し後任として同年4月和佐谷維昭（哲学・倫理学）が就任。'73年2月、黒川が死亡退職。'75年4月、山口（旧姓鳥居）が退職。'77年3月、築山と帯賀（旧姓大上）が退職。同年4月福原省三（心理学）が就任。'88年6月永金が退職。'89年4月、高木卓司（物理学）が就任した。

'88年の教員免許法の改正により、'90年より和佐谷、福原が教職課程の専任教員に移籍した（教職課程の項参照）。

## (3) 課題

1991年5月、大学審議会は、文部大臣から受けていた諮問「大学等における教育研究の高度化、個性化及び活性化等のための具体的方策について」に対して「大学設置基準要綱」を答申した。同年6月、これに基づいて省令が改正された。この改正要綱いわゆる「大綱化」は一般教育に対しこれまでにない厳しい対応を迫る内容を含んでいる。なぜなら、それは専門科目と一般科目との枠組を廃し、卒業までの一貫したカリキュラムの編成を求めたからである。もちろん一般教育の意味が否定されているわけではない。要綱はそれに関し次のように触れている。「教育課程の編成に当たっては、大学は学部等の専攻に係わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するように適切な配慮をしなければならない」（第6 1、(2)）。

しかし、一般教育がその制度的根拠を失ったことは確かであり、カリキュラムの編成はそれぞれの大学の自主性に委ねられているのである。現在の時点での一般教育の専任は高木1名のみで、他は全て学内の他科の専任教員の兼務、あるいは学外の非常勤講師に依存している。最大で専任6名の時期があったことを考えると大幅な後退である。一般教育の人員枠が次第に専門科目の教員によって取って代われ充当されてきた歴史的経過がここにある。一般教育は専門教育といかなる有機的関連をもちつつ、それ独自の役割を果たしていくべきか、「大綱化」はいままでになく大きな課題を一般教育に突きつけている。

一般教育は学内に、各3系列と外国語、保健体育それぞれの担当者の専任及び兼任教員で組織する一般教育等教官会議を設置し、また中四国一般教育研究協議会にも短大として入会し、一般教育等全般についての情報の交換や研究向上に努めている。現在、一般教育・外国語・保健

体育・教職を中心とする一般教育等担当者会議において「大綱化」に対し、教養ゼミの開設、専門ゼミとの単位の相互乗り入れ、「女性問題」「環境問題」「人権問題」等時代に対応した科目の設置などについて具体的な改革の検討に入っている。

## 〈外国語科目〉

発足当初は一般教育の人文科学系列に属していた外国語は、すでに述べたように1953年の基準改正によって独立した科目として位置づけられた。その際、本学では外国語教育の重要性を考慮して4単位以上の取得を卒業要件として課した。外国語は英語のみを開設していたが、学生

### 《寄稿》

#### 定年を迎えて

国文科第6回卒業（1957年）

元尾道市立吉和小学校長 真継 定男

約40年前、戦後少しゆとりの持てるかと思われる頃、人生の夢と希望を求めて学窓を巣立った。子ども達も、それぞれの道をゆっくりではあるが歩み始め、私も定年を迎えると、やけにあの若い頃（短大時代）が頭に当来する。長江の学舎で学び、グラウンドがないために、体育の時間は約30分かけて千光寺のグラウンドに汗をかきながら登山し授業を受ける。授業が終わって、山頂から尾道水道のパノラマを見ながら帰る時は、とてもすっきりした気分だった想いが残っている。

今こうして、教育の世界に永い間関わらせて頂き、多くの子ども達や保護者との出会いを通して自分自身をふり返る日々である。

社会の激変と教育の世界も無縁ではなく多難であり、すぐそこ迄来た21世紀を生きる子ども達と接していると、色々な想いが胸の中を駆けめぐる。その心の中の一部を披露したい。

三十数年教育の現場にいる者の一人として、良い本を読んだり、良い講演を聴いたりすると、いつも心が洗われる様で、いつもの自分から脱皮した思いがするものである。

子どもを見る目が変わって「小言ばかり言っただけ。長所を見つけてほめてやろう。教師として親として、生き方も反省しなくては」と殊勝な思いにかられるものである。

「子どもは無限の可能性を秘めているものだ。あのエジソンも、学校では、表現は悪いが落ちこぼれだった」というのは 後援会等よく取り上げられる話である。

確かに小学校の時から、出来る子、出来ない子と単純に決めつけることはいけない。

しかし、一人ひとりの顔が違うように、好みや能力は違っているのは事実であろう。親自身が子ども時代にみんな優等生だったはずはなく、運動抜群の人、図画の得意な人、音楽の才能を持った人、手先の器用な人と、それぞれが、今社会の一員となって立派に家庭を作っている。

親としては、それを忘れて、我が子にだけは学力面だけに無限の可能性を期待し、やれ塾だ何だと、詰め込みを始める例がよくあるように見えてならない。

少子化も進み、家の中でゲーム相手に遊ぶ子ども達が増え、金を出せば何でも好きな物が手に入り、社会のルールや集団の中の自分の果たす役目を見うしないかけてはいないだろうか。

卵をだく鳥は、中からヒナがかえるその時に、殻を割って手助けしてやるという。子どもの求めるものをタイミングよく与えるのは親だからこそ出来るのだろうが、今の親達は、まだ十分成長していないヒナを、急いで殻を割って引き出そうとしているように見えてならない。ゆとりの時間は、親や社会の方にこそ必要なのに…と思う昨今である。

からの強い要望もあり1977年より第二外国語としてドイツ語とフランス語の二つを選択科目として開設し、英語を含めて合計4単位を選択必修とした。教員は発足当初は教職担当の八木寛が兼任していたが、1952年4月に森清（英語・文学）が、'66年4月に信岡巽（英語・文学）が就任した。'90年3月に森が退職、後任として同年4月、高垣俊之（英語）が就任した。

いわゆる「大綱化」は外国語もその圏外にあるわけではなく、本学においても外国語教育が今後どうあるべきか、真剣に問い直しを迫られている。クラスの少人数化、「英語会話」、国際化時代に対応するための「外国の大学との交換留学プログラム」等の開設、あるいは「中国語」等アジア関係の外国語科目の開設などが近い将来の課題となってきた。

### 〈保健体育科目〉

本学では開学以来、短期大学設置基準に基づき、保健体育科目（体育関係科目から1961年度

#### 〈寄稿〉

#### 尾道短大とわたし

国文科第10回卒業（1961年）

尾道市立西藤小学校校長 村上 剛造

私が子供の頃、私より小さい子がなついてくるので、子供ってかわいいものだなと思っていた。また、私は歌を歌うのが好きで、学級行事（茶話会など）では、プログラムの中に私の独唱を組んでもらった。高等学校の入学祝いに「自転車を買ってやろう」と両親が言った時、私は「ピアノを習わせてほしい」とたのんで、オルガンを買ってもらった。小さな子供にまじってピアノレッスンを始めた。

高等学校では音楽クラブに入部して、混声合唱を楽しみ、3年間は、あっという間に過ぎ去った。子供が好きなので教師になる道を選んだ。私の町尾道に尾道短期大学があり、中学校国語の教員免許がとれるので、国文科に入学した。

入学してみると、八木寛学長の世話で、玉川大学の通信教育を併せて学習することにより、小学校の教員免許もいただけることがわかった。「やった！これで小学校の教員になれるぞ」と、目の前がパッと明るく開けたうれしさを、今でも忘れることができない。

一人で通信教育を行うのは大変だが、多くの仲間と共に頑張ったので、あまり苦しむこともなかった。レポートも友達と弱点をカ

バーしあいながら修了することができた。

教育実習は、玉川大学附属小学校で行った。当時（1960年・昭和35年）は、まだ汽車だった。煙をモクモクはきながら、シュッシュポッポ、シュッシュポッポ。乗客が多いので、座席には座れず、通路に新聞紙をしいて、そこに横になって18時間以上もゆられながら行った。

教育実習中、子供達から、「12チャンネルで〇〇したでしょう。先生見た？」と、あたりまえのように話しかけられる。昭和35年当時、尾道にはテレビはほとんどの家庭にはなく、とまどい、びっくりした。

無事教育実習を終え、小原学長から、「全人」と書いた色紙をいただき、感激した。今でも我家の一番よく見える所に掲示して、我心を戒めながら小学校教師として勤めている。

また、尾道短期大学では各教授を囲んでのサークルがあり、私は吉田眞三教授、先輩、同僚の温かい愛情、友情に囲まれた中で、文学について、悩み事について話し合い、感性、知識が広まり、深まって行くのを感じ、大変楽しく過ごすことができた。

私の大好きな子供に関わる職につくことができたのは、尾道短期大学のみなさんのおかげと感謝いたしております。



保健体育科目に変更) 講義1単位、実技1単位を開設し、卒業の要件として2単位以上の取得を定めて今日に至っている。それは、健康や運動・スポーツに関する科学的理解(講義)、健康・体力の保持増進、運動欲求の充足、精神的緊張からの解放、好ましい人間関係の醸成、スポーツやレクリエーションの方法・習慣、態度の育成など(以上実習)を目指したものである。しかし、開学当初、南校と同居でグラウンドは狭く、学舎から離れた千光寺公園市民グラウンドを使用するなど多くの困難を抱えていた。1962年、久山田に移転し、グラウンドは確保されたものの、その面積は必ずしも十分とはいえず、体育館もなく授業に様々な支障があった。1986年、体育館が完成し、1988年、経営情報学科増設に伴ってグラウンドは拡張され、その後1991年、人工芝テニスコート2面、クレートニスコート2面も設備された。

専任教員は井上強(体育学)が1950年4月に就任、1977年退職した。その後任として同年4月、平松携(保健体育学)が就任した。

1991年の省令改正、いわゆる「大綱化」は一般教育のみならず保健体育にも改革の対応を迫っている。保健体育科目から健康スポーツ科目への変更やゼミの開講などが今後の課題として検討されている。

## 教職課程

### (1) 経過

本学の教職課程は1948年、女専の国語科の卒業生に対する中等学校教員無試験検定の認可に始まる。引き続き短期大学の国文科、経済科においても、「教職に関する専門科目」を含む教育職員免許法が規定した教科目の必要単位数を取得することによって、中学校教諭、国語(国文科)、及び「職業」(経済科)の2級普通免許状が授与された。これによって教員免許を得た多数の本学出身者が、市内、県内を中心に西日本各地の教育界に活躍の場を得てめざましい実績を上げてきた。しかし、社会の技術革新の進行に応じて1958年、学習指導要領の改正により「職業・家庭科」が「技術・家庭科」に変更され、中学校の現場ではこの移行が1960年から段階的に行われた。そのため「職業」の教員免許状は年々実質無用のものとなり、受講者は減少しほとんど皆無となったため、1984年度をもってこれを廃止した。また「国語」の免許状については、1988年の「教職員免許法及び教育免許法施行規則」の改正によって、これまでの2級普通免許状が2種免許状に改められたのに伴い、本学国文科の教職課程においても再課程認定の必要が生じ、1989年、文部大臣に対して「再課程認定申請書(正規の課程及び聴講生の課程)」を提出し、1990年3月26日にその認定を受けた。

以上二つの免許状とは別に、1956年以来、本学で単位を取得しながら同時に玉川大学の小学校教育課程の通信教育の聴講生として所定の科目を履修することによって小学校教諭の資格を得るという方式が行われた。そして、これによって多数の卒業生が小学校の教育界にも進出し、めざましい実績を上げてきたが、社会情勢の移り変わりとともに1967年度をもって打ち切られた。

## (2) 教員の変遷

1948年7月、八木寛が女専の教育学担当として就任し、引き続き短大で「教育原理」「教育史」「教育実習」を担当した。八木が本学の教育課程で果たした功績は、この小さいスペースでは語り尽くせないほどに大きい。本学が教育界で築いた実績と名声は、ひとえによき教師育成のために注いだ八木の創意と情熱に負うものである。上記の小学校教員の資格取得が可能であったのも、教育者としての八木に対する学外関係者の信頼があればこそであった。1965年4月、八木は学長に就任したが、引き続き上記科目を担当した。そして、玉川大学のスクーリングや教育実習には多忙の中を常に学生に同伴し、身をもって教職の真髄を説き教え教師養成に情熱を傾注した。この方式による小学校教員養成打ち切りの1967年以後も、玉川大学の通信教育部の正科生（従来は聴講生）に本学卒業後尾道短大として集団で編入学し履修するという方法で、なおも多数の人材を小学校に送り出し続けた。1973年4月に八木は退職したが、退職後も玉川の通信生への助言と後援を終生惜しまなかった。

1950年3月帯賀一男が就任し「教育心理学」「職業指導」を担当した。1977年3月、帯賀は退職した。1988年の教職員免許法改正に伴い、'90年一般教育から和佐谷維昭と福原省三が教職課程専任者として移籍し、和佐谷が「教育原理」「教育実習」、福原が「教育心理」「教育実習」をそれぞれ担当し今日に至っている。

## (3) 現況と課題

1960年代に入って小学校の児童数の大幅な減少が始まり、また教員免許状を持った四年制大学の出身者の急増とも相まって、本短大の卒業生の教育界への進出は年を追うごとに狭められ極めて困難な情勢になりつつある。教員志望の学生は、本学卒業後四年制大学への編入をめざし努力しているというのが現在の状況である。

本学が教育界に築いてきた実績と名声は輝かしいものがあり、この伝統をいかに継承し発展させていくかが大きな課題である。

# 2 国文科

## (1) 学科の教育内容

国文科は、国文学・国語学を中心に人文科学の多くの領域にわたって幅広く基礎的な知識を学び、同時に国文学・国語学に関する専門的知識や情操を養成することを目指した学科である。そのような理念に立って、国文科は学生自身の自主的学習態度を育てるために当初から、ゼミナール（演習）形式をとりいれてきた。国語学、古代文学、中世文学、近世文学、近代文学の各分野で、2年間、ゼミナールにおける学習発表によって、調査・分析の方法を身につけ、年度末のレポート作成によってテーマを体系化していく力を養うことができる。さらに、ゼミナールにおける自主的な研究活動の成果を発表する機関誌として、卒業論文を中心にした『国文学

報』を発行し、すでに38号を数えている。また、1971（昭和46）年には、国文科開設20周年を記念して『京大附属図書館蔵 漢書列伝竺挑抄』を刊行した。そのほか、年に一度の学生研究発表会、年間2回の公開講演会を開催し、2年生の希望者を対象とした「万葉旅行」も行っている。これらの行事によって専門教育のみでなく、幅広く情操豊かな人間を育てる教育を目指している。

## (2) 教員の変遷

国文科は、1950（昭和25）年3月10日付けをもって認可され、5月1日に第1回の入学生を迎えた。発足当初からの専任教員は、三ヶ尻浩（国語学）、江藤保定（国文学）、吉田眞三（国文学）のわずか3名であった。すなわち、女子専門学校から継続勤務の方々である。

'51年4月、江藤が転出し、同年11月、野上久人（古代文学・万葉集）が就任した。'56年3月、三ヶ尻が退職し、代わって同年4月、大塚光信（国語学）が就任した。さらに、'65年4月には、中本環（中世文学）が就任した。'67年3月、大塚は転出する。同年4月、岡田統夫（方言学）が就任した。'68年3月、中本が転出し、同年4月、亀山泰紀（中世文学）が就任した。

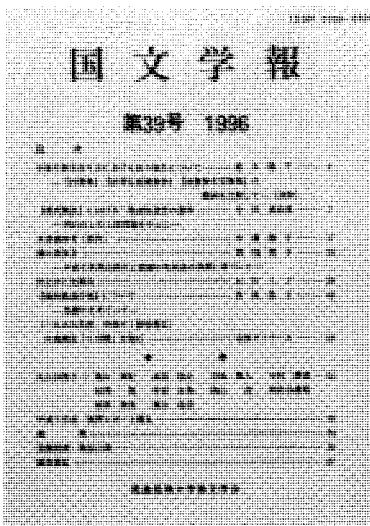
'69年6月、岡田の逝去後、'70年4月、江端義夫（方言学）が就任したが、'73年3月、江端は転出する。

'73年4月、森山茂（中世文学）、坂根俊英（近代文学）が就任した。'74年4月、村田正英（国語学）が就任し、さらに'75年4月には、浜森太郎（近世文学）が就任し、国文科の教員は6名となる。

浜は'77年3月に転出し、'79年4月土谷泰敏（近世文学）が就任した。また、'81年4月には、福田襄之助（中国文学）が学長として就任した。'82年3月、土谷は転出し、同年4月、寺杣雅人（近代文学）が就任した。'83年4月、松永宗二（近世文学）が就任した。'85年3月、福田は退職し、'85年12月、松永が離任した。'86年4月、高橋圭一（近世文学）が就任したが、'89年3月に転出した。'89年4月、中村勝則（近世文学）が就任した。

国文科の専任教員は、発足当初わずか3名であったが、'70年には4名となり、'75年には6名となり現在に至っている。現在、近代文学の担当者が2名いるなど充実しているが、古代文学、方言学、中国文学の担当者はおらず、増員が望まれるところである。

なお、国文科の非常勤講師として長い間勤めていただいた松田芳昭先生のことを最後にふれておく。松田先生は1953年、国文科ができて間もない頃から1994年3月まで（途中、広島大学の仕事の関係で数年の中断もあったが）、ほぼ40年近くにわたって非常勤として来られた。講義科目は「日本文学購読」「日本文学特殊講義」「日本文学概論」等で、その内容は井原西鶴、「古事記」、「万葉集」、近松浄瑠璃、日本文学と風土等、幅広い領域



国文学報 第39号 1996年

にわたっている。

### 3 経済科

#### (1) 学科の教育内容

経済科は、経済学を中心に社会科学の多くの領域にわたって幅広く基礎的知識を学び、変化する経済社会に十分対応できる能力を養成することを目指した学科である。経済学及びその周辺の社会科学系専門科目の講義、演習に重点が置かれているのは当然のことであるが、簿記や

《寄稿》

#### 短大時代の思い出

元尾道市助役・経済科第1回卒業（1953年）

濱中 國秋

尾道短期大学の前進である女子専門学校が創立されてから50周年を迎えるにあたり、卒業生の一人として誠に喜びに耐えません。心からお祝い申し上げます。

振り返ってみますと、本校設立時の昭和21年、久保仮校舎の女専から、長江時代の国文・経済科の短大昇格、そして昭和37年、静かな環境に恵まれた現在の久山田に立派な学舎が新築移転となりました（この間経営情報学科の増設）。こうした学舎の移転新築と時代の変遷に伴い、学生も今では北は北海道、南は沖縄からと、非常に広い地域から多くの学生が集まってくるようになりました。卒業生も、昭和28年は114名（国文38、経済76）でしたが、平成5年には523名（国文124、経済266、情報133）と5倍近く増加しております。

昭和26年当時備後地方には、広大な福山、三原分校を除いて大学はなく、経済科は尾道短期大学にしかありませんでしたので、学生は備後一円から集まってきました。若い講師の先生方より年上で、いろいろ職業を経験してきた学生が相当数おり、80数名の入学者中女性は2名だけでした。講師には全国的に著名な紅陵大学学長・高垣寅次郎（金融論）、神戸大学経済学部教授・坂本弥三郎（経済原論）、同校花戸竜蔵（財政学）、中央大学教授・片山

金章（商法）など尾商出身の諸先生方が多く、各大学でのお忙しい講義をやりくりして、年に何回か来尾くさり集中講義をなされたものでした。尾道駅構内には、まだタクシーは少なく、輪タクや人力車が客待ちをしているような風情もありました。

東京－尾道唯一の交通手段である急行安芸号で20時間近くかけて尾道に着き、駅から短大まで歩いたり、バスで来られ、床に穴が空いている老朽学舎で講義されたのです。常勤の教授、講師の諸先生も学生と年齢差があまりなく、講義や課外活動も活発であったと覚えています。当時の大学の諸状況を思い起こし、今の立派な学舎、図書館、体育館、建築中の学生会館などを目の当たりにする時、文字通り「隔世の感」があります。

今日、尾道短期大学が名実ともに繁栄されたことは学生、卒業生の努力はもとより、市当局、並びに諸先生方と、これを支えてくださった多くの方々のご尽力のたまものと感謝申し上げます。

終わりに臨んで、これからの少子化の傾向や四年制大学への志向の増大等の社会情勢の著しい変化のなかで、わが尾道短大の将来には多くの課題と試練があると思いますが、創立50周年を契機として、これまでに育まれた輝かしい歴史と伝統を礎としながら、本校の益々の充実とさらなる発展に向けて新しい出発点となることを心からお祈りいたします。

情報処理実習のような実務的なものまで幅広い教育内容になっている。

経済科の教育内容を特徴づけるものとして、第一に、少人数教育の重視をあげることができる。具体的には、1967（昭和42）年度から始まった「演習」がある。学生は、担任教官の指導のもと、各自の専門分野をより深く研究し、その成果を8000字程度の小論文にまとめることが義務づけられるが、1968年度以降、各ゼミの代表論文は『経済科研究会報』として集大成されている。さらに、1992年度から開講された「基礎演習」もここにあげることができよう。これは、現在社会に対応する科学的なものの方、考え方を学習することを目指すものであり、同時に2年次の演習の準備段階と位置づけることができる。

教育内容の特徴の第二は、専門教育の重視である。このことを特徴的に示すのが、1988年度

### 《奇稿》

## 尾短を卒業して

経済科第26回卒業（1978年）

桐原 泉（旧姓土井）

“尾道”いつ、何処であつても、この二文字を見つけると私は妙に胸が熱くなる。懐かしい故郷のにおいが、ずうっと向こうから、尾道水道と並んで走る電車に乗って香ってくるような、そんな気がする。そして林芙美子の放浪記を口ずさみたくなる。たった2年の間過ごした町への想いが、どうしてこんなにも穏やかにあふれ出てくるのだろう。それはきっと、私の人生をプラスの方向へと位置付けてくれた大切な町だったからに違いない。

初めて尾道を訪れたのは、受験の日。あの日の尾道水道の風景は今でも脳裏に焼き付いている。久山田行きのバスに乗った。しかしくねくねと坂を登って行くにつけ、どんどん人里から離れてしまい、「たいへんな所に来てしまったのでは……」そんな不安も束の間、目の前に現われたまたしてもすばらしい景色で解消されてしまった。緑の山々、段々畑には色とりどりの屋根、そしてお行儀良く澄ましているかに建っている短大。それらが水源池に浮かんでさざ波になり、“ようこそ”と出迎えてくれたかのようなだった。私はどうしてもここに再び来たいと強く願った。

念願が叶い、親元を離れ寮生活が始まる。三畳一間のお城で将来の夢を描き、友達と夜遅くまで語り合った。コークハイの味も知

り、これが青春の味と感激した。半てんを着てズリッパを履き近所のお店に買物に行く。買物物は大概のところラーメンか食パンか菓子。畦道に腰掛けては笑う。悩むなんてことはなかったのかな。こんぶ屋にかつお屋、皿洗いに進学塾とバイトに汗流し、部活に行つては汗流し、友達と団子になって行つたディスコでも汗流し、何もかもが精一杯の青春だった。

尾道は素朴で、純粋な心をそのままに膨らませてくれて、そしていつも温かく見守っていてくれた。そんな気がします。

40歳を2年後に控えた今、思い巡らす作業があまりにも多くなり、時間に追われて、ついつい忘れ物をしてしまっていたのです。世の中の、人の裏も表も分かりかけ、色々な事を体験する中で、いつしか心までも強張っていました。そうなのです。あの尾短時代に持っていた、ただ純粋で素朴な心だけは、いつになっても決して忘れてはならないのです。今ペンを走らせながら、懐かしい香りと一緒に、何かしら熱いものがふつふつと体の中に甦って来ました。大きな物をも動かせる力になっていくような気がします。

たった2年の間だったけれど、尾短で学び尾道で生活できたことは、これからも私の心の支えとなって、すばらしい人生の展開へとつながっていくことでしょう。

から1991年度まで4年間にわたり実施された「外書講読」である。これは、経済学を中心とする専門科目に関する外書（英語）を輪読することにより、学生に専門的の学問研究の一端に触れる機会を提供しようとするものであった。この「外書講読」は当初の目的を果たし、先に述べた「基礎演習」へと発展的に解消されることになったが、専門教育の重視という教育方針は経済科のカリキュラム全体を流れるものであるとあってよい。

## (2) 教員の変遷（括弧内は主な担当科目。学生便覧等を参照した）

経済科は、国文科設立の翌年、1951年4月に発足した。発足当初の専任教員は、国文科から

### 《寄稿》

#### 久山田の思い出

経済科第27回卒業（1979年）

福山市立金江小学校教諭 山口美穂（旧姓大村）

尾道駅からバスに乗り、栗原町を通り過ぎると一本道。山道を登って登って、やっと久山田のバス停に到着する。水源池を横目で見ながら徒歩で3分程。尾道短大の校門に行き着く。緑に囲まれたのどかな学舎に初めて出会ったのは、19年前になる。

どんな学生生活になるのかと、期待と不安を持っての入学。何歳になっても、一年生は一年生である。私を含め、家から通っている者は、まだよかろうが、四国や九州など、遠くから親元を離れて来ている人にとっては、不安がひとしおではなかっただろう。

そんな不安を解消してくれたのが、チューター制である。20人という少人数のクラス編成で、お互い話し合う機会が多く、担任の先生も、一人一人に細かく対応して下さる。

私たちの担任は、体育の若くて行動力のある平松先生だった。先生は、チューターのまとまりを常に考え、色々と助言をして下さった。

1年生になって間もない頃、呉の野呂山で宿泊セミナーが行われた。その折、チューターで歌を歌うことになった。先生が、指揮者を決めてやったらどうかと言われた。お互いが顔を見合わせていると、しばらくしてNさんが、手を挙げて、引き受けてくれた。Nさんの指揮で、即席の合唱団ができて上がり、チューターのみんなで声を合わせて歌った心地

よさを覚えている。

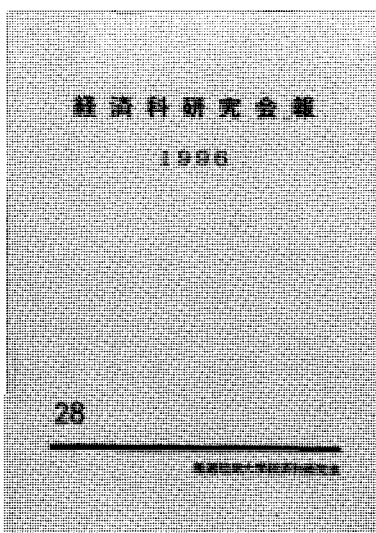
二年生の大学祭では、先生が、チューターで何か出し物をして見ないかと、声をかけて下さった。みんなで相談の結果、ポテトチップスを作って売る事にした。自宅から通っているYさんの家に集まり、夜遅くまで、わいわい騒ぎながら作業をした。それまであまり話した事のない人とも話ができて、友だちの輪が広がったと思う。

また、体育の授業の中でしたオリエンテーリングが今も心に残っている。チーム毎に相談しながら、山の中を地図とにらめっこして進んで行く。自然に恵まれた久山田ならではのスポーツだと思う。

専門の学問の方では、難解な経済の仕組みや原理を鮮やかにひも解いて下さった吉原（龍介）先生や、法に対する物の考え方の基本をしっかりと植えつけて下さった小倉（正恒）先生の講義など忘れがたいものが多かった。

そして、卒業間近の2月。同じチューターのNさんの一言、「通信教育を受けて先生になろうと思う。」で、私の進路は急転換した。今は亡き八木先生（元学長）の紹介で、玉川大学の通信教育に学び、1年間だけの就職浪人の後、小さい頃からの夢だった教職に就く事ができた。

自然に恵まれたのどかな風景と、多くの友人や先生方に出会った2年間で、今の私にとって、どんなに大切だったかという事を改めて感じているこの頃である。



経済科研究会報 28 1966年

移籍した三邊清一郎（経済学・経済史）、小河義夫（商品学）と51年4月就任の速水敏（経済学・農業経済論）のわずか3名であった。

1953年1月、田中稻穂（商品学）が学長に就任し同時に経済科の専任教員を兼ねた。同年4月、宮川嘉治（会計学）が、翌54年4月、中峯照悦（法学）がそれぞれ就任したが、宮川は'56年3月、中峯も'57年3月に転出することになる。

'56年3月、小河が退職、4月に有賀定彦（経済政策）、10月に高橋英夫（会計学）、翌年1月に富田忠雄（会計学・簿記）が就任し、'57年4月には中峯の後任として木村五郎（法学）が着任した。

'59年4月、退職した三邊の後任として樺本功（経済学）が就任し、同月、高橋が退職した。

'60年4月には小野幸男（経営学・簿記）が、'61年4月には木村の後任として高野真澄（法学）が着任した。

'61年度から'62年度にかけて樺本、有賀、小野が転出し、その補充として'63年4月に佐藤康人（会計学・簿記）、梅田恵三（経営学・国際経済論）、'64年1月に吉原龍介（経済政策・経済原論）が就任し、さらに'65年4月には、学長を退任した田中の後を受けて比嘉清松（経済史）が就任した。

'67年度には佐藤、比嘉が退職し、'68年4月、園田猛二郎（経営学・日本産業論）が就任した。

'69年4月、転出した高野の後任として小倉正恒（法学・民法）が着任した。

'73年4月、速水が退職し、同月、前原雅文（経営学・社会学）、森映雄（経済原論・金融論）、長屋泰昭（経済政策・経済学）、三室堯磨（商法・民法）が就任、'75年4月には勝矢倫生（日本経済史・経済史概論）、大西秀典（社会政策論・社会保障論）、さらに'77年4月には刈山和俊（統計学・数学）が着任し、選任教員の充実が一層図られた。

'80年4月、森の後任として松岡憲司（経済原論・金融論）が就任し、'83年3月の梅田、長屋転任の後を受けて中久保邦夫（経済政策・商業政策）、佐藤滋正（経済学史・経済学）が着任した。

'84年3月三室が転出、'85年3月には富田が退職し、松岡も転出する。その後任として'85年4月、松野友芳（民法）、菅準一（経済原論）、久保田秀樹（会計学・簿記）が就任した。

'87年4月、翌年4月に予定されていた経営情報学科増設に備えて、野間圭介（情報処理論・プログラミング）が着任、野間は前原、久保田と共に'88年4月、経営情報学科設立と同時に同学科へ移籍することになる。

新学科増設による専任教員減を補充するため、'88年4月、柳原幹雄（国際経済論・国際金融論）が就任したが、従前の教員数を回復するには至らず、その後欠員の補充がなされないままとなる。

'89年4月、転出した小倉の後任として溝淵裕（憲法・法学）が着任する。

'90年3月、吉原、中久保が転出、同年10月に福森徹（経済政策論・産業政策論）、'91年4月に難波安彦（経済原論・経済学）が、その後任として就任した。難波は'93年3月に、福森も'95年3月に転出することとなり、'93年4月に河野洋（経済原論）が、'95年4月には安藤康士（経済政策論・産業政策論）が着任した。

先にも見たとおり、経済科の専任教員数は発足当初、1学年定員80名に対しわずか3名であったが、数年で7名となり、その後'63年度の1学年定員200名への増員をはさんで前後20年あまりは6名ないし7名で推移していた。その充実が図られたのは、'70年代半ばであった。すなわち、'73年度3名増、'75年度2名増、そして'77年度1名増と、短期間の間にそれまでの倍近い教員数となり、1学年定員200名の学生に対し専任教員12名で教育・研究にあたる体制ができることになる。その後10年あまりこの体制が継続することになるが、'88年4月の経営情報学科増設にともなう教員補充がなされるも従前の専任教員数を回復するに至らず、現員11名体制を10年近くにわたり余儀なくされている。経済科の教員内容の特徴である少人数教育及び専門教育の重視を今後とも維持するためには、早急に欠員を補充するとともに、一層の教育・研究体制の充実を図る必要があると考えられる。

## 4 経営情報学科

経営情報学科は、入学定員100名で1988（昭和63）年4月に発足した。

### (1) 設置の趣旨

近年、情報科学技術の驚異的進展と産業社会の複雑化、高度化に伴って、それに対応しうる専門的教育を求める社会的要望には強いものがあり、尾道市においても、地域経済の長期的かつ安定的な発展を遂げていくためには、このような科学技術の進展に十分対応し得る人材の確保が必要である。

本学科は、教育基本法及び学校教育法の趣旨に則り、平和的国家及び社会の形成者として品性と教養を培う。それとともに、高度技術化、情報化する産業社会に対応して、経営等の場でコンピュータを駆使して活躍できるように、経営実務ならびに情報処理に関連した科学的知識を基礎から教授し、地域社会の振興に寄与できる有為な人材を育成するために設置するものである。

今日、コンピュータを中心とする情報処理の進展は驚異的であり、その影響は社会全体に及び、社会構造そのものをも変えつつある。特に1980年代に入って各種の通信上の規制緩和に伴うオンライン・システムの普及、及びマイクロ・コンピュータの著しい発展によって、経営のあらゆる場にコンピュータが導入されるようになった。しかるに、これらの情報関連技術の進歩に比して、その利用に係わる人材養成は著しく立ち遅れている。

しかしながら、経済学を主要学科目とする既設の経済科の教育課程では、そうした人材の養成は十分なものではなく、そのため、経済科の教育課程の中で、関連科目として用意されてい



る経営実務的科目と情報処理科目を主要学科目とする学科をあらたに増設し、経営の具体的な業務へのコンピュータ利用及びその効果的運用を担う有用な人材の養成を目指す必要がある。

本学の経営情報学科は、このような時代的認識を基礎に、急速に高まりつつある地場産業、地域企業などの要請に応じて、経営という場で情報処理システムを設計し、その運用を担う技術者の養成を行うことを目的として設置された。

## (2) 設置に至る経緯

- ・ 1981年10月15日の教授会において大学改組委員会が設置され、経済科の四年制大学への昇格、学科増設等についての検討が重ねられた。
- ・ 1986年7月23日の当委員会において本短期大学の整備拡充計画として「産業情報科」を増設する構想が打ち出された。
- ・ 1986年11月、第二次尾道市総合計画（基本計画）の審議策定の諮問を受けた尾道市総合計画審議会が、その諮問の中で本短期大学の充実発展の方向として学科増設等が考えられるとして、その具体的検討について議会・行政・本短期大学などの関係者によって積極的に取り組むべきであると答申した。
- ・ 1986年12月4日の教授会において「産業情報科（入学定員100名）」増設が承認された。
- ・ 1986年12月18日の教授会において、これまでの改組委員会は、学科増設委員会に名称が改められ、その中に新たにカリキュラム検討小委員会が設けられた。
- ・ 1987年1月16日、設置主体（尾道市）内に、「尾道短期大学学科増設推進本部」が設けられた。
- ・ 1987年6月18日の教授会で学科増設委員会より、新設学科の名称が文部省の指導により「経営情報学科」となる旨、報告があった。
- ・ 1987年6月30日、文部省に経営情報学科設置申請書類を提出、受理された。
- ・ 1987年10月12日、大学設置審議会専門委員会の実地審査が行われた。
- ・ 1987年12月23日、経営情報学科認可証受領（文部省により経営情報学科認可）
- ・ 1988年4月1日、経営情報学科発足

## (3) 学科の教育内容

経営情報学科は、最新のコンピュータ・ネットワークシステムの発展により到来した情報化社会に必要な不可欠な情報処理能力や、企業ですぐに役立つ経営実務能力を養成するとともに、社会人として幅広い教養を身につけ調和のとれた人材を育成することを目指した学科である。経営学の基礎から経営管理論・経営情報論・経営科学論のような理論的・実践的な講義、計算機概論やコンピュータ・プログラミング言語のような情報処理に直接係わる講義、実習に重点が置かれている。

経営情報学科は、幅広い教養と専門的視野をもって現実の問題に対処できる能力を養成することを特徴としており、そのために、次の諸点に留意して教育課程を編成している。

- ・ 1年次から専門教育科目を履修できるようにし、一般教育科目のうち約半数は2年次に履修するようにしている。

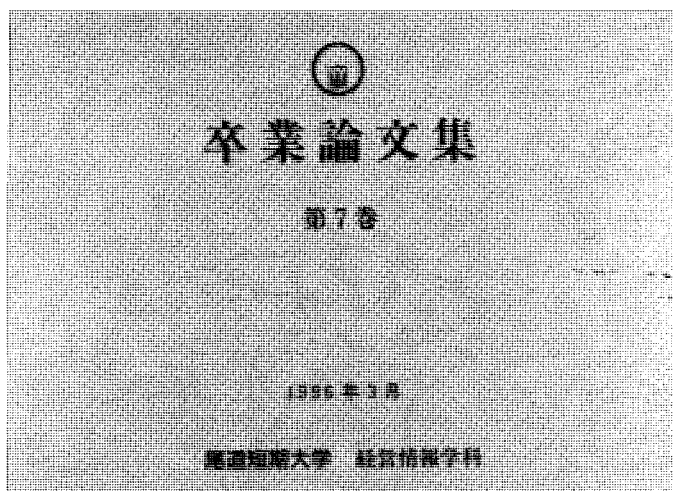
- ・ コンピュータとその利用技術についての基礎知識を修得するとともに経営の実務能力を身につけるために演習及び実習に十分な時間をとっている。
- ・ 第2種情報処理技術者試験（通産省）の受験が可能な水準の能力を付与するようにしている。

経営情報学科において特に重視されている演習では企業の行動科学的解明とその実践的アプローチを、経営関連科学や情報科学、コンピュータの知識を駆使することにより進めている。学生は自らの学習意欲に従ってより詳細な研究テーマを設定しているが、専門知識の修得と同時に学際的研究を重視する本学科の方針により、十分学生の幅広い知的興味をカバーできるシステムになっている。その研究成果は、「卒業論文集」(学生全員の論文を掲載)として集大成されて関係図書館・大学に配布されており、真摯な取り組みとユニークな研究は高い評価を得ている。

卒業論文集	第1巻	1990年3月発行	154名
卒業論文集	第2巻	1991年3月発行	119名
卒業論文集	第3巻	1992年3月発行	117名
卒業論文集	第4巻	1993年3月発行	130名
卒業論文集	第5巻	1994年3月発行	130名
卒業論文集	第6巻	1995年3月発行	128名

また、本学科では情報処理能力を身につけるために、次のような点を情報処理教育の重点として進めている。

- ① コンピュータの基礎知識の習得
- ② コンピュータ・プログラミング言語の習得
- ③ コンピュータによるデータ処理技術の習得
- ④ 会計処理、日報作成、伝票発行など、日常業務の体系を理解し、その業務を実習する。
- ⑤ 経営分析、経営者の意思決定支援情報など、経営情報の分析、資料作成、報告書作成



卒業論文集 第7巻 1996

能力の習得等。

情報処理教育を徹底するために、学内に大型コンピュータIBM9221を導入し、中央制御方式によりプログラム言語はもとより電子メールやデータベースなど幅広い用途に計算機を用いている。学生には端末としてワークステーションIBM5530Uを66台、5530Tを7台設置・開放することによって1人に1台のコンピュータが自由に利用できるようになっている。これにより学生は、大型コンピュータのもつ教育支援システム（CAIシステム）を自由に利用し、個別言語を効率的に習得できるようになっている。また、計算機室の分室にNEC PC-9801BAを48台設置して、ワープロ技能の習得やその他幅広い範囲にわたる教育が可能となった。さらに自習用ノート型パソコンの貸出制度を設けて情報処理教育の一層の充実を図っている。また、全学的立場から効果的な情報処理教育の実施を目標に、情報処理教育運営委員会を組織して検討を進めている。

#### (4) 教員の変遷

経営情報学科は、1988年4月に発足した。発足当初の専任教員は、経済科から移籍した前原雅文（経営組織論・経営管理論）、野間圭介（経営科学論・プログラミング）、久保田秀樹（会計学・簿記原理）と白神良昭（計算機概論）、田中宏（品質管理論・生産管理論）、住田璋治（経営情報論・情報管理論）、稲福善男（経営学総論・経営学史）、小泉伸（プログラミング・情報数字）の8名であった。

1989年4月、白神が学長に就任し、同時に経営情報学科の専任教員を兼ねた。同年3月に久保田が転出し、その後任として同年4月に石川雅之（会計学・簿記原理）が着任した。

1991年3月、田中と野間が転出し、その後任として同年4月に中村恒夫（生産管理論・品質管理論）と大塚登（プログラミング・経営科学論）が就任した。

1993年3月、白神は学長を退任し、住田は転出した。その後任として同年4月に藤田幸史（計算機概論・プログラミング）と石原茂和（経営情報論・情報管理論）が就任した。

1994年3月、稲福が転出し、その後任として同年4月に阿部香（経営学総論・経営学史）が就任した。

# 第6章 研究活動

## 1 研究紀要

大学は、教育機関であると同時に研究機関でもある。本学は女専以来の学問的な伝統を受け継ぎ、教員の研究活動は旺盛である。それぞれの教員が自己の研究分野について著した研究書、学会や学会誌に発表した発表や研究論文は数知れない。本学においても本学教員独自の研究発表の場として『研究紀要』を持っており、1952（昭和27）年3月、第1集を発表して以来1980年まで毎年度1回、1981年より毎年度2回編集発行し、現在第44巻（40巻2号より「集」を「巻」に変更）2号にまで至っている。その総目次は次のとおりである。紙幅の関係で1967年の16集までの総目次は『尾道短期大学二十年史』に譲り、それ以降のものをここに掲載しておく。

表5 『研究紀要』総目次

集次	発行年号	題名	発表者
17	1968	《論文》	
		フランス憲法における《Loi organique》についての覚え書き	高野 真澄
		分解原理と分権的管理	吉原 龍介
		西部方言における「先生が、来テジャ（ダ、ヤ）」などの「テ敬語法」について	岡田 統夫
		T.E.ヒューム研究（その一）－思想とその現代的意味－	信岡 巽
		《書評》	
		小林規威著『日本の合弁会社』	梅田 恵三
18	1969	《論文》	
		フランスの議長－第5共和制憲法における議会制構造の考察－	高野 真澄
		国際合弁企業体の概念に関する一考察	梅田 恵三
		The Decomposition Algorithm for Large-Scale “Bi-Angular” Linear Programs	吉原 龍介
		労働市場の構造的変化と労務管理の展開	作谷猛二郎
		「あはれがる」と「あはれぶ」	亀山 泰紀
		女子青年の性知識	帯賀 一男
		T.E.ヒューム研究（その二）－思想とその現代的意味－	信岡 巽

集次	発行年号	題名	発表者
19	1970	《資料紹介》	
		尾藤二洲の書翰（その一）	頼 祺一
		《論文》	
		海外投資と日本の合弁会社	梅田 恵三
		中世の浦について	黒川 正宏
		Non-Linear Decomposition Programming and Decentralized System Optimization	吉原 龍介
		統治行為論の批判的考察（その一）	小倉 正恒
		堺本「枕草子」覚え書	亀山 泰紀
		「T.E.Hulme の詩」の解釈について—人間 Hulme の —断面—	信岡 巽
		20	1971
日米労使関係の比較研究—ホワイトヒル・武沢信一共著 “The Other Worker” をめぐって—	作谷猛二郎		
T.S.エリオットとフランス—批評家エリオット— エドワード・J.H.グリーン著	森 清訳		
《論文》			
大伴家持—その憂愁—	野上 久人		
「風」—素材史研究—	亀山 泰紀		
合弁事業方式によるわが国企業進出の現状と課題	梅田 恵三		
線型計画の分割アルゴリズム	吉原 龍介		
労使協議制についての一考察	作谷猛二郎		
統治行為論の批判的考察（その二）	小倉 正恒		
21	1972	「—フランス人のキーツ観」—仏訳「キーツ詩集」の序文 をめぐって—	森 清
		Graham Greene 小説論（I）—序説：悪の意識の源を 探って—	信岡 巽
		《論文》	
		「応答」連文表現における音声敬語法	江端 義夫
		ディラン・トマス詩に関する覚書（1）—主題をめぐって—	森 清
		Decentralized Planning Procedure for Water Quality Management	吉原 龍介
		多国籍企業の研究（1）—その発生と1914年までの特 徴—	梅田 恵三

集次	発行年号	題名	発表者
22	1973	労働福祉と労使関係（その一）	作谷猛二郎
		統治行為論の批判的考察（その三）	小倉 正恒
		《論文》	
		日本の在外合弁会社の進むべき道	梅田 恵三
		古典文学作品の「文法読み」－理論的思考の国語教育－	江端 義夫
		ディラン・トマスの詩に関する覚書（2）－象徴をめぐって－	森 清
		Graham Greene 小説論(2)－信仰と作家：The Heart of the Matter に関連して－	信岡 巽
23	1974	ライブニッツ「理由律」に関して	和佐谷維昭
		《論文》	
		歌徳説話論序説	森山 茂
		「楚囚之詩」論－北村透谷研究ノート－	坂根 俊英
		所有形態よりみた在外日本企業の実態	梅田 恵三
		権威受容説と伝達の論理的関連－バーナード学説を中心として－	前原 雅文
		インフレーションと「インフレ圧力」－Roy Harrodの提言への一つの付加－	森 映雄
		経済政策論の新しい課題（1）－政策意志形成過程論の考察－	長屋 泰昭
		「価値論」（その一）	和佐谷維昭
		統治行為論の批判的考察（その四）	小倉 正恒
		Stirling 数を拡張して得られる関数について	築山 福文
		《資料》	
		ディラン・トマスの言語と表現－統語法をめぐって－	森 清
Graham Greene, The Collected Edition の Introduction から	信岡 巽		
24	1975	《論文》	
		国連有識者グループ勧告を読んで	梅田 恵三
		組織における権威問題－サイモンの理論を中心として－	前原 雅文
		経済政策論の新しい課題（2）－政策意志形成過程分析の主要方向－	長屋 泰昭
		レギュレーションQとその問題点	森 映雄
		「価値論」（その二）	和佐谷維昭
		歌徳説話の伝承について－歌徳説話論その一－	森山 茂
萩原朔太郎覚え書－大正四年の書簡を中心に－	坂根 俊英		

集次	発行年号	題名	発表者
		研究ノート・公共財と計画の経済理論(1)	吉原 龍介
		《資料》	
25	1976	「引当金」の現況	富田 忠雄
		《論文》	
		実質現金残高効果についての一考	森 映雄
		マルクス主義の唯物史観と階級社会観—マルクス主義の 国家観の基礎—	長屋 泰昭
		経済社会の多元化と民主政治	大西 康雄
		東欧における合弁企業—その特徴と問題点—	梅田 恵三
		責任と権威—バーナードを中心として—	前原 雅文
		Stirling 数を拡張して得られる関数について II	築山 福文
		「価値論」(その三)	和佐谷維昭
		歌徳説話の和歌について—歌徳説話論その二—	森山 茂
		許六俳論の展開(上)—「噂」から「虚実」へ—	浜 森太郎
		「月に吠える」論—天上志向と地下沈潜—	坂根 俊英
26	1977	《論文》	
		内部貨幣経済における実質現金残高効果についての一考	森 映雄
		マルクス主義の国家観と政策意志形成—マルクスとエン ゲルスの所説を中心として—	長屋 泰昭
		多元社会における職務委員と民主政治—J.メスナーの議 論を巡って—	大西 康雄
		わが国にみる進出外資と撤退外資の動向—特に自由化ス ケジュール完了時の現況に視点を置いて—	梅田 恵三
		リーダーシップの本質	前原 雅文
		研究ノート・近世村落における家格に関する一考察	勝矢 倫生
		Hermite 多項式を拡張して得られる関数について	築山 福文
		歌徳の種々相—歌徳説話論その三—	森山 茂
		許六俳論の展開(中)—許六と支考との争点—	浜 森太郎
		椎名麟三論ノート—「赤い孤独者」を中心に—	坂根 俊英
27	1978	《論文》	
		国立公園における過剰利用の社会的費用	吉原 龍介
		内部貨幣経済における実質現金残高効果についての一 考(2)	森 映雄
		経済政策の「担い手」の概念と構造の学説史的検討 —最近の西ドイツの経済政策論を中心として—	長屋 泰昭
		J. N. フィッギスの多元社会論	大西 康雄

集次	発行年号	題名	発表者
		ユーゴー型合弁事業と外資の反応	梅田 恵三
		バーナード理論の基本問題	前原 雅文
		本学女子学生の体格・体力・運動能力に関する一考察(1)	平松 携
		研究ノート：文学と信仰 - Martin Turnell, <i>Modern Literature and Christian Faith</i> を中心に(1)	信岡 巽
		道綱の母-思いやりの限界-	亀山 泰紀
		説話において和歌が動機となった事柄について	森山 茂
		「蝶を夢む」論-朔太郎研究ノート-	坂根 俊英
28	1979	《論文》	
		所得変化と貯蓄率	森 映雄
		経済政策の概念、諸局面および「担い手」について-経 済政策の「担い手」の学説史的検討の総括-	長屋 泰昭
		自由主義と多元社会-G. プリーフスの所説を基礎にし て-	大西 康雄
		東欧にみる産業協力と合弁企業	梅田 恵三
		バーナード理論の基礎	前原 雅文
		広島藩における林野政策に関する基礎的考察(1)-林野 支配に関する職制と林野利用の状況把握を通して-	勝矢 倫生
		オランダにおける大規模会社の経営管理機構-ツウーテ ィア・ボード制度における監査役会を中心にして-	三室 堯磨
		価値判断と言語	和佐谷維昭
		農村のコミュニティスポーツに関する事例研究	平松 携
		女郎花物語の変遷(2)-写本・板本両系統における説話 編集の相違について-	森山 茂
		「日本語表現法」覚え書き-自己紹介文を通して-	亀山 泰紀
		『春と修羅』覚え書き	坂根 俊英
29	1980	《論文》	
		最近の高年齢勤労者の貯蓄行動	森 映雄
		地域主義「地域」概念の考察	園田猛二郎
		経営における支配問題	前原 雅文
		コミュニティスポーツの振興に関して-西ドイツの市民 スポーツの現状を通して-	平松 携
		和歌説話の評語(1)-宇治拾遺物語・十訓抄・古今著聞 集・沙石集の場合-	森山 茂
		萩原朔太郎研究ノート-「性」を中心に-	坂根 俊英



集次	発行年号	題名	発表者
		平仮名古文書に使用されたる和訓表記の漢字—平安時代・院政時代—	村田 正英
		《判例研究》	
		庭の日照利益に関する判例研究	小倉 正恒
		《書評》	
30-1	1981	Edward R. Tuftes, <i>Political Control of the Economy</i> .	長屋 泰昭
		《研究》	
		ポスト・ケインズ派短期分析に関する一考察—パシネッティの多部門成長モデルを中心として—	松岡 憲司
		広島藩における農政に関する基礎的考察(2)—「芸備郡要集」にみる享和期農政の動向—	勝矢 倫生
		経済的関心、政治行動および経済政策—経済政策形成過程論の一つの理論的枠組みについて—	長屋 泰昭
		多元社会の諸問題—G. プリーフスの所説に基づく1つの覚え書き—	大西 康雄
		中外合資経営企業法と日本の対応	梅田 恵三
		官僚制の本質	前原 雅文
		共同代表取締役制度についての一考察—代表権行使の委任の可否について—	三室 堯磨
		価値判断の客観化へのアプローチ—岩崎武雄教授『倫理学』を中心に—	和佐谷維昭
		G. Greene: <i>The power and the Glory</i> の主題—罪と愛—	信岡 巽
		コミュニティスポーツの振興に関して(Ⅱ)—都市住民のスポーツ施設利用と満足度に関する研究—	平松 携
		萩原朔太郎研究ノート(続)—『氷島』について—	坂根 俊英
		和歌説話の評語(2)—古本説話集・世継物語・今物語・古野拾遺・東斎随筆の場合—	森山 茂
30-2	1981	《研究》	
		「日照権」形成過程に関する一考察	小倉 正恒
		経済政策形成過程論の意義について	長屋 泰昭
		シビル・ミニマムと地域の課題	園田猛二郎
		合弁関係法にみる対中国投資環境と課題	梅田 恵三
		オリンピックにおける政治介入とナショナリズムに関する考察	平松 携
		田畑修一郎覚え書—大正13年から昭和11年まで—	坂根 俊英

集次	発行年号	題名	発表者
		和歌説話の評語(3) - 今昔物語集の場合 - 《研究ノート》	森山 茂
31-1	1982	企業集団の生成と成果 《研究》	松岡 憲司
		T. E. Hulme の古典主義と原罪の問題	信岡 巽
		近世農政思想に関する一考察 - 「秘話独言」にみる文政 末期における広島藩農政の動態 -	勝矢 倫生
		組織における官僚制の問題	前原 雅文
		在外合弁企業の撤退	梅田 恵三
		コミュニティスポーツの振興に関して(Ⅲ) - 広島県の スポーツ行政施策を通して -	平松 携
		マルクス主義における自由の問題 - 「搾取からの自由」 と「権力からの自由」 -	和佐谷維昭
		近代文学における東北方言 《書評》	坂根 俊英
31-2	1982	Jerome W. Van Gorkom, <i>Social Security Revisited</i> 《研究》	大西 康雄
		産業別多様化の動態的計測	松岡 憲司
		コミュニティスポーツの振興に関して(Ⅳ) - 尾道市民 のスポーツ行動の現状と課題 -	平松 携
		Eine experimentale Arbeit über visuelles Verhalten in sozialen Interaktionen. - Blickkontakt in einer Zweierbeziehung, der beeinflusst wird durch Interaktionsdistanz und Bedürfnisse nach Affiliation -	福原 省三
		ことばと韻律について - 日本詩定型論異見 -	寺杣 雅人
		萩原朔太郎研究 - 「ノート」の分析 - 《研究》	坂根 俊英
32-1	1983	享和期における広島藩諸郡の経済事情 - 「芸備郡要集」 の分析を中心として -	勝矢 倫生
		経済形成の自由の可能性について - W. パーロウの所説を 中心として -	長屋 泰昭
		アメリカ社会保障制度の成立について	大西 康雄
		発展途上国からの海外企業進出の特徴	梅田 恵三
		日本的経営論の批判的考察(1)	前原 雅文

集次	発行年号	題名	発表者
		コミュニティスポーツの振興に関して (V) - スポーツ指導者の目標と住民の意識差 -	平松 携
		中野重治論ノート - 詩を中心に -	坂根 俊英
		今昔物語集における女性の描き方について - 所謂、本朝、世俗部を対象とする考察 -	森山 茂
32-2	1983	《研究》	
		今日の住宅問題 - 第四期住宅建設五ヵ年計画中間年にあたって -	佐藤 滋正
		道徳教育における一つの問題	和佐谷維昭
		G. Greene, <i>The Basement Room</i> 試論 - H. James, <i>The Turn of the Screw</i> の一変体として -	信岡 巽
		続・中野重治論ノート	坂根 俊英
		本歌取り俳諧の流行とその周辺	松永 宗二
		《研究ノート》	
		企業集団系企業と非企業集団系企業の間における多様化度の比較	松岡 憲司
		《書評》	
		Mark V. Pauly (ed.), <i>National Health Insurance: What Now, What Later, What Never?</i>	大西 康雄
33-1	1984	《研究》	
		日本的経営論の批判的考察 (2)	前原 雅文
		コミュニティスポーツの振興に関して (VI) - スポーツ指導者の指導行動と満足度に関する研究 -	平松 携
		日本詩韻律論の方法 - 韻律をめぐる作者と読者の関係について -	寺杣 雅人
		中野重治論ノート (3)	坂根 俊英
		説話文学における女訓について (1)	森山 茂
		《書評》	
		Carolyn L. Weaver, <i>The Crisis in Social Security, Economic and Political Origins.</i> Duke University Press, Durham, 1982, 250pp.	大西 康雄
33-2	1984	《研究》	
		マルクス主義における善悪	和佐谷維昭
		コミュニティスポーツの振興に関して (VII) - 高齢者のスポーツ行動に関する考察 -	平松 携
		萩原朔太郎「愛憐詩篇」論	坂根 俊英

集次	発行年号	題名	発表者
		《文献紹介》	
		Streithofen, Heinrich Basilius/Voss, Rüdiger von (hrsg.), <i>Goetz Briefs Ausgewählte Schriften, Erster Band: Mensch und Gesellschaft/ Zweiter Band: Wirtschaftsordnung und Sozialpartnerschaft</i>	大西 康雄
34-1	1985	《研究》	
		西国街道海田宿における休泊施設の経営構造—農民負担との関連を中心にして—	勝矢 倫生
		On compact Cartan and maximal compact subgroups of $SL_2$ over a local field	刈山 和俊
		萩原朔太郎「愛憐詩篇」論(二)	坂根 俊英
		《研究ノート》	
		ボールディングの組織革命—その本質・要因をめぐって—	大西 康雄
34-2	1985	《研究》	
		日本の経営論の批判的考察(3)	前原 雅文
		コミュニティスポーツの振興に関して(VIII)—高齢者のゲートボール参加に関する社会学的研究—	平松 携
		Joseph Conrad, <i>Heart of Darkness</i> (『闇の奥』) を読む	信岡 巽
		『感情』論ノート—『抒情小曲集』と朔太郎の詩—	坂根 俊英
		《研究ノート》	
		余暇(レジャー)の概念について	大西 康雄
35-1	1986	《研究》	
		多元社会の不安定性—G. ブリーフスの所説を基礎にして—	大西 康雄
		労働と倫理(一)	和佐谷維昭
		『月に吠える』ノート—実存意識と詩精神—	坂根 俊英
		《研究ノート》	
		“Le Travail” 誌上のワルラス	中久保邦夫
35-2	1986	《研究》	
		レオン・ワルラスの「科学的社会主義」	中久保邦夫
		労働と倫理(二)	和佐谷維昭
		非言語的行動の表出機能と伝達機能に関する研究	福原 省三
		萩原朔太郎『青猫』ノート	坂根 俊英

集次	発行年号	題名	発表者
36-1	1987	《研究》	
		広島藩における伝馬役負担の構造と展開—西国街道海田宿の事例を中心に—	勝矢 倫生
		コミュニティスポーツの振興に関して(IX)—3市(福山・因島・三次市)における高齢者のスポーツ行動の違いに関する研究—	平松 携
36-2	1987	萩原朔太郎のアフォーリズムについて	坂根 俊英
		女郎花物語の変遷(3)—写本・板本両系統における教訓的評語の相違について—	森山 茂
		《研究》	
37-1	1988	R.A.ニスベットの多元社会論—『共同体の希求』をめぐる—	大西 康雄
		平和朝和歌のリズム—単独母音を含む非字余り句からの考察—	寺杣 雅人
		林芙美子論ノート(一)	坂根 俊英
37-2	1988	《研究》	
		「司法審査の限界」に関する一考察—「事件性」と憲法判断回避について—	小倉 正恒
		シナジェティクスと社会科学	菅 準一
38-1	1989	生命倫理の問題点と課題(一)	和佐谷維昭
		広島藩における宿駅経営の負担構造—西国街道海田宿の場合—	勝矢 倫生
		林芙美子論ノート(二)	坂根 俊英
38-1	1989	《研究》	
		絶対地代の問題圏—マルクス「差額地代表」の検討を通して—	佐藤 滋正
		情緒二要因説の実験的検討	福原 省三
38-1	1989	『図書寮本寶物集』における和語表記の漢字	村田 正英
		林芙美子論ノート(三)—詩について—	坂根 俊英
		《資料》	
38-1	1989	母音からみた平安朝和歌の律構造〈資料編〉	寺杣 雅人
		《研究》	
		直物・先物が替相場決定のメカニズムと金融・財政政策の効果	柳原 幹雄
		日本の経営の組織論的分析	前原 雅文

集次	発行年号	題名	発表者
		The Complex Fate of Henry James - with special reference to his moral sense -	信岡 巽
38-2	1989	八木重吉論ノート 《研究》	坂根 俊英
		多元社会のインフレーション・ゲッツ・ブリーフスの所説を基礎にして-	大西 秀典
39-1	1990	精神分裂病者における対人距離と視線の分析 歩行における心拍数の変動 価値哲学の試み-序論(上)- 野間宏論ノート-『真空地帯』を中心に- 《研究》	福原 省三 平松 携 和佐谷維昭 坂根 俊英
		構造としての個人 輸入偽ブランド品対策の経済学的分析 Galois Cohomology of Algebraic Tori Split over Cyclic Extensions	菅 準一 吉原 龍介 刈山 和俊
		会計基準設定過程における利害抗争といわゆる「会計の政治化」 情報化技術並びにソフトウェア工学における標準化諸問題の-考察- ME 技術革新時代の標準化の役割と課題- ライフスタイルと歩行に関する事例研究-万歩計による測定から-	石川 雅之 田中 宏 平松 携
39-2	1990	中野重治論ノート(六) 《研究ノート》 マルクス「絶対地代論」についての覚書き 《研究》	坂根 俊英 佐藤 滋正
40-1	1991	広島藩における土免制の構造と展開 社会的学習ネットワーク アルコール依存症の症例報告 I - 家族力動を中心とした治療経過 - 価値哲学の試み - 序論(中) - 西脇順三郎ノート-シュールレアリスムとの関係について- 《研究》 会計基準設定論の混乱要因-忠実表示主義と経済的帰結主義の意義- A Study on Motivation and Oral Proficiency in English	勝矢 倫生 菅 準一 福原 省三 和佐谷維昭 坂根 俊英 石川 雅之 高垣 俊之

集次	発行年号	題名	発表者
		続・西脇順三郎ノート―シュールレアリスムとの関係について―	坂根 俊英
		《資料》	
		尾道地域商業の現状と課題	稲福 善男
		研究紀要総目次(第30集1号―第39集2号)	
40-2	1991	《研究》	
		地域経済の発展と商業機能の課題〈尾道小売商業の現状と課題〉	稲福 善男
		Management Decision Support Systems Utilizing Patent Information	住田 璋治
		ジュニアスポーツの競技力向上における研究―高校生の目標レベルから―	平松 携
41-1	1992	《研究》	
		意味システムの自己組織プロセス―(1)―	菅 準一
		Harrod 動学と企業の主体均衡	難波 安彦
		会計規制と規制緩和	石川 雅之
		地域経済の発展と商業機能の課題〈Ⅱ.尾道観光と商業機能の推進のための準備〉	稲福 善男
		On Discontinuing Students of College EFL	高垣 俊之
		広島県下の江田島他14島の歩行に関する調査研究―万歩計による測定から―	平松 携
		医の倫理における多義性について	和佐谷維昭
		リズムにおける流れとよどみ―拍節群化の二重性について―	寺杣 雅人
		《書評》	
		里見賢治著『日本の社会保障をどう読むか』	大西 秀典
41-2	1992	《研究》	
		近代経済学の再検討―システム論的アプローチ―	菅 準一
		まちづくりと地域活性化―摂津市商業近代化事業の推進を事例として―	稲福 善男
		富士山登山中のエネルギー消費量とエネルギー代謝率について	平松 携
		価値についての説明の試み	和佐谷維昭
		《研究ノート》	
		T. H. Hulme とイマジスト運動覚書	信岡 巽

集次	発行年号	題名	発表者
		《翻訳》 M. H. ベスト「日本の企業家的企業」	佐藤 滋正
		《書評》 Wells, N./Freer, C. (ed.), <i>The Ageing Population : Burden or Challenge?</i>	大西 秀典
42-1	1993	《研究》 近世地方書の論理構造－「芸州政基」における享保末期 広島藩農政論の再考察－ 意味システムの自己組織プロセス－(2)－ 会計方針の選択と会計基準 地域産業構造の形成と特質(Ⅲ・尾道産業構造の特質と 課題) On a Reference Model of English Pronunciation in Japan 四国霊場88カ所の歩行に関する調査研究 高齢者の保健・福祉に関する研究Ⅰ－高齢者の生活実態 と福祉施策に関する調査－ 五音句のリズム－その規範と逸脱－ 《研究ノート》 世界経済の三極圏化論について	勝矢 倫生 菅 準一 石川 雅之 稲福 善男 高垣 俊之 平松 携 福原 省三 寺杣 雅人 園田猛二郎
42-2	1993	《研究》 近世地方書における継承と成熟(1)－賀美永蔵著「農制 随筆」にみる宝暦期広島藩農政の動向－ 明治末期から昭和初期の商業における長時間労働問題 八ヶ岳縦走のエネルギー消費量について 高齢者の保健・福祉に関する心理学的研究Ⅱ－保健・福 祉に対する意識調査の分析－ 横光利一「笑われた子」論－〈内面の光り〉と〈面〉の 意味－ 《資料》 T. E. Hulme と H. ベルグソン	勝矢 倫生 福森 徹 平松 携 福原 省三 寺杣 雅人 信岡 巽
43-1	1994	《研究》 近世地方書における継承と成熟(2)－賀美永蔵著「農制 随筆」にみる宝暦期広島藩農政の動向－ 経済学の教育・研究における記号処理ソフト利用の一事 例について	勝矢 倫生 菅 準一



集次	発行年号	題名	発表者
		高齢者の保健・福祉に関する心理学的研究Ⅲ－尾道市高齢者保健・福祉計画の一試案－	福原 省三
		言語と価値（その一）	和佐谷 維昭
		横光利一「笑われた子」の主題（上）－「面」における〈面〉からの考察－	寺 柚 雅人
43-2	1994	《研究》	
		高齢社会政策論序説	大西 秀典
		Character Formula for Cuspidal Unramified Series Representations of the Multiplicative Group of Division Algebras over Local Fields	刈山 和俊
		リカードウ地代論の語句修正をめぐるスラッフアの解釈について	佐藤 滋正
		経済学の教育・研究における記号処理ソフト利用の一事例について（2）	菅 準一
		On Communicating in English for Japanese 高齢鍛練者の傾斜歩行時における生理的反応の特性について	高垣 俊之 平松 携
		《資料》	
		T. E. Hulme と現代批評	信岡 巽
44-1	1995	《研究》	
		南北間での知的所有権問題に関する一考察	河野 洋
		経済学の教育・研究における記号処理ソフト利用の一事例について（3）	菅 準一
		A preliminary study on self-monitoring of beginning Japanese ESL learners	高垣 俊之
		アイ・カメラによる視線移動の追跡研究－眼球運動と性格との関係について－	福原 省三
		《翻訳》	
		絶対者の従者－T. E. ヒュームの政治哲学の研究－ －フランス、W. ネルソン著	信岡 巽訳
44-2	1995	《研究》	
		人口高齢化について	大西 秀典
		文化後期広島藩における財政政策の位相－頼杏坪の意見書を起点として－	勝矢 倫生
		アダム・スミスの「租税論」について	佐藤 滋正

集次	発行年号	題名	発表者
		C.S.Peirceのプラグマティズムとその思想の経営学における意義	阿部 香
		言語と価値(その二)	和佐谷維昭
		倉田百三論ノートー心のたたかいー	坂根 俊英
		横光利一「笑われた子」の主題(中)ー基本的コントラストからの考察ー	寺杣 雅人
		《翻訳》	
		ディクソン・ウェクター著「ヒュームと悲劇的見解」	信岡 巽訳

## 2 文部省科学研究費補助金による研究

文部省の科学研究費補助金を得て研究したものは、次のとおりである。

表6 文部省科学研究費補助金による研究

交付年度	区分	交付金額(円)	研究課題	職名	研究者氏名
1954(昭和29)	各個研究	60,000	アメリカ初期経済思想	教授	三邊清一郎
1957(昭和32)	各個研究	60,000	ベンジャミン・フランクリンの経済思想	教授	三邊清一郎
1960(昭和35)	各個研究	30,000	コリヤード西日辞書の研究	助教授	大塚 光信
1961(昭和36)	各個研究	70,000	道元の哲学構造	教授	高橋 賢陳
1962(昭和37)	各個研究	50,000	道元の哲学構造	教授	高橋 賢陳
1963(昭和38)	各個研究	100,000	桃源系抄物の研究	助教授	大塚 光信
1965(昭和40)	各個研究	54,000	フランス憲法における代表民主制の展開	助教授	高野 真澄
1966(昭和41)	各個研究	80,000	後進国に対する国際合併企業経営の方法と日本経済に与える効果	講師	梅田 恵三
1984(昭和59)	奨励A	400,000	レオン・ワルラスを中心としたフランス経済学史における経済思想	講師	中久保邦夫
1994(平成6)	奨励A	700,000	自己組織化ニューラルネットのパターン分類能力の検討と感性工学への応用	講師	石原 茂和
1995(平成7)	奨励A	600,000	自己組織化ニューラルネットによる主成分分析の能力の検討と感性工学への応用	講師	石原 茂和

### 3 博士号取得

旧教員で、博士号の取得者は次のとおりである。(但し、本学に在職中あるいは本学在職中の研究業績等による)

表7 博士号取得者 (旧教員)

氏名	職名	学位種類	論文題目	日付	本学在職期間
三邊清一郎	元教授	慶応義塾大学・経済学博士	ベンジャミン・フランクリン研究	1960(昭和35)年 3月14日	1950(昭和25)年4月1日 ～1959(昭和34)年3月31日
高橋 賢陳	名誉教授	広島文理科大学・文学博士	道元の実践哲学構造	1961(昭和36)年 7月27日	1948(昭和23)年3月31日 ～1972(昭和47)年4月1日

現教員で、博士号の取得者は次のとおりである。

表8 博士号取得者 (現教員)

氏名	職名	学位種類	論文題目	日付	本学在職期間
大塚 登	教授	大阪大学・理学博士	Radiative Pion Capture on $^{12}\text{C}$ and $^{16}\text{O}$ - Nuclear Structure Investigations by the Shell Model	1978(昭和53)年 3月31日	1991(平成3)年4月1日 ～現在
高木 卓司	教授	広島大学・理学博士	Microscopic Approach to Two-nucleon Absorption of In-flight in Nuclei	1980(昭和55)年 12月22日	1989(平成元)年4月1日 ～現在
刈山 和俊	教授	東北大学・理学博士	On conjugacy classes of maximal tori in classical groups (古典群の極大トーラスの共役類について)	1989(平成元)年 3月10日	1977(昭和52)年4月1日 ～現在

### 4 長期研修制度

大学において教員は、その職務遂行上、絶えず研究と教授能力の向上に努めなければならないことはいうまでもない。本学においても、それに資する目的で1980(昭和55)年4月1日、「尾道短期大学内地留学研修員規程」を設けた。しかし、その後海外における調査・研究等や学術交流の必要性が次第に高まってきたため前規程を廃し、国内と海外の両者を含んだ「学外研修員規程」(1995年6月22日)を設けた。前者の規程によって内地留学したものは次のとおりである。

表9 尾道短期大学内地留学研修員規程による研修員

氏名	職名	研究題目	期 間	場 所
和佐谷維昭	教授	道德教育の研究	1982(昭和57)年 4月 1日 ～9月30日	広島大学
刈山 和俊	教授	局所体上の代数群の構造	1983(昭和58)年10月 1日 ～1984(昭和59)年 3月31日	京都大学
平松 携	教授	歩行運動と健康づくりとの関係	1993(平成5)年10月 1日 ～1994(平成6)年 3月31日	広島大学

なお、在外研究については文部省の公立医科大学等経常費等補助金（在外研究員費）による制度があり、これによって在外研究をしたものは次のとおりである。

表10 公立医科大学等経常費等補助金（在外研究員費）による在外研究員

氏名	職名	研究題目	派遣先国	期 間
福原 省三	助教授	日本人とヨーロッパ人における対人間のコミュニケーション様式の比較検討	西ドイツ アイヒステット大学	1981(昭和56)年10月 1日 ～1982(昭和57)年 3月31日
松野 友芳	助教授	フランス民事責任論の研究	フランス パリ第一大学	1995(平成7)年 9月 1日 ～1996(平成8)年 3月 8日

その他、民間の奨学金あるいは私費による在外研究に従事したものもいるが省略する。

## 5 表 彰

本学関係者で研究成果についてその業績を認められ表彰を受けたものには、青木茂元教授の中国文化賞がある。

### 業績内容

青木茂元教授は40年にわたって歴史的研究に生命をそそぎ、数多くの論文を発表、とくに「尾道市史」全3巻、「近世日本における富籤の社会経済史的研究」など貴重な資料を残された。また広島県蹟名勝天然記念物調査委員、尾道市文化財保護委員、として地方文化のために多大の貢献をされた。こうした業績に対し1963（昭和38）年11月27日、中国新聞社より中国文化賞が贈られた。

# 第7章 社会活動 (地域との連携を目指して)

公立短期大学は他の一般の大学と同様に、高い水準の研究と教育をその基本的な任務とするものであるが、他面そうした機能を通じて地域の文化や社会の向上、発展に貢献していくという別の役割も担っている。本学は創立当初より特にこうした面で地域の期待も大きく、大学としても他に先駆けて研究成果や専門的知識、あるいは施設等を進んで公開、提供し、いわゆる「開かれた大学」として、直接あるいは間接的に地域の発展に重要な役割を果たしてきた。特に近年、生涯教育において大学の果たす役割が重視されつつあり、多彩なスタッフによる本学の研究体制は年々、地域の文化や経済との交流を深めつつある。

## 1 公開講座

公開講座は学則に明文化されているように「一般公衆の文化並びに科学的知識の向上に資するため」に市民への奉仕を目的に開設された。今日では全国の大学で珍しくはないが、1949（昭和24）年8月12日に第1回が開かれたことは当時としては先駆的なことであったといえる。記念すべき第1回講座は、久保小学校で八木教授が「現代教育問題の断想」と題して行った。第2回目は11月15日に3人の教授が南高校で行った。その後、12年間に33回開講し、1961年11月を最後に休止した。

その後、再開されてからの講演者と題目は次のとおりである。

### 公開講座 講演者と題目

#### ■第1回 1976（昭和51）年度

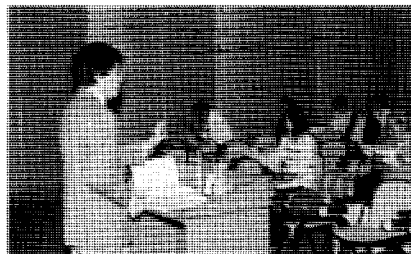
（テーマ「ヒューマニズム」）

- ① 7/26 和佐谷維昭 「ヒューマニズムと自由（1）」
- ② 7/27 和佐谷維昭 「ヒューマニズムと自由（2）」
- ③ 7/28 森 清 「ヒューマニズムと生命主義（1）」
- ④ 7/29 森 清 「ヒューマニズムと生命主義（2）」
- ⑤ 8/ 3 信岡 巽 「ヒューマニズムと神（1）」
- ⑥ 8/ 4 信岡 巽 「ヒューマニズムと神（2）」
- ⑦ 8/ 4 和佐谷・森・信岡 「ヒューマニズムについて」

#### ■第2回 1977（昭和52）年度

（テーマ「自然」）

- ① 3/23 坂根 俊英 「近代文学と自然（1）」
- ② 3/24 坂根 俊英 「近代文学と自然（2）」
- ③ 3/27 吉原 龍介 「山と人」
- ④ 3/28 吉原 龍介 「山と経済学」



コミュニティーカレッジ

⑤ 3/29 吉田 眞三 「中世における新しい自然の発見」

■第3回 1978 (昭和53) 年度

- ①11/27 村田 正英 「古代からのメッセージ」
- ②11/28 小倉 正恒 「平等の思想と実践 (1)」
- ③11/29 小倉 正恒 「平等の思想と実践 (2)」
- ④11/30 森 映雄 「円高問題について (1)」
- ⑤12/ 1 森 映雄 「円高問題について (2)」

■第4回 1980 (昭和55) 年度

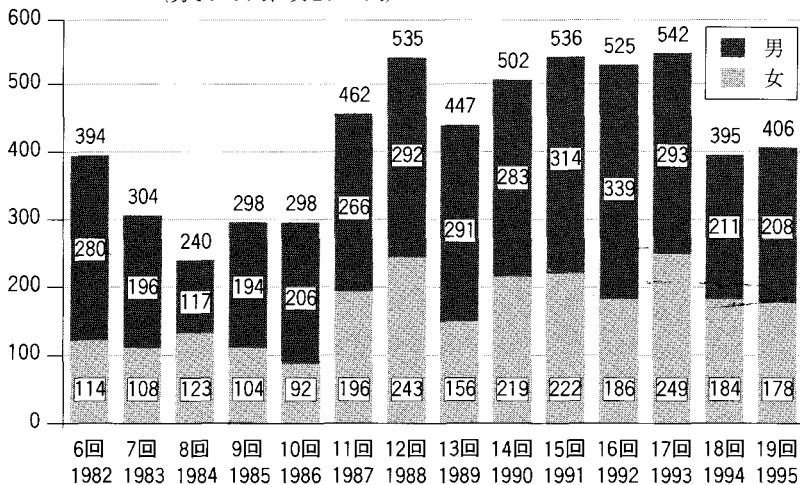
- ①10/28 土谷 泰敏 「江戸時代の俳諧と尾道」
- ②10/29 大西 秀典 「婦人と生活」
- ③10/30 森山 茂 「今昔物語集 本朝世俗部にみる女性像」

■第5回 1981 (昭和56) 年度

- ① 5/21 福田襄之介 「中国人の心」
- ② 6/23 勝矢 倫生 「歴史のなかのもりやはやし」
- ③ 6/24 平松 携 「日常生活とコミュニティスポーツ活動」
- ④ 7/22 小倉 正恒 「自衛隊と憲法」
- ⑤ 8/21 信岡 巽 「キリスト教と文学」
- ⑥ 9/22 吉原 龍介 「国立公園の経済学」
- ⑦10/21 長屋 泰昭 「社会主義経済体制の現状とゆくえ」
- ⑧11/25 園田猛二郎 「地域社会と共同体」

図7 公開講座の参加者数の推移

会場は、公会堂別館から第15回(1991年)より尾道市立図書館に変更  
 第6回～第19回の延べ参加者数5884人  
 (男3510人、女2374人)



- ⑨ 12/21 和佐谷維昭 「宗教における逆説」
- ⑩ 1/20 福田襄之介 「シルクロードと中国の詩」

■第6回 1982 (昭和57) 年度

- ① 5/20 (木) 小倉 正恒 「相続法改正点について」
- ② 6/22 (火) 刈山 和俊 「マイクロコンピュータのプログラム作法BASICの基礎 (1)」
- ③ 6/23 (水) 刈山 和俊 「マイクロコンピュータのプログラム作法BASICの基礎 (2)」
- ④ 7/21 (水) 森 清 「英語教育論争をめぐって」
- ⑤ 8/20 (金) 永金 知也 「健康と教育と」
- ⑥ 9/21 (火) 松岡 憲司 「パーソナルコンピュータを用いた経済の実証的分析 (1)」
- ⑦ 10/21 (木) 松岡 憲司 「パーソナルコンピュータを用いた経済の実証的分析 (2)」
- ⑧ 11/ 8 (月) 三室 堯磨 「会社法改正について」
- ⑨ 12/21 (火) 村田 正英 「本居春庭について」
- ⑩ 1/20 (木) 福田襄之介 「易の思想」

(男：280人/女：114人 計394人)

■第7回 1983 (昭和58) 年度

- ① 5/19 (水) 小倉 正恒 「わたしたちのくらしと憲法」
- ② 6/22 (火) 和佐谷維昭 「安楽死と倫理」
- ③ 6/23 (木) 三室 堯磨 「不渡手形と所持人の救済」
- ④ 7/21 (木) 富田 忠雄 「株主への会社決算報告」
- ⑤ 8/25 (木) 福原 省三 「荒れる子どもたちの心理」
- ⑥ 9/22 (木) 平松 携 「豊かな生活を求める尾道市民の運動とスポーツ」
- ⑦ 10/19 (水) 坂根 俊英 「中野重治の詩について」
- ⑧ 11/17 (木) 大西 秀典 「公的年金のゆくえ」
- ⑨ 12/15 (木) 寺杣 雅人 「定型詩歌の韻律について」
- ⑩ 1/19 (木) 福田襄之介 「漢詩の特色」

(男：196人/女：108人 計304人)

■第8回 1984 (昭和59) 年度

- ① 5/16 (水) 小倉 正恒 「サラ金—法改正要点」
- ② 5/31 (木) 村田 正英 「幸若舞とその詞章」
- ③ 6/21 (木) 佐藤 滋正 「アダムスミスと経済学の生誕」
- ④ 7/12 (木) 永金 知也 「食の科学」
- ⑤ 7/26 (木) 大西 秀典 「転換期の社会保障」
- ⑥ 8/23 (木) 信岡 巽 「イギリスの小説—C.ディケンズの場合」
- ⑦ 9/20 (木) 松永 宗二 「尾道近世文芸資料について」

- ⑧10/ 4 (木) 福原 省三 「いま、しつげに問われるもの」
  - ⑨10/25 (木) 坂根 俊英 「萩原朔太郎の詩」
  - ⑩11/15 (木) 福田襄之介 「論語と人生」
- (男：117人/女：120人 計240人)

■第9回 1985 (昭和60) 年度

- ① 5/16 (木) 大西 秀典 「労働と余暇」
  - ② 6/20 (木) 刈山 和俊 「統計的物の見方」
  - ③ 7/18 (木) 中久保邦夫 「経済を見る」
  - ④ 8/22 (木) 松永 宗二 「『八犬伝』はどう読まれてきたか」
  - ⑤ 9/ 5 (木) 和佐谷維昭 「労働と倫理」
  - ⑥ 9/19 (木) 勝矢 倫生 「歴史のなかのたやはたけ」
  - ⑦10/ 3 (木) 寺柚 雅人 「小説における語りと視点」
  - ⑧10/17 (木) 福原 省三 「目が語る虚と実」
  - ⑨11/ 7 (木) 坂根 俊英 「文学と人生」
  - ⑩11/21 (木) 小倉 正恒 「婦人と人権」
- (男：194人/女：104人 計298人)

■第10回 1986 (昭和61) 年度

- ① 5/15 (木) 永金 知也 「水の科学」
  - ② 6/ 5 (木) 坂根 俊英 「戦後文学について」
  - ③ 6/19 (木) 園田猛二郎 「現代資本主義」
  - ④ 7/17 (木) 和佐谷維昭 「生命倫理」
  - ⑤ 8/21 (木) 寺柚 雅人 「啄木と二つの歌集」
  - ⑥ 9/ 4 (木) 平松 携 「高齢化社会と運動」
  - ⑦ 9/18 (木) 吉原 龍介 「61年度経済白書について」
  - ⑧10/ 2 (木) 刈山 和俊 「方程式について」
  - ⑨10/16 (木) 森 清 「文学と人生『英文学を学んで』」
  - ⑩11/20 (木) 福田襄之介 「日本とヨーロッパの表現様式」
- (男：206人/女：92 計298人)

■第11回 1987 (昭和62) 年度

- ① 5/21 (木) 坂根 俊英 「二葉亭四迷の文学」
- ② 6/ 4 (木) 佐藤 滋正 「経済学の夜明け—重商主義の世界史的意識」
- ③ 6/18 (木) 久保田秀樹 「簿記学入門」
- ④ 7/ 2 (木) 松野 友芳 「暮らしの中の法律 (1)」
- ⑤ 7/16 (木) 大西 秀典 「新年金制度—内容と展望」
- ⑥ 9/13 (木) 森 清 「外国人と日本人観」
- ⑦ 9/17 (木) 吉原 龍介 「62年度経済白書を読む」
- ⑧10/ 1 (木) 亀山 泰紀 「清少納言は鼻が悪かった？」
- ⑨10/15 (木) 菅 準一 「経済学と現代」
- ⑩11/ 5 (木) 小倉 正恒 「暮らしの中の法律 (2)」



(男：266人／女：196人 計462人)

■第12回 1988(昭和63)年度

- ① 5/19(木) 村田 正英 「波と浪—常用漢字のながれ—」
- ② 6/ 2(木) 坂根 俊英 「宮本百合子の文学」
- ③ 6/16(木) 勝矢 倫生 「街道に生きる人々—西国街道宿駅研究史余話—」
- ④ 7/ 7(木) 平松 携 「健康を求めて—歩行のプログラムを中心に—」
- ⑤ 7/21(木) 中久保邦夫 「もの見方について—最近の科学方法論から—」
- ⑥ 9/ 1(木) 野間 圭介 「暮らしの中のコンピュータ」
- ⑦ 9/29(木) 吉原 龍介 「63年度経済白書を読む」
- ⑧10/ 6(木) 大西 秀典 「高齢化対策について」
- ⑨10/ 2(木) 刈山 和俊 「対称性について」
- ⑩11/17(木) 小倉 正恒 「暮らしの中の法律(3)」

(男：292人／女：243人 計535人)

■第13回 1989(平成元)年度

- ① 5/18(木) 和佐谷維昭 「哲学の性格と位置づけ」
- ② 6/ 1(木) 大西 秀典 「わが国の年金問題」
- ③ 6/15(木) 住田 璋治 「企業経営と維持」
- ④ 7/ 6(木) 寺杣 雅人 「文芸における〈二項対立〉—志賀直哉『清兵衛と瓢箪』を読む」
- ⑤ 7/20(木) 田中 宏 「標準化と人間生活」
- ⑥ 9/ 7(木) 福原 省三 「アルコール依存症」
- ⑦ 9/21(木) 森山 茂 「源氏物語の現代語訳」
- ⑧10/ 5(木) 菅 準一 「構造とは何か」
- ⑨10/19(木) 前原 雅文 「組織と人間」
- ⑩11/ 2(木) 森 清 「英語教育あれこれ」

(男：291人／女：156人 計447人)

■第14回 1990(平成2)年度

- ① 5/17(木) 亀山 泰紀 「日本文学における愛(古代・中世)」
- ② 6/ 7(木) 中村 勝則 「日本文学における愛(近世)」
- ③ 6/21(木) 坂根 俊英 「日本文学における愛(近代)」
- ④ 7/ 5(木) 信岡 巽 「アメリカの文学について」
- ⑤ 7/19(木) 溝淵 裕 「外国人の人権について」
- ⑥ 8/ 2(木) 平松 携 「ライフスタイルと健康づくり」
- ⑦ 9/ 6(木) 野間 圭介 「どこでお買物?(商圈調査より)」
- ⑧ 9/20(木) 松野 友芳 「暮らしの中の法律」
- ⑨10/ 4(木) 稲福 善男 「地域開発と商業活動(1)—尾道商業活動分析と活性化のための準備として—」
- ⑩10/18(木) 園田猛二郎 「パラダイムを越えて—発想転換の時代—」

(男：283人／女：219人 計502人)

■第15回 1991（平成3）年度

- ① 5/ 2（木） 森山 茂 「平安朝女性の夢と現実」
  - ② 5/16（木） 佐藤 滋正 「18世紀フランスとケネー『経済表』」
  - ③ 6/ 6（木） 寺杣 雅人 「日本語のあやとりズム」
  - ④ 6/20（木） 勝矢 倫生 「年貢を納めていた人々」
  - ⑤ 7/ 4（木） 大西 秀典 「老後のヒト・モノ・カネ」
  - ⑥ 7/18（木） 前原 雅文 「経営と社会」
  - ⑦ 9/ 5（木） 高垣 俊之 「アメリカ英語の特徴」
  - ⑧ 9/19（木） 柳原 幹雄 「国際経済の中の日本」
  - ⑨10/ 3（木） 稲福 善男 「観光都市としての尾道（1）」
  - ⑩10/17（木） 白神 良昭 「情報工学の最近の話題（エーアイ・ファジー）について」
- （男：314人／女：222人 計536人）

■第16回 1992（平成4）年度

- ① 5/ 7（木） 中村 恒夫 「半導体は産業の米たりうるか」
  - ② 5/21（木） 石川 雅之 「会計基準の動向」
  - ③ 6/ 4（木） 坂根 俊英 「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を読む」
  - ④ 6/18（木） 亀山 泰紀 「隠者の文学—友の世界を求めて—」
  - ⑤ 7/ 2（木） 村田 正英 「信長の時代の日本とキリシタン資料」
  - ⑥ 7/10（木） 和佐谷維昭 「事実判断と価値判断について」
  - ⑦ 9/ 3（木） 平松 携 「ライフスタイルと健康づくり—歩く歩く歩く」
  - ⑧ 9/17（木） 刈山 和俊 「群とは何か」
  - ⑨10/ 1（木） 難波 安彦 「景気動向は何故おこるのか」
  - ⑩10/15（木） 稲福 善男 「まちづくりと活性化」
- （男：339人／女：186人 計525人）

■第17回 1993（平成5）年度

- ① 5/ 6（木） 森山 茂 「源氏物語の魅力について」
  - ② 5/20（木） 平松 携 「歩く歩く歩く（富士山に登る）」
  - ③ 6/ 3（木） 和佐谷維昭 「生きがいについて」
  - ④ 6/17（木） 福原 省三 「高齢化社会について」
  - ⑤ 7/ 1（木） 中村 勝則 「江戸時代の流行作家と読者」
  - ⑥ 7/15（木） 福森 徹 「わが国戦前期における商業労働政策」
  - ⑦ 9/ 2（木） 菅 準一 「社会科学の方法」
  - ⑧ 9/16（木） 溝淵 裕 「性差と法」
  - ⑨10/ 7（木） 園田猛二郎 「90年代日本の国際環境」
  - ⑩10/21（木） 稲福 善男 「尾道産業構造の特質と課題」
- （男：293人／女：249人 計542人）

■第18回 1994（平成6）年度

- ① 5/12（木） 坂根 俊英 「中原中也の詩を読む」
- ② 5/20（木） 高垣 俊之 「アジア大会と英語」

- ③ 6/ 2 (木) 松野 友芳 「プライバシーの保護について」
  - ④ 6/16 (木) 平松 携 「健康づくりを考える一歩くとからだはわかるかー」
  - ⑤ 7/ 7 (木) 柳原 幹雄 「日本経済が直面する諸問題」
  - ⑥ 7/21 (木) 寺柚 雅人 「俳句のリズム」
  - ⑦ 9/ 1 (木) 大西 秀典 「これからの年金制度」
  - ⑧ 9/ 8 (木) 藤井 佐美 「浦島太郎の伝承」
  - ⑨10/ 6 (木) 石原 茂和 「人口知能とは何か (1)」
  - ⑩10/20 (木) 石原 茂和 「人口知能とは何か (2)」
- (男：211人/女：184人 計395人)

■第19回1995(平成7)年度

- ① 5/11 (木) 坂根 俊英 「倉田百三(一)ーその人生ー」
  - ② 5/18 (木) 坂根 俊英 「倉田百三(二)ーその思想と文学ー」
  - ③ 6/ 1 (木) 亀山 泰紀 「露を知らない女を盗み出した男ー伊勢物語の世界ー」
  - ④ 6/15 (木) 勝矢 倫生 「農民を治めていた人々ー近世地方書を読むー」
  - ⑤ 7/ 6 (木) 平松 携 「健康づくりを考える(2) 歩行雑感のあれこれ」
  - ⑥ 7/20 (木) 溝淵 裕 「性別役割分担論と法」
  - ⑦ 9/ 7 (木) 阿部 香 「データベースうら話」
  - ⑧ 9/21 (木) 藤田 幸史 「ファジー推論入門」
  - ⑨10/ 5 (木) 中村 恒夫 「尾道の活性化を願って」
  - ⑩10/19 (木) 河野 洋 「マクロ経済政策と民間部門の予想」
- (男：228人/女：178人 計406人)

## 2 市民大学

市教育委員会の主催で本学はそれに協力する形をとった市民大学は、1952(昭和27)年度を第1回として開始され、1960年度の第9期まで継続した。第1期は1952年6月6日から1953年2月22日まで、9カ月間に33回、夜間に開講し、168名の聴講者があって、そのうち52名に修了証書が渡された。修了証書は9講座中6講座以上を聴講した者に与えられた。

この市民大学は大学特設講座とも称され、科学、文学、心理学、経済学、教育学、哲学、食品学、法学、郷土史の9講座を設け、1講座9時間を1単位として、一般市民を対象として、幅広い教養の修得を目指して開かれた。市民に開かれた大学を目指そうとする意欲の感じられる先駆的な試みであった。

1960年10月9日に第9期の閉講式を行い、それを最後に市民大学(特設講座)は廃止された。全期開講表は表11のとおりである。

表11 全期開講表

期	年度	期間	開講回数	聴講者数	修了者数	修了条件 (聴講数・講座数)	備 考
1	'52	6.6 -('53年)2.22	33	168	52	6/9	文学(吉田)、経済(高垣・花戸・大江)、科学(山本)、郷土史(青木)、心理(大上)、教育(八木)、哲学(高橋)、食品(小河)、法学(三宅)
2	'53	4.19 -11.15	31	206	66	7/10	文学(野上)、化学(小河)、商品(田中)、経済(三邊)、郷土史(青木)、教育(八木)、文学(吉田)、物理(山本)、倫理(高橋)、統計(速水・築山)
3	'54	5.23 -11.28	28	186	50	7/10	物理(山本)、化学(小河)、経済(高垣・三邊)、心理(帯賀)、文学(吉田)、郷土史(青木)、数学(築山)、統計(速水)、商品(田中)、倫理(高橋)
4	'55	5.15 -11.20	28	146	51	7/10	教育(八木)、物理(山本)、会計(宮川)、経済(三邊・高垣)、化学(小河)、心理(帯賀)、文学(吉田)、商品(棚)、数学(築山)
5	'56	5.13 -12.2	29	138	38	7/10	哲学(高橋)、物理(山本)、経済(三邊・速水)、心理(帯賀)、教育(八木)、文学(吉田・野上)、商品(田中)、史学(青木)、統計(築山)
6	'57	5.12 -10.27	24	104	35	4/8	音楽(宮地)、美学(妹尾)、心理(帯賀)、時事(小野・曾根・杉浦・門田)、文学(野上)、商品(田中)、法学(河)
7	'58	第1講座 (毎々曜日) 5.18-9.7	17	45	15	3/5	文学(吉田)、経済(富田・三邊・速水・堀江)、工学(佐々木・寺本)、社会(森脇)、衛生(安東)、教育(八木)
		第2講座 (毎々曜日) 5.22-9.11	17	33	15	3/5	経済(有賀・高橋)、国語(大塚)、国文(野上)、教育(高橋)、法学(木村)
8	'59	第1講座 (本学) 5.24-9.6	10	20	12	3/4	国語(大塚)、経済(富田)、社会(井上)、国文(吉田)
		第1講座 (出張) 6.14-8.30	6				会場を三成・高須・西藤小学校にしたもの、倫理(高橋)、教育(八木)
9	'60	第1講座 (本学) 6.5-10.9	19	40	10	5/7	史学(青木)、美学(妹尾)、文学(野上)、音楽(杉恵)、経済(速水)、心理(帯賀)、社会(八木)
		第2講座 (出張) 8.7-9.18	6				会場を三成・西藤小学校にしたもの、文学(吉田)、法学(木村)、物理(山本)

なお、1954年の「山陽日日新聞」には次のような記事が見られ、市民大学の様子を知ることができる。

### ■にぎわう尾道市民大学

#### 聴講生最高年齢69歳

尾道市民の文化知識を高めるため5月23日から尾道短期大学で毎日曜日に開催されて好評を博している尾道市民大学では、このほど市民大学の聴講生195名に対し職業別、年齢別、地域別の統計調査を行ったところ、次のごとく興味ある結果がでた。職業別では公務員が断然多く33.3%（65名）、ついで社員21%（41名）、教員17.9%（35名）、工員7.2%（14名）となっている。また年齢別では20～24歳が約半分の42%（82名）、つぎに25～29歳の19.9%（35名）、20歳以下が11.8%（23名）の順となり、地域別では久保町が28.7%（56名）で最も多く、栗原町が16.4%（32名）でこれにつぎ、十四日町15.9%（31名）、吉和町7.7%（15名）などの順となっている。なお年齢の最高は尾道市土堂町本通り、大丸呉服店重役土居勝彦さんの69歳で、同氏は第3回目の聴講者である。

〈山陽日日新聞 1954(昭和29)年5月29日 要約〉

## 3 専修科の設置

高等学校を卒業したものが短期間で商業経済の専門知識を修得し、また家政学の技能と理論を修得するため修業年限1カ年の専修科が設置された。1956（昭和31）年度に家政専修科と商業専修科が置かれたが、次年度からは家政専修科だけとなった。

専修科を終えて、さらに修学を希望する者のために研究科も置いた。専修科は1962年まで続いたが、久山田移転を機に廃止された。募集人員は商経専修科男女共学25名、家政専修科女子のみ25名。学科目は商経専修科目では、商工簿記、会計学、商業実務、金融論、珠算、商法、税法、民法、経営学他であり、家政専修科では家政学、食品栄養学、育児、看護学、生理衛生、家族法、調理実習、和洋裁被服工作、家庭経済学他である。指導には尾道短大の教員が当たった。

## 4 コンピュータ公開講座

市内在住者及び市内の勤務者を対象として、18歳以上の社会人でコンピュータの初心者に対して、コンピュータ公開講座を行っている。1988年の経営情報学科新設を機に始めたもので、第1回目は1988年3月24日から30日まで5回、午後6時から2時間、尾道短期大学で講義と実習を行った。定員は40名、教材費1000円で始まった。初回のテーマは「コンピュータ事始め」であった。

その後、この講座は毎年、パソコン経験の浅い初心者を対象に、定員30～40名で行われてい

る。1993年の内容はデータベース「PARADOX3.5」の実習であった。1994年の内容としては、日本語ワープロとウインドウズの入門を2回に分けて行っている。

## 5 表 彰

本学関係者で広く文化のために貢献し、その功績を認められ表彰を受けたものには、野上久人名誉教授の広島文化賞がある。

### 功績内容

野上久人名誉教授は、1961（昭和36）年、歌誌「世紀」創刊。1976年、広島県の歌人協会初代会長を務め、現在尾道市文化協会理事。尾道市の文化水準向上のために献身的な営みを続けている功績に対し、1989（平成元）年11月20日、広島文化賞が贈られた。

# 第8章 学生生活

## 1 学友会

学友会は、女専時代には校友会と称した。校友会の活動は、音楽・体育・茶道・華道・演劇などの諸部が行っていた。その後、文芸部、新聞部もつくられた。

短大時代になると学友会と改称され、大きく文化局と体育局の2局のもとに各部の活動が行われるようになる。1952（昭和27）年には16部があった。さらに1968年には体育局、社会局、文化局の3局21部と同好会15が記録されている。学友会執行部は選挙によって選出された学生によって運営される自治組織であり、サークル活動を統括するほか、球技大会、大学祭、運動会、予餞会等の各種行事において指導的役割を果たして、学校と学生との良きパイプ役を果たしている。

## 2 サークル活動

サークル活動の歴史は毎年発刊される卒業記念アルバムの中のクラブ写真や大学新聞によって知ることができる。1950年代においてはバドミントン部や野球部が対外試合においてしばしば優勝した。1955年バドミントン部は広島県東部で優勝し、卓球部は中国学生卓球選手権で優勝している。また、野球部は中国六大学秋季リーグ戦で準優勝している。

1960年代においては、経済研究部・歴史研究部・英語研究部・落語研究部の活動が文化面においては活発であった。スポーツ面においては、男子学生が多かった時代を反映して、野球部・

### スポーツ

#### 善戦第二位を獲得 中国六大学リーグ戦

中国六大学秋季リーグ戦（各大学新聞より）  
 尾道大学は、中国六大学秋季リーグ戦で、善戦第二位を獲得した。十一月十七日、尾道市立体育館にて行われた、中国六大学秋季リーグ戦の最終戦、尾道大学対山形大学戦の結果、尾道大学は、二、一、二、一、三、二の得点で勝利し、二、二、八の総得点で、善戦第二位を獲得した。本学からは、藤原、柳生、藤井君（経）、杉野、田村、羽原（経）の六名が参加して、男子団体の部で強豪岡大、広大を破って、四戦、尚個人部の部で善戦を展開したが、全勝の好記録で、堂々輝く初優勝を挙げた。

第一回戦 尾道大0—4尾大  
 第二回戦 岡大A2—4尾大  
 第三回戦 広大B0—4尾大  
 優勝戦 岡大B3—4尾大

尚個人部の部で善戦を展開したが、全勝の好記録で、堂々輝く初優勝を挙げた。

第一回戦 尾道大0—4尾大  
 第二回戦 岡大A2—4尾大  
 第三回戦 広大B0—4尾大  
 優勝戦 岡大B3—4尾大

尚個人部の部で善戦を展開したが、全勝の好記録で、堂々輝く初優勝を挙げた。

野球部六大学リーグ戦準優勝〈尾道大学新聞 1955（昭和30）年12月5日〉

### 卓球優勝す

#### 中国学生選手権獲得

第六回中国学生卓球選手権大会は、十一月五日六日の岡日広島大学東豊分校体育館に於て華々しく開催された。

本学からは藤原、柳生、藤井君（経）、杉野、田村、羽原（経）の六名が参加して、男子団体の部で強豪岡大、広大を破って、四戦、尚個人部の部で善戦を展開したが、全勝の好記録で、堂々輝く初優勝を挙げた。

第一回戦 尾道大0—4尾大  
 第二回戦 岡大A2—4尾大  
 第三回戦 広大B0—4尾大  
 優勝戦 岡大B3—4尾大

尚個人部の部で善戦を展開したが、全勝の好記録で、堂々輝く初優勝を挙げた。

卓球部優勝〈尾道大学新聞 1955（昭和30）年12月5日〉

柔道部・空手部・水泳部が活動していた。また、しぶ柿会・ブルースカイ・焼きリンゴ・すみれ会というサークルもあった。1970年代においてはハウスミーティング・千鳥会・ハーブ同好会・ハミング等が活動した。

時代によってクラブや同好会にも消長が見られる。短大発足当初から今日まで息長く続き、長い伝統を誇っているクラブには次のようなものがある。

すなわち、美術部・文芸部・書道部・新聞部・卓球部・バトミントン部・テニス部・写真部。バレー部は1970年代前期に一時中断したが、再び復活している。音楽部は70年代前期までであったが、その後、細分化されて受け継がれている。

60年代後半に新しい部が続々と結成されている。すなわち、バスケット部・園芸部・ハワイヤン同好会・さつき会・部落問題研究会・茶道部・華道部・箏曲部・ギター部・ワンダーフォーゲル部・ユネスコ・ユースホステル部等であり、これらの中には今日まで長い伝統を誇る部も多く含まれている。

1969（昭和44）年から70年代初頭にかけてがまた新部ラッシュの様相を呈している。ハウスミーティング・軽音楽・ソフト部・ハーブ同好会・マンドリン部・アーチェリー・第三文明・ESS・囲碁将棋の各部が結成されている。

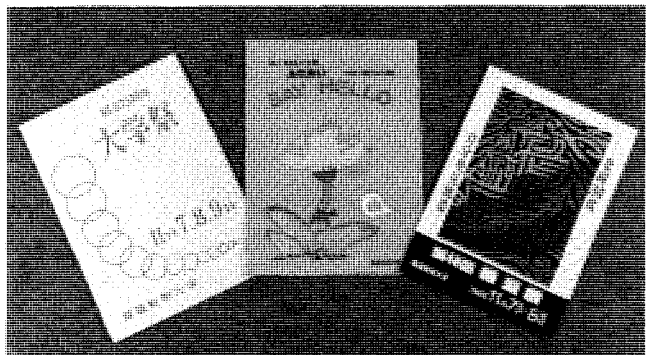
70年代半ばには、フラウエンコール・フォークソング・何でもやろう会が結成され、活躍している。80年代には源氏物語を読む会・硬式テニス部が生まれ、テニス部は硬式と軟式に分かれた。80年代後半にはマイコン同好会・映画研究同好会・ワープロ同好会・合気道同好会・児童文学研究会等が誕生している。

数年で消え去った同好会も合わせると、以上の他にも数多くの活動があり、例えばエレキ同好会・労演同好会等の名も見られたが、とてもすべては書ききれない。

### 3 学園祭

学園祭は1969（昭和44）年までは学生祭と称していた。1970年以後、大学祭と改称され、1980年代半ばに、緑湖祭となり、現在に至っている。

1970年代の大学祭のテーマは「脱皮」「和」「青春のニコマ」「無限軌道」等、漢語系の表現が目立つが、1976年



大学祭パンフレット

から、「With you」「Come on New friends !!」等、英語系の表現が多くなっていく。80年代、90年代も「Be Free」「Play with me」等のテーマ名がみられる。時には、1992年のように「北緯34度自分発見地帯」のようなテーマもある。



内容的には前夜祭、演芸会、体育祭、展示会が行われているが、展示会の他、バザー（模擬店）が増え、イベントが多彩になっている。

## 4 寮

1962（昭和37）年、尾道短大の久山田町への移転にともない、これまで旧市内に下宿していた多くの学生と新年度からの新入生が久山田町に下宿することを希望し、そのために大学から町に協力の要請があった。この話を伝え聞いた旧市内在住の吉岡輝雄氏によって、1962年4月、「大学荘」が開設され、新1年生約40名が入寮した。久山田町における民間経営の学生寮の第1号である。続いて翌年、「久山寮」ができ、1965年には「東山寮」が開設された。以後、屋敷の離れや納屋などを改造することによって貸間や下宿が続々と誕生した。1967年、寮・貸間組合が組織され、組合長に谷尾敏郎氏が就任し、その後、平川宣博氏が受け継いだ。現在は「すみれ寮」の西本氏が寮組合長である。

当初は学生数に比して寮・下宿の数が少なかったが、その後、次々と建てられ、最も多い時は700名近い学生が下宿していた。すなわち65%以上の学生が久山田に住んでいたことになる。しかし、最近は川上、大地のあたりにワンルームマンションが増え、全学生のうち約2割は下から通い、久山田の寮に住む者は全学生の約5割である。

しかし、寮生活は学生にとって思い出の深い、楽しいものであることはいつの時代も同じである。

## 5 チューター制度

学生はすべてチューターに属し、担当の教員のもとで、生活面、学習面において指導や助言を受け、さまざまな相談にも便宜を得ている。各種行事においてチューター毎に活動することもあり、学生と教員や学生相互の親睦を深めている。以前は歓迎遠足や宿泊セミナーも行われており、そこでもチューターを単位として行動することが多かった。

今日でもチューターが自主的に会合をもつことが奨励されている。

## 6 学生相談室、保健相談室

学生相談室は、学生のさまざまな悩みの相談に応じ、学生生活を支援していく目的で開設されたものである。

1970（昭和45）年にB棟1階（現在の非常勤講師室）に置かれ、1973年にはA棟1階（現在の11号室）に移転している。その後、中止時期をはさんで、1993年、再び開設をみた。一方、医務室は旧事務室の向い側に置かれていたが、1988年にC棟に保健室として設置された。1995年、委託の養護教員が常駐配属されたのに伴い、学生相談室と共有して、保健相談室が設けられた。現在、大いに活用され、2カ月で185名の利用者を記録している。

相談状況の推移としては、1980年代には、来談した学生数は年平均約27名で、全学生の約3.3%であった。しかし、1990年代には、年平均約18名で、およそ1.8%と減少している。精神保健に限ってみると、抑鬱、不安神経症が各時代を通じてよくみられる。1970年代にみられた5月病は少なくなり、かわってアパシーに似た無気力、無関心、無感動の傾向がみられる。また最近では、登校拒否や特に強迫神経症に属する不潔恐怖の悩みもみられるようになった。

概して、学生気質は、1970年代には自分を見つめ先生方を求める、自己探究あるいは人生探究的な相談が多かったが、1980年代から就職・進学相談など現実的かつ実用的な相談が多くなってきた。また、1995年度に新たに設けられた保健相談室は、学生の身心の健康の保持向上を目的として設置され、保健衛生上の問題を主とし、あわせてさまざまな心の問題に対しても、相談、助言等の教育活動を行っている。

複雑化した社会環境の中で学生の抱える問題も多様化しているが、より充実した学生生活を送れるように、いつでも誰でも気軽に足を運べる開かれた保健相談室として、その利用が期待されている。

## 第9章 就職状況

本学は開学以来1万6000名を超える卒業生を世に送り出してその実績が社会的に高い評価を受け、社会の福祉と文化の向上に寄与している。大学の本来の使命は教育研究にあり、就職斡旋の業務は本来の目的ではない。しかし、卒業生の就職結果は、在学中の教育研究効果も加味しての大学に対する社会的評価の結果であることは否めない。最近の女子の四年制大学志向の増加により、本学への進学希望者が減少してきている。企業は、科学技術の発展、情報社会の拡大等を反映し、レベルの高い人材を求めている。短期大学としては、大学の特徴・利点を生かした教育研究に取り組まなければならない、時代に即応した短期大学となることが急務と思われる。

ところで就職状況の推移であるが、残念ながら就職状況を示す資料はきわめて乏しく、就職状況の推移を正確に把握することは困難であるので、総対的にみた就職状況の推移の概要について説明していくことにする。

本格的に卒業生を実社会に送り出し、本学の卒業生の真価が認識されだしたのは1955（昭和30）年頃である。この時期はデフレ政策下の経済界の不況で厳しい状況であったが、就職率はほぼ100%で、就職者の約90%の就職先は中小企業であった。これは夏期休暇を中心として学長、補導課長をはじめ各教員が尾道地方はもとより、東京、名古屋、京阪神方面、九州方面にまで足をのばして就職先の開拓に全力を注いだ結果である。当時は就職活動の解禁は10月であった。国文科の学生は、ほとんどが教員を希望していた。

1960年頃は高度経済成長の時期であり、創立以来最高の求人難で、大都市を中心に大企業の求人もかなり増大し、地元業界からも多くの求人があった。就職希望者に対する求人は約2倍に達した。これは全国的な人材難が影響して短期大学に対する門戸が広げられたためである。このように学卒者に対する全国的な求人難を反映して、本学にも就職希望者を大幅に上回る求人が舞い込んだ。夏休み前から「青田買い」が始まり、就職活動が正式に開始される10月までに50%以上の就職先が決まるような状態であった。このような状況は1965年頃まで続き、就職戦線は好調を維持し、もちろん就職率も100%であった。1966年以降数年間は経済界の不況で就職難の状態が続き、特に遠隔地の出身者の就職が厳しかった。

1970年代後半には就職状況も良くなり、就職先の業種別内訳として、国文科は製造業30%前後、金融・保険業15%前後、公務員40%前後、サービス業10%前後で推移し、経済科は、製造業25%前後、金融・保険業25%前後、公務員25%前後、サービス業20%前後で推移した。就職率はほぼ100%であった。四年制大学への編入学等の進学は卒業者の5%前後であった。

1980年代も就職状況は比較的良好な状態が続き、就職先として大企業が多数を占めるようになった。就職先の業種別内訳として、国文科は、製造業20%前後、金融・保険業25%前後、公務員25%前後、サービス業25%前後で推移し、経済科は製造業25%前後、金融・保険業35%前後、公務員10%前後、サービス業25%前後で推移した。就職率もほぼ100%であったが、四

年制大学への編入学等の進学は1970年代後半よりも減少した。

1990年代になると、1988年に増設された経営情報学科の卒業生も加わったので、就職資料室を整備し、就職指導の一層の徹底を図るようになった。就職先も大企業が大半を占めるようになり、就職率もほぼ100%を維持している。就職先の業種別内訳は全体として製造業20%前後、金融・保険業20%前後、公務員20%前後、サービス業35%前後で推移している。四年制大学への編入学等の進学は卒業生の5%前後である。

国文科の学生は小・中学校を中心とした教員を希望する者が多く、特に1965年頃までは大部分の者が教員を希望していた。これまでに経済科を含めて800名を超える卒業生が教員として各地で活躍し、大きな社会的役割を果たしている。

# 第10章 後援会・同窓会

## 1 後援会の活動

女専発足と同時に東雲会しのめかいという後援会組織が設立された。その会則によれば会長1名（学校長）、副会長2名（1名は同校主席教授、1名は理事中より互選）、常務理事（若干名、同校教職員中より会長が委嘱）、理事7名（評議員の互選）、評議員（若干名）となっていた。上記役員の任期はいずれも1年（不妨再任）である。会費は生徒1人に付き毎年240円であった。初代会長は校長の頼成一、副会長は学校側は林猪太郎、理事側では理事5名の互選の結果富永貫一氏（女専設立委員会委員長で尾道商工会議所第6代会頭）が選ばれた。同氏はその後毎回再選され短大の設立におよんだ。

1950（昭和25）年度からは、女専短大合流のため会則が変更され、会名も「尾道短期大学後援会」に改められた。新しい会則では会長1名（会員中より選挙）、副会長2名（1名は学校職員、1名は会員中より選挙）、理事（若干名で会長が委嘱）、評議員（若干名・同）となった。いずれも任期は前会と同様1年（不妨再任）である。これによって、会長には富永貫一氏が選ばれ、学校側を代表する副会長は八木寛に決定した。1965年度より八木に代わって高橋賢陳が後を継いだ。その後の歴代会長、副会長は資料編に掲載の通りである。

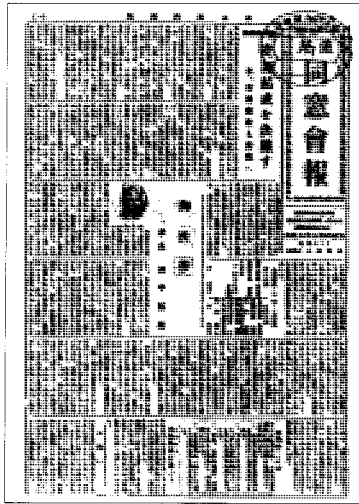
財政的基盤の脆弱な小都市経営の本学のような場合、後援会の果たす役割はきわめて大きく、女専・短大創設当初より校舎、図書館、体育館、学生会館をはじめとする諸施設の建設や整備充実において、後援会が全額あるいは多額の寄付を行っている。また、大学運営の諸経費においても少なからざる支援を行ってきた。

なお、教授会側では後援会との意思疎通を図り、学生の立場に立ったより民主的な会の運営を願って、大学代表の副会長は、従来慣行的に前任教授が任ぜられていたものを、適任者を学長が任命し、その任期は2年で原則として再任を認めないとする「後援会運営改革案」（内規）を1989年3月16日の教授会で了承した。この内規は同年度より実施し、今日に至っている。

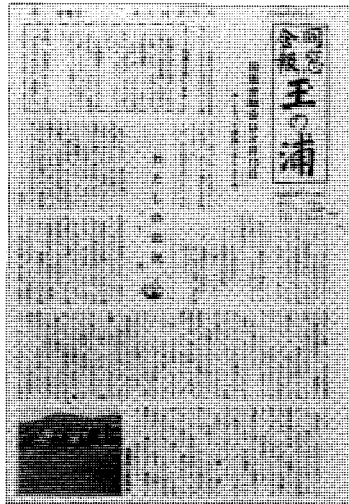
## 2 同窓会の活動

尾道短期大学の前身、女専第1回の卒業は1949（昭和24）年であり、同窓会はこの時から発足した。その3年後、短大の第1回卒業生を出し、大学女専同窓会として新たな出発をする。尾道短期大学同窓会としたのは1971年である。

会長には、女専時代は校長が、短大になってからは学長が推挙され、会員からは副会長2名が選ばれていた。1959年度から会長は卒業生から選出するものとし、初代会長を小島雅由氏と決定した。歴代の会長は以下のとおりである。括弧内は就任年（敬称略）。



〈同窓会報創刊号 1955(昭和30)年11月10日〉



〈同窓会報第30号 1978(昭和53)年8月1日〉

- 小島雅由 (1959)
- 東川智一 (1962)
- 森田武文 (1964)
- 竹内幹夫 (1965)
- 小島雅由 (1968)

初期の同窓会活動で特筆すべきは同窓会報の発行である。1955年に創刊号が発行されてから1978年まで30号が発行されている。この間、研究集会などがたびたび開催され、会員の交流が図られている。

また、1963年、学生ホール建設で総工費450万円の一部として167万1309円を募金運動で集め、母校へ寄付している。

現在の同窓会活動であるが、恩師の退官には送別会を企画してきた。

当初から継続しているものに、同窓会総会と懇親会がある(8月の第3日曜日、午前11時～)。会報が発行されていた時代は、総会案内も盛り込まれていたため盛会であったが、現在は案内状もなく低調である。会報も案内状も出せない理由の一つに、財政的な難しさがあげられる(1995年現在会員数1万6700名)。

総会伝達の方法は、卒業時に渡す同窓生名簿に記載することと、区切りのいい年度の幹事に声をかける程度にとどまっている(通信費同窓会負担)。年度次同窓会や支部結成の活動が期待される。

同窓会名簿作成は5年ごとに行われ、今回は1996年7月の発行予定である(販売・照会・照合ハガキ・異動通知とも 〒670 姫路市平野町62 小野高速印刷(株)内 尾道短期大学会員名簿発行事務局)。

この同窓会名簿は卒業時の会員には無料で配布している。

なお、1986年度より卒業式当日、卒業祝賀会を行い晴れの門出を祝っている(平成7年には

会場を尾道国際ホテルとした)。

1995年4月現在で同窓会員は1万6700名となり、各方面で活躍されているわけであるが、その情報把握が難しい。しかし、創立50周年を迎えるにあたって、確実に社会の一員として歯車を回しているようである。

ちなみに、地元尾道では、これまでに助役2名や市議会副議長を送り出しており、現県小学校校長会副会長（県教育賞受賞）も同窓生といった具合で多士済々である。他県や他地域においても本学出身者の同様の活躍振りがよく伝えられている。

理事会は随時活発に開かれ、ときには短大の四年制大学昇格問題、学生気質、果ては尾道の将来展望など、なごやかなうちに議論が白熱する。

しかし、悩みは出席者の少ない総会にどう対処するか、若い世代の理事が集まらないことをどうするかなどで知恵を拝借したいことも多い。会則に年度当番幹事をうたって、同窓会の運営にあたってもらうことを考えてはという意見も出ている。

また、『尾道短期大学50年史』に会として500万円を補助することを決議した。

#### 平成7年度同窓会役員

会 長	小 島 雅 由	
副 会 長	西 原 通 夫	
	平 田 文 子	
書 記	森 浜 道 子	
	岡 田 宏 美	
会 計	山 本 直 子	
会計監査	竹 内 幹 夫	
	河 野 元 一	
理 事	筒 井 和 子	藤 原 茂
	小 川 環	正 田 敏 子
	藤 井 昌 明	大 下 至 子
	藤 野 徹	寄 宗 昌 彦
	原 考	山 本 直 子
	長 尾 功 機	森 浜 道 子
	佐 藤 伊 助	岡 田 宏 美
	羽 田 恵 子	
玉の浦編集委員	杉 山 文 男	

## 第3部 資料編



# 1 尾道市歴代市長

代	氏名	就任年月日
16	石原善三郎	1945(昭和20).12.24
17	石原善三郎	1947( " 22). 4. 5
18	天野 彦三	1951( " 26). 4.24
19	天野 彦三	1955( " 30). 5. 1
20	青山 俊三	1959( " 34). 5. 1
21	松谷 勝	1963( " 38). 4.30
22	松谷 勝	1967( " 42). 4.30
23	石原善三郎	1971( " 46). 4.30
24	佐藤 勲	1975( " 50). 4.30
25	博田 東平	1979( " 54). 4.22
26	博田 東平	1983( " 58). 4.24
27	博田 東平	1987( " 62). 4.26
28	博田 東平	1991(平成 3). 4.21
29	亀田 良一	1995( " 7). 4.26

## 2 歴代学長

代	氏名	期間
第1代	頼 成一	1946(昭和21). 4. 1 ~1951(同26). 7. 21  1946. 4. 1~同7. 1の間女子専門学 校長事務取扱。同7. 15、同校長。 1950. 4. 1、短期大学昇格により同 学長。
	(学長事務取扱) 八木 寛	1951(昭和26). 7. 22~1953. 1. 14
第2代	田中 稻穂	1953(昭和28). 1. 15~1965. 3. 31
第3代	八木 寛	1965(昭和40). 4. 1~1973. 3. 31
第4代	吉田 眞三	1973(昭和48). 4. 1~1981. 3. 31
第5代	福田襄之介	1981(昭和56). 4. 1~1985. 3. 31
第6代	信岡 巽	1985(昭和60). 4. 1~1989. 3. 31
第7代	白神 良昭	1989(平成元). 4. 1~1993. 3. 31
第8代	森山 茂	1993(平成5). 4. 1~現在

### 3 叙勲者

職名	氏名	叙勲の種類	叙勲年月日
元学長	田中 稲穂	勲三等旭日中綬章	1973 (昭和48)年6月29日
元学長・名誉教授	八木 寛	勲三等瑞宝章	1981 (昭和56)年4月29日
名誉教授	高橋 賢陳	勲三等瑞宝章	1982 (昭和57)年6月16日
元学長・名誉教授	福田襄之介	勲三等旭日中綬章	1992 (平成4)年4月29日

### 4 名誉教授

氏名	就任年月日
高橋 賢陳	1982(昭和57). 5. 20
八木 寛	1982(昭和57). 5. 20
野上 久人	1982(昭和57). 5. 20
築山 福文	1982(昭和57). 5. 20
帯賀 一男	1982(昭和57). 5. 20
吉田 眞三	1982(昭和57). 5. 20
富田 忠雄	1985(昭和60). 4. 1
福田襄之介	1985(昭和60). 4. 24
森 清	1990(平成2). 4. 1

## 5 歴代管理職

### (1)教務部長兼事務部長

八木 寛 1951. 4. 1~1953. 3.31

### (2)補導部長

八木 寛 1953. 4. 1~1953. 9.15

### (3)歴代教務課長

氏名	期間
山本 実	1951. 4. 1~1954. 4. 1
高橋 賢陳	1954. 4. 1~1956. 3.31
築山 福文	1956. 4. 1~1960. 3.31
富田 忠雄	1960. 4. 1~1963. 3.31
野上 久人	1963. 4. 1~1966. 4. 1
築山 福文	1966. 4. 1~1968. 3.31
富田 忠雄	1968. 4. 1~1970. 3.31

### (4)歴代補導課長

氏名	期間
吉田 眞三	1951. 4. 1~1954. 4. 1
帯賀 一男	1954. 4. 1~1958. 4. 1
吉田 眞三	1958. 4. 1~1961. 4. 1
山本 実	1961. 4. 1~1962. 8. 4
帯賀 一男	1962. 9. 1~1966. 4. 1
速水 敏	1966. 4. 1~1968. 3.31

### (5)学生課長

吉田 眞三 1968. 4. 1~1970. 3.31

### (6)厚生課長

井上 強 1964. 4. 1~1970. 3.31

### (7)歴代図書課長

氏名	期間
高橋 賢陳	1951. 4. 1~1954. 4. 1
青木 茂	1954. 4. 1~1958. 4. 1
野上 久人	1958. 4. 1~1961. 4. 1
速水 敏	1961. 4. 1~1964. 3.31
大塚 光信	1964. 4. 1~1967. 3.31
森 清	1967. 4. 1~1970. 3.31

### (8)歴代教務部長

氏名	期間
富田 忠雄	1970. 4. 1~1971. 3.31
野上 久人	1971. 4. 1~1973. 3.31
吉原 龍介	1973. 4. 1~1975. 3.31
富田 忠雄	1975. 4. 1~1977. 3.31
梅田 恵三	1977. 4. 1~1979. 3.31
亀山 泰紀	1979. 4. 1~1981. 3.31
富田 忠雄	1981. 4. 1~1983. 3.31
小倉 正恒	1983. 4. 1~1985. 3.31
吉原 龍介	1985. 4. 1~1988. 3.31

## (9)歴代学生部長

氏名	期 間
吉田 眞三	1970. 4. 1~1971. 3. 31
黒川 正宏	1971. 4. 1~1972. 3. 31
帯賀 一男	1972. 4. 1~1974. 3. 31
信岡 巽	1974. 4. 1~1976. 3. 31
小倉 正恒	1976. 4. 1~1978. 3. 31
信岡 巽	1978. 4. 1~1980. 3. 31
吉原 龍介	1980. 4. 1~1982. 3. 31
三室 堯麿	1982. 4. 1~1984. 3. 31
平松 携	1984. 4. 1~1986. 3. 31
永金 知也	1986. 4. 1~1988. 3. 31
吉原 龍介	1988. 4. 1~1989. 3. 31
森山 茂	1989. 4. 1~1993. 3. 31
前原 雅文	1993. 4. 1~1995. 3. 31
和佐谷維昭	1995. 4. 1~現在

## (11)歴代図書館長

氏名	期 間
梅田 恵三	1970. 4. 1~1972. 3. 31
作谷猛二郎	1972. 4. 1~1973. 6. 7
築山 福文	1973. 6. 7~1974. 3. 31
亀山 泰紀	1974. 4. 1~1976. 3. 31
森山 茂	1976. 4. 1~1978. 3. 31
前原 雅文	1978. 4. 1~1980. 3. 31
小倉 正恒	1980. 4. 1~1982. 3. 31
園田猛二郎	1982. 4. 1~1984. 3. 31
森山 茂	1984. 4. 1~1986. 3. 31
勝矢 倫生	1986. 4. 1~1988. 3. 31
森 清	1988. 4. 1~1989. 3. 31
和佐谷維昭	1989. 4. 1~1993. 3. 31
信岡 巽	1993. 4. 1~1995. 3. 31
平松 携	1995. 4. 1~現在

## (10)歴代厚生部長

氏名	期 間
井上 強	1970. 4. 1~1971. 3. 31
速水 敏	1971. 4. 1~1973. 3. 31
森 清	1973. 4. 1~1975. 3. 31
永金 知也	1975. 4. 1~1977. 3. 31
和佐谷維昭	1977. 4. 1~1979. 3. 31
森 映雄	1979. 4. 1~1981. 3. 31
長屋 泰昭	1981. 4. 1~1983. 3. 31
坂根 俊英	1983. 4. 1~1985. 3. 31
村田 正英	1985. 4. 1~1987. 3. 31
大西 秀典	1987. 4. 1~1988. 3. 31

## 6 専任教員

## (1)尾道市立女子専門学校 (1946. 7. 1~1950. 3. 31)

氏名	職名	担当学科目	在職期間	備考
頼 成一	校長	漢文学	1946. 7. 1~尾短へ続く	
林 猪太郎	教授	社会・英語	1946. 7. 1~1949. 5. 16	
江藤 保定	"	国語	1946. 7. 1~尾短へ続く	
柿村 峻	"	漢文	1946. 10. 25~1949. 4. 15	
三吉 トモ	"	家政	1947. 3. 31~尾短へ続く	
小河 義夫	"	化学・物理	1948. 3. 31~ "	
八木 寛	"	教育・英語	1948. 7. 31~ "	
三ヶ尻 浩	"	国語	1949. 3. 31~ "	
大上 一男	"	心理学	1950. 3. 31~ "	
青木 茂	助教授	歴史	1947. 3. 31~ "	
吉田 眞三	"	国語	1947. 3. 31~ "	
高橋 賢陳	"	哲学・倫理	1948. 3. 31~ "	
小川 裕	講師	家事	1948. 2. 5~1949. 3. 31	
島居フミエ	"	家政	1949. 5. 31~尾短へ続く	
増田 茅子	"	被服	1950. 5. 15~1952. 3. 31	

## (2)尾道短期大学 (1950. 4. 1~1996. 3. 31)

## 〈旧 職〉

氏 名	職 名	担当学科目	在職期間	備 考
頼 成一	学 長	漢文学	1950. 4. 1~1951. 7. 21	
三ヶ尻 浩	教 授	国語学	1950. 4. 1~1956. 3. 31	
八木 寛	"	教育学	1950. 4. 1~1973. 4. 1	学長 1965. 4. 1~1973. 3. 31
三邊清一郎	"	経済学・経済史	1950. 4. 1~1959. 3. 31	
江藤 保定	"	日本文学	1950. 4. 1~1951. 4. 30	
高橋 賢陳	"	哲学・倫理学	1950. 4. 1~1972. 4. 1	
吉田 眞三	"	日本文学	1950. 4. 1~1981. 3. 31	学長 1973. 4. 1~1981. 3. 31
山本 実	"	物理学	1950. 4. 1~1962. 8. 4	
青木 茂	"	歴史・経済史	1950. 4. 1~1963. 10. 31	
野上 久人	"	日本文学	1951. 11. 1~1973. 4. 1	
三吉 トモ	講 師	家政学	1950. 4. 1~1951. 8. 31	
小河 義夫	"	化学・商品学	1950. 4. 1~1956. 3. 31	
帯賀 一男	教 授	心理学・職業指導	1950. 4. 1~1977. 3. 31	旧姓(大上)
山口フミエ	助教授	家政学	1950. 4. 1~1975. 4. 1	旧姓(島居)
井上 強	教 授	体育学	1950. 4. 1~1977. 3. 31	
速水 敏	"	経済学・統計学	1951. 4. 1~1973. 4. 1	
築山 福文	"	数学・統計学	1951. 4. 1~1977. 3. 31	
森 清	"	英語・文学	1952. 4. 1~1990. 3. 31	
田中 稻穂	学長・ 教 授	商品学	1953. 1. 15~1965. 3. 31	学長1953. 1. 15~1965. 3. 31 1951. 9. 1より非常勤講師 1967. 3. 31非常勤辞職
宮川 嘉治	講 師	会計学	1953. 4. 20~1956. 3. 31	
中峯 照悦	"	法 学	1954. 4. 1~1957. 3. 15	
大塚 光信	教 授	国語学	1956. 4. 1~1967. 3. 31	
有賀 定彦	講 師	経済政策	1956. 4. 16~1962. 8. 31	
高橋 英夫	"	会計学	1956. 10. 1~1959. 4. 30	
富田 忠雄	教 授	会計学	1957. 1. 1~1985. 3. 31	
木村 五郎	講 師	法 学	1957. 4. 1~1961. 4. 15	
櫛本 功	"	経済学	1959. 4. 1~1961. 7. 31	
小野 幸男	"	経済学・簿記	1960. 4. 1~1962. 11. 30	
高野 真澄	助教授	法 学	1961. 4. 16~1969. 3. 31	
佐藤 康人	"	会計学・簿記	1963. 4. 1~1967. 12. 31	
梅田 恵三	教 授	経営学・国際経済論	1963. 4. 1~1983. 3. 31	
吉原 龍介	"	経済学・経済原論	1964. 1. 1~1990. 3. 31	旧姓(有田)
比嘉 清松	講 師	経済史	1965. 4. 1~1968. 3. 31	
中本 環	"	日本文学	1965. 4. 1~1968. 3. 31	

氏名	職名	担当学科目	在職期間	備考
永金 知也	助教授	化学	1967. 4. 1~1988. 6. 13	
岡田 統夫	講師	国語学	1967. 4. 1~1969. 6. 13	
頼 祺一	"	日本歴史	1968. 4. 1~1969. 3. 31	
小倉 正恒	教授	法学・民法	1969. 4. 1~1989. 3. 31	
黒川 正宏	助教授	日本歴史	1969. 4. 1~1973. 2. 28	
江端 義夫	講師	国語学	1970. 4. 1~1973. 3. 31	
森 映雄	助教授	経済原論・金融論	1973. 4. 1~1980. 3. 31	
長屋 泰昭	"	経済政策・経済学	1973. 4. 1~1983. 3. 31	
三室 堯磨	"	商法・民法	1973. 4. 1~1984. 3. 31	
浜 森太郎	講師	日本文学	1975. 4. 1~1977. 3. 31	
土谷 泰敏	"	日本文学	1979. 4. 1~1982. 3. 31	
松岡 憲司	助教授	経済原論・金融論	1980. 4. 1~1985. 3. 31	
福田襄之介	学長	中国文学	1981. 4. 3~1985. 3. 31	学長 1981. 4. 1~1985. 3. 31
中久保邦夫	助教授	経済政策・商業政策	1983. 4. 1~1990. 3. 31	
松永 宗二	講師	日本文学	1983. 4. 1~1986. 12. 28	
久保田秀樹	助教授	会计学・簿記	1985. 4. 1~1989. 3. 31	
高橋 圭一	講師	日本文学	1986. 4. 1~1989. 3. 31	
野間 圭介	助教授	経営科学論	1987. 4. 1~1991. 3. 31	
白神 良昭	教授	電子工学・計算機概論	1988. 4. 1~1993. 3. 31	学長 1989. 4. 1~1993. 3. 31
田中 宏	"	生産管理論・品質管理論	1988. 4. 1~1991. 3. 31	
住田 璋治	"	経営情報論	1988. 4. 1~1993. 3. 31	
稲福 善男	"	経営学総論	1988. 4. 1~1994. 3. 31	
福森 徹	講師	産業政策	1990. 10. 1~1995. 3. 31	
難波 安彦	助教授	経済原論・経済学	1991. 4. 1~1993. 3. 31	



〈現 職〉

(1996年3月31日現在)

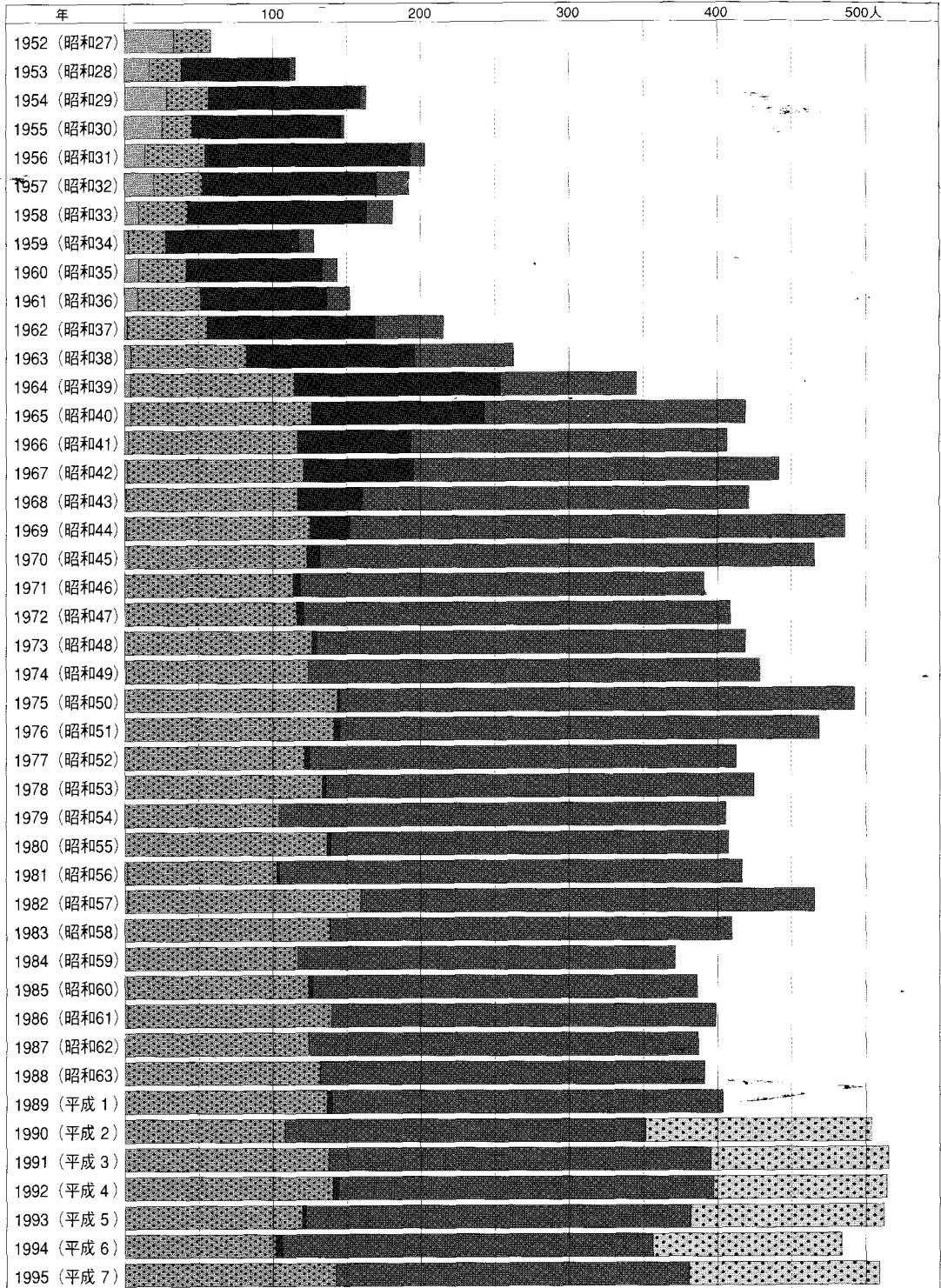
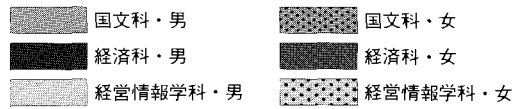
氏 名	職 名	担当分野	在職期間	備 考
信岡 巽	教 授	英語・文学	1966. 4. 1～現在	学長 1985. 4. 1～1989. 3. 31
園田猛二郎	〃	経済事情	1968. 4. 1～現在	
亀山 泰紀	〃	日本文学	1968. 4. 1～現在	
和佐谷維昭	〃	倫理学・哲学	1972. 4. 1～現在	
森山 茂	〃	日本文学	1973. 4. 1～現在	学長1993. 4. 1～現在
前原 雅文	〃	経営学	1973. 4. 1～現在	
坂根 俊英	〃	日本文学	1973. 4. 1～現在	
村田 正英	〃	日本語学	1974. 4. 1～現在	
勝矢 倫生	〃	経済史	1975. 4. 1～現在	
大西 秀典	〃	経済学	1975. 4. 1～現在	
平松 携	〃	体育学	1977. 4. 1～現在	
福原 省三	〃	心理学	1977. 4. 1～現在	
刈山 和俊	〃	数 学	1977. 4. 1～現在	
寺杣 雅人	〃	日本文学	1982. 4. 1～現在	
佐藤 滋正	〃	経済学史	1983. 4. 1～現在	
菅 準一	〃	経済学	1985. 4. 1～現在	
高木 卓司	〃	物理学	1989. 4. 1～現在	
中村 恒夫	〃	管理工学	1991. 4. 1～現在	
大塚 登	〃	情報科学	1991. 4. 1～現在	
藤田 幸史	〃	計算機工学	1993. 4. 1～現在	
松野 友芳	助教授	民 法	1985. 4. 1～現在	
柳原 幹雄	〃	経済学	1988. 4. 1～現在	
小泉 伸	〃	数 学	1988. 4. 1～現在	
中村 勝則	〃	日本文学	1989. 4. 1～現在	
石川 雅之	〃	会計学	1989. 4. 1～現在	
溝淵 裕	〃	法 学	1989. 4. 1～現在	
高垣 俊之	〃	英 語	1990. 4. 1～現在	
石原 茂和	講 師	システム工学	1993. 4. 1～現在	
河野 洋	〃	経済学	1993. 4. 1～現在	
阿部 香	〃	経営学	1994. 4. 1～現在	
安藤 康士	〃	経済学	1995. 4. 1～現在	

## 7 歴代後援会役員

年 度	会 長	大学側代表 副会長	年 度	会 長	大学側代表 副会長
1950(昭和25)	富永 貫二	八木 寛	1973(昭和48)	向畑 清	帯賀 一男
1951(昭和26)	富永 貫一	八木 寛	1974(昭和49)	浜本 清	帯賀 一男
1952(昭和27)	富永 貫一	八木 寛	1975(昭和50)	今岡 慶蔵	帯賀 一男
1953(昭和28)	富永 貫一	八木 寛	1976(昭和51)	浜本 清	帯賀 一男
1954(昭和29)	富永 貫一	八木 寛	1977(昭和52)	浜本 清	帯賀 一男
1955(昭和30)	富永 貫一	八木 寛	1978(昭和53)	浜本 清	富田 忠雄
1956(昭和31)	富永 貫一	八木 寛	1979(昭和54)	浜本 清	富田 忠雄
1957(昭和32)	富永 貫一	八木 寛	1980(昭和55)	浜本 清	富田 忠雄
1958(昭和33)	富永 貫一	八木 寛	1981(昭和56)	浜本 清	富田 忠雄
1959(昭和34)	富永 貫一	八木 寛	1982(昭和57)	浜本 清	富田 忠雄
1960(昭和35)	富永 貫一	八木 寛	1983(昭和58)	浜本 清	富田 忠雄
1961(昭和36)	富永 貫一	八木 寛	1984(昭和59)	浜本 清	富田 忠雄
1962(昭和37)	富永 貫一	八木 寛	1985(昭和60)	浜本 清	森 清
1963(昭和38)	富永 貫一	八木 寛	1986(昭和61)	浜本 清	森 清
1964(昭和39)	富永 貫一	八木 寛	1987(昭和62)	浜本 清	森 清
1965(昭和40)	富永 貫一	高橋 賢陳	1988(昭和63)	浜本 清	森 清
1966(昭和41)	富永 貫一	高橋 賢陳	1989(平成元)	藤井 榮眞	信岡 巽
1967(昭和42)	吉田 定男	高橋 賢陳	1990(平成2)	藤井 榮眞	信岡 巽
1968(昭和43)	吉田 定男	高橋 賢陳	1991(平成3)	藤井 榮眞	園田猛二郎
1969(昭和44)	吉田 定男	高橋 賢陳	1992(平成4)	藤井 榮眞	園田猛二郎
1970(昭和45)	毛利 俊造	高橋 賢陳	1993(平成5)	藤井 榮眞	亀山 泰紀
1971(昭和46)	渡辺金之助	高橋 賢陳	1994(平成6)	藤井 榮眞	亀山 泰紀
1972(昭和47)	桑田 緑	帯賀 一男	1995(平成7)	藤井 榮眞	前原 雅文

## 8 卒業生数の推移

年	国文科			経済科			経営情報科			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1952(昭和27) (昭和27年3月卒)	33	23	56							33	23	56
1953(昭和28)	18	21	39	74	2	76				92	23	115
1954(昭和29)	30	25	55	106	2	108				136	27	163
1955(昭和30)	26	20	46	102	1	103				128	21	149
1956(昭和31)	15	40	55	139	9	148				154	49	203
1957(昭和32)	20	33	53	117	22	139				137	55	192
1958(昭和33)	10	33	43	120	18	138				130	51	181
1959(昭和34)	3	26	29	89	10	99				92	36	128
1960(昭和35)	11	31	42	91	11	102				102	42	144
1961(昭和36)	10	41	51	85	16	101				95	57	152
1962(昭和37)	2	55	57	112	46	158				114	101	215
1963(昭和38)	6	77	83	114	65	179				120	142	262
1964(昭和39)	5	110	115	136	96	232				141	206	347
1965(昭和40)	5	120	125	118	176	294				123	296	419
1966(昭和41)	3	114	117	77	213	290				80	327	407
1967(昭和42)	2	119	121	75	245	320				77	364	441
1968(昭和43)	2	116	118	43	261	304				45	377	422
1969(昭和44)	1	126	127	25	334	359				26	460	486
1970(昭和45)	3	120	123	8	334	342				11	454	465
1971(昭和46)		114	114	4	273	277				4	387	391
1972(昭和47)		116	116	4	289	293				4	405	409
1973(昭和48)		128	128	1	290	291				1	418	419
1974(昭和49)	1	123	124		305	305				1	428	429
1975(昭和50)		144	144	1	347	348				1	491	492
1976(昭和51)	1	141	142	3	323	326				4	464	468
1977(昭和52)		123	123	1	289	290				1	412	413
1978(昭和53)		133	133	1	291	292				1	424	425
1979(昭和54)		105	105		301	301				0	406	406
1980(昭和55)		137	137	1	269	270				1	406	407
1981(昭和56)	1	103	104	1	312	313				2	415	417
1982(昭和57)	1	159	160		305	305				1	464	465
1983(昭和58)		139	139		270	270				0	409	409
1984(昭和59)		116	116		254	254				0	370	370
1985(昭和60)	1	123	124	1	262	263				2	385	387
1986(昭和61)	1	140	141		258	258				1	398	399
1987(昭和62)		124	124		261	261				0	385	385
1988(昭和63)		131	131		260	260				0	391	391
1989(平成1)		137	137	1	266	267				1	403	404
1990(平成2)		108	108		243	243	1	151	152	1	502	503
1991(平成3)		138	138		259	259		118	118	0	515	515
1992(平成4)		141	141	3	254	257		116	116	3	511	514
1993(平成5)	0	121	121	1	260	261	0	130	130	1	511	512
1994(平成6)	0	101	101	3	253	256	0	127	127	3	481	484
1995(平成7)	1	144	145	0	237	237	0	126	126	1	507	508
計	212	4439	4651	1657	8792	10449	1	768	769	1870	13999	15869

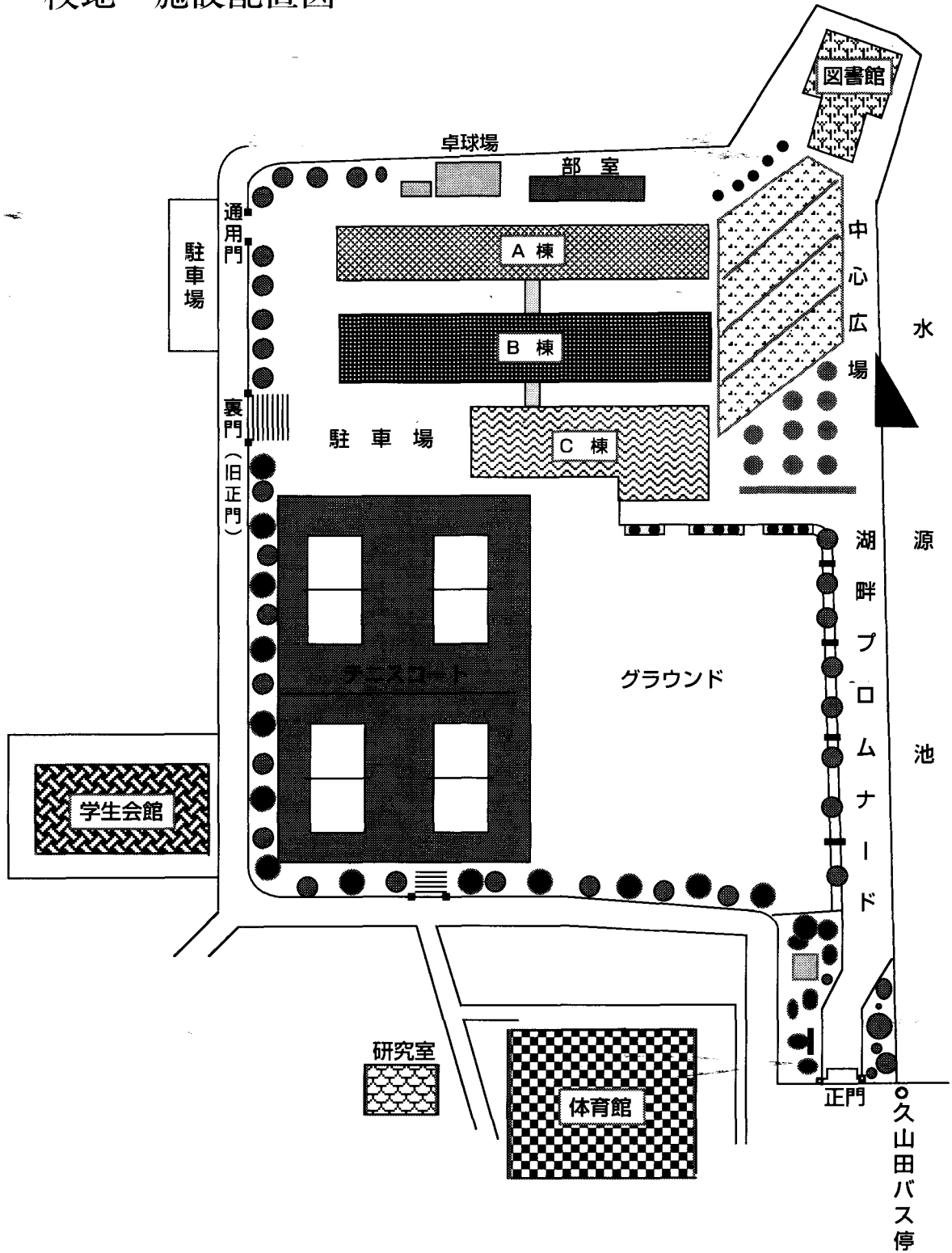


# 年 表

年	学長	主 な 事 跡	周 辺 事 項
1946(昭和21)	頼	3月30日 尾道市立女子専門学校設置認可 尾道市立久保小学校の校舎を仮校舎として、「国語科」(定員150名)、「生活科」(定員150名)を置く(初代校長、頼成一) 7月1日 開校式・入学式	
1947(昭和22)			六・三制発足
1948(昭和23)		この年、中等学校教員無試験検定の許可を得る	新制高等学校発足
1949(昭和24)		3月12日 女専第1回生卒業式(県立東高等学校講堂借用) 4月15日 別科第1回生入学式 8月12日 公開講座第1回開催 9月7日 長江二丁目の尾道市立南高等学校(夜間部)の校舎に移転	新制大学発足 大学設置審議会「短期大学設置基準」決定
1950(昭和25)		3月 学制改革により、尾道短期大学に昇格、「国語科」を「国文科」に改称(定員160名) 「生活科」「別科」は募集打ち切り	短期大学発足
1951(昭和26)	(八木)	この年、「経済科」を増設(定員160名)、国文科定員を80名に減員 3月10日 別科第2回生修了式(別科の最後) 4月1日 国文・経済両科に学科長を置く 7月22日 頼学長死去に伴い、八木寛教授を学長事務取扱とする	石原善三郎氏市長退任 天野彦三氏市長就任
1952(昭和27)		3月5日 女専生活科第4回生卒業式(女専の最後) 3月 『尾道短期大学研究紀要』第一輯創刊 6月6日 第1期市民大学開講	
1953(昭和28)	田中	1月15日 田中稲穂氏、第2代学長に就任 5月28日 怪火事件(夜間学舎2階に怪火)	「短期大学設置基準」改正
1956(昭和31)		5月1日 専修科第1回生入学式 7月1日 創立10周年記念式典(長江小学校講堂借用) 11月3日 「尾道短期大学学生歌」制定	
1958(昭和33)		1月 『国文学報』創刊	
1959(昭和34)			天野彦三氏市長退任 青山俊三氏市長就任
1960(昭和35)		10月9日 第9期市民大学閉講(市民大学の最後)	
1961(昭和36)		7月1日 門田水源池バス転落事故(短大学舎起工式当日) 7月9日 久山田水源池の一角に新学舎の建設始まる 11月11日 第33回公開講座を開講(公開講座の最後) この年、尾道短期大学の所管、市長部局より教育委員会に移る	
1962(昭和37)		3月15日 専修科第6回生卒業式(専修科の最後) 3月 学舎落成、月末に移転完了	
1963(昭和38)		4月 国文科・経済科の定員を、それぞれ200名、400名に増員	青山俊三氏市長退任 松谷勝氏市長就任
1964(昭和39)			「学校教育法」一部改正に伴い、短期大学が恒久的の制度とされる
1965(昭和40)	八木	3月 田中学長退職 4月 八木寛教授、第3代学長に就任	
1966(昭和41)		この年より、受験者の増加傾向を受けて、推薦入学制を廃止	
1967(昭和42)		11月26日～27日 中・四国商経学会を本学にて開催	
1968(昭和43)		4月30日 『尾道短期大学20年史』発行	
1969(昭和44)		3月 『経済科研究会報』創刊	機動隊による東大安田講堂封鎖解除
1970(昭和45)		この年、学科長制を廃止	
1971(昭和46)		10月30日 国文科開設20周年を記念して『京大附属図書館蔵漢書列伝竺桃抄』刊行(尾道短期大学国文研究室)	松谷勝氏市長退任 石原善三郎氏市長就任

年	学長	主 な 事 跡	周 辺 事 項
1973(昭和48)	吉田	3月 八木学長退職	普通交付税交付金の支給開始
		4月 吉田眞三教授、第4代学長に就任	
1974(昭和49)	吉田	1月 B棟中央の研究棟完成	石原善三郎氏市長退任 佐藤勲氏市長就任 「短期大学設置基準」改正
1975(昭和50)		4月 それまでの80分1単位制を改め、50分1単位とする 「総合講座」開設	
1976(昭和51)	吉田	4月 学生指導の一環として、寮アドバイザー制度を設ける 宿泊セミナーを行う	
		7月 公開講座を復活	
1977(昭和52)	吉田	これまで英語のみであった外国語科目にドイツ語・フランス語を加える	
1978(昭和53)		12月 水源池の一角(荒神社参道下)に新図書館完成	
1979(昭和54)	吉田	3月1日 新図書館開館	共通一次試験始まる 博田東平氏市長就任
1981(昭和56)		3月 吉田学長退職	
1982(昭和57)	福田	4月 福田襄之介氏、第5代学長に就任	
		10月15日 「大学改組委員会」設置 この年より、宿泊セミナー・寮アドバイザー制度を廃止	
1983(昭和58)	福田	この年より、入学定員の約5%につき、尾道市内在住者を対象に推薦入学試験を実施	
1984(昭和59)		この年より、経済科専門科目に「情報処理」開設	
1985(昭和60)	信岡	4月1日 久山田小学校跡地にテニスコート設置	
1986(昭和61)		3月 福田学長退職	
1987(昭和62)	信岡	4月 信岡巽教授、第6代学長に就任	
1988(昭和63)		5月 久山田小学校跡地(テニスコート)に体育館完成 この年以降「総合講座」は閉講	
1989(平成元)	白神	4月 「経営情報学科」新設(定員200名) 新学舎(C棟)完成、水源池側ヘグラウンド拡張	
		この年より、従来の教務部・学生部・厚生部を統合し、学生部とする。三科にそれぞれ学科長を、一般教育等に主任を置く	
1990(平成2)	白神	3月 信岡学長退任	大学入試センター試験始まる
		4月1日 尾道短期大学の所管、教育委員会より市長部局(総務部)に移る	
1991(平成3)	白神	4月 白神良昭教授、第7代学長に就任	「短期大学設置基準」改正
		2月 キャンパス南端に正門完成	
1992(平成4)	白神	3月26日 教育職員免許法改正に伴う再課程認定を申請し、認定される	
		3月 「卒業論文集」(経営情報学科)第一巻発行	
1993(平成5)	森山	4月 50分1単位制を改め、45分1単位とする	18歳人口減少期に突入
1995(平成7)		4月 中国人留学生、外国人入試を受け、初めて本科生として入学	
1996(平成8)	森山	3月 白神学長退職	博田東平氏市長退任 亀田良一氏市長就任
		4月 森山茂教授、第8代学長に就任 この年より、入学定員の約30%につき、全国高校対象に推薦入学試験を実施	
1995(平成7)	森山	9月 高校生対象にオープンキャンパスを実施	
		9月 新学生会館完成(旧学生食堂跡に)	
1996(平成8)	森山	2月 キャンパス東側(水源池沿い)の緑化整備工事(ランド・スケープ計画)着工	

# 校地・施設配置図



## 編集後記

1996（平成8）年7月1日でわが短期大学もその前身である尾道市立女子専門学校創設から数えて50周年を迎える。われわれ『尾道短期大学50年史』の刊行に携わった一同も心からこれを祝したい。

われわれの正式名は「創立記念事業準備委員会」である。この委員会が森山茂学長の意によって設けられたのは、1994年4月であった。半世紀の歴史的節目を祝うにふさわしい記念事業を早くから立案準備しておきたいということであった。発足時に任命された委員会のメンバーは、各科より1名選出の教員4名と事務局長を合わせた下記の計5名で、委員長は筆頭者信岡であった。

信岡 巽（一般教育）、寺杣雅人（国文）、松野友芳（経済）、前原雅文（経営情報）、岡田信次（事務局長）

しかし、その後寺杣が他の委員会の責任者に就任したため1995年度より坂根俊英（国文）に交替した。また、同年9月、松野がフランス・パリ第一大学へ留学したため勝矢倫生（経済）が追加任命された。さらに、1996年3月末をもって信岡が定年退職、坂根が他大学へ転出することが決まったため、1995年12月平松携（一般教育）と村田正英（国文）が追加任命された。事務局長も1995年4月の庁内の定期異動により岡田から島谷勲へ引き継がれた。

委員会では協議の末、記念式典の挙行と『50年史』の刊行を記念事業の主要な柱とすることに決定し、前者については1996年7月1日創立記念日にこれを行うこととし、後者については式典の当日にこれを配布できるよう刊行の準備作業に入ることにした。これらは教授会で報告し了承された。

『50年史』の刊行は、信岡が編集責任者として全体の組立と基本的史資料の収集に当たり、これに基づいて各委員がいくつかの分野を分担して執筆した。また、情報処理実習室については経営情報学科の大塚登学科長に、同窓会に関することは同窓会の副会長西原道夫氏に特に執筆をお願いした。座談会や寄稿は、信岡が中心となり同窓会の協力も得て取りまとめた。出版社との折衝は主として事務局長（岡田・島谷）が当たった。

担当した分野と執筆者は次の通りである。

### 第1部 沿革編

第1章 前史 久保時代

第2章 尾道短期大学の発足

第3章 着実な成長

第4章 新たな飛躍

### 第2部 変遷と現況編

第1章 学章と学生歌 (以上信岡)

第2章 学内機構 (前原)

第3章 学内諸施設 (信岡)

1 図書館 (勝矢)

2 体育館及びグラウンド (平松)



	3 課外教室・学生食堂から学生会館へ(勝矢)	
	4 情報処理実習室	(大塚)
第4章	入試制度	(松野)
第5章	教育・研究	
	1 一般教育・教職課程	(信岡・平松)
	2 国文科	(坂根)
	3 経済科	(松野)
	4 経営情報学科	(前原)
第6章	研究活動	(信岡)
第7章	社会活動	(坂根)
第8章	学生生活	(坂根)
第9章	就職状況	(前原)
第10章	後援会・同窓会	(信岡・西原)
第3部	資料編	(前原・信岡・事務局長)
	年表	(村田)
	校地・施設配置図	(平松)

記述要領に関連し、誤解や混乱を防ぐため特に次の4点について配慮したのでご理解を得たい。

- 1 内容の最終記述時点は、原則として1996年3月31日とする。
- 2 年号は原則として西暦を使用する。ただし、節見出しの初出は西暦と和暦の併記とする。
- 3 メートル法以前の尺貫法による表記は、換算した注をつける。
- 4 本文中の人名については、現・大学関係者には敬称を用いない。元・関係者には敬称を用いる。ただし、叙述している箇所で見職の場合は、敬称は用いない。

編集の方針として、史実の正視という基本姿勢を忘れることがあってはならないのは当然のことながら、親しみやすく楽しく読めるものということを基本に置いた。これは森山学長の希望でもあった。同窓生による座談会や多くの寄稿文を取り入れ、また、新聞記事やエピソードの類を随所に挿入したのも、そうした意図に基づいている。全体の組み立てやレイアウトにも同様な工夫を凝らしたつもりである。

本史の完成に至るまでの道程は、けっして平坦なものではなかった。根本的な理由は、大学として、こうした校史を想定して資料の収集や整理・保管をこれまで組織的に行ってこなかったことである。われわれは、まず資料の収集と整理から始めなければならず、これにかなりの時間と労力を要したのである。しかし、半世紀という長い歳月の中で、重要な資料のいくつかは、すでに失われており、本史の記述に十分生かすことができなかつたことは心残りである。ついでながら、これを教訓に、今後学内にこうし

たことの整備のための機関を是非とも設置していただくよう要望しておきたいと思う。

ここでどうしても触れておかなければならないのは、『尾道短期大学20年史』のことである。これは1966年、創立20周年を記念して、名誉教授高橋賢陳博士（当時・教授）が本学の誕生から草創期にかけての極めて多難な時期における本学の動相を、当時の資料を精査して、客観的・体系的に詳述された名著であり、本学における唯一貴重な校史である。この度の『50年史』執筆に当たり、われわれが最も頼りとした文献が、この『20年史』であったことは言うまでもない。本『50年史』の前半20年間の記述は、前書を大方なぞり書きしたに過ぎないといわなければならない。今は亡き、高橋先生にお許しを願うとともに、感謝を申し述べておかなければならない。

本史の執筆に当たり直接資料の引用をご快諾いただいた山陽日日新聞社の秋田清社長並びに朝日新聞社福山支局に対しお礼を申し上げねばならない。また、多くの興味深い本学の史実をご教示いただいた『おのみち戦後の歩み—その光と影—』とその著者森本輝郎氏にも感謝を申し上げる。さらに、われわれの面倒な依頼に対し、ご多忙の中を進んで原稿をお寄せ下さったり、座談会にご出席いただいたり、その他さまざまな形でご協力をたまわった多くの関係者、諸先生、同窓会の方々にも厚く感謝の意を表明する。特に、当時の貴重な写真や資料の発掘、収集など、本史の計画の段階から上梓に至る道程のあらゆる局面で、たえず惜しみないご支援、ご助言をたまわった小島雅由同窓会長には感謝の言葉もない。深くお礼を申し上げる次第である。

本『50年史』刊行の経費の一切は同窓会の寄付金によるものである。いつもながら、その母校に寄せる熱い情愛に対しては敬服の他はない。われわれとしては、その期待に応えるべく、すべてに疎漏なきよう最善の努力を注いだつもりであるが、本書に関し、いささかなりともご批判があるとすれば、その責めはすべて編集責任者である信岡が負わねばならない。

本学の誕生は敗戦直後の廃墟と混乱のさなかであった。幾多の困難と障害を切り拓き発展してきたその歴史は、そのまま日本が戦後に歩んだ激動の歴史の体験に重なり合うものであろう。半世紀の軌跡は一地方の短期大学の歴史にとどまらず、ある意味において、日本の戦後史の一環をなすものと言うことができるであろう。戦後50年を経た日本が今一つの時代を終え大きな転換期に差しかかりつつあるとき、本学もまた新たな試練に晒されようとしている。巷間に言う「大学冬の時代」の到来である。本『50年史』が、われわれが歩んできた足跡を辿り、その歴史の教訓に学び、次なる飛躍のための一助ともなればこれに優るよるこびはない。

最後になったが、企画の段階から本『50年史』の編集・制作全般にわたってご協力いただいた関西廣濟堂のスタッフの方々に、深く感謝を申し上げる次第である。

1996年3月31日

創立記念事業準備委員会  
委員長 信岡 巽

# 尾道短期大学50年史

1996年7月1日 発行

発行 尾道短期大学

〒722 広島県尾道市久山田町1600番地

T E L 0848-22-8311(代表)

F A X 0848-22-5460

編集 創立記念事業準備委員会

制作印刷 株式会社関西廣濟堂

〒560 大阪府豊中市蛍池西町2丁目2-1

T E L 06-855-1100(代表)

F A X 06-855-1324



尾道短期大学

ONOMICHI JUNIOR COLLEGE